

第1.2-84表 気象庁震度階級関連解説表(2009)木造建物(住宅)の状況

震度階級	木造建物(住宅)	
	耐震性が高い	耐震性が低い
5弱	—	壁などに軽微なひび割れ・亀裂がみられることがある。
5強	—	壁などにひび割れ・亀裂がみられることがある。
6弱	壁などに軽微なひび割れ・亀裂がみられることがある。	壁などのひび割れ・亀裂が多くなる。 壁などに大きなひび割れ・亀裂が入ることがある。 瓦が落下したり、建物が傾いたりすることがある。倒れるものもある。
6強	壁などにひび割れ・亀裂がみられることがある。	壁などに大きなひび割れ・亀裂が入るものが多くなる。 傾くものや、倒れるものが多くなる。
7	壁などのひび割れ・亀裂が多くなる。 まれに傾くことがある。	傾くものや、倒れるものがさらに多くなる。

(注1) 木造建物(住宅)の耐震性により2つに区分けした。耐震性は、建築年代の新しいものほど高い傾向があり、概ね昭和56年(1981年)以前は耐震性が低く、昭和57年(1982年)以降には耐震性が高い傾向がある。しかし、構法の違いや壁の配置などにより耐震性に幅があるため、必ずしも建築年代が古いというだけで耐震性の高低が決まるものではない。既存建築物の耐震性は、耐震診断により把握することができる。

(注2) この表における木造の壁のひび割れ、亀裂、損壊は、土壁(割り竹下地)、モルタル仕上壁(ラス、金網下地を含む)を想定している。下地の弱い壁は、建物の変形が少ない状況でも、モルタル等が剥離し、落下しやすくなる。

(注3) 木造建物の被害は、地震の際の地震動の周期や継続時間によって異なる。平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震のように、震度に比べ建物被害が少ない事例もある。

第1.2-85表 気象庁震度階級関連解説表(2009)鉄筋コンクリート造建物の状況

震度階級	鉄筋コンクリート造建物	
	耐震性が高い	耐震性が低い
5強	—	壁、梁(はり)、柱などの部材に、ひび割れ・亀裂が入ることがある。
6弱	壁、梁(はり)、柱などの部材に、ひび割れ・亀裂が入ることがある。	壁、梁(はり)、柱などの部材に、ひび割れ・亀裂が多くなる。
6強	壁、梁(はり)、柱などの部材に、ひび割れ・亀裂が多くなる。	壁、梁(はり)、柱などの部材に、斜めやX状のひび割れ・亀裂がみられることがある。 1階あるいは中間階の柱が崩れ、倒れるものがある。
7	壁、梁(はり)、柱などの部材に、ひび割れ・亀裂がさらに多くなる。 1階あるいは中間階が変形し、まれに傾くものがある。	壁、梁(はり)、柱などの部材に、斜めやX状のひび割れ・亀裂が多くなる。 1階あるいは中間階の柱が崩れ、倒れるものが多くなる。

(注1) 鉄筋コンクリート造建物では、建築年代の新しいものほど耐震性が高い傾向があり、概ね昭和56年(1981年)以前は耐震性が低く、昭和57年(1982年)以降は耐震性が高い傾向がある。しかし、構造形式や平面的、立面的な耐震壁の配置により耐震性に幅があるため、必ずしも建築年代が古いというだけで耐震性の高低が決まるものではない。既存建築物の耐震性は、耐震診断により把握することができる。

(注2) 鉄筋コンクリート造建物は、建物の主体構造に影響を受けていない場合でも、軽微なひび割れがみられることがある。

第1.2-86表 敷地周辺における主な地震の諸元

No.	発生年月日	地震の名称	マグニチュード M	震央距離 (km)
1	1914.1.12	桜島地震	7.1	47
2	1997.3.26	鹿児島県北西部地震	6.6	22
3	1997.5.13	鹿児島県北西部地震	6.4	17

第1.2-87表 敷地周辺の主な活断層

No.	断層の名称	断層長さ (km)	マグニチュード M ^{※1}	震央距離 (km)
1	市来断層帯市来区間	24.9	7.2	12
2	辻の堂断層 ^{※2}	12.3	6.8	29
3	笠山周辺断層群一 水俣南断層群	31.8	7.3	34
4	長島西断層・長島断層群	20.0	7.0	34
5	出水断層系	23.0	7.1	35
6	人吉盆地南縁断層	21.8	7.1	79
7	布田川・日奈久断層帯	92.7	8.1	92
8	緑川断層帯	33.6	7.4	115
9	甕断層帯甕区間	40.9	7.5	26
10	市来断層帯甕海峡中央区間	38.5	7.5	29
11	市来断層帯吹上浜西方沖区間	20.2	7.0	30
12	F-E断層 ^{※2}	9.1	6.8	22
13	F-F断層	18.0	6.9	27
14	甕島北方断層	28.1	7.2	34
15	甕島西方断層	62.5	7.8	63
16	長崎海脚断層	86.4	8.1	80
17	男女海盆北方断層	50.1	7.7	103
18	男女海盆断層	51.1	7.7	106

※1: マグニチュードは、松田(1975)による式に基づく(但し、※2を除く)。

※2: 地表付近の断層長さが短く、震源断層が地表付近の長さ以上に広がっている可能性も考えられる断層(以下「孤立した短い活断層」という。)については、安全評価上、M6.8を考慮する。

第1.2-88表 主な観測地震

No.	地名 (地震名)	発震年月日 時刻※	震央位置※ 北緯 東経	マグニ チュード※ M	震源 深さ※ (km)	震央 距離 Δ (km)	気象庁震度階級
1	九州西側 海域	1984.8.15 3:30:12	31°32.8′ 130°3.8′	5.5	13	34	4 鹿児島市東郡元
2	鹿児島県 北西部	1994.2.13 2:6:56	32°5.1′ 130°29.7′	5.7	5.2	40	4 人吉市城本町、天草市牛深町、阿久根市赤瀬 川(旧)
3	鹿児島県 北西部 (鹿児島県 北西部地 震:本震)	1997.3.26 17:31:48	31°58.37′ 130°21.54′	6.6	11.85	22	5強 阿久根市赤瀬川(旧)、薩摩川内市中郷、さつ ま町宮之城屋地 4 霧仙市小浜町雲仙、熊本市京町(旧)、八代市 平山新町、宇城市松橋町、人吉市城本町、芦 北町芦北、上天草市大矢野町、天草市牛深 町、都城市菖蒲原、鹿児島市東郡元、枕崎市 高見町(旧)、大口市山野、霧島市隼人町内山 田
4	鹿児島県 北西部 (鹿児島県 北西部地 震:余震)	1997.4.3 4:33:23	31°58.22′ 130°19.32′	5.7	14.79	20	5強 薩摩川内市中郷 5弱 阿久根市赤瀬川(旧)、さつま町宮之城屋地 4 芦北町芦北、霧島市隼人町内山田
5	鹿児島県 北西部 (鹿児島県 北西部地 震:本震)	1997.5.13 14:38:28	31°56.90′ 130°18.16′	6.4	9.24	17	6弱 薩摩川内市中郷 5強 さつま町宮之城屋地 5弱 阿久根市赤瀬川(旧) 4 八代市平山新町、宇城市松橋町、人吉市城本 町、芦北町芦北、上天草市大矢野町、都城市 菖蒲原、鹿児島市東郡元、鹿児島市下福元、 枕崎市高見町(旧)、大口市山野、霧島市隼人 町内山田

※:地震諸元は、「地震年報、2011年」による。

第1.2-89表 長周期帯における理論的手法による評価に用いる
解放基盤表面以深の地下構造モデル

層厚 (m)	密度 ρ (g/cm ³)	Vp (km/s)	Vs (km/s)	Q値
10	2.70	3.20	1.50	100
452	2.70	3.70	1.60	100
538	2.70	4.40	2.15	200
1,000	2.70	5.20	3.01	200
1,000	2.70	5.60	3.24	300
14,000	2.70	5.90	3.50	300
16,000	3.00	6.60	3.80	500
—	3.30	7.60	4.30	500

第1.2-90表 検討用地震選定の諸元

No.	断層又は地震の名称	断層長さ (km)	マグニチュード M	等価震源距離 (km)
1	市来断層帯市来区間	24.9	7.2	22.5
2	辻の堂断層	12.3	6.8	31.6
3	笠山周辺断層群－ 水俣南断層群	31.8	7.3	39.8
4	長島西断層・長島断層群	20.0	7.0	37.3
5	出水断層系	23.0	7.1	39.5
6	布田川・日奈久断層帯	92.7	8.1	104.0
7	甕断層帯甕区間	40.9	7.5	36.5
8	市来断層帯甕海峡中央区間	38.5	7.5	38.4
9	市来断層帯吹上浜西方沖区間	20.2	7.0	33.6
10	F-E断層	9.1	6.8	25.8
11	F-F断層	18.0	6.9	30.2
12	甕島北方断層	28.1	7.2	39.0
13	甕島西方断層	62.5	7.8	72.1
14	長崎海脚断層	86.4	8.1	93.6
15	鹿児島県北西部地震(3月)	—	6.6	26.2
16	鹿児島県北西部地震(5月)	—	6.4	19.9
17	桜島地震	—	7.1	49.8

第1.2-91表 1997年鹿児島県北西部地震特性化震源モデルの断層パラメータ

パラメータ	単位	設定値	
		3月26日	5月13日
断層面積	km ²	75.0	66.2
地震モーメント※	N・m	1.2×10 ¹⁸	9.0×10 ¹⁷
平均応力降下量	MPa	4.5	5.8
アスペリティ面積	km ²	24.0	24.0
アスペリティ実効応力	MPa	14.1	15.9
短周期レベル	N・m/s ²	4.85×10 ¹⁸	5.42×10 ¹⁸

※ 地震モーメントは、菊地・山中(1997)による。

第1.2-92表 断層パラメータの設定根拠(基本震源モデル)

パラメータ		基本震源モデルのパラメータ設定根拠	
巨視的パラメータ	震源断層の形状等	断層長さ及び震源断層の拡がり	断層長さ及び震源断層の拡がりは、地震調査委員会(2013)に基づき、設定する。
		断層傾斜角	傾斜角は、原子力安全基盤機構(2005)によると九州地方は横ずれ断層が主体と考えられることから、強震動予測レシピに基づき、90度と設定する。
		地震発生層	地震発生層上下端深さは、「1.2.7.2(4)a. 内陸地殻内地震(b) 地震発生層」を踏まえ、上端2km、下端15kmと設定する。発生層厚さは、13kmと設定する。
	マグニチュード	断層長さから松田(1975)に基づき、設定する。	
	地震モーメント	断層面積及び1997年鹿児島県北西部地震の観測記録を用いた検討により得られた平均応力降下量から円形クラック式に基づき、算定する。	
微視的パラメータ	アスペリティの位置	セグメントごとに敷地に最も近い位置の断層上端に設定する。	
	アスペリティの応力降下量、平均すべり量	アスペリティの実効応力は、1997年鹿児島県北西部地震の観測記録を用いた検討により得られた値を設定する。平均すべり量は強震動予測レシピに従い、経験式に基づき、設定する。	
	背景領域の応力降下量、平均すべり量	強震動予測レシピに従い、経験式に基づき、設定する。	
	すべり速度時間関数	短周期領域では用いていない。 長周期領域では中村・宮武(2000)に基づき、設定する。	
	高周波遮断特性	1997年鹿児島県北西部地震の観測記録を用いた検討を踏まえ設定する。	
その他のパラメータ	破壊伝ば速度	強震動予測レシピに従い、経験式に基づき、設定する。	
	破壊開始点	巨視的断層面の端部で破壊が敷地に向かうような位置に設定する。	
	破壊伝ば様式	強震動予測レシピに従い、放射状の破壊伝ばを設定する。	

第1.2-93表 市来断層帯市来区間による地震の断層パラメータ

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°44'18"	31°43'42"	31°43'54"	31°44'18"
			東経	130°22'18"	130°11'30"	130°18'48"	130°22'18"
		西端	北緯	31°44'24"	31°44'24"	31°43'42"	31°43'54"
			東経	130°06'42"	130°06'42"	130°11'30"	130°18'48"
	走向 (度)			—	99.7	88.1	82.4
	傾斜角 (度)			90	90	90	90
	ずれの種類			左横ずれ	左横ずれ	左横ずれ	左横ずれ
	断層上端深さ (km)			2	2	2	2
	断層長さ (km)			24.9	7.7	11.6	5.6
	断層幅 (km)			13.0	13.0	13.0	13.0
	断層面積 (km ²)			323.7	100.1	150.8	72.8
	剛性率 (N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)			1.39×10 ¹⁹	4.00×10 ¹⁸	7.39×10 ¹⁸	2.48×10 ¹⁸
平均すべり量 (cm)			129.5	120.7	148.2	102.9	
平均応力降下量 (MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)			1.53×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的パラメータ	アスペリティ	地震モーメント (N・m)		1.02×10 ¹⁹	2.93×10 ¹⁸	5.42×10 ¹⁸	1.82×10 ¹⁸
		面積 (km ²)		118.08	36.51	55.01	26.56
		平均すべり量 (cm)		260.3	242.6	297.8	206.9
		実効応力 (MPa)		15.9	15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント (N・m)		3.70×10 ¹⁸	1.07×10 ¹⁸	1.97×10 ¹⁸	6.61×10 ¹⁷
		面積 (km ²)		205.62	63.59	95.79	46.24
		平均すべり量 (cm)		54.4	50.7	62.2	43.2
		実効応力 (MPa)		2.5	2.5	2.5	2.5
その他のパラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-260図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-94表 甕断層帯甕区間による地震の断層パラメータ

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°49'04"	31°45'07"	31°48'17"	31°49'04"
			東経	130°06'51"	129°56'02"	129°58'27"	130°06'51"
		西端	北緯	31°38'57"	31°38'57"	31°45'07"	31°48'17"
			東経	129°45'13"	129°45'13"	129°56'02"	129°58'27"
	走向 (度)			—	236.3	213.1	263.8
	傾斜角 (度)			90	90	90	90
	ずれの種類			右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ
	断層上端深さ (km)			2	2	2	2
	断層長さ (km)			40.9	20.5	7.0	13.4
	断層幅 (km)			13.0	13.0	13.0	13.0
	断層面積 (km ²)			531.7	266.5	91.0	174.2
	剛性率 (N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)			2.92×10 ¹⁹	1.69×10 ¹⁹	3.37×10 ¹⁸	8.93×10 ¹⁸
平均すべり量 (cm)			166.0	191.6	112.0	154.9	
平均応力降下量 (MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)			1.96×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的パラメータ	アスベリテイ	地震モーメント (N・m)		2.14×10 ¹⁹	1.24×10 ¹⁹	2.47×10 ¹⁸	6.55×10 ¹⁸
		面積 (km ²)		193.95	97.21	33.19	63.54
		平均すべり量 (cm)		333.6	385.2	225.1	311.4
		実効応力 (MPa)		15.9	15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント (N・m)		7.79×10 ¹⁸	4.51×10 ¹⁸	8.99×10 ¹⁷	2.38×10 ¹⁸
		面積 (km ²)		337.75	169.29	57.81	110.66
		平均すべり量 (cm)		69.7	80.5	47.0	65.1
		実効応力 (MPa)		2.5	2.5	2.5	2.5
その他のパラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-261図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-95表 市来断層帯甌海峡中央区間による地震の断層パラメータ

項目				設定値		
				全体	南部セグメント	北部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	北端	北緯	31°45'48"	31°38'01"	31°45'48"
			東経	130°08'06"	129°59'47"	130°08'06"
		南端	北緯	31°28'24"	31°28'24"	31°38'01"
			東経	129°55'36"	129°55'36"	129°59'47"
	走向 (度)			—	200.4	222.5
	傾斜角 (度)			90	90	90
	ずれの種類			右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ
	断層上端深さ (km)			2	2	2
	断層長さ (km)			38.5	19.0	19.5
	断層幅 (km)			13.0	13.0	13.0
	断層面積 (km ²)			500.5	247.0	253.5
	剛性率 (N/m ²)			3.31 × 10 ¹⁰	3.31 × 10 ¹⁰	3.31 × 10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)			3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)			2.67 × 10 ¹⁹	1.31 × 10 ¹⁹	1.36 × 10 ¹⁹
	平均すべり量 (cm)			161.0	160.0	162.1
平均応力降下量 (MPa)			5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)			1.91 × 10 ¹⁹	—	—	
微視的パラメータ	アスペリティ	地震モーメント (N・m)		1.95 × 10 ¹⁹	9.58 × 10 ¹⁸	9.96 × 10 ¹⁸
		面積 (km ²)		182.57	90.10	92.47
		平均すべり量 (cm)		323.7	321.6	325.8
		実効応力 (MPa)		15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント (N・m)		7.11 × 10 ¹⁸	3.49 × 10 ¹⁸	3.63 × 10 ¹⁸
		面積 (km ²)		317.93	156.90	161.03
		平均すべり量 (cm)		67.6	67.2	68.1
		実効応力 (MPa)		2.5	2.5	2.5
その他のパラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-262図参照	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—

第1.2-96表 検討用地震の諸元

検討用地震	マグニチュード M	等価震源距離 (km)
市来断層帯市来区間による地震	7.2	13.9
甕断層帯甕区間による地震	7.5	20.2
市来断層帯甕海峡中央区間による地震	7.5	19.9

第1.2-97表 断層パラメータの設定根拠(不確かさ考慮モデル)

パラメータ		不確かさ考慮の有無・根拠	
巨視的パラメータ	震源断層の形状等	断層長さ及び震源断層の拵がり	断層帯断層区間については、敷地に最も近い位置に想定した場合について震源断層面を設定する。
		断層傾斜角	強震動予測レンジ等を参考に、60度(地質調査結果等を参考に南・南東傾斜)と設定する。
		地震発生層	地震発生層上下端深さは、敷地周辺では、地震観測記録等の多くの情報が得られていることから、不確かさの考慮は行わない。
	マグニチュード	マグニチュードは、断層長さの不確かさを考慮することに伴い、不確かさを考慮する。	
	地震モーメント	地震モーメントは、断層長さ又は断層傾斜角の不確かさを考慮することに伴い、不確かさを考慮する。	
微視的パラメータ	アスペリティの位置	セグメントごとに敷地に最も近い位置の断層上端に設定する。	
	アスペリティの応力降下量、平均すべり量	アスペリティの実効応力及び背景領域の実効応力は、2007年新潟県中越沖地震の知見を踏まえ、短周期レベルに関する既往の経験式の1.5倍相当の値を設定する。平均すべり量については、断層長さ又は断層傾斜角の不確かさを考慮することに伴い、不確かさを考慮する。	
	背景領域の応力降下量、平均すべり量		
	すべり速度時間関数	中村・宮武(2000)では、他のパラメータの不確かさで間接的に考慮されているため、不確かさの考慮は行わない。	
	高周波遮断特性	「1.2.7.2(6)a. 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動 (b) 検討用地震の地震動評価 イ 基本震源モデルの設定」における1997年鹿児島県北西部地震の観測記録を用いた検討により1997年鹿児島県北西部地震の敷地地盤における地震記録を模擬できていることから、不確かさの考慮は行わない。	
その他のパラメータ	破壊伝ば速度	「1.2.7.2(6)a. 敷地ごとに震源を特定して策定する地震動 (b) 検討用地震の地震動評価 イ 基本震源モデルの設定」における1997年鹿児島県北西部地震の観測記録を用いた検討により1997年鹿児島県北西部地震の敷地地盤における地震記録を模擬できていることから、不確かさの考慮は行わない。	
	破壊開始点	敷地への影響が大きくなることを考慮して、破壊が敷地に向かうような位置に複数ケース設定する。	
	破壊伝ば様式	敷地への影響が大きくなることを考慮して破壊開始点を設定しており、基本震源モデルで設定した放射状の伝ばによる影響が大きいと判断し、不確かさの考慮は行わない。	

第1.2-98表 市来断層帯市来区間による地震の不確かさを考慮した地震動評価の検討ケース

No.	検討ケース	断層長さ	傾斜角	断層幅	破壊開始点	アスペリティ位置	応力降下量	震源断層の拡がり
1	基本震源モデル	24.9km	90度	13.0km	巨視的断層面 東下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
2	応力降下量の 不確かさ考慮モデル	24.9km	90度	13.0km	巨視的断層面 東下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	短周期レベルの経験式の 1.5倍相当	地震調査委員会 (2013)
3		24.9km	90度	13.0km	アスペリティ 東下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	短周期レベルの経験式の 1.5倍相当	地震調査委員会 (2013)
4	断層傾斜角の 不確かさ考慮モデル	24.9km	60度	15.1km	巨視的断層面 東下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
5		24.9km	60度	15.1km	アスペリティ 東下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)

第1.2-99表 断層帯区間による地震の不確かさを考慮した地震動評価の検討ケース

No.	検討ケース	断層長さ	傾斜角	断層幅	破壊開始点	アスペリティ位置	応力降下量	震源断層の拡がり
1	基本震源モデル	40.9km	90度	13.0km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
2	応力降下量の 不確かさ考慮モデル	40.9km	90度	13.0km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	短周期レベルの経験式の 1.5倍相当	地震調査委員会 (2013)
3		40.9km	90度	13.0km	アスペリティ 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	短周期レベルの経験式の 1.5倍相当	地震調査委員会 (2013)
4	断層傾斜角の 不確かさ考慮モデル	40.9km	60度	15.1km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
5		40.9km	60度	15.1km	アスペリティ 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
6	断層長さ 及び 震源断層の拡がりの 不確かさ考慮モデル	43.0km	90度	13.0km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	敷地に最も 近い位置に設定
7		43.0km	90度	13.0km	アスペリティ 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	敷地に最も 近い位置に設定

第1.2-100表 市来断層帯甕海峡中央区間による地震の不確かさを考慮した地震動評価の検討ケース

No.	検討ケース	断層長さ	傾斜角	断層幅	破壊開始点	アスペリティ位置	応力降下量	震源断層の拡がり
1	基本震源モデル	38.5km	90度	13.0km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
2	応力降下量の 不確かさ考慮モデル	38.5km	90度	13.0km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	短周期レベルの経験式の 1.5倍相当	地震調査委員会 (2013)
3		38.5km	90度	13.0km	アスペリティ 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	短周期レベルの経験式の 1.5倍相当	地震調査委員会 (2013)
4	断層傾斜角の 不確かさ考慮モデル	38.5km	60度	15.1km	巨視的断層面 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)
5		38.5km	60度	15.1km	アスペリティ 南下端	敷地に最も近い位置の 断層上端	観測記録による 検討に基づく値	地震調査委員会 (2013)

第1.2-101表 市来断層帯市来区間による地震の不確かさを考慮した
断層パラメータ(応力降下量の不確かさを考慮したケース)

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°44'18"	31°43'42"	31°43'54"	31°44'18"
			東経	130°22'18"	130°11'30"	130°18'48"	130°22'18"
		西端	北緯	31°44'24"	31°44'24"	31°43'42"	31°43'54"
			東経	130°06'42"	130°06'42"	130°11'30"	130°18'48"
	走向(度)			—	99.7	88.1	82.4
	傾斜角(度)			90	90	90	90
	ずれの種類			左横ずれ	左横ずれ	左横ずれ	左横ずれ
	断層上端深さ(km)			2	2	2	2
	断層長さ(km)			24.9	7.7	11.6	5.6
	断層幅(km)			13.0	13.0	13.0	13.0
	断層面積(km ²)			323.7	100.1	150.8	72.8
	剛性率(N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度(km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント(N・m)			1.39×10 ¹⁹	4.00×10 ¹⁸	7.39×10 ¹⁸	2.48×10 ¹⁸
平均すべり量(cm)			129.5	120.7	148.2	102.9	
平均応力降下量(MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル(N・m/s ²)			1.92×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的パラメータ	アスペリティ	地震モーメント(N・m)		1.02×10 ¹⁹	2.93×10 ¹⁸	5.42×10 ¹⁸	1.82×10 ¹⁸
		面積(km ²)		118.08	36.51	55.01	26.56
		平均すべり量(cm)		260.3	242.6	297.8	206.9
		実効応力(MPa)		19.875	19.875	19.875	19.875
	背景領域	地震モーメント(N・m)		3.70×10 ¹⁸	1.07×10 ¹⁸	1.97×10 ¹⁸	6.61×10 ¹⁷
		面積(km ²)		205.62	63.59	95.79	46.24
		平均すべり量(cm)		54.4	50.7	62.2	43.2
		実効応力(MPa)		3.125	3.125	3.125	3.125
その他のパラメータ	破壊伝ば速度(km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-263図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-102表 甌断層帯甌区間による地震の不確かさを考慮した
断層パラメータ(応力降下量の不確かさを考慮したケース)

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°49'04"	31°45'07"	31°48'17"	31°49'04"
			東経	130°06'51"	129°56'02"	129°58'27"	130°06'51"
		西端	北緯	31°38'57"	31°38'57"	31°45'07"	31°48'17"
			東経	129°45'13"	129°45'13"	129°56'02"	129°58'27"
	走向(度)			—	236.3	213.1	263.8
	傾斜角(度)			90	90	90	90
	ずれの種類			右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ
	断層上端深さ(km)			2	2	2	2
	断層長さ(km)			40.9	20.5	7.0	13.4
	断層幅(km)			13.0	13.0	13.0	13.0
	断層面積(km ²)			531.7	266.5	91.0	174.2
	剛性率(N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度(km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント(N・m)			2.92×10 ¹⁹	1.69×10 ¹⁹	3.37×10 ¹⁸	8.93×10 ¹⁸
平均すべり量(cm)			166.0	191.6	112.0	154.9	
平均応力降下量(MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル(N・m/s ²)			2.46×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的パラメータ	アスベリティ	地震モーメント(N・m)		2.14×10 ¹⁹	1.24×10 ¹⁹	2.47×10 ¹⁸	6.55×10 ¹⁸
		面積(km ²)		193.95	97.21	33.19	63.54
		平均すべり量(cm)		333.6	385.2	225.1	311.4
		実効応力(MPa)		19.875	19.875	19.875	19.875
	背景領域	地震モーメント(N・m)		7.79×10 ¹⁸	4.51×10 ¹⁸	8.99×10 ¹⁷	2.38×10 ¹⁸
		面積(km ²)		337.75	169.29	57.81	110.66
		平均すべり量(cm)		69.7	80.5	47.0	65.1
		実効応力(MPa)		3.125	3.125	3.125	3.125
その他のパラメータ	破壊伝ば速度(km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-264図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-103表 市来断層帯甕海峡中央区間による地震の不確かさを考慮した断層パラメータ(応力降下量の不確かさを考慮したケース)

項目				設定値			
				全体	南部セグメント	北部セグメント	
巨視的パラメータ	断層位置	北端	北緯	31°45'48"	31°38'01"	31°45'48"	
			東経	130°08'06"	129°59'47"	130°08'06"	
		南端	北緯	31°28'24"	31°28'24"	31°38'01"	
			東経	129°55'36"	129°55'36"	129°59'47"	
	走向 (度)				—	200.4	222.5
	傾斜角 (度)				90	90	90
	ずれの種類				右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ
	断層上端深さ (km)				2	2	2
	断層長さ (km)				38.5	19.0	19.5
	断層幅 (km)				13.0	13.0	13.0
	断層面積 (km ²)				500.5	247.0	253.5
	剛性率 (N/m ²)				3.31 × 10 ¹⁰	3.31 × 10 ¹⁰	3.31 × 10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)				3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)				2.67 × 10 ¹⁹	1.31 × 10 ¹⁹	1.36 × 10 ¹⁹
	平均すべり量 (cm)				161.0	160.0	162.1
平均応力降下量 (MPa)				5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)				2.38 × 10 ¹⁹	—	—	
微視的パラメータ	アスペリティ	地震モーメント (N・m)		1.95 × 10 ¹⁹	9.58 × 10 ¹⁸	9.96 × 10 ¹⁸	
		面積 (km ²)		182.57	90.10	92.47	
		平均すべり量 (cm)		323.7	321.6	325.8	
		実効応力 (MPa)		19.875	19.875	19.875	
	背景領域	地震モーメント (N・m)		7.11 × 10 ¹⁸	3.49 × 10 ¹⁸	3.63 × 10 ¹⁸	
		面積 (km ²)		317.93	156.90	161.03	
		平均すべり量 (cm)		67.6	67.2	68.1	
		実効応力 (MPa)		3.125	3.125	3.125	
その他のパラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52	
	破壊開始点			第1.2-265図参照	—	—	
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	
Q値				104f ^{0.63}	—	—	

第1.2-104表 市来断層帯市来区間による地震の不確かさを考慮した
断層パラメータ(断層傾斜角の不確かさを考慮したケース)

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°43'41"	31°43'05"	31°43'17"	31°43'41"
			東経	130°22'24"	130°11'23"	130°18'49"	130°22'24"
		西端	北緯	31°43'47"	31°43'47"	31°43'04"	31°43'17"
			東経	130°06'34"	130°06'34"	130°11'29"	130°18'53"
	走向 (度)			—	99.7	88.1	82.4
	傾斜角 (度)			60	60	60	60
	ずれの種類			左横ずれ	左横ずれ	左横ずれ	左横ずれ
	断層上端深さ (km)			2	2	2	2
	断層長さ (km)			24.9	7.7	11.6	5.6
	断層幅 (km)			15.1	15.1	15.1	15.1
	断層面積 (km ²)			375.99	116.27	175.16	84.56
	剛性率 (N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)			1.74×10 ¹⁹	5.00×10 ¹⁸	9.25×10 ¹⁸	3.10×10 ¹⁸
平均すべり量 (cm)			139.6	130.1	159.7	111.0	
平均応力降下量 (MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)			1.65×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的パラメータ	アスベリティ	地震モーメント (N・m)		1.27×10 ¹⁹	3.67×10 ¹⁸	6.78×10 ¹⁸	2.28×10 ¹⁸
		面積 (km ²)		137.15	42.41	63.89	30.85
		平均すべり量 (cm)		280.5	261.5	321.0	223.0
		実効応力 (MPa)		15.9	15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント (N・m)		4.63×10 ¹⁸	1.33×10 ¹⁸	2.47×10 ¹⁸	8.28×10 ¹⁷
		面積 (km ²)		238.84	73.86	111.27	53.71
		平均すべり量 (cm)		58.6	54.6	67.1	46.6
		実効応力 (MPa)		2.5	2.5	2.5	2.5
その他のパラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-266図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-105表 甌断層帯甌区間による地震の不確かさを考慮した
断層パラメータ(断層傾斜角の不確かさを考慮したケース)

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的 パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°48'27"	31°44'36"	31°47'57"	31°48'27"
			東経	130°06'56"	129°56'26"	129°59'04"	130°06'56"
		西端	北緯	31°38'26"	31°38'26"	31°44'46"	31°47'39"
			東経	129°45'39"	129°45'39"	129°56'39"	129°58'29"
	走向 (度)			—	236.3	213.1	263.8
	傾斜角 (度)			60	60	60	60
	ずれの種類			右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ
	断層上端深さ (km)			2	2	2	2
	断層長さ (km)			40.9	20.5	7.0	13.4
	断層幅 (km)			15.1	15.1	15.1	15.1
	断層面積 (km ²)			547.07	309.55	70.44	167.08
	剛性率 (N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)			3.05×10 ¹⁹	2.02×10 ¹⁹	2.20×10 ¹⁸	8.03×10 ¹⁸
	平均すべり量 (cm)			168.4	197.7	94.3	145.2
平均応力降下量 (MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)			1.99×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的 パラメータ	アスペリティ	地震モーメント (N・m)		2.23×10 ¹⁹	1.48×10 ¹⁹	1.61×10 ¹⁸	5.89×10 ¹⁸
		面積 (km ²)		199.56	112.92	25.70	60.95
		平均すべり量 (cm)		338.4	397.4	189.6	291.9
		実効応力 (MPa)		15.9	15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント (N・m)		8.13×10 ¹⁸	5.40×10 ¹⁸	5.86×10 ¹⁷	2.14×10 ¹⁸
		面積 (km ²)		347.51	196.63	44.75	106.13
		平均すべり量 (cm)		70.7	83.0	39.6	61.0
		実効応力 (MPa)		2.5	2.5	2.5	2.5
その他の パラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-267図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-106表 市来断層帯甕海峡中央区間による地震の不確かさを考慮した断層パラメータ(断層傾斜角の不確かさを考慮したケース)

項目				設定値		
				全体	南部セグメント	北部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	北端	北緯	31°45'23"	31°37'48"	31°45'23"
			東経	130°08'38"	130°00'28"	130°08'38"
		南端	北緯	31°28'10"	31°28'10"	31°37'36"
			東経	129°56'17"	129°56'17"	130°00'18"
	走向 (度)			—	200.4	222.5
	傾斜角 (度)			60	60	60
	ずれの種類			右横ずれ	右横ずれ	右横ずれ
	断層上端深さ (km)			2	2	2
	断層長さ (km)			38.5	19.0	19.5
	断層幅 (km)			15.1	15.1	15.1
	断層面積 (km ²)			552.21	272.33	279.88
	剛性率 (N/m ²)			3.31 × 10 ¹⁰	3.31 × 10 ¹⁰	3.31 × 10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)			3.5	3.5	3.5
	地震モーメント (N・m)			3.09 × 10 ¹⁹	1.51 × 10 ¹⁹	1.58 × 10 ¹⁹
	平均すべり量 (cm)			169.2	168.0	170.3
平均応力降下量 (MPa)			5.8	5.8	5.8	
短周期レベル (N・m/s ²)			2.00 × 10 ¹⁹	—	—	
微視的パラメータ	アスペリティ	地震モーメント (N・m)		2.27 × 10 ¹⁹	1.11 × 10 ¹⁹	1.16 × 10 ¹⁹
		面積 (km ²)		201.43	99.34	102.09
		平均すべり量 (cm)		340.0	337.6	342.3
		実効応力 (MPa)		15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント (N・m)		8.24 × 10 ¹⁸	4.04 × 10 ¹⁸	4.21 × 10 ¹⁸
		面積 (km ²)		350.77	172.99	177.78
		平均すべり量 (cm)		71.0	70.6	71.5
		実効応力 (MPa)		2.5	2.5	2.5
その他のパラメータ	破壊伝ば速度 (km/s)			2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-268図参照	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—

第1.2-107表 甕断層帯甕区間による地震の不確かさを考慮した
断層パラメータ(断層長さ及び震源断層の拡がりの不確かさを考慮したケース)

項目				設定値			
				全体	西部セグメント	中部セグメント	東部セグメント
巨視的パラメータ	断層位置	東端	北緯	31°49'04"	31°45'07"	31°50'13"	31°49'04"
			東経	130°06'51"	129°56'02"	129°59'56"	130°06'51"
		西端	北緯	31°38'57"	31°38'57"	31°45'07"	31°50'13"
			東経	129°45'13"	129°45'13"	129°56'02"	129°59'56"
	走向(度)			—	236.3	213.2	281.1
	傾斜角(度)			90	90	90	90
	ずれの種類			—	右横ずれ	右横ずれ	左横ずれ
	断層上端深さ(km)			2	2	2	2
	断層長さ(km)			43.0	20.5	11.3	11.2
	断層幅(km)			13.0	13.0	13.0	13.0
	断層面積(km ²)			559.0	266.5	146.9	145.6
	剛性率(N/m ²)			3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰	3.31×10 ¹⁰
	S波速度(km/s)			3.5	3.5	3.5	3.5
	地震モーメント(N・m)			3.15×10 ¹⁹	1.74×10 ¹⁹	7.10×10 ¹⁸	7.01×10 ¹⁸
平均すべり量(cm)			170.2	196.9	146.2	145.5	
平均応力降下量(MPa)			5.8	5.8	5.8	5.8	
短周期レベル(N・m/s ²)			2.01×10 ¹⁹	—	—	—	
微視的パラメータ	アスベリティ	地震モーメント(N・m)		2.31×10 ¹⁹	1.27×10 ¹⁹	5.21×10 ¹⁸	5.14×10 ¹⁸
		面積(km ²)		203.91	97.21	53.59	53.11
		平均すべり量(cm)		342.1	395.8	293.8	292.5
		実効応力(MPa)		15.9	15.9	15.9	15.9
	背景領域	地震モーメント(N・m)		8.39×10 ¹⁸	4.63×10 ¹⁸	1.89×10 ¹⁸	1.87×10 ¹⁸
		面積(km ²)		355.09	169.29	93.31	92.49
		平均すべり量(cm)		71.5	82.7	61.4	61.1
		実効応力(MPa)		2.5	2.5	2.5	2.5
その他のパラメータ	破壊伝ば速度(km/s)			2.52	2.52	2.52	2.52
	破壊開始点			第1.2-269図参照	—	—	—
	破壊伝ば様式			放射状	放射状	放射状	放射状
Q値				104f ^{0.63}	—	—	—

第1.2-108表 不確かさを考慮した検討用地震の諸元

(断層傾斜角の不確かさを考慮したケース)

検討用地震	マグニチュード M	等価震源距離 (km)
市来断層帯市来区間による地震	7.2	16.5
甕断層帯甕区間による地震	7.5	21.6
市来断層帯甕海峡中央区間による地震	7.5	20.5

(断層長さ及び震源断層の拡がりの不確かさを考慮したケース)

検討用地震	マグニチュード M	等価震源距離 (km)
甕断層帯甕区間による地震	7.6	21.0

第1.2-109表 要素地震の震源パラメータ

項目		設定値
発生年月日		1984年8月15日
気象庁マグニチュード		5.5
震源位置	北緯	31.54°
	東経	130.07°
震源深さ (km)		13
走向 (度)		96 ; 6
傾斜 (度)		82 ; 89
すべり角 (度)		1 ; 172
地震モーメント (N・m)		1.02×10^{17}
臨界振動数 (Hz)		1.016
平均すべり量 (cm)		59.4
実効応力 (MPa)		21.02

第1.2-110表 収集対象とする内陸地殻内の地震

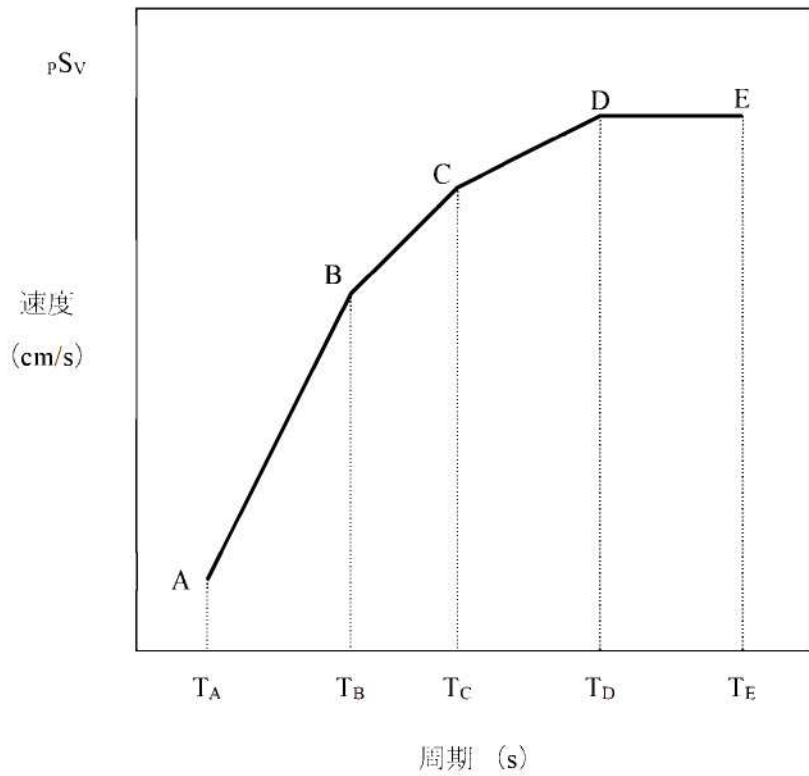
No.	地震名	日時	規模
1	2008年岩手・宮城内陸地震	2008/06/14,08:43	Mw6.9
2	2000年鳥取県西部地震	2000/10/06,13:30	Mw6.6
3	2011年長野県北部地震	2011/03/12,03:59	Mw6.2
4	1997年3月鹿児島県北西部地震	1997/03/26,17:31	Mw6.1
5	2003年宮城県北部地震	2003/07/26,07:13	Mw6.1
6	1996年宮城県北部(鬼首)地震	1996/08/11,03:12	Mw6.0
7	1997年5月鹿児島県北西部地震	1997/05/13,14:38	Mw6.0
8	1998年岩手県内陸北部地震	1998/09/03,16:58	Mw5.9
9	2011年静岡県東部地震	2011/03/15,22:31	Mw5.9
10	1997年山口県北部地震	1997/06/25,18:50	Mw5.8
11	2011年茨城県北部地震	2011/03/19,18:56	Mw5.8
12	2013年栃木県北部地震	2013/02/25,16:23	Mw5.8
13	2004年北海道留萌支庁南部地震	2004/12/14,14:56	Mw5.7
14	2005年福岡県西方沖地震の最大余震	2005/04/20,06:11	Mw5.4
15	2012年茨城県北部地震	2012/03/10,02:25	Mw5.2
16	2011年和歌山県北部地震	2011/07/05,19:18	Mw5.0

第1.2-111表 応答スペクトルに基づく手法による基準地震動Ss-1の
設計用応答スペクトル値

基準地震動 Ss-1	コントロールポイント									
	A		B		C		D		E	
	T _A	pS _V	T _B	pS _V	T _C	pS _V	T _D	pS _V	T _E	pS _V
Ss-1 _H	0.02	1.719	0.09	18.92	0.20	42.04	1.00	130.00	5.00	130.00
Ss-1 _V	0.02	1.030	0.09	11.05	0.20	25.06	1.00	81.77	5.00	95.42

注) T_A～T_Eは周期(s)

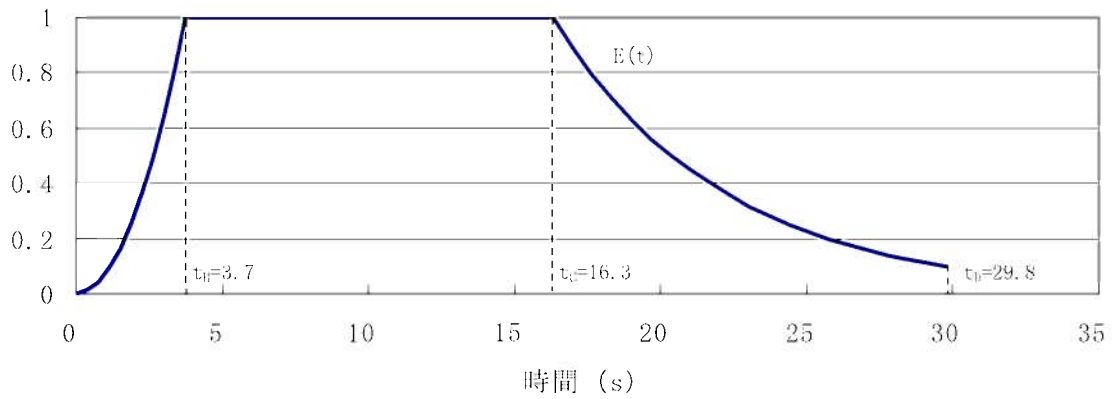
pS_Vは速度(cm/s)



擬似速度応答スペクトル

第1.2-112表 基準地震動Ss-1の設計用模擬地震波の振幅包絡線の経時的変化

基準地震動 Ss-1	継続時間 (s)	振幅包絡線の経時的変化(s)		
		t _B	t _C	t _D
Ss-1 _H	29.8	3.7	16.3	29.8
Ss-1 _V	29.8	3.7	16.3	29.8



$$t_B = 10^{0.5M-2.93}$$

$$t_C - t_B = 10^{0.3M-1.0}$$

$$t_D - t_C = 10^{0.17M+0.54 \log X_{eq}-0.6}$$

$$M = 7.0, X_{eq} = 10 \text{ (km)}$$

第1.2-113表 基準地震動Ss-1の設計用模擬地震波の作成結果

基準地震動 Ss-1	作成条件	作成結果			
	応答スペクトル	最大加速度 (cm/s ²)	応答スペクトル比	継続時間	SI比
Ss-1 _H	第1.2-111表	540	第1.2-313図	第1.2-112表	1.03
Ss-1 _V	第1.2-111表	324	第1.2-313図	第1.2-112表	1.01

$$R(T) = \frac{S_{v1}(T)}{S_{v2}(T)} \geq 0.85 \quad (0.02 \leq T)$$

但し、T:周期 (s)

S_{v1}(T): 模擬地震波の応答スペクトル値

S_{v2}(T): 目標とする応答スペクトル値

$$SI比 = \frac{\int_{0.1}^{2.5} S_v(T) dt}{\int_{0.1}^{2.5} \bar{S}_v(T) dt} \geq 1.0$$

但し、SI: 応答スペクトル強さ

S_v(T): 模擬地震波の応答スペクトル (cm/s)

$\bar{S}_v(T)$: 目標とする応答スペクトル (cm/s)

T: 固有周期 (s)

第1.2-114表 基準地震動の最大加速度

基準地震動				最大加速度 (cm/s^2)
基準地震動Ss-1	設計用模擬地震波	水平方向	Ss-1 _H	540
		鉛直方向	Ss-1 _V	324
基準地震動Ss-2	2004年北海道留萌支庁南部 地震を考慮した地震波	水平方向	Ss-2 _H	620
		鉛直方向	Ss-2 _V	320

第1.2-115表 敷地周辺の長大な活断層による地震の諸元

No.	断層名	断層長さ (km)	マグニチュード M	等価震源距離 (km)
1	布田川・日奈久断層帯	92.7	8.1	104.0
2	甕島西方断層	62.5	7.8	72.1
3	長崎海脚断層	86.4	8.1	93.6

第1.2-116表 琉球海溝におけるプレート間地震(Mw9.1)の断層パラメータ

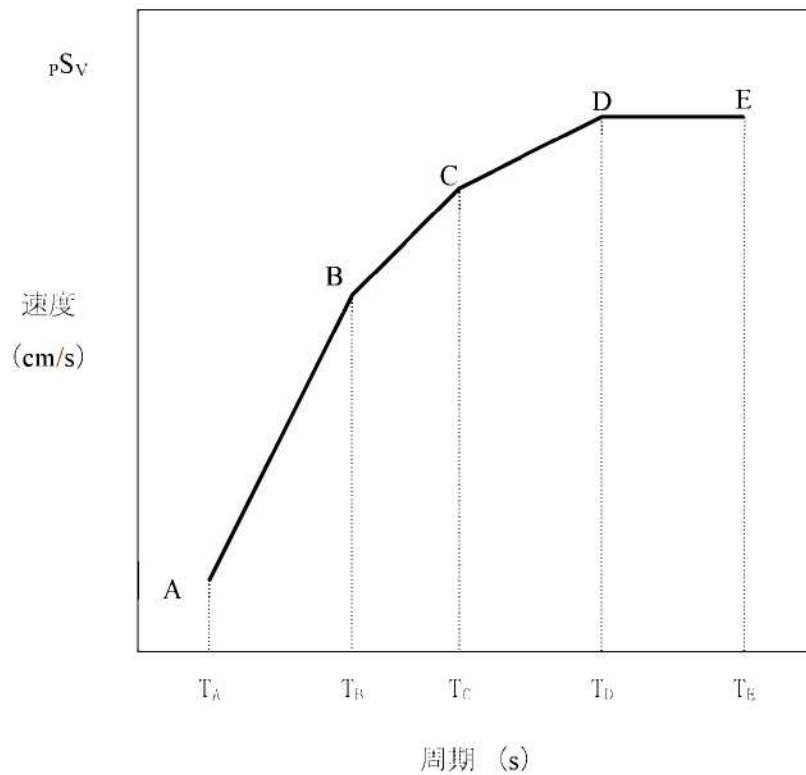
パラメータ		琉球海溝北部	琉球海溝中部
全体	面積 (km ²)	120,859	
	平均応力降下量 (MPa)	3	
	平均すべり量 (m)	10.4	
	地震モーメント (N・m)	5.2×10 ²²	
	Mw	9.1	
全体 (セグメント)	面積 (km ²)	51,072	69,787
	平均応力降下量 (MPa)	4.2	4.2
	平均すべり量 (m)	9.5	11.1
	地震モーメント (N・m)	2.0×10 ²²	3.2×10 ²²
	Mw	8.8	8.9
SMGA全体	面積 (km ²)	5,107	6,979
	面積比 (%)	10	10
	応力パラメータ (MPa)	26.6	26.6
	平均すべり量 (m)	19.0	22.2
	地震モーメント (N・m)	4.0×10 ²¹	6.4×10 ²¹
	Mw	8.3	8.5
SMGA①	面積 (km ²)	2,554	3,489
	応力パラメータ (MPa)	37.6	37.6
	平均すべり量 (m)	19.0	22.2
	地震モーメント (N・m)	2.0×10 ²¹	3.2×10 ²¹
	Mw	8.1	8.3
SMGA②	面積 (km ²)	2,554	3,489
	応力パラメータ (MPa)	37.6	37.6
	平均すべり量 (m)	19.0	22.2
	地震モーメント (N・m)	2.0×10 ²¹	3.2×10 ²¹
	Mw	8.1	8.3
背景領域	面積 (km ²)	45,965	62,809
	応力パラメータ (MPa)	3.9	3.9
	平均すべり量 (m)	8.5	9.9
	地震モーメント (N・m)	1.6×10 ²²	2.5×10 ²²
	Mw	8.7	8.9
その他	破壊伝ば速度 (km/s)	2.7	2.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰	4.1×10 ¹⁰
	S波速度 (km/s)	3.82	3.82
	密度 (g/cm ³)	2.8	2.8
	破壊伝ば形式	放射状	放射状

第1.2-117表 免震構造施設設計用基準地震動Ss-Lの設計用応答スペクトル値

基準地震動 Ss-L	コントロールポイント									
	A		B		C		D		E	
	T_A	pS_V	T_B	pS_V	T_C	pS_V	T_D	pS_V	T_E	pS_V
Ss-L _H	0.02	1.274	0.16	21.44	0.64	85.78	2.00	200.00	5.00	200.00
Ss-L _V	0.02	0.763	0.16	12.50	0.64	53.61	2.00	139.00	5.00	146.80

注) $T_A \sim T_E$ は周期 (s)

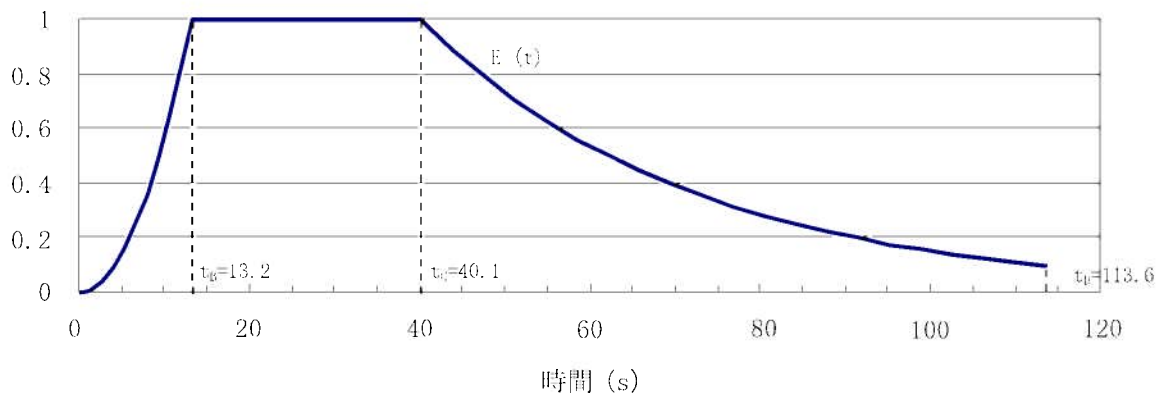
pS_V は速度 (cm/s)



擬似速度応答スペクトル

第1.2-118表 免震構造施設設計用基準地震動Ss-Lの設計用模擬地震波の振幅包絡線の経時的変化

基準地震動 Ss-L	継続時間 (s)	振幅包絡線の経時的変化(s)		
		t _B	t _C	t _D
Ss-LH	113.6	13.2	40.1	113.6
Ss-LV	113.6	13.2	40.1	113.6



$$t_B = 10^{0.5M-2.93}$$

$$t_C - t_B = 10^{0.38M-1.0}$$

$$t_D - t_C = 10^{0.17M+0.54\log X_{eq}-0.6}$$

$$M = 8.1, X_{eq} = 104.0 \text{ (km)}$$

第1.2-119表 免震構造施設設計用基準地震動Ss-Lの設計用模擬地震波の作成結果

基準地震動 Ss-L	作成条件	作成結果			
	応答スペクトル	最大加速度 (cm/s ²)	応答スペクトル比	継続時間	SI比
Ss-L _H	第1.2-117表	400	第1.2-327図	第1.2-118表	1.01
Ss-L _V	第1.2-117表	240	第1.2-327図	第1.2-118表	1.02

$$R(T) = \frac{S_{v1}(T)}{S_{v2}(T)} \geq 0.85 \quad (0.02 \leq T)$$

但し、T:周期 (s)

S_{v1}(T): 模擬地震波の応答スペクトル値

S_{v2}(T): 目標とする応答スペクトル値

$$SI \text{ 比} = \frac{\int_{0.1}^{2.5} S_v(T) dt}{\int_{0.1}^{2.5} \bar{S}_v(T) dt} \geq 1.0$$

但し、SI: 応答スペクトル強さ

S_v(T): 模擬地震波の応答スペクトル (cm/s)

$\bar{S}_v(T)$: 目標とする応答スペクトル (cm/s)

T: 固有周期 (s)

第1.2-120表 免震構造施設設計用基準地震動の最大加速度

基準地震動				最大加速度 (cm/s^2)
免震構造施設設計 用基準地震動Ss-L	設計用模擬地震波	水平方向	Ss-L _H	400
		鉛直方向	Ss-L _V	240

第 1.2-121 表 解析用物性値設定の考え方

物性値 岩種・岩級		物理特性 密度 $\rho(\text{g/cm}^3)$	強度特性			変形特性				
			せん断強度 $\tau_0(\text{N/mm}^2)$	内部摩擦角 $\phi(^{\circ})$	残留強度 $\tau(\text{N/mm}^2)$	動的変形特性		静的変形特性		
					動せん断弾性係数 $G_d(\times 10^3\text{N/mm}^2)$	動ポアソン比 ν_d	減衰定数 $h(\%)$	静弾性係数 $E_s(\times 10^3\text{N/mm}^2)$	静ポアソン比 ν_s	
礫岩	B,C _H 級	密度試験結果	岩盤せん断試験結果			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	岩盤変形試験結果	一軸圧縮試験結果
	C _M 級	密度試験結果	岩盤せん断試験結果	礫岩C _M 級に基づき算定	慣用値 ^{※1}			岩盤変形試験結果	慣用値 ^{※1}	
	C _L 級	礫岩C _M 級に基づき算定	岩盤せん断試験結果	礫岩C _H 級に基づき算定	慣用値 ^{※1}			岩盤変形試験結果	慣用値 ^{※1}	
	D級	密度試験結果	粘板岩D級を使用			G ₀ 、 ν_d : PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 G _d /G ₀ : 粘板岩D級を使用		粘板岩D級を使用	粘板岩D級を使用	慣用値 ^{※1}
砂岩	B,C _H 級	密度試験結果	砂岩C _H 級を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	岩盤変形試験結果	一軸圧縮試験結果
	C _M 級	密度試験結果	粘板岩C _M 級に基づき算定	粘板岩C _H 級に基づき算定	慣用値 ^{※1}			岩盤変形試験結果	慣用値 ^{※1}	
	C _L 級	現場密度試験結果	岩盤せん断試験結果					慣用値 ^{※1}	岩盤変形試験結果	慣用値 ^{※1}
	D級	密度試験結果	粘板岩D級を使用			G ₀ 、 ν_d : PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 G _d /G ₀ : 粘板岩D級を使用		粘板岩D級を使用	粘板岩D級を使用	慣用値 ^{※1}
粘板岩 及び頁岩	B,C _H 級	密度試験結果	粘板岩C _H 級を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	粘板岩C _L 級に基づき算定	一軸圧縮試験結果
	C _M 級	密度試験結果	岩盤せん断試験結果					慣用値 ^{※1}	粘板岩C _M 級に基づき算定	慣用値 ^{※1}
	C _L 級	粘板岩C _M 級に基づき算定	砂岩C _L 級に基づき算定	砂岩C _H 級に基づき算定	慣用値 ^{※1}			岩盤変形試験結果	慣用値 ^{※1}	
	D級	密度試験結果	静的三軸圧縮試験結果			G ₀ 、 ν_d : PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 G _d /G ₀ : 繰返し三軸試験結果		繰返し三軸試験結果	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}
混在岩		粘板岩C _L 級を使用	粘板岩C _L 級を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	粘板岩C _L 級を使用	慣用値 ^{※1}
変はんれい、 岩類	B,C _H 級	密度試験結果	粘板岩C _H 級を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	粘板岩C _M 級を使用	粘板岩C _M 級を使用
	C _M 級	密度試験結果	粘板岩C _M 級を使用					慣用値 ^{※1}	粘板岩C _M 級を使用	慣用値 ^{※1}
	C _L 級	変はんれい岩類C _M 級 に基づき算定	粘板岩C _L 級を使用					慣用値 ^{※1}	粘板岩C _L 級を使用	慣用値 ^{※1}
	D級	密度試験結果	静的三軸圧縮試験結果			G ₀ 、 ν_d : PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 G _d /G ₀ : 繰返し三軸試験結果		繰返し三軸試験結果	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}
北陸火山岩類 I	密度試験結果	みやま層を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	みやま層を使用	慣用値 ^{※1}	
みやま層	密度試験結果	静的三軸圧縮試験結果			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}	
北陸 火山岩類 II	C _M 級	密度試験結果	北陸火山岩類 II D級を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	北陸火山岩類 II C _L 級を使用	一軸圧縮試験結果
	C _L 級	密度試験結果	北陸火山岩類 II D級を使用					慣用値 ^{※1}	北陸火山岩類 II D級に基づき 算定	一軸圧縮試験結果
	D級	密度試験結果	岩盤せん断試験結果			G ₀ 、 ν_d : PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 G _d /G ₀ : 粘板岩D級を使用		粘板岩D級を使用	岩盤変形試験結果	慣用値 ^{※1}
溶結 凝灰岩	C _M 級	密度試験結果	溶結凝灰岩D級を使用			PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定		慣用値 ^{※1}	溶結凝灰岩C _L 級に基づき算定	北陸火山岩類 II C _M 級を使用
	C _L 級	密度試験結果	溶結凝灰岩D級を使用					慣用値 ^{※1}	岩盤変形試験結果	北陸火山岩類 II C _L 級を使用
	D級	密度試験結果	岩盤せん断試験結果			G ₀ 、 ν_d : PS検査による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 G _d /G ₀ : 粘板岩D級を使用		粘板岩D級を使用	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}
断層内物質	密度試験結果	静的三軸圧縮試験結果			繰返し三軸試験結果	慣用値 ^{※1}	繰返し三軸試験結果	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}	
断層内物質 (凝灰質粘土状)	密度試験結果	静的三軸圧縮試験結果			繰返し三軸試験結果	慣用値 ^{※1}	繰返し三軸試験結果	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}	
埋戻土 ^{※2}	密度試験結果	静的三軸圧縮試験結果			繰返し三軸試験結果	慣用値 ^{※1}	繰返し三軸試験結果	静的三軸圧縮試験結果	慣用値 ^{※1}	
マンメイドロック	慣用値 ^{※1}	—	—	—	E _s 及び ν_d より算定	慣用値 ^{※1}	慣用値 ^{※1}	設計基準強度より算定	慣用値 ^{※1}	

※1 原子力発電所の基礎地盤及び周辺斜面の安定性評価技術<技術資料> (土木学会原子力土木委員会、2009年2月)、岩盤斜面の安定解析と計測 ((社) 土木学会、平成6年12月)、原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説 ((社) 日本建築学会、2005制定) 等を参考に設定。
 ※2 埋戻土については、既設原子炉建設時の試験値を基に物性値を設定。新設の建物・構築物周辺においても、同等以上の強度特性を有する材料にて埋戻すこととしている。

第1.2-122表 解析用物性値

岩種・岩級	物性値	物理特性			強度特性			変形特性		
		密度 $\rho(\text{g/cm}^3)$	せん断強度 $\tau_0(\text{N/mm}^2)$	内部摩擦角 $\phi(^{\circ})$	残留強度 $\tau(\text{N/mm}^2)$	動せん断弾性係数 $G_d(\times 10^3 \text{N/mm}^2)$	動ポアソン比 ν_d	減衰定数 $h(\%)$	静弾性係数 $E_s(\times 10^3 \text{N/mm}^2)$	静ポアソン比 ν_s
礫岩	B _C H級	2.69	2.32	46.7	$1.80\sigma^{0.65}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	2.30	0.22	
	C _M 級	2.69	1.24	45.3	$1.21\sigma^{0.84}$					
	C _L 級	2.27	0.19	43.7	0.72σ					
	D級	2.09	0.06	18.7	$\sigma \leq 0.08 \quad \tau = 0.06 + \sigma \tan 18.7^{\circ}$ $\sigma > 0.08 \quad \tau = 0.07 + \sigma \tan 10.3^{\circ}$					G_0, ν_d : PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 $G_d/G_0 = 1/(1+197\gamma^{0.81})$
砂岩	B _C H級	2.70	1.08	44.8	$1.77\sigma^{0.49}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	2.07	0.22	
	C _M 級	2.70	1.08	44.8	$1.77\sigma^{0.49}$					
	C _L 級	2.28	0.24	27.6	$0.64\sigma^{0.48}$					
	D級	2.22	0.06	18.7	$\sigma \leq 0.08 \quad \tau = 0.06 + \sigma \tan 18.7^{\circ}$ $\sigma > 0.08 \quad \tau = 0.07 + \sigma \tan 10.3^{\circ}$					G_0, ν_d : PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 $G_d/G_0 = 1/(1+197\gamma^{0.81})$
粘板岩 及び頁岩	B _C H級	2.72	0.75	44.8	$1.45\sigma^{0.51}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	1.94	0.26	
	C _M 級	2.70	0.75	44.8	$1.45\sigma^{0.51}$					
	C _L 級	2.28	0.17	27.6	$0.58\sigma^{0.53}$					
	D級	1.86	0.06	18.7	$\sigma \leq 0.08 \quad \tau = 0.06 + \sigma \tan 18.7^{\circ}$ $\sigma > 0.08 \quad \tau = 0.07 + \sigma \tan 10.3^{\circ}$					G_0, ν_d : PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 $G_d/G_0 = 1/(1+197\gamma^{0.81})$
混在岩	2.28	0.17	27.6	$0.58\sigma^{0.53}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	0.62	0.30		
変はんれい 岩類	B _C H級	2.89	0.75	44.8	$1.45\sigma^{0.51}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	1.94	0.26	
	C _M 級	2.84	0.75	44.8	$1.45\sigma^{0.51}$					
	C _L 級	2.40	0.17	27.6	$0.58\sigma^{0.53}$					
	D級	1.75	0.04	26.9	$\tau = 0.03 + \sigma \tan 24.0^{\circ}$					G_0, ν_d : PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 $G_d/G_0 = 1/(1+50\gamma^{0.61})$
北嶺火山岩類 I	2.11	0.79	32.5	$\tau = 0.34 + \sigma \tan 33.9^{\circ}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	0.76	0.30		
みやま層	1.76	0.79	32.5	$\tau = 0.34 + \sigma \tan 33.9^{\circ}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	0.76	0.30		
北嶺 火山岩類 II	C _M 級	2.62	0.30	31.4	$0.79\sigma^{0.53}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	0.28	0.24	
	C _L 級	2.47	0.30	31.4	$0.79\sigma^{0.53}$					
	D級	1.85	0.30	31.4	$0.79\sigma^{0.53}$					G_0, ν_d : PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 $G_d/G_0 = 1/(1+197\gamma^{0.81})$
溶結 凝灰岩	C _M 級	2.27	0.31	29.3	$0.69\sigma^{0.38}$	PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定	3	0.37	0.24	
	C _L 級	1.98	0.31	29.3	$0.69\sigma^{0.38}$					
	D級	1.81	0.31	29.3	$0.69\sigma^{0.38}$					G_0, ν_d : PS検層による速度層毎のVs、Vp及び密度により算定 $G_d/G_0 = 1/(1+197\gamma^{0.81})$
断層内物質	2.27	0.11	27.9	$\tau = 0.11 + \sigma \tan 25.3^{\circ}$	$G_0 = 0.464\sigma_m^{0.75}$ $G_d/G_0 = 1/(1+483\gamma^{0.85})$	0.45	$h = [\gamma/(6.813\gamma + 0.002) + 0.093] \times 100$	$0.083\sigma_3^{0.86}$	0.40	
断層内物質 (凝灰質粘土状)	1.64	0.06	11.7	$\tau = 0.04 + \sigma \tan 10.6^{\circ}$	$G_0 = 0.061\sigma_m^{0.61}$ $G_d/G_0 = 1/(1+188\gamma^{0.97})$	0.45	$h = [\gamma/(4.268\gamma + 0.063) + 0.017] \times 100$	$0.048\sigma_3^{0.15}$	0.40	
埋戻土 ^{※1}	2.00	0.01	37.3	$\sigma \tan 37.3^{\circ}$	$G_0 = 0.183\sigma_m^{0.44}$ $G_d/G_0 = 1/(1+161\gamma^{0.75})$	0.45	$h = [\gamma/(4.639\gamma + 0.008) + 0.013] \times 100$	$0.193\sigma_3^{1.24}$	0.40	
マンメイドロック	2.35	—	—	—	8.6	0.20	5	20.6	0.20	

※1 盛土及び第四系の物性値については、埋戻土の物性値を用いる。

G_0 : 初期動せん断弾性係数 γ : せん断ひずみ σ : 垂直応力 σ_m : 平均主応力 σ_3 : 最小主応力

第1.2-123表(1) すべり安全率($X_{IL}-X_{IL}'$ 断面)(陸側)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率 ^{※1}	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
1	建屋底面のすべり	Ss-1	4.4	13.72	
		Ss-2	3.6	7.51	
2	建屋底面+断層のすべり	Ss-1	3.5	13.73	
		Ss-2	2.6 (3.1 ^{※2})	7.52	
3	建屋底面+断層のすべり	Ss-1	5.4	13.72	
		Ss-2	2.9	7.50	
4	断層のすべり	Ss-1	4.4	13.73	
		Ss-2	2.66	7.51	

※1 地震動の位相を反転させたケースを含む ※2 応力再配分後のすべり安全率

----- 岩種・岩級区分線 ———— すべり線 ———— 断層 ○ すべり安全率の最小値

第1.2-123表(2) すべり安全率($X_{IL}-X_{IL}'$ 断面)(海側)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率 ^{※1}	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
1		Ss-1	3.5	5.48	
		Ss-2	4.4	7.62	
2		Ss-1	2.2	13.88	
		Ss-2	2.5	7.77	
3		Ss-1	2.0 (2.0 ^{※2})	13.88	
		Ss-2	2.5	7.68	
4		Ss-1	3.5	5.51	
		Ss-2	3.5	7.72	

※1 地震動の位相を反転させたケースを含む

※2 応力再配分後のすべり安全率

----- 岩種・岩級区分線

— 断層

— 断層

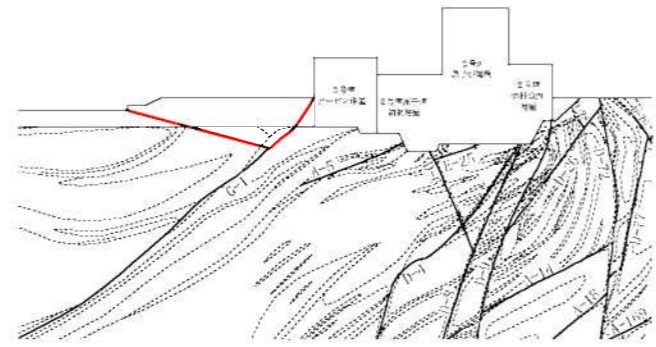
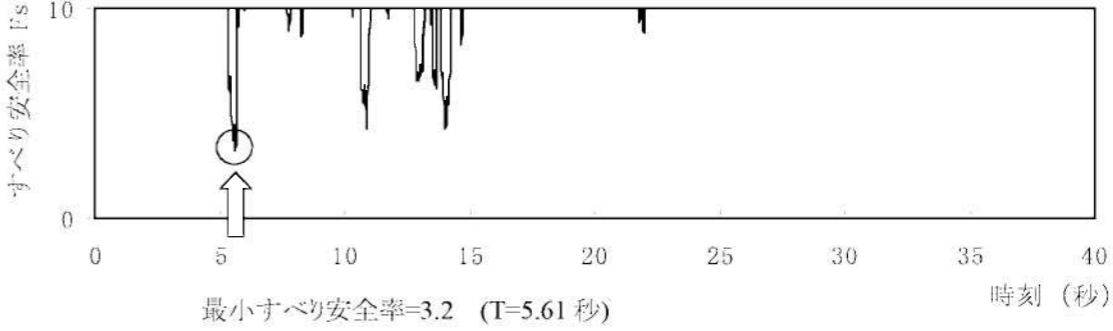
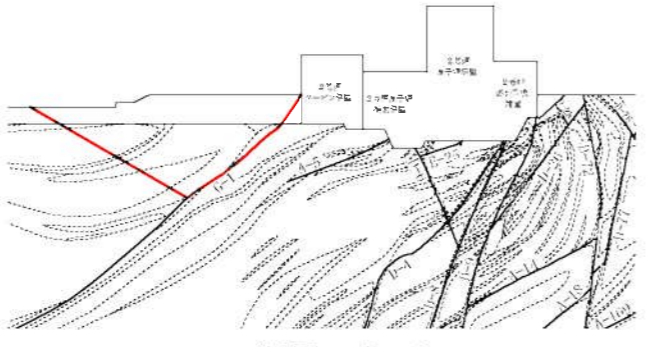
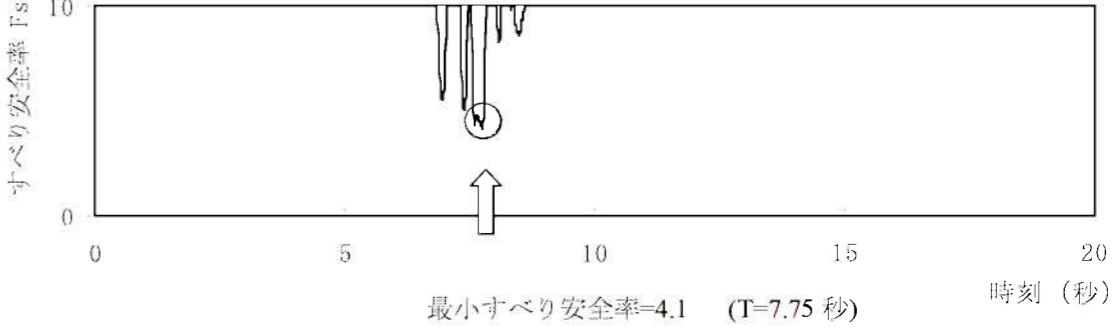
○ すべり安全率の最小値

第1.2-123表(3) すべり安全率(X_{2L}-X_{2L'}断面)(その1)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率※1	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
1	建屋底面のすべり	Ss-1	4.0	13.73	<p>最小すべり安全率=2.8 (T=7.52 秒)</p>
		Ss-2	2.8	7.52	
2	建屋底面+断層のすべり	Ss-1	3.7	13.74	<p>最小すべり安全率=2.6 (T=7.52 秒) (強度-1σの場合: 2.5)</p>
		Ss-2	2.6 (2.6* ²)	7.52	
3	建屋底面+断層のすべり	Ss-1	4.2	5.44	<p>最小すべり安全率=4.1 (T=7.56 秒)</p>
		Ss-2	4.1	7.56	
4	断層のすべり	Ss-1	6.2	13.71	<p>最小すべり安全率=4.2 (T=7.51 秒)</p>
		Ss-2	4.2	7.51	

※1 地震動の位相を反転させたケースを含む ※2 応力再配分後のすべり安全率 ----- 岩種・岩級区分線 — 断層 ○ すべり安全率の最小値

第1.2-123表(4) すべり安全率(X_{2L}-X_{2L'}断面)(その2)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率※1	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
5	 <p>断層のすべり</p>	Ss-1	3.2	5.61	 <p>最小すべり安全率=3.2 (T=5.61 秒)</p>
		Ss-2	4.1	7.74	
6	 <p>断層のすべり</p>	Ss-1	4.3	5.41	 <p>最小すべり安全率=4.1 (T=7.75 秒)</p>
		Ss-2	4.1	7.75	

※1 地震動の位相を反転させたケースを含む

----- 岩種・岩級区分線 — 断層

— すべり線

第1.2-123表(5) すべり安全率(Y-Y'断面)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率※1	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
1	建屋底面のすべり	Ss-1	5.7	13.75	
		Ss-2	3.8	7.53	
2	建屋底面+断層のすべり	Ss-1	6.0	13.75	
		Ss-2	4.0	7.54	
3	建屋底面+断層のすべり	Ss-1	6.6	13.75	
		Ss-2	4.8	7.53	
4	断層のすべり	Ss-1	3.0	10.05	
		Ss-2	1.7 (1.8※2)	7.55	

※1 地震動の位相を反転させたケースを含む

※2 応力再配分後のすべり安全率

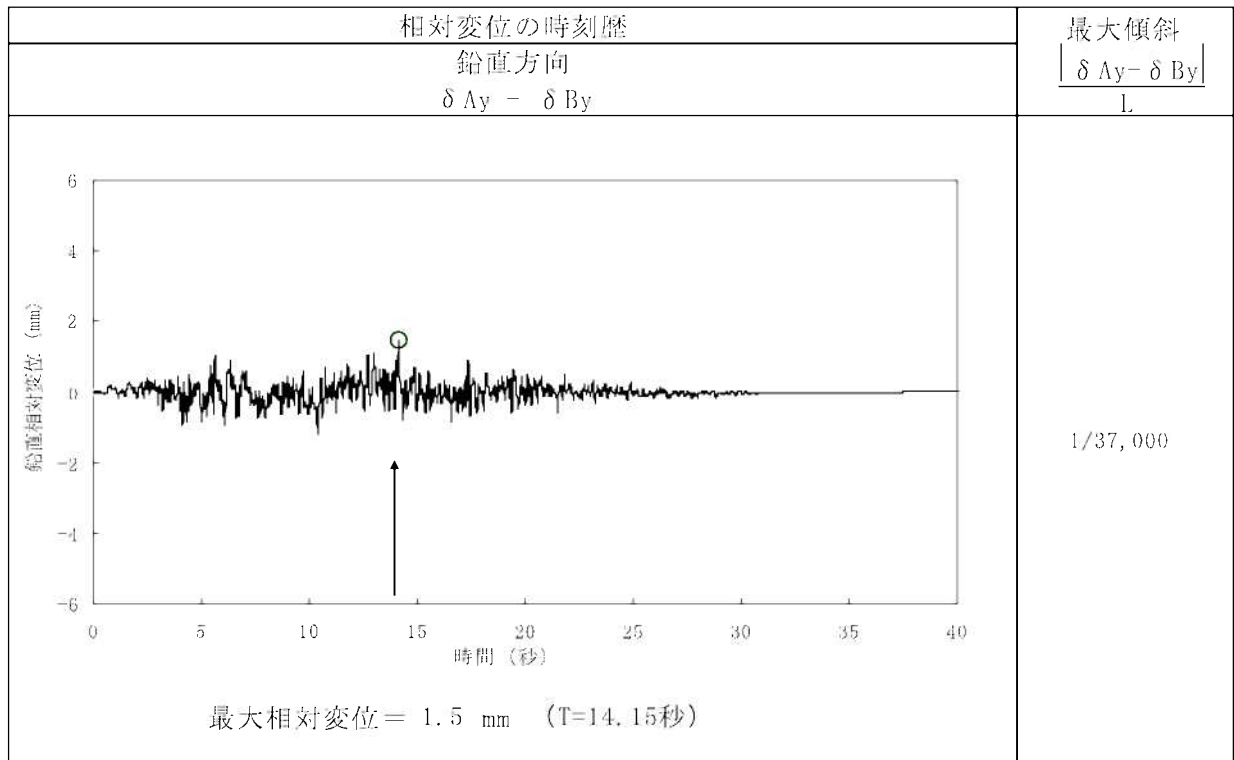
----- 岩種・岩級区分線

— 断層

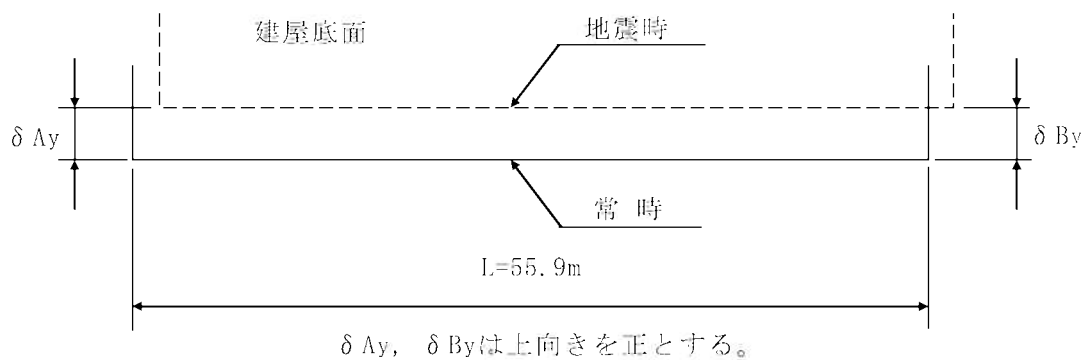
— 断層

○ すべり安全率の最小値

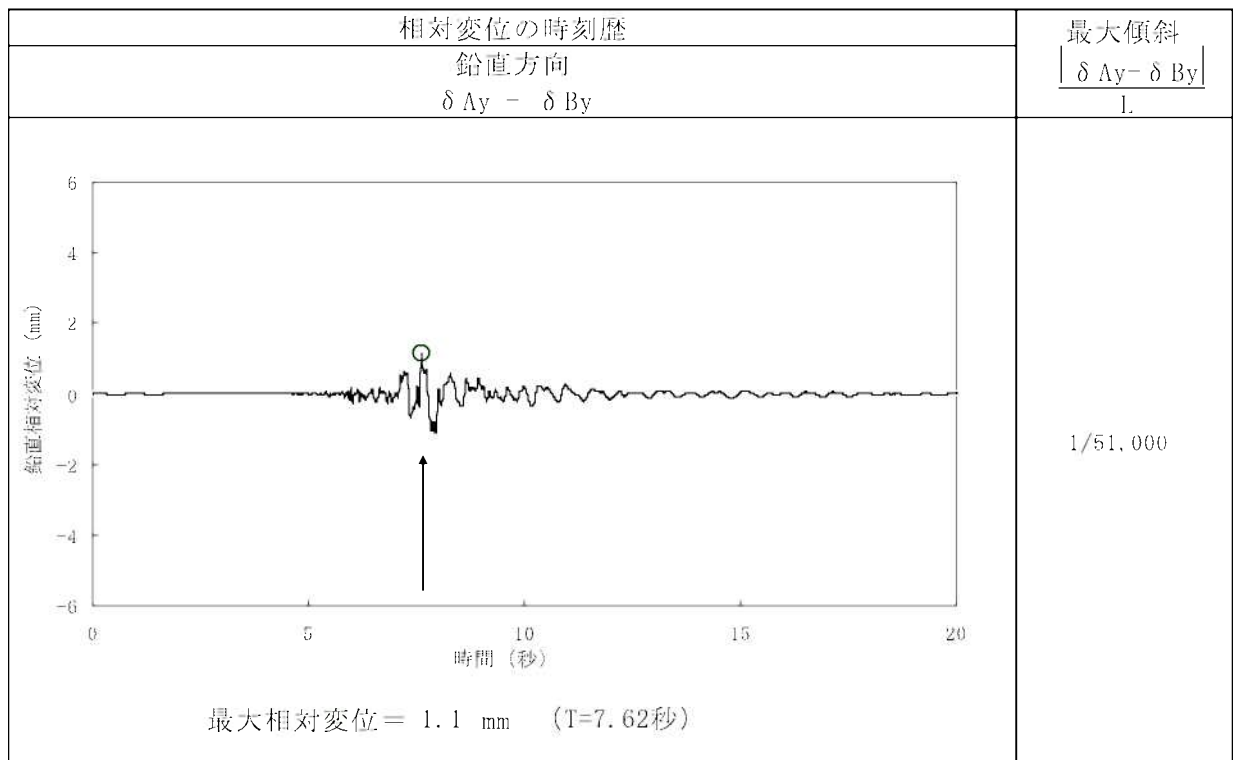
第1.2-124表(1) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($X_{1L}-X_{1L}'$ 断面、Ss-1)



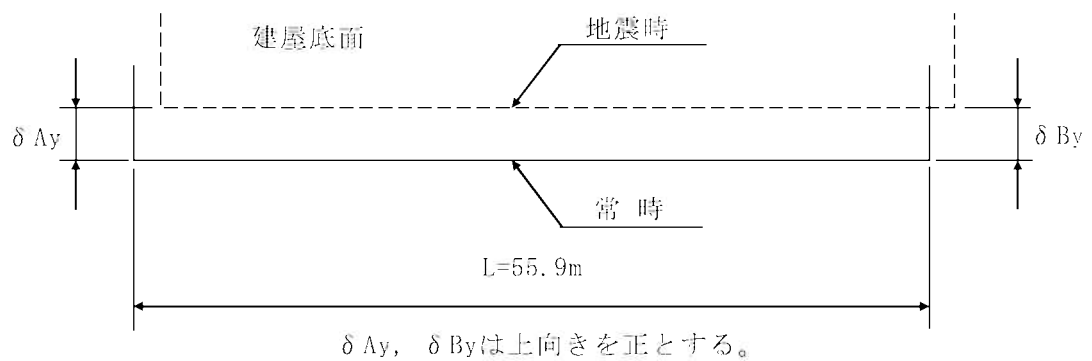
(注) 記号の説明



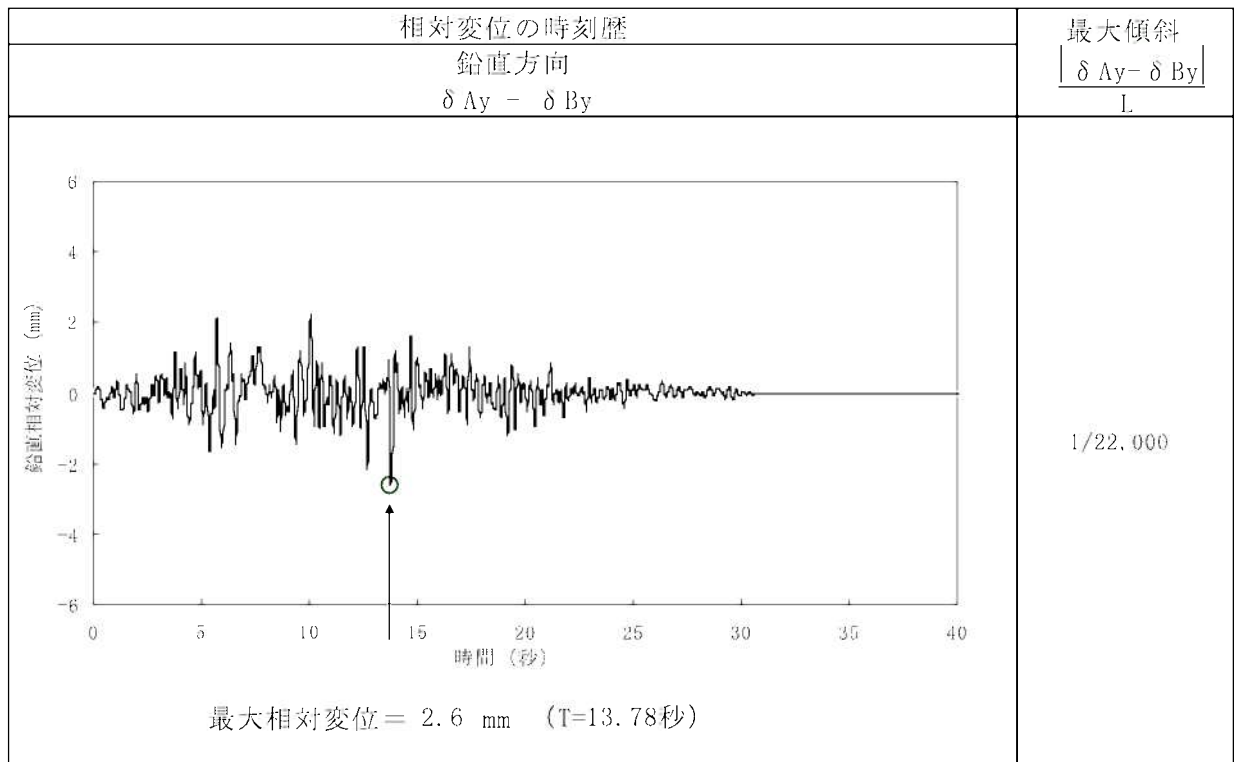
第1.2-124表(2) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($X_{1L}-X_{1L}'$ 断面、Ss-2)



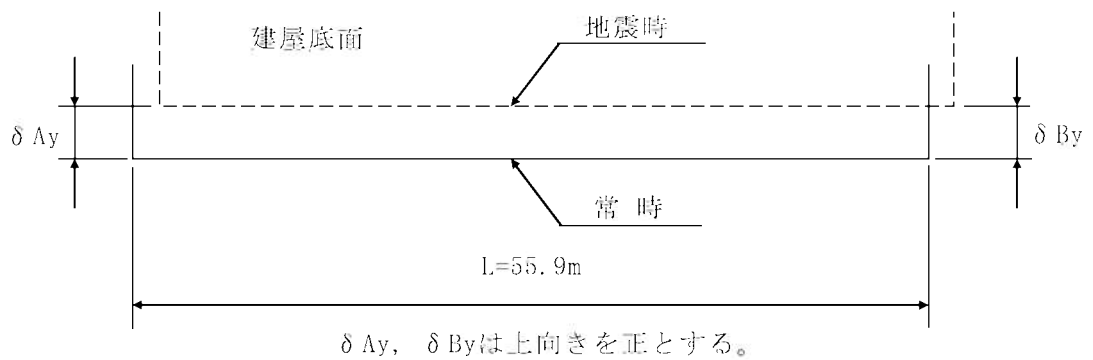
(注) 記号の説明



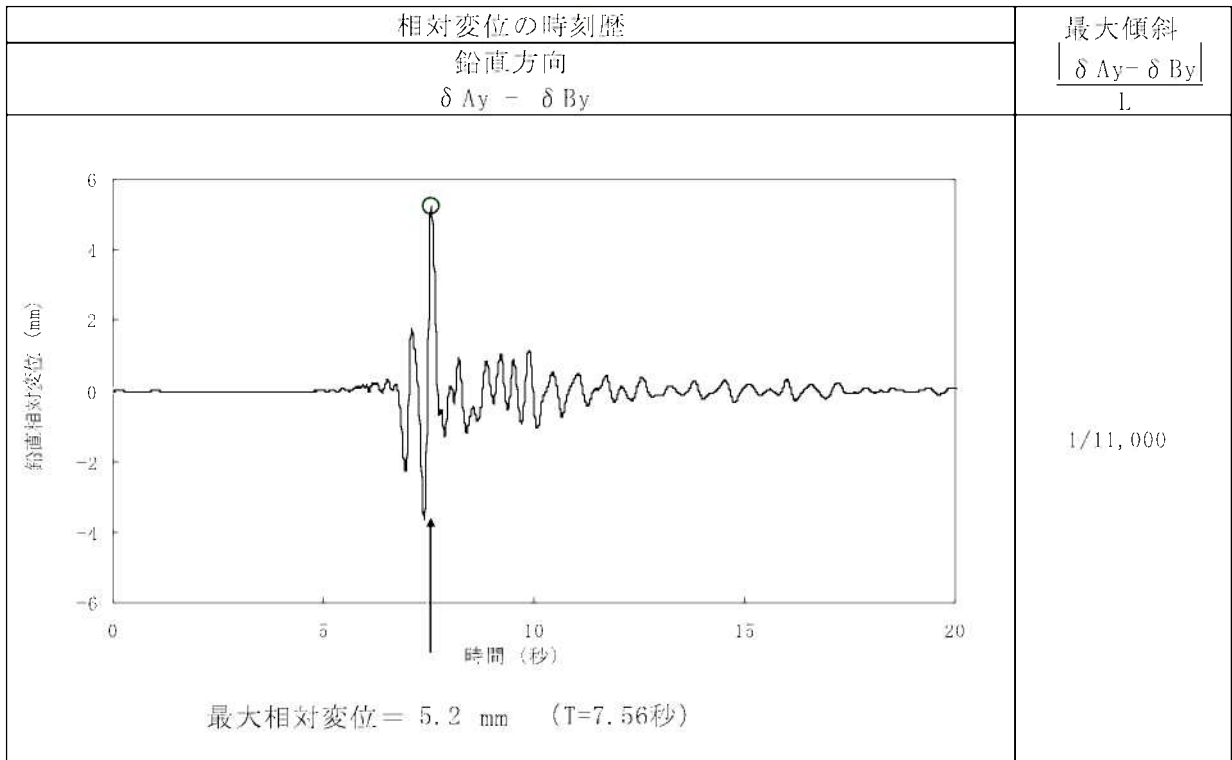
第1.2-124表(3) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($X_{2L}-X_{2L}'$ 断面、Ss-1)



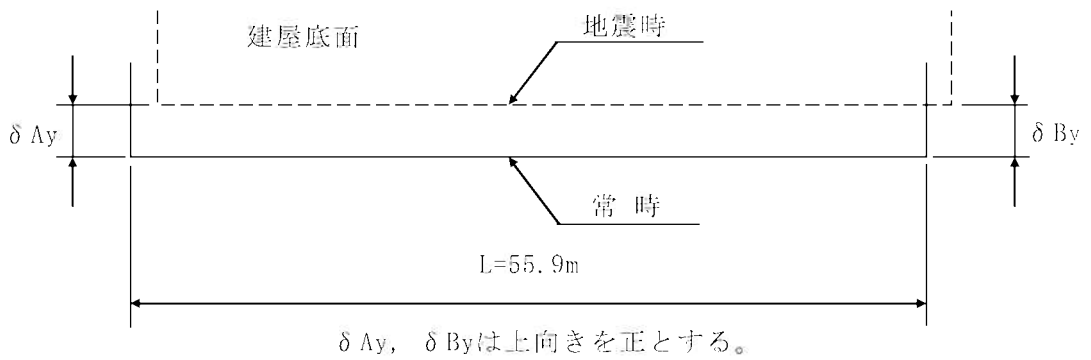
(注) 記号の説明



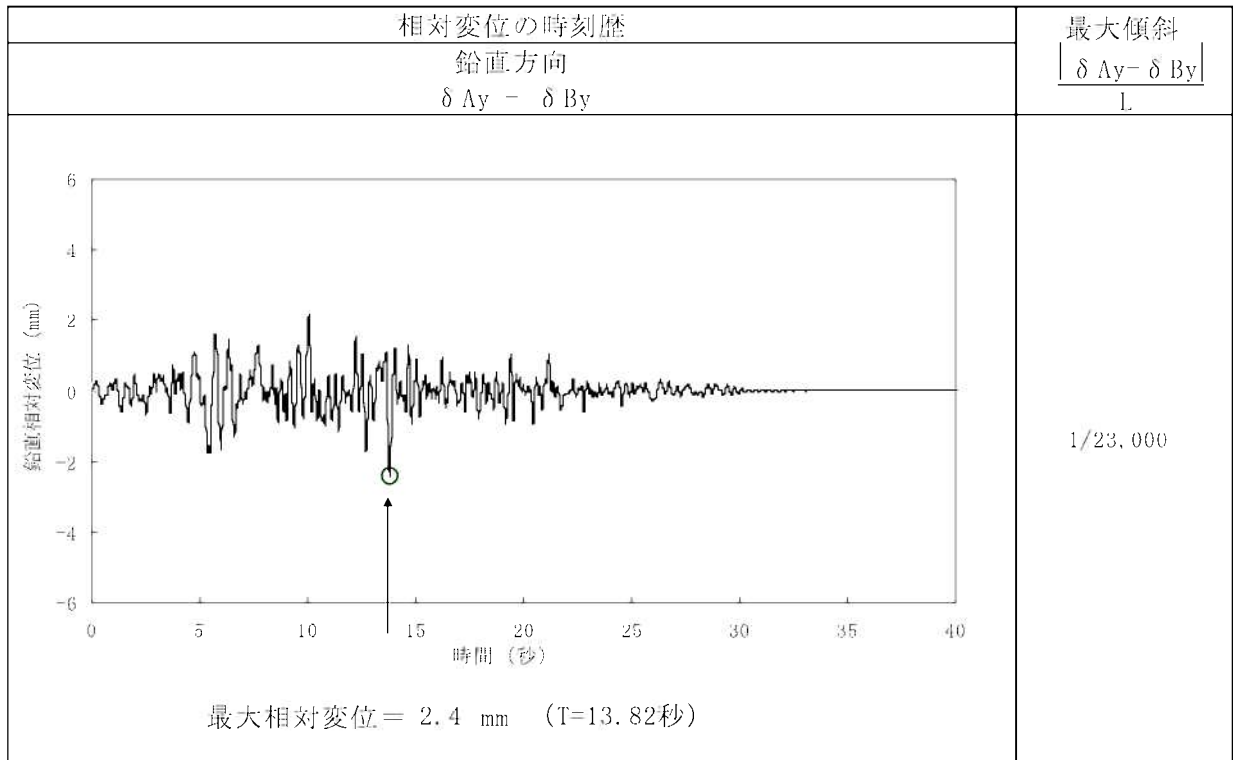
第1.2-124表(4) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($X_{2L}-X_{2L}'$ 断面、Ss-2)



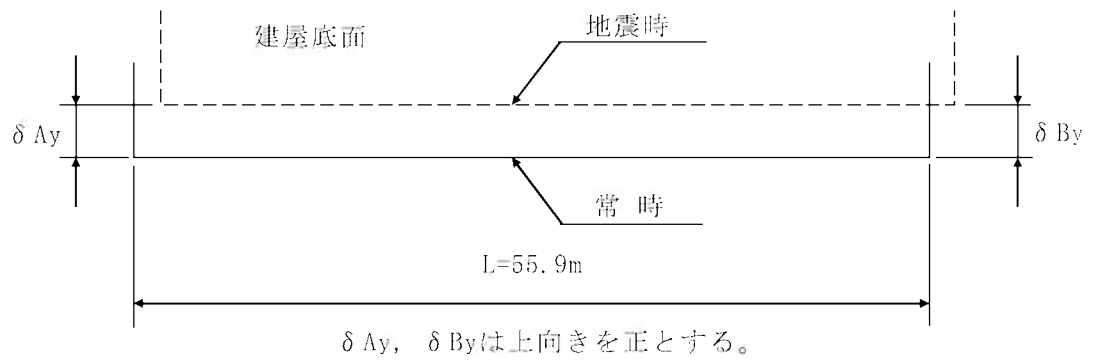
(注) 記号の説明



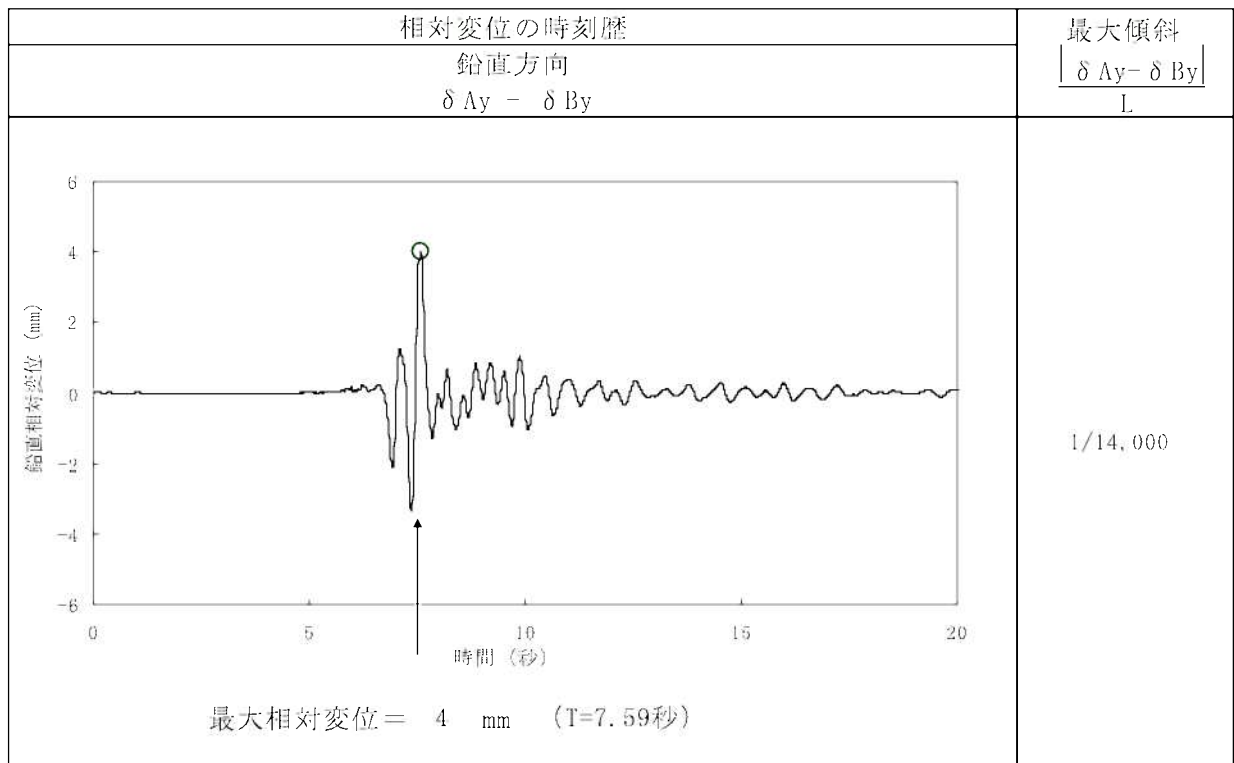
第1.2-124表(5) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
(Y-Y'断面、Ss-1)(1号機)



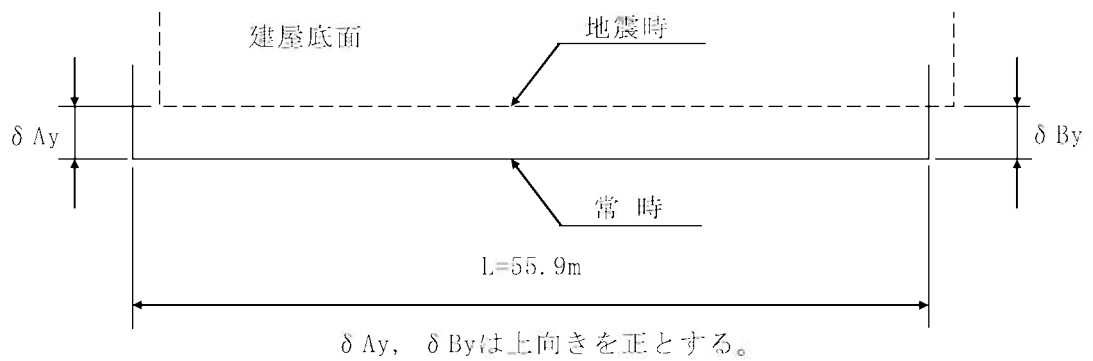
(注) 記号の説明



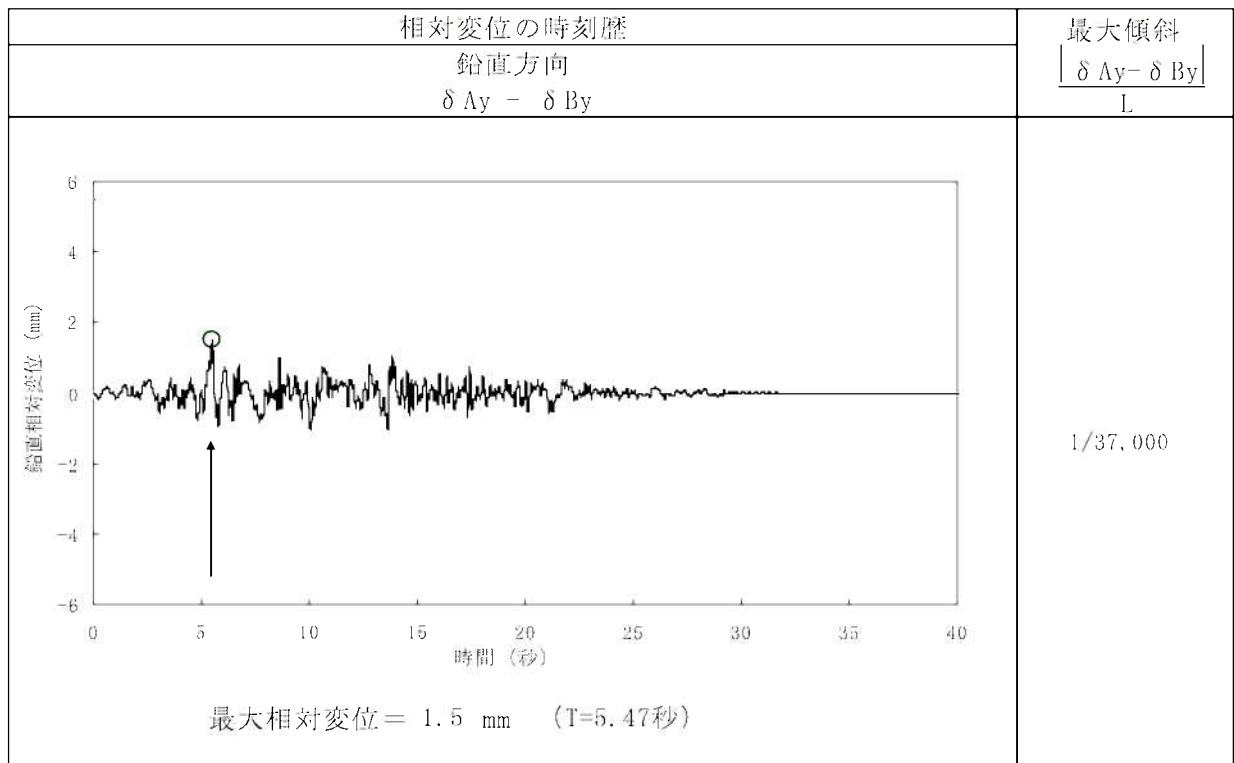
第1.2-124表(6) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
(Y-Y'断面、Ss-2)(1号機)



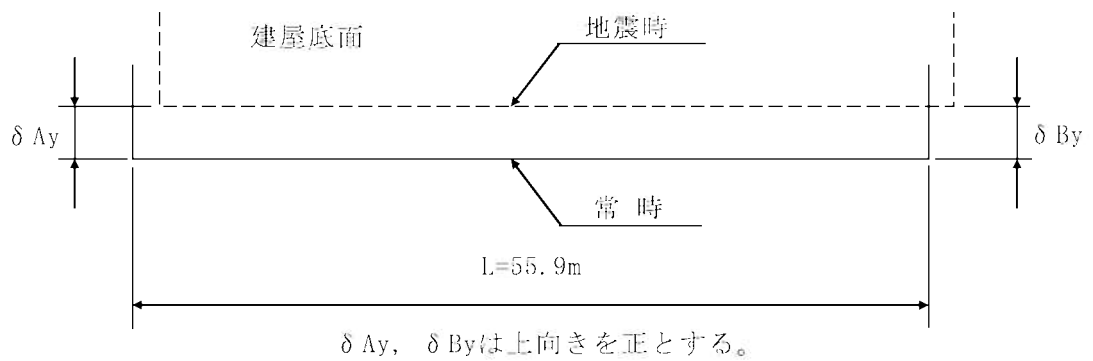
(注) 記号の説明



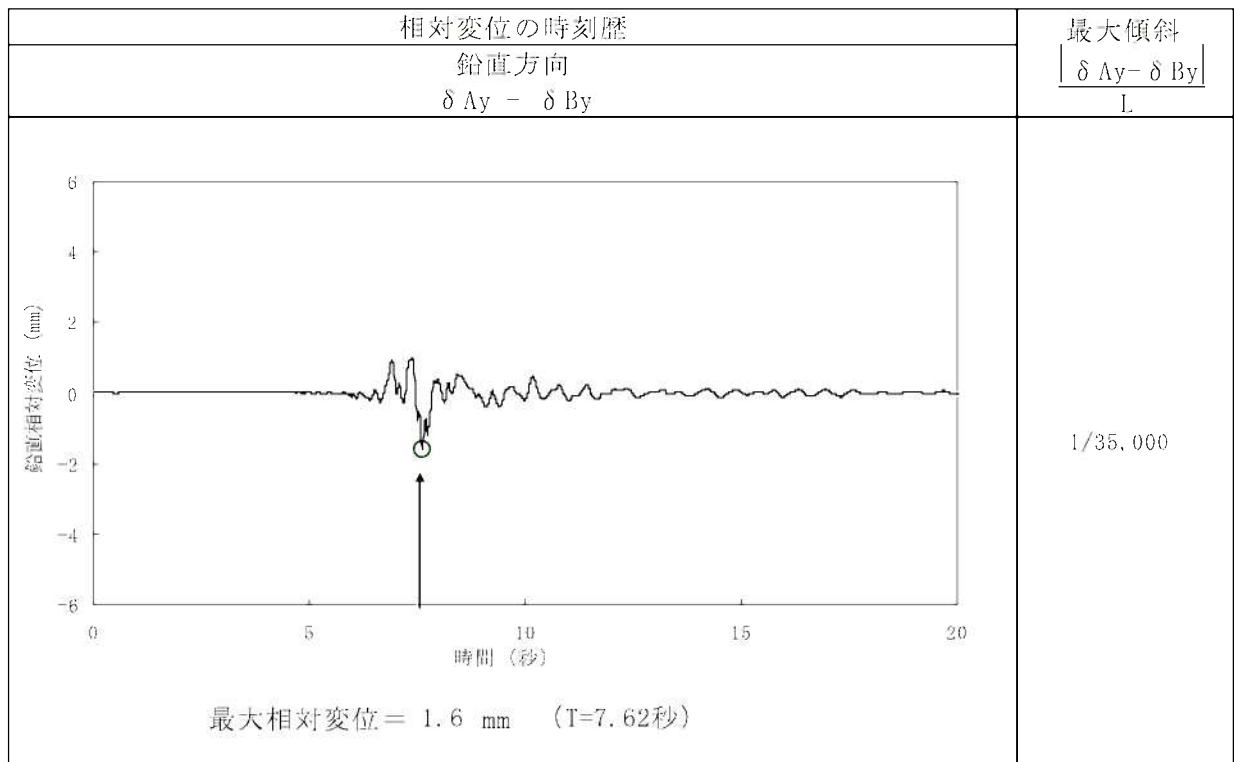
第1.2-124表(7) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
(Y-Y'断面、Ss-1)(2号機)



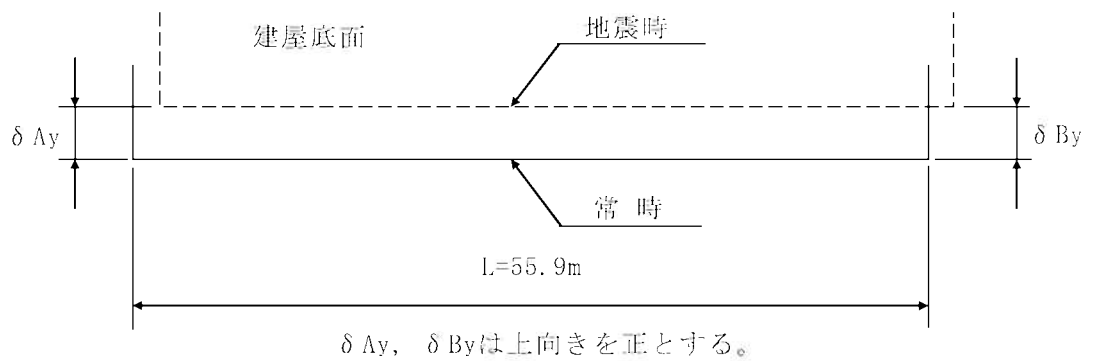
(注) 記号の説明



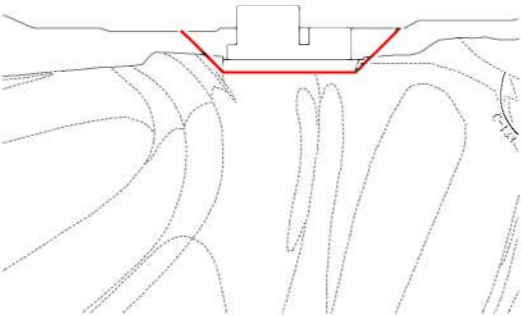
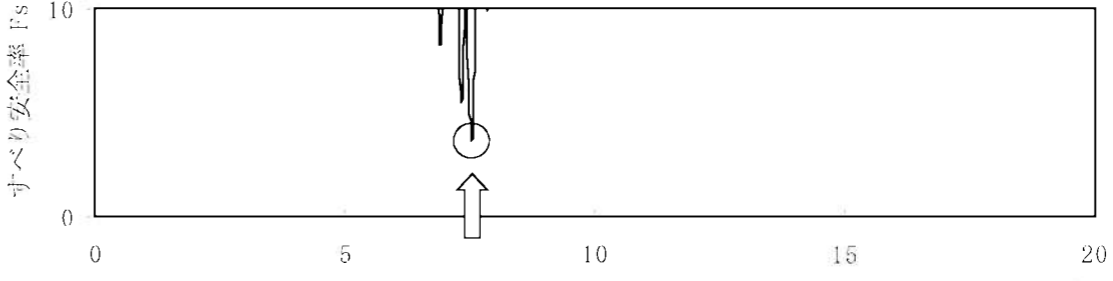
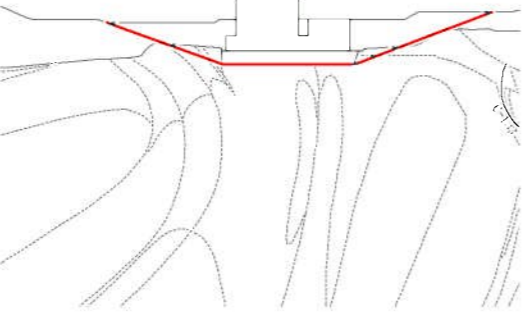
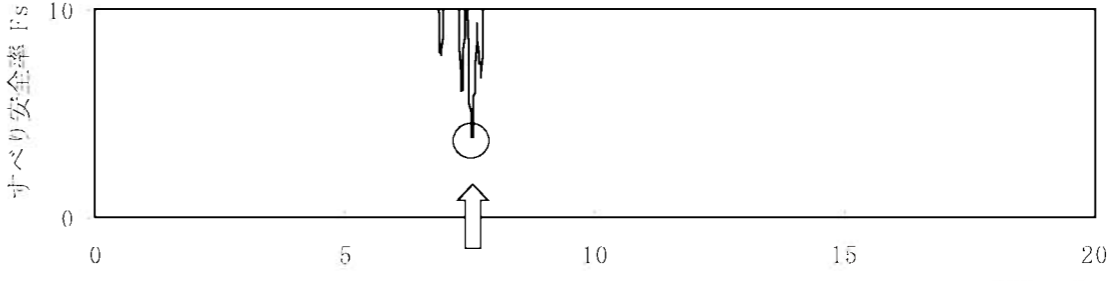
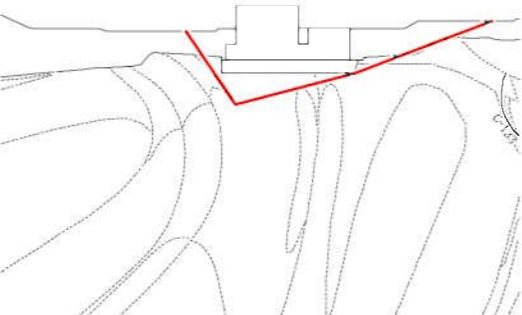
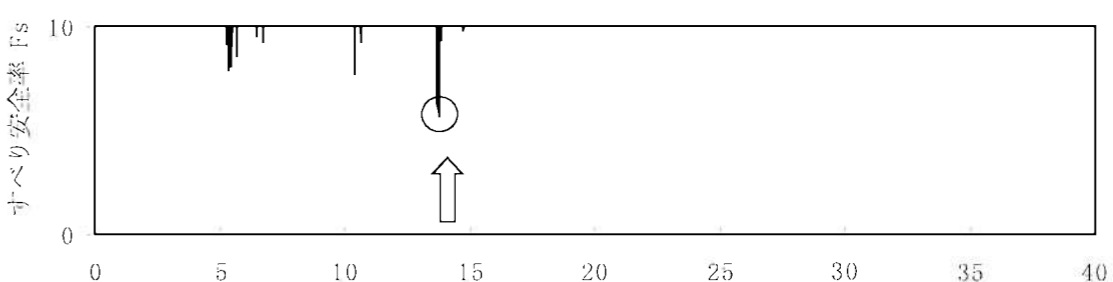
第1.2-124表(8) 原子炉建屋基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
(Y-Y'断面、Ss-2)(2号機)



(注) 記号の説明



第1.2-125表(1) すべり安全率($X_k - X_k'$ 断面)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率 ^{※1}	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
1	 建屋底面のすべり	Ss-1	3.7	13.74	 すべり安全率 F _s 時刻 (秒)
		Ss-2	3.6 (3.8 ^{※2})	7.53	
2	 建屋底面のすべり	Ss-1	4.0	13.74	 すべり安全率 F _s 時刻 (秒)
		Ss-2	3.8	7.54	
3	 岩盤のすべり	Ss-1	5.6	13.73	 すべり安全率 F _s 時刻 (秒)
		Ss-2	6.1	7.52	

※1 地震動の位相を反転させたケースを含む

※2 応力再配分後のすべり安全率

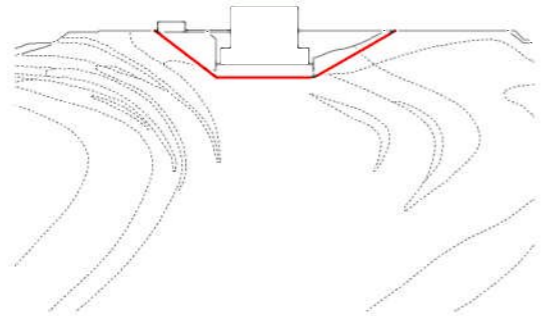
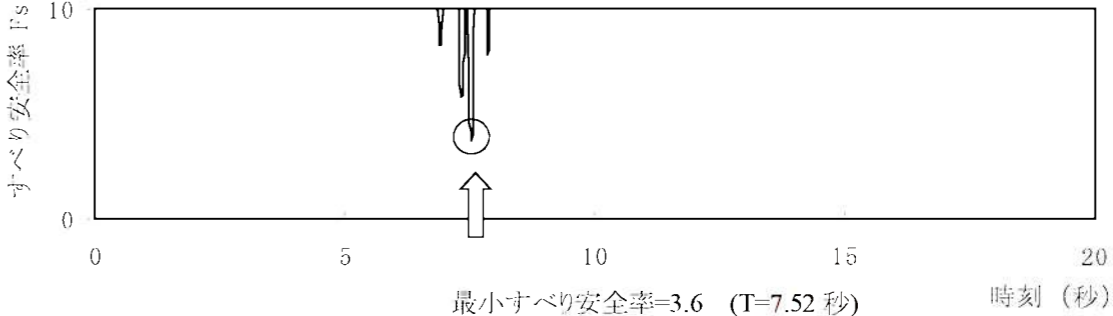
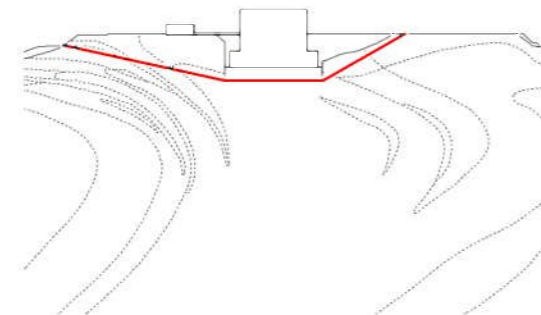
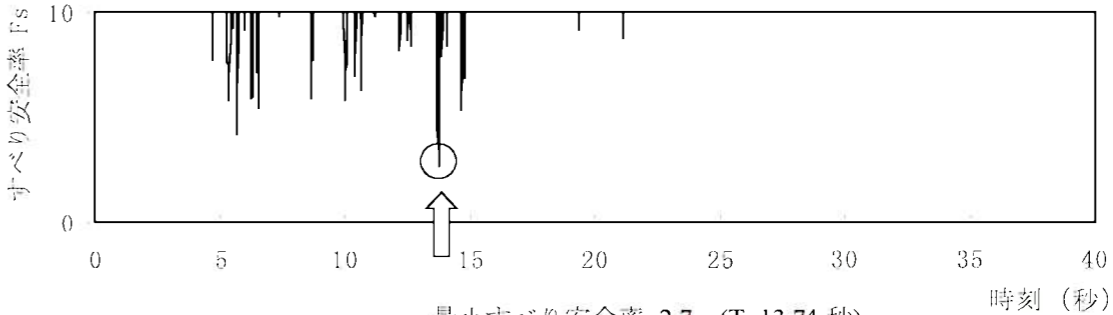
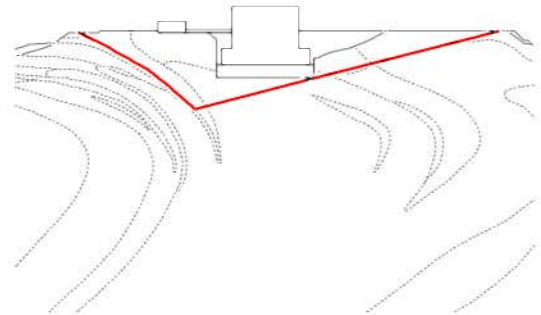
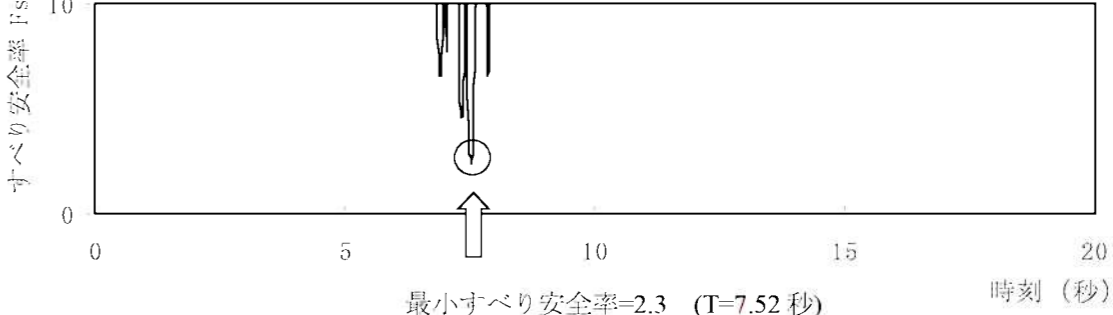
----- 岩種・岩級区分線

— 断層

— 断層

○ すべり安全率の最小値

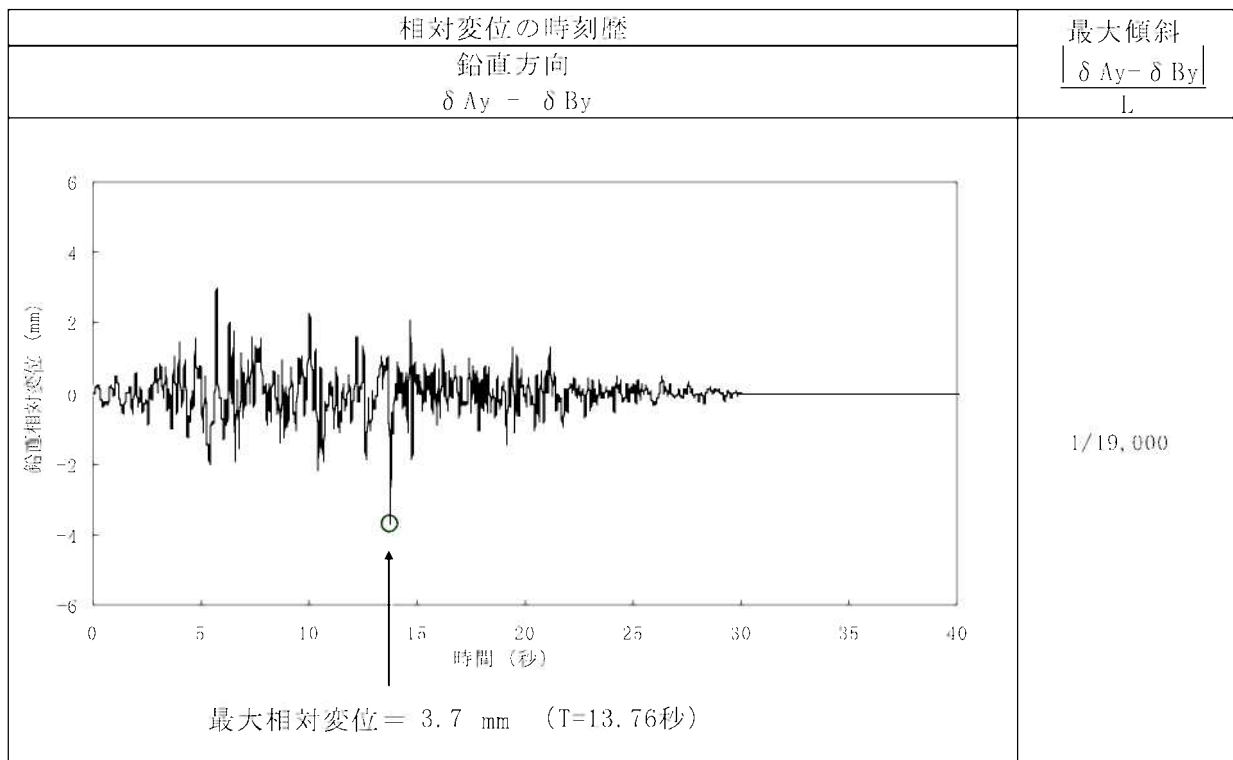
第1.2-125表(2) すべり安全率($Y_k - Y_k'$ 断面)

すべり線番号	すべり線形状	地震動	最小すべり安全率 ^{※1}	時刻(秒)	すべり安全率タイムヒストリー (すべり安全率が最小となるケースについて示す。)
1	 建屋底面のすべり	Ss-1	3.9	13.74	 最小すべり安全率=3.6 (T=7.52 秒)
		Ss-2	3.6	7.52	
2	 建屋底面のすべり	Ss-1	2.7	13.74	 最小すべり安全率=2.7 (T=13.74 秒)
		Ss-2	2.9	7.52	
3	 岩盤のすべり	Ss-1	2.6	13.74	 最小すべり安全率=2.3 (T=7.52 秒) (強度-1σの場合: 2.1)
		Ss-2	2.3 (2.6 ^{※2})	7.52	

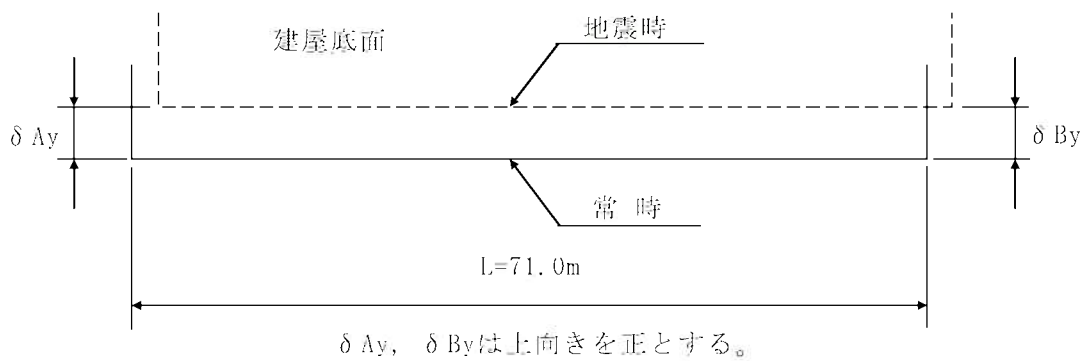
※1 地震動の位相を反転させたケースを含む ※2 応力再配分後のすべり安全率

----- 岩種・岩級区分線 ———— すべり線 ○ すべり安全率の最小値

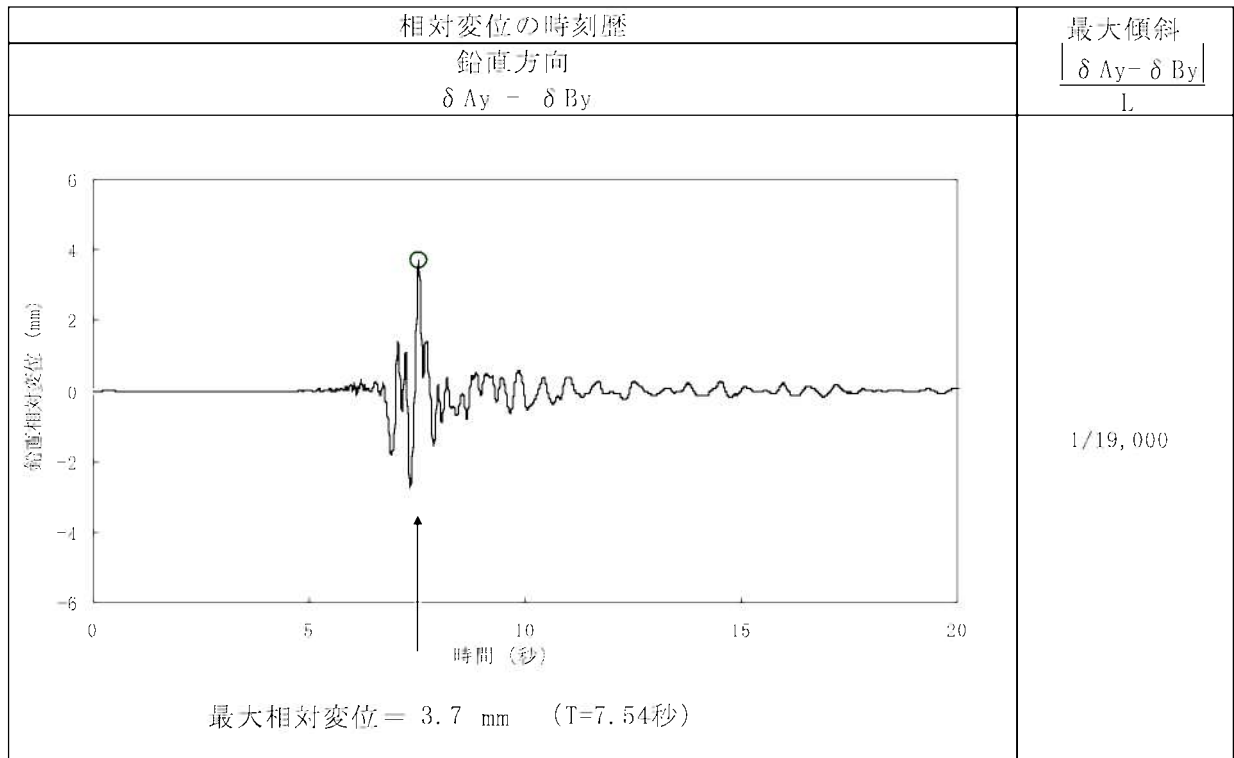
第1.2-126表(1) 緊急時対策棟基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($X_K - X_K'$ 断面、Ss-1)



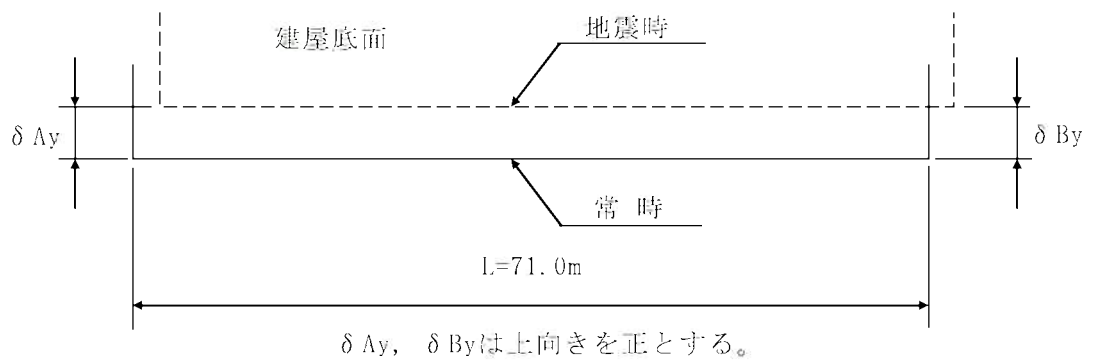
(注) 記号の説明



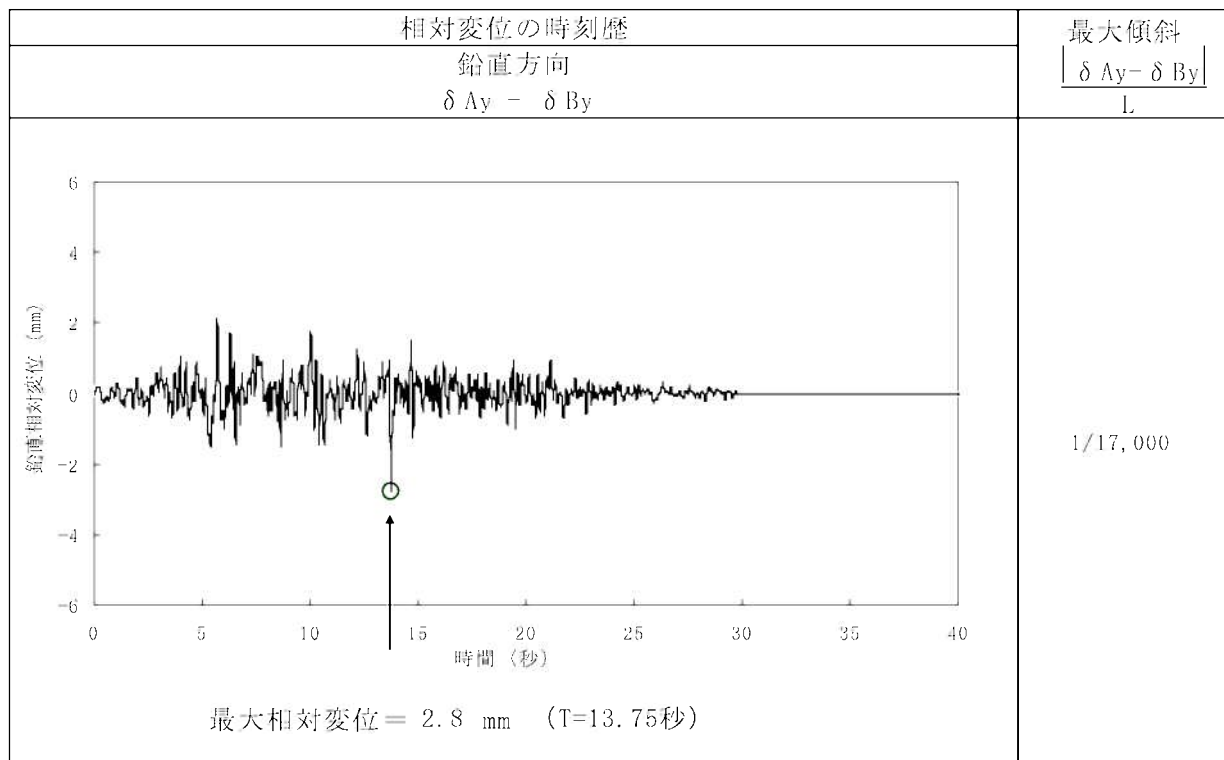
第1.2-126表(2) 緊急時対策棟基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($X_K - X_{K'}$ 断面、Ss-2)



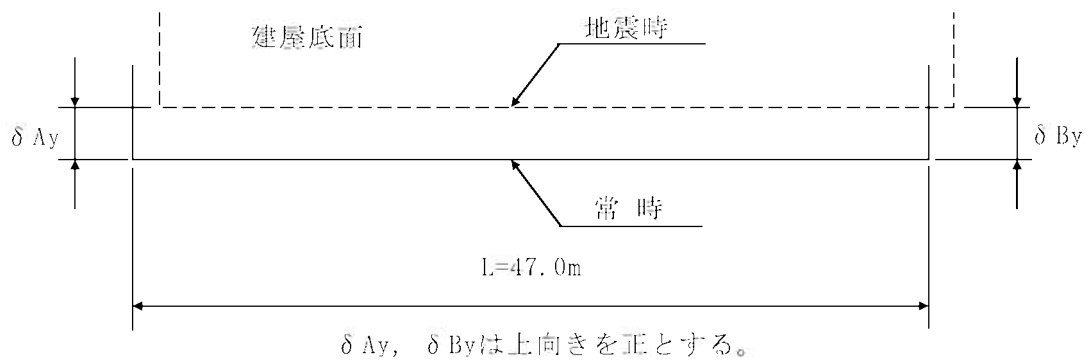
(注) 記号の説明



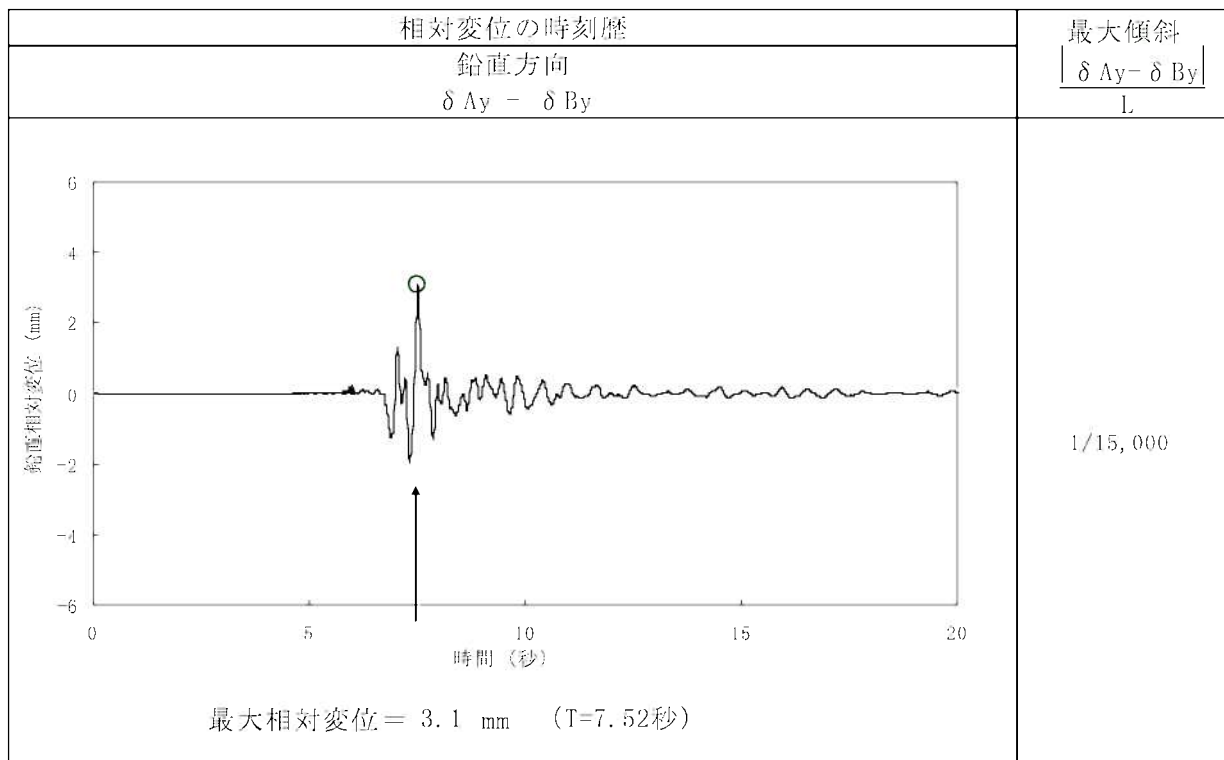
第1.2-126表(3) 緊急時対策棟基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($Y_K - Y_{K'}$ 断面、Ss-1)



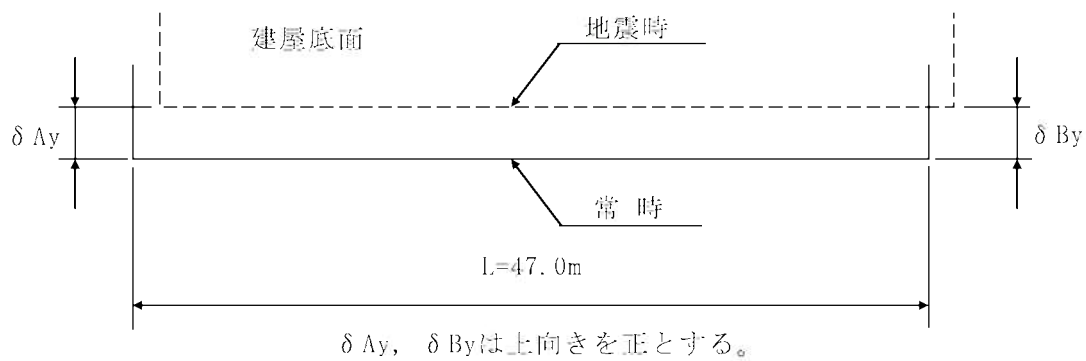
(注) 記号の説明



第1.2-126表(4) 緊急時対策棟基礎底面両端の鉛直方向の相対変位・傾斜
($Y_K - Y_{K'}$ 断面、Ss-2)



(注) 記号の説明



第1.2-129表 阿久根特別地域気象観測所における地上気象観測月別平年値

項目	単位	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
平均気温	℃	7.5	8.0	11.0	15.4	18.9	22.3	26.1	26.8	23.9	19.3	14.5	9.7	16.9
日最高気温の平均	℃	10.9	11.6	14.9	19.4	22.8	25.6	29.4	30.5	27.7	23.4	18.4	13.4	20.7
日最低気温の平均	℃	4.1	4.6	7.2	11.5	15.2	19.4	23.4	23.7	20.8	15.7	10.9	6.2	13.6
平均湿度	%	67	68	71	74	78	85	85	81	79	72	70	68	75
最多風向	-	ENE	NE	NE	ENE	ENE	SSW	SSW	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE
平均風速	m/s	3.9	4.0	3.8	3.2	2.7	2.6	2.6	2.5	3.0	3.3	3.5	3.7	3.2
日照時間	h	112.3	114.2	147.5	170.0	181.8	136.7	205.1	225.3	179.4	188.1	146.0	129.8	1,936.3
降水量	mm	84.9	94.3	144.2	177.4	188.3	403.0	362.9	206.8	209.7	103.9	84.3	68.5	2,128.2

注：統計期間は昭和46年～平成12年の30年間、但し、風速は昭和50年～平成12年の26年間である。

出典：「日本気候表全国の平年値一覧」（気象庁編、平成13年）

第1.2-130表 川内地域気象観測所における地上気象観測結果（平成18年）

項目	単位	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
平均気温	℃	6.9	9.1	10.0	15.0	20.2	23.5	28.0	28.2	24.6	20.5	14.7	9.4	17.5
最多風向	-	NNE	NW	NNE	NW	WNW	NNE	SSW	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE
平均風速	m/s	1.6	2.2	2.3	2.5	2.3	2.0	2.6	1.8	1.5	1.5	1.8	1.6	2.0
日照時間	h	123.7	116.8	167.6	161.2	68.6	70.2	135.4	186.4	139.1	242.8	122.3	118.7	1,652.8
降水量	mm	104.0	140.0	142.0	246.0	269.0	434.0	525.0	221.0	190.0	25.0	108.0	170.0	2,574.0

出典：「アメダス年報2006年」（気象庁編、平成19年）

第1.2-131表 川内川の流量

観測所	流量(m ³ /s)					統計期間
	豊水流量	平水流量	低水流量	渇水流量	年平均	
斧淵	86.40	56.39	40.60	22.75	91.03	昭和31年1月~平成15年12月

出典:「流量年表」(国土交通省河川局、平成19年)

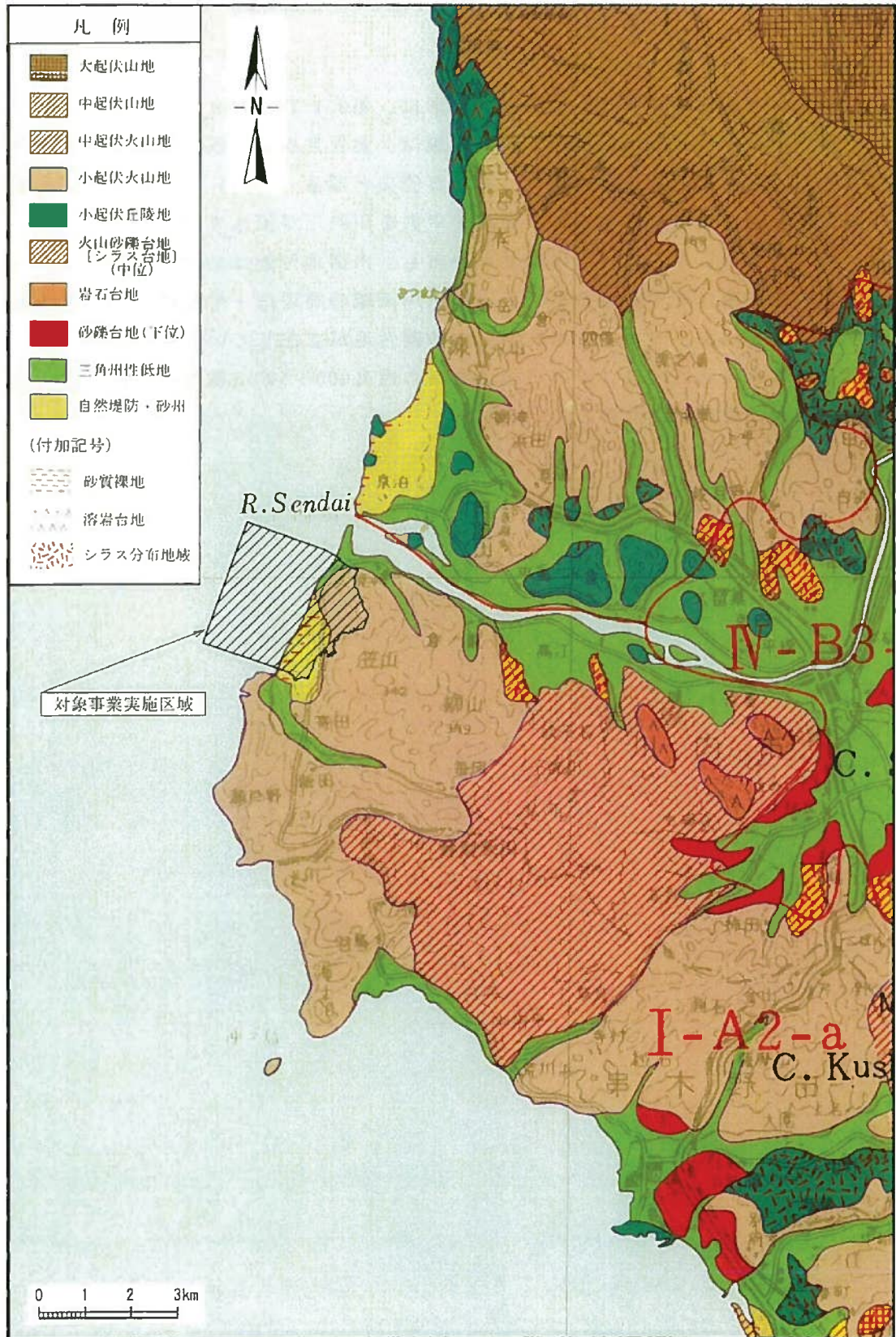
第1.2-132表 土地利用の状況(平成18年)

(単位:ha)

	総数	田	畑	宅地	山林	その他
薩摩川内市	30,818	4,679	3,406	2,185	16,119	4,430
いちき串木野市	8,023	740	838	566	5,191	688
鹿児島県	465,382	48,152	108,916	34,930	230,402	42,982

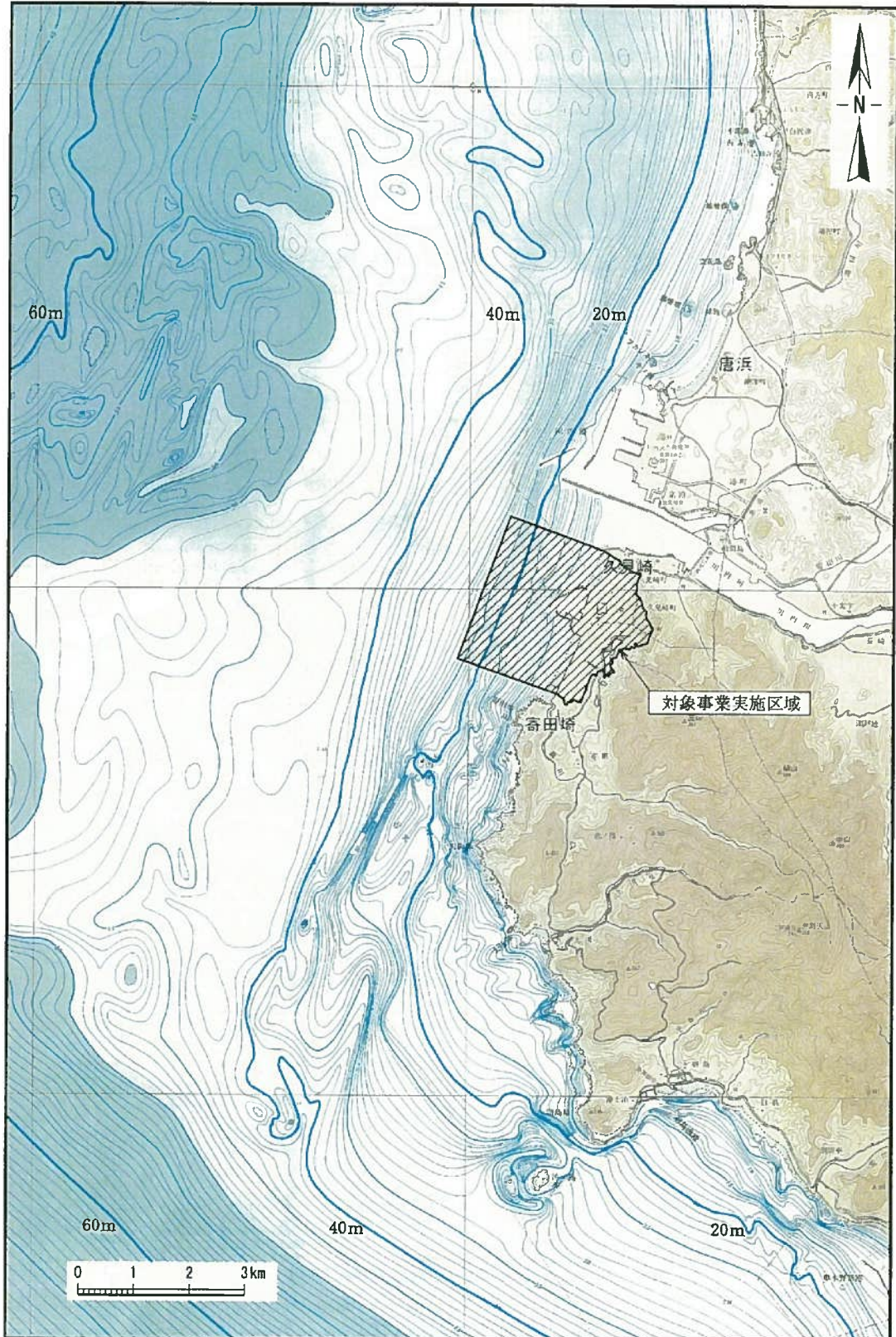
注:四捨五入の関係で、総数と内訳は一致しない。

出典:「平成18年 鹿児島県統計年鑑」(鹿児島県、平成19年)



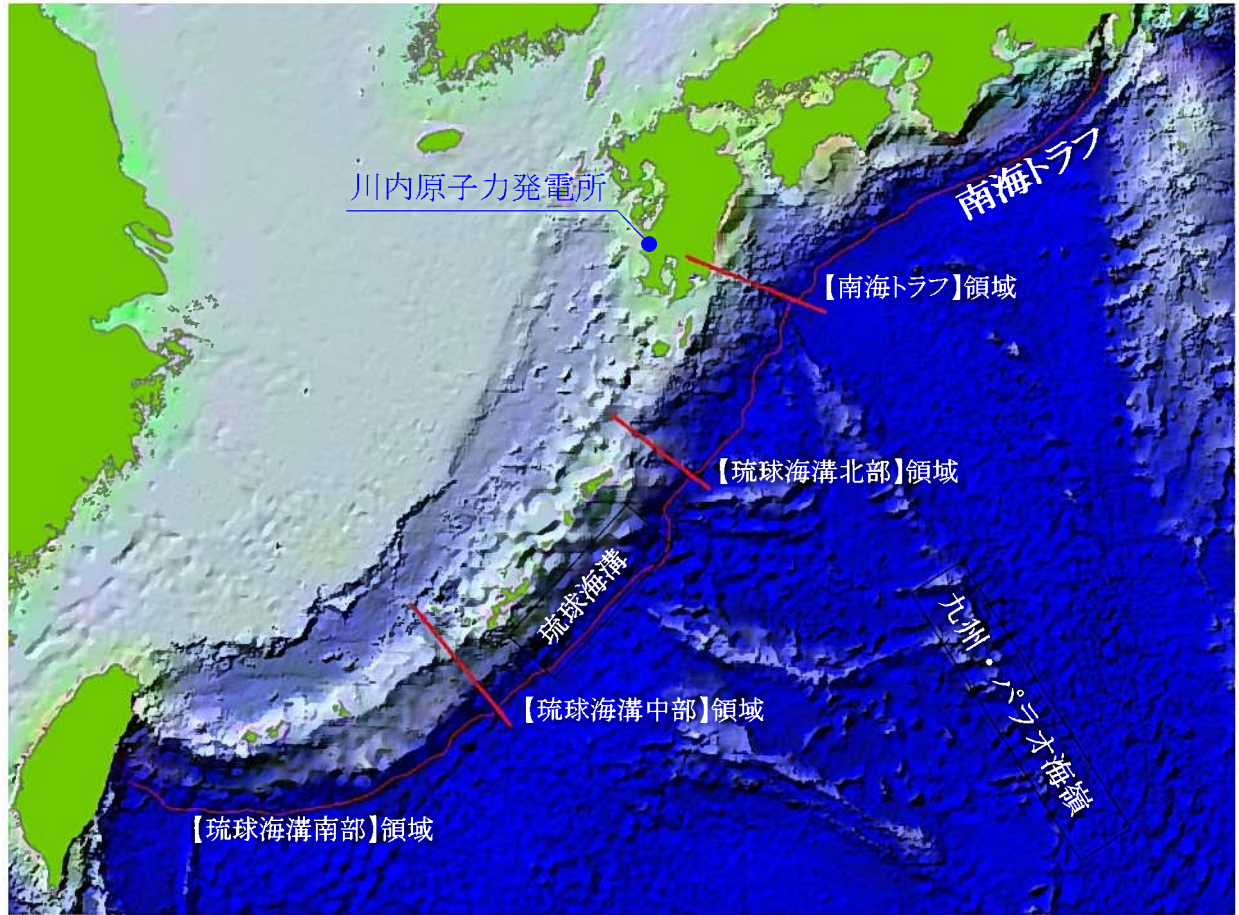
「土地分類図(鹿児島県)地形図」(経済企画庁、昭和46年)より作成

第1.2-1図 川内原子力発電所及びその周辺の地形



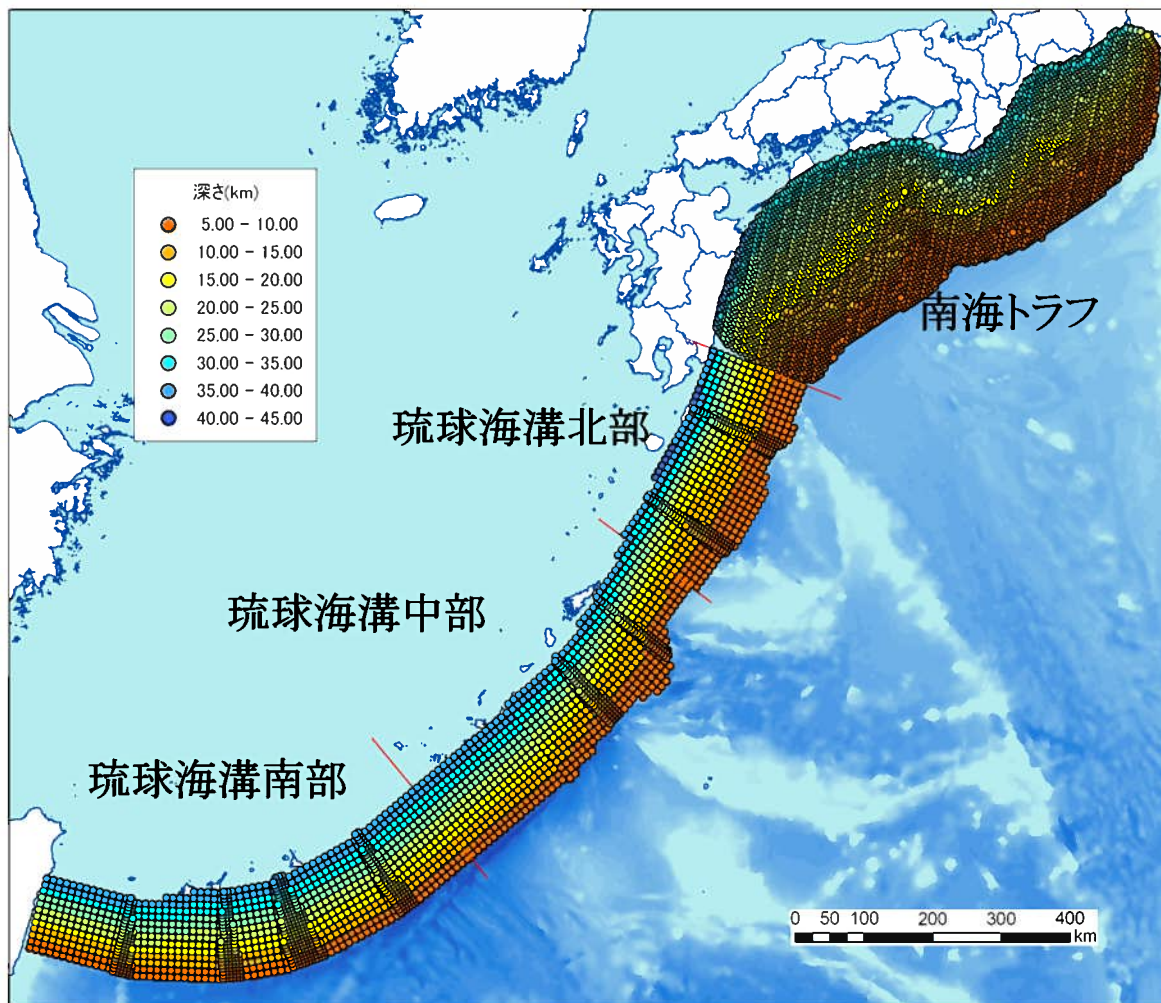
「阿久根海底地形図」(海上保安庁、平成13年)
「串木野海底地形図」(海上保安庁、平成14年)より作成

第1.2-2図 川内原子力発電所の周辺海域の海底地形

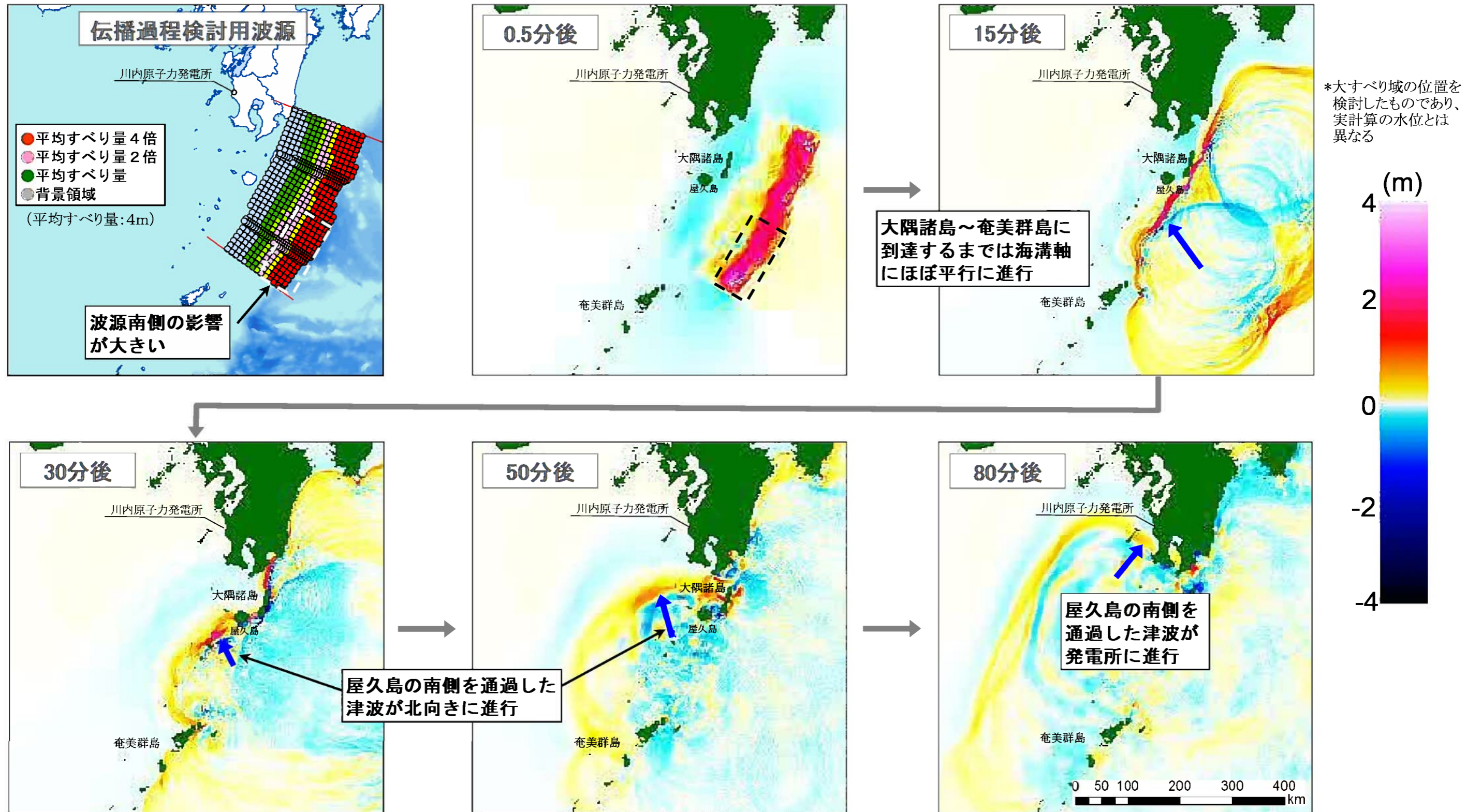


©ESRI, NOAA NGDC

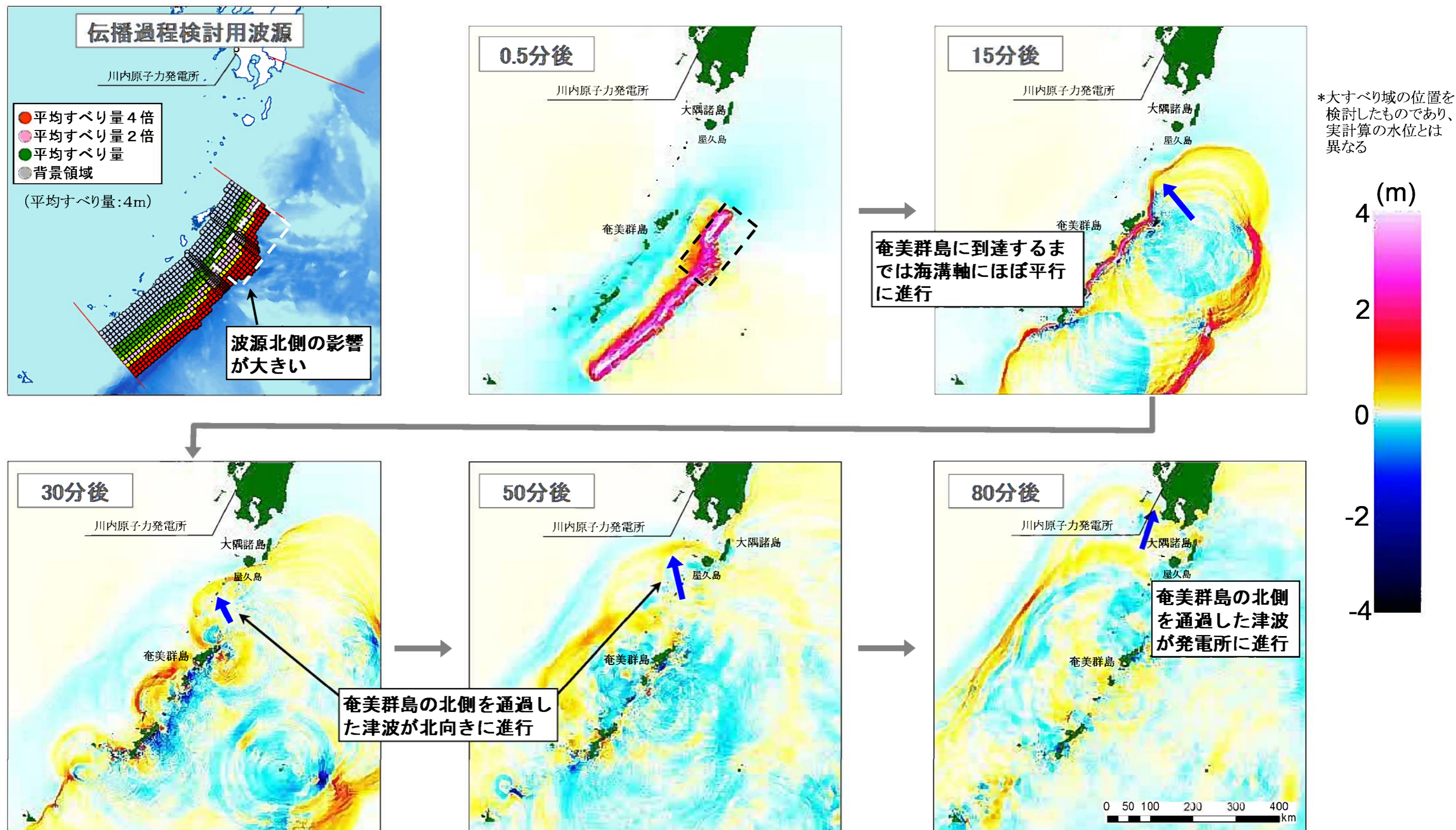
第1.2-4図 南海トラフ～琉球海溝における領域区分図



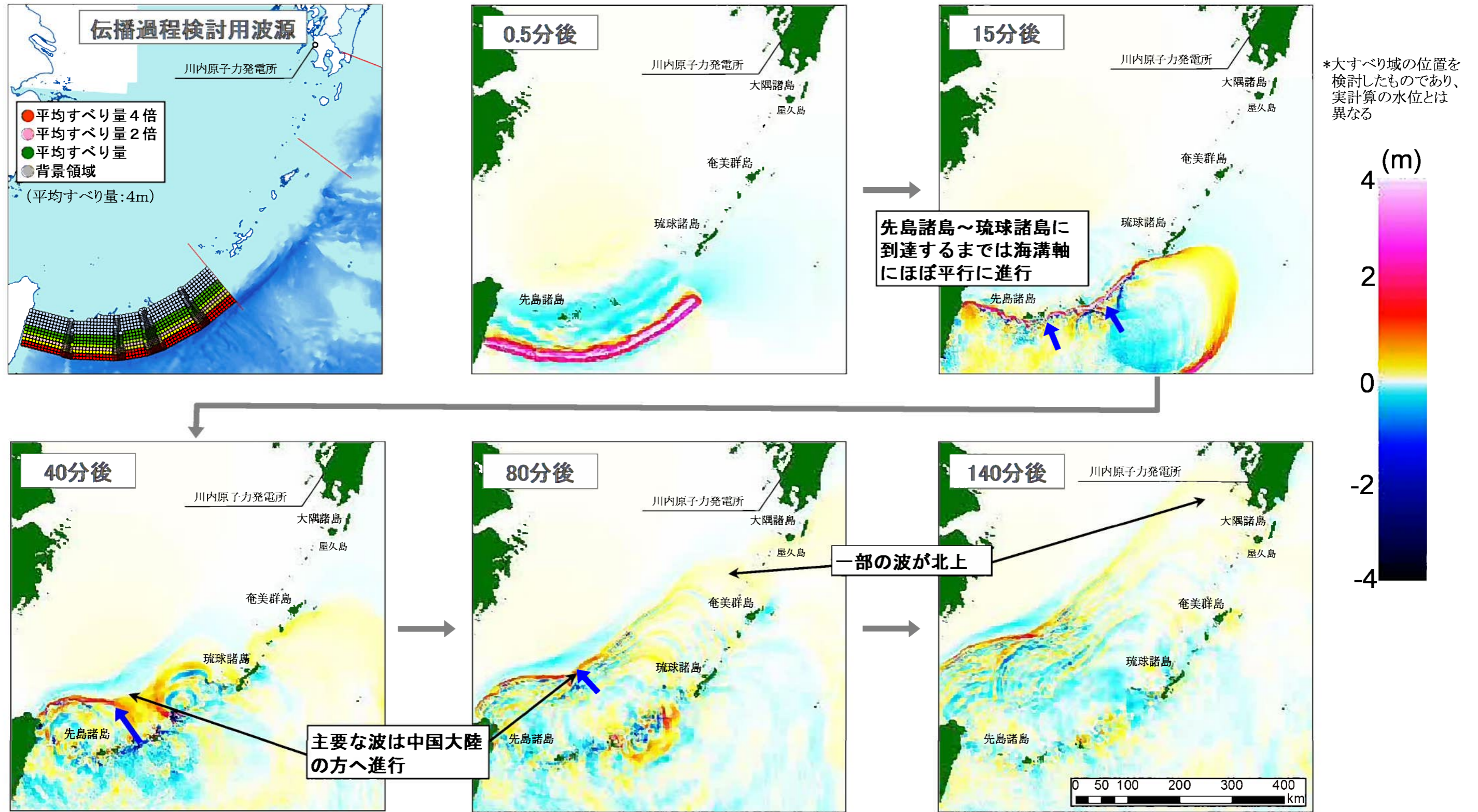
第1.2-5図 南海トラフ～琉球海溝におけるスラブ面形状



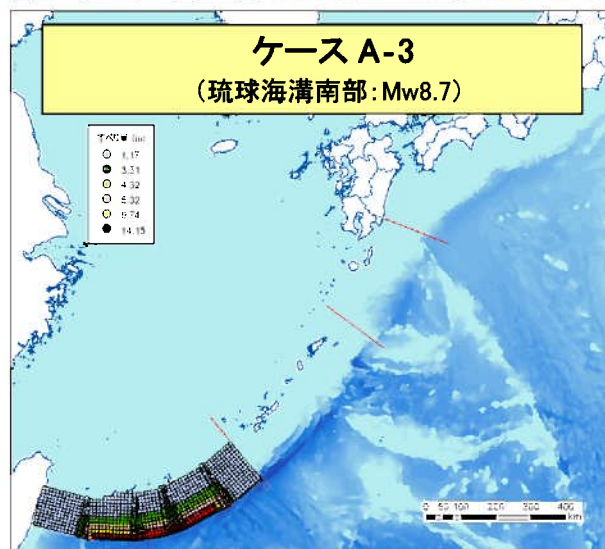
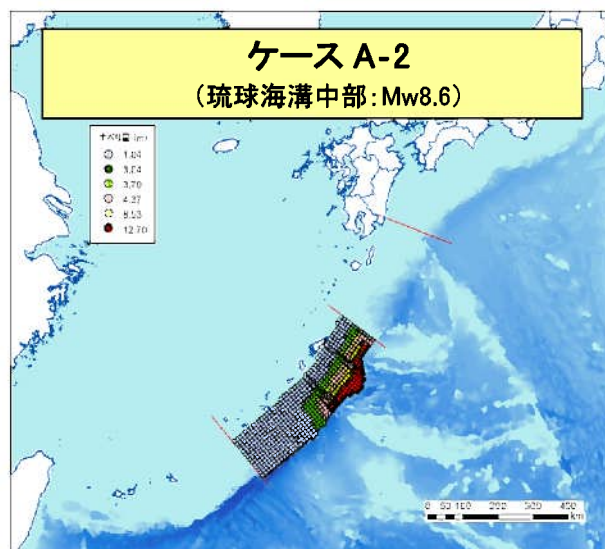
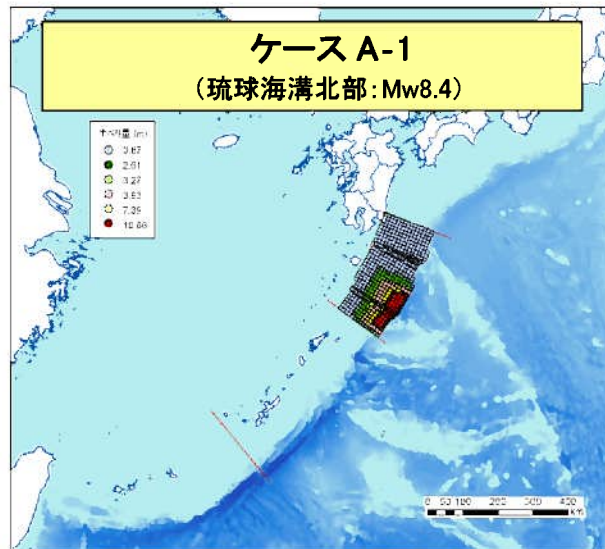
第1.2-6図(1) 琉球海溝北部を波源とした津波の伝ば過程



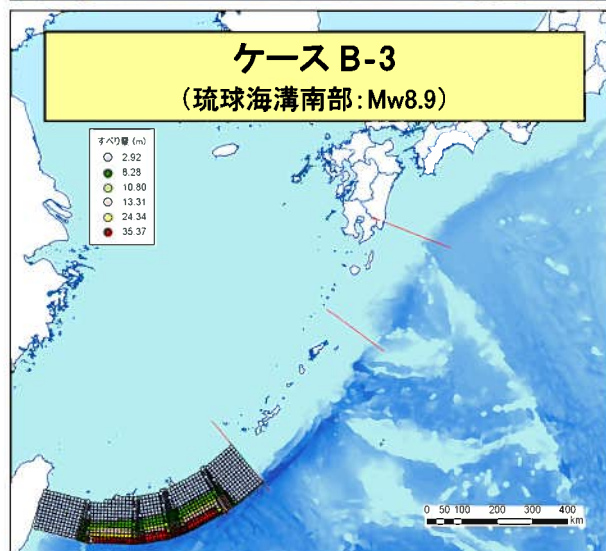
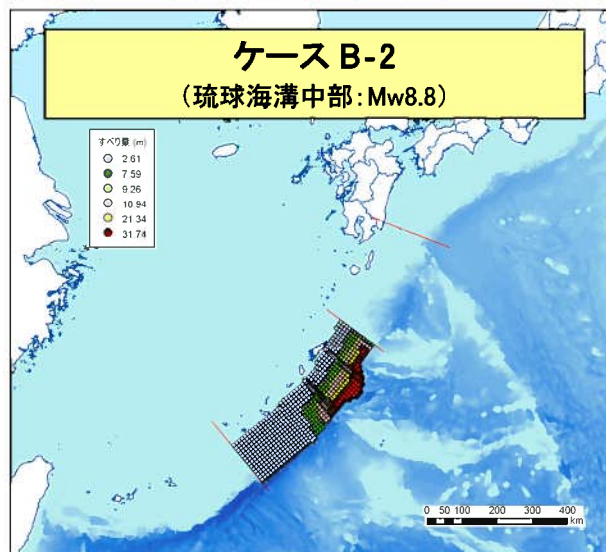
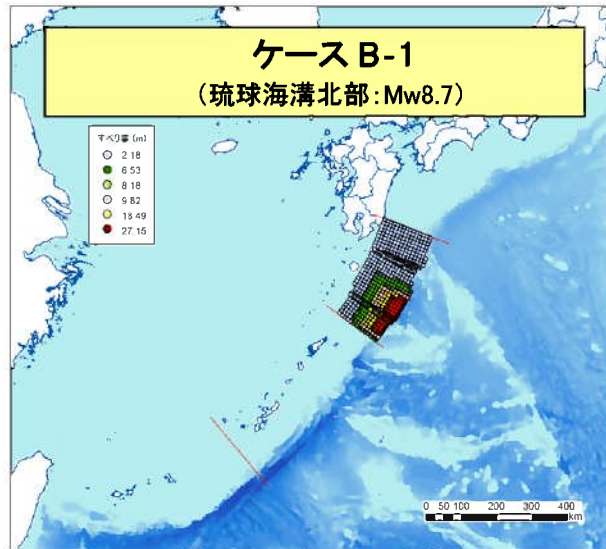
第1.2-6図(2) 琉球海溝中部を波源とした津波の伝ば過程



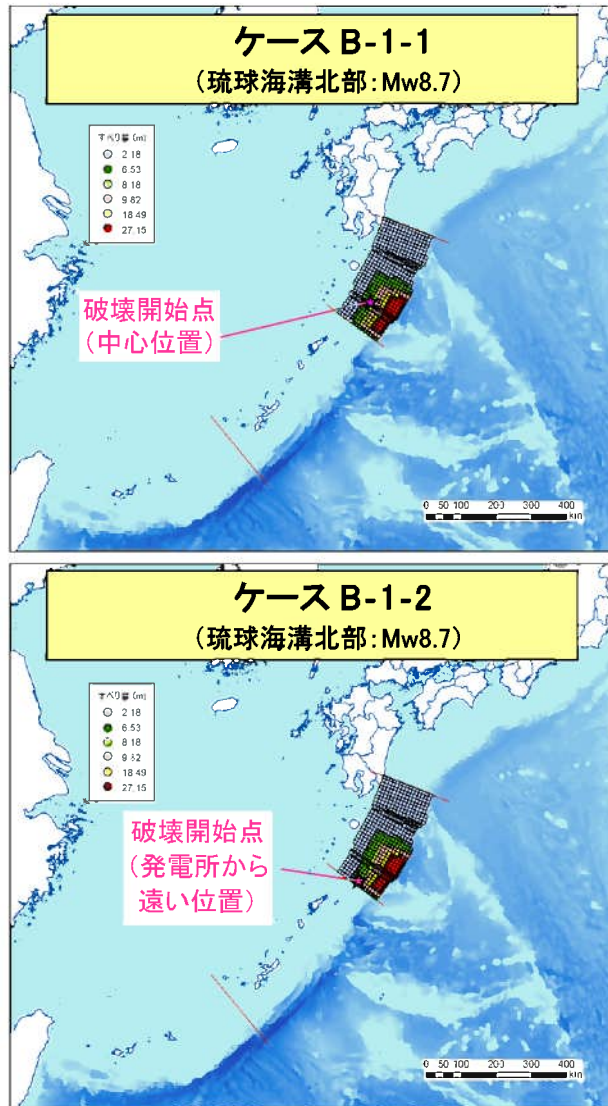
第1.2-6図(3) 琉球海溝南部を波源とした津波の伝ば過程



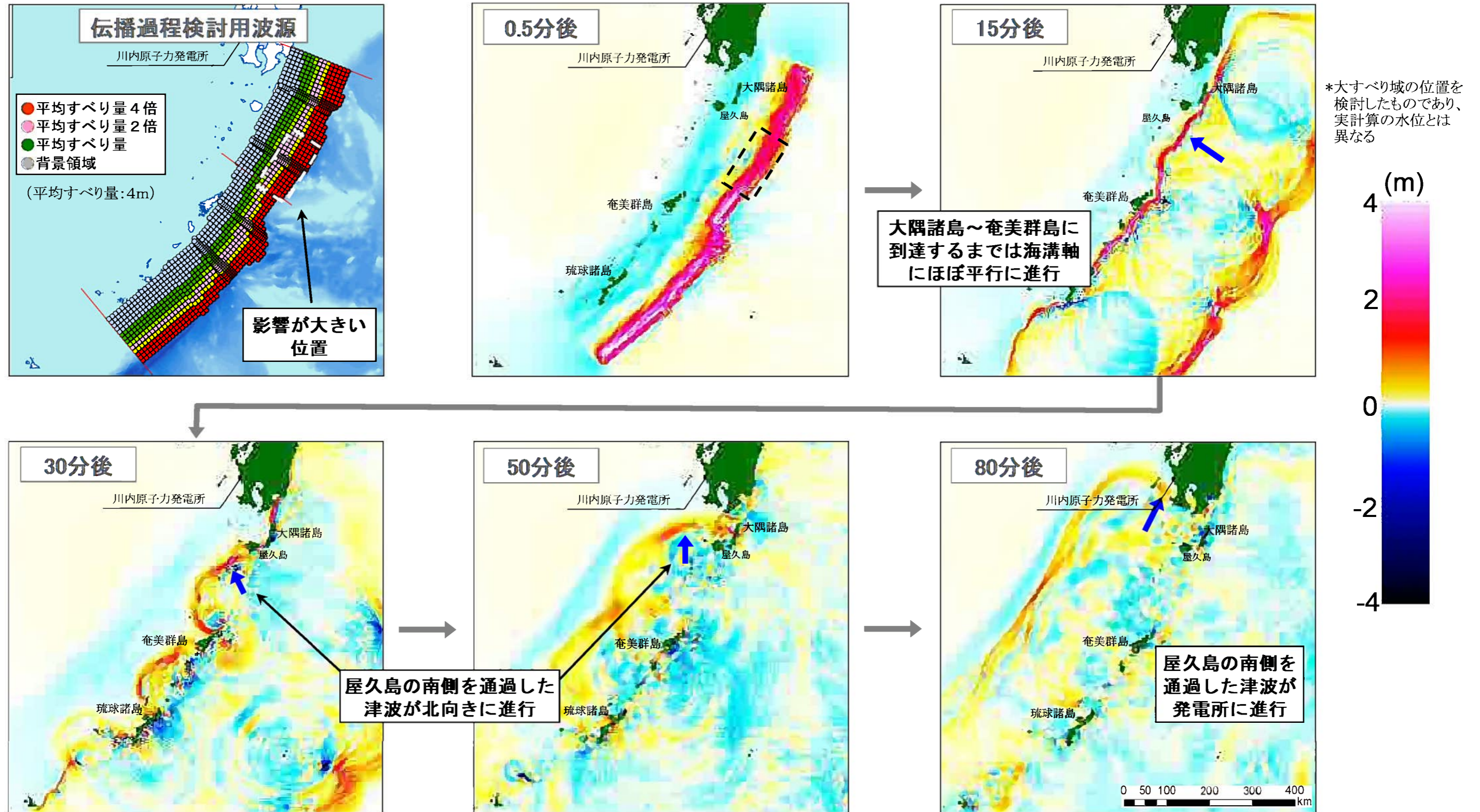
第1.2-7図(1) 琉球海溝の津波波源
(分析結果に基づく津波波源:基本ケース)



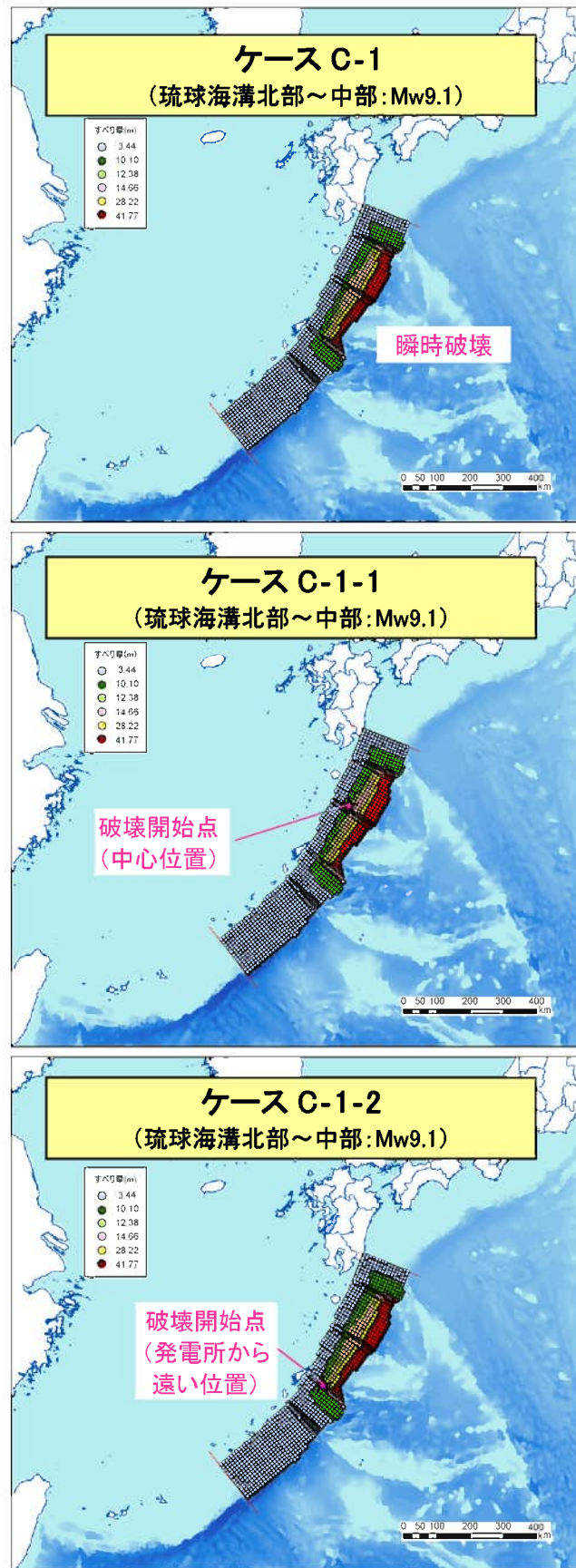
第1.2-7図(2) 琉球海溝の津波波源
(分析結果に基づく津波波源:不確かさケース①)



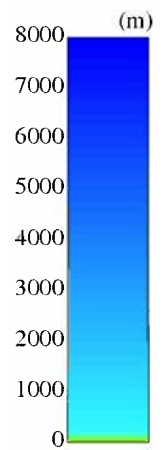
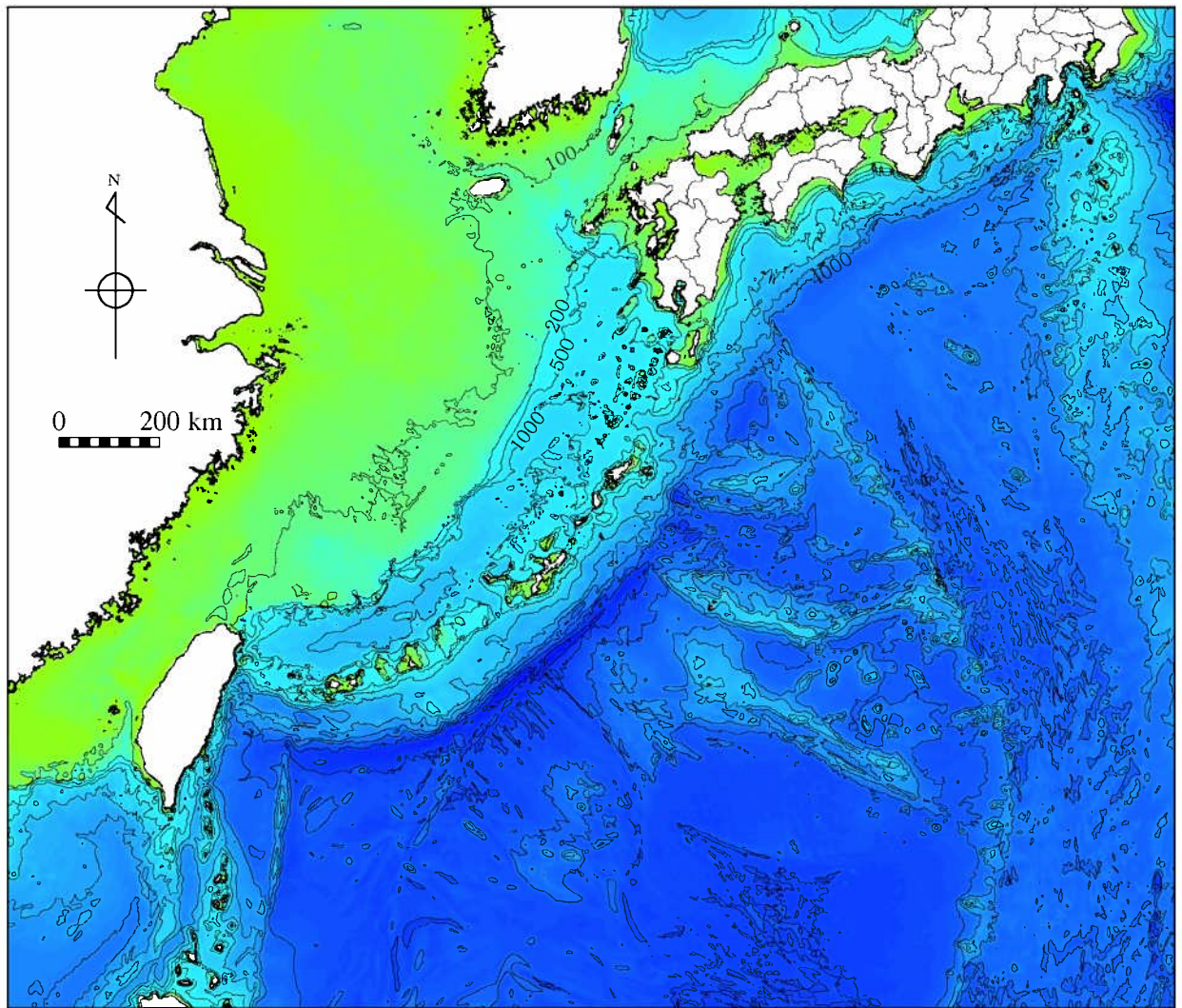
第1.2-7図(3) 琉球海溝の津波波源
(分析結果に基づく津波波源:不確かさケース②)



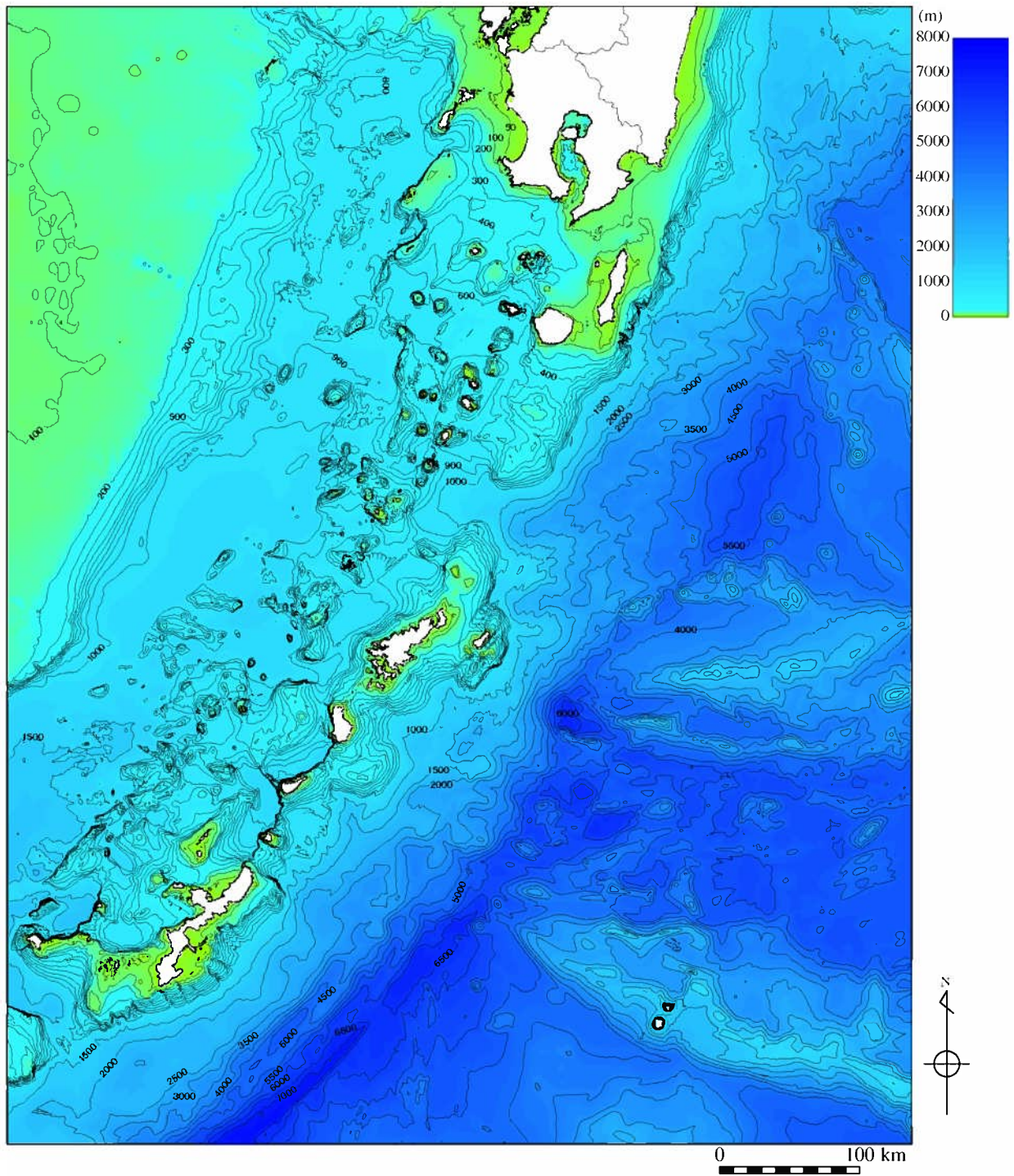
第1.2-8図 琉球海溝北部～琉球海溝中部を波源とした津波の伝ば過程



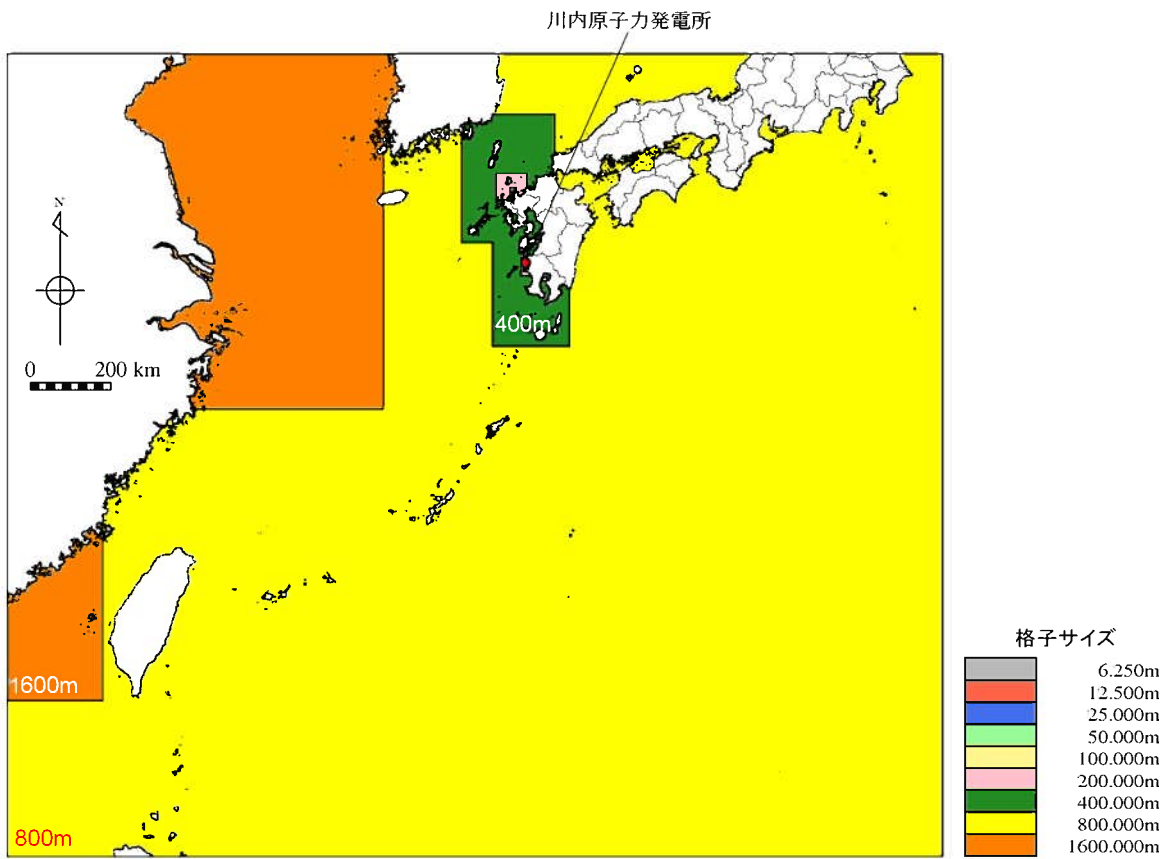
第1.2-9図 琉球海溝の津波波源
(領域境界を越えて固着域が破壊する津波波源)



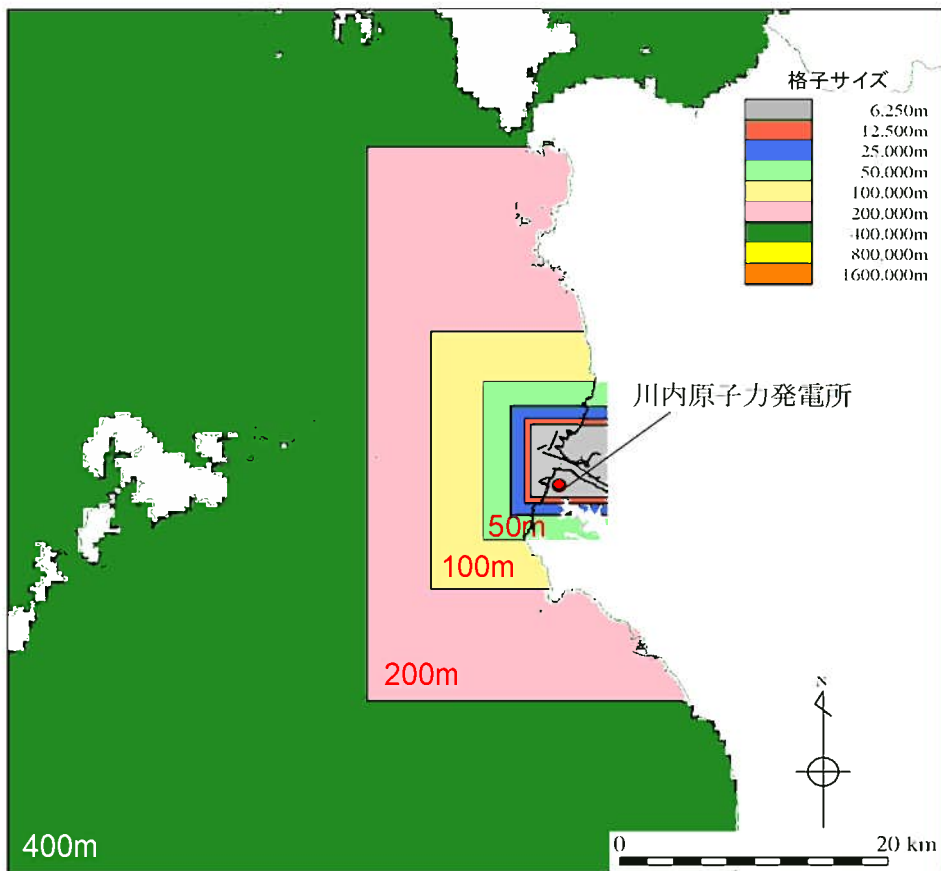
第1.2-10図(1) 海底地形(計算領域全体)



第1.2-10図(2) 海底地形(琉球海溝北部周辺)



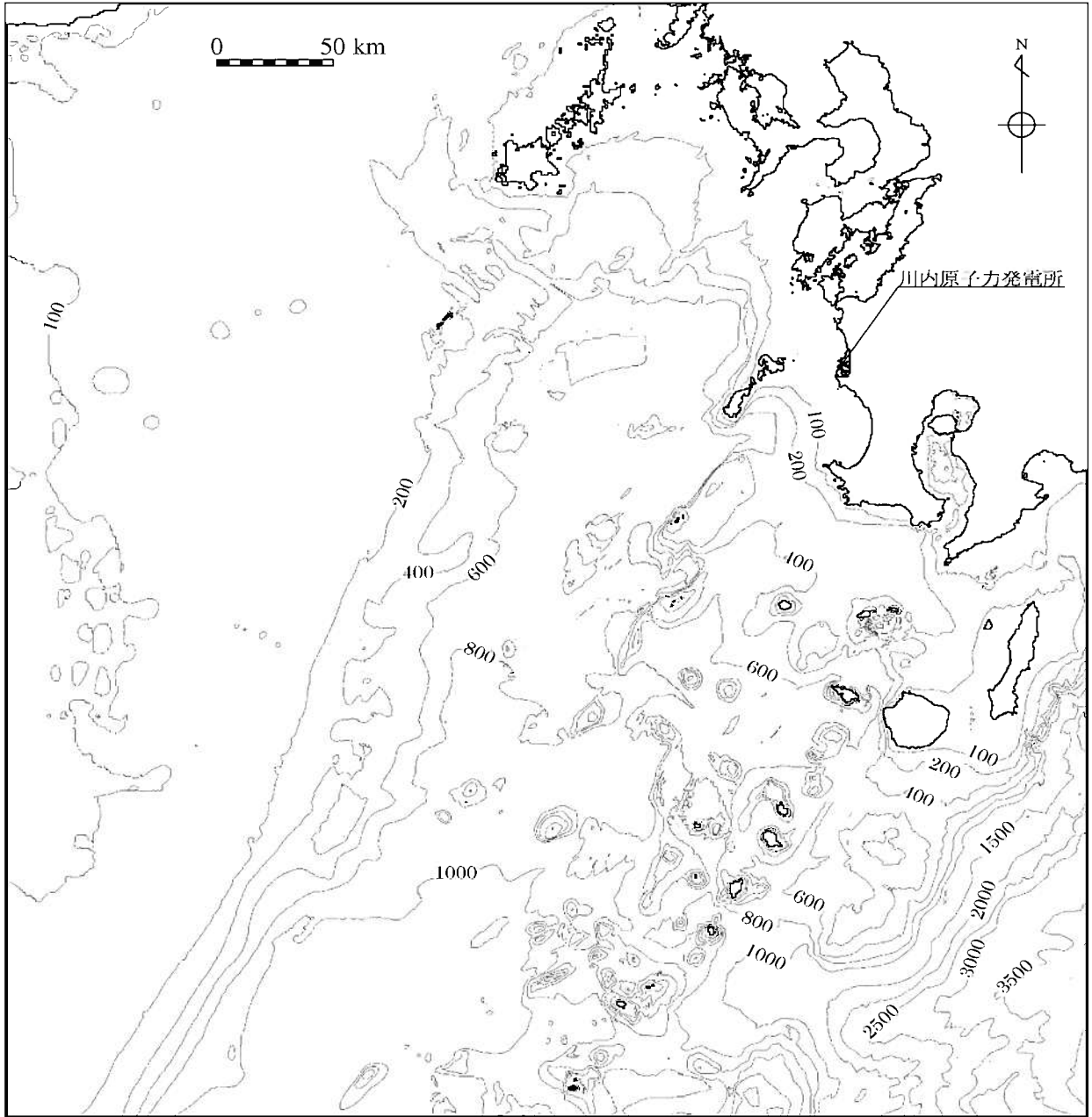
第1.2-11図(1) 計算格子分割(計算領域全体)



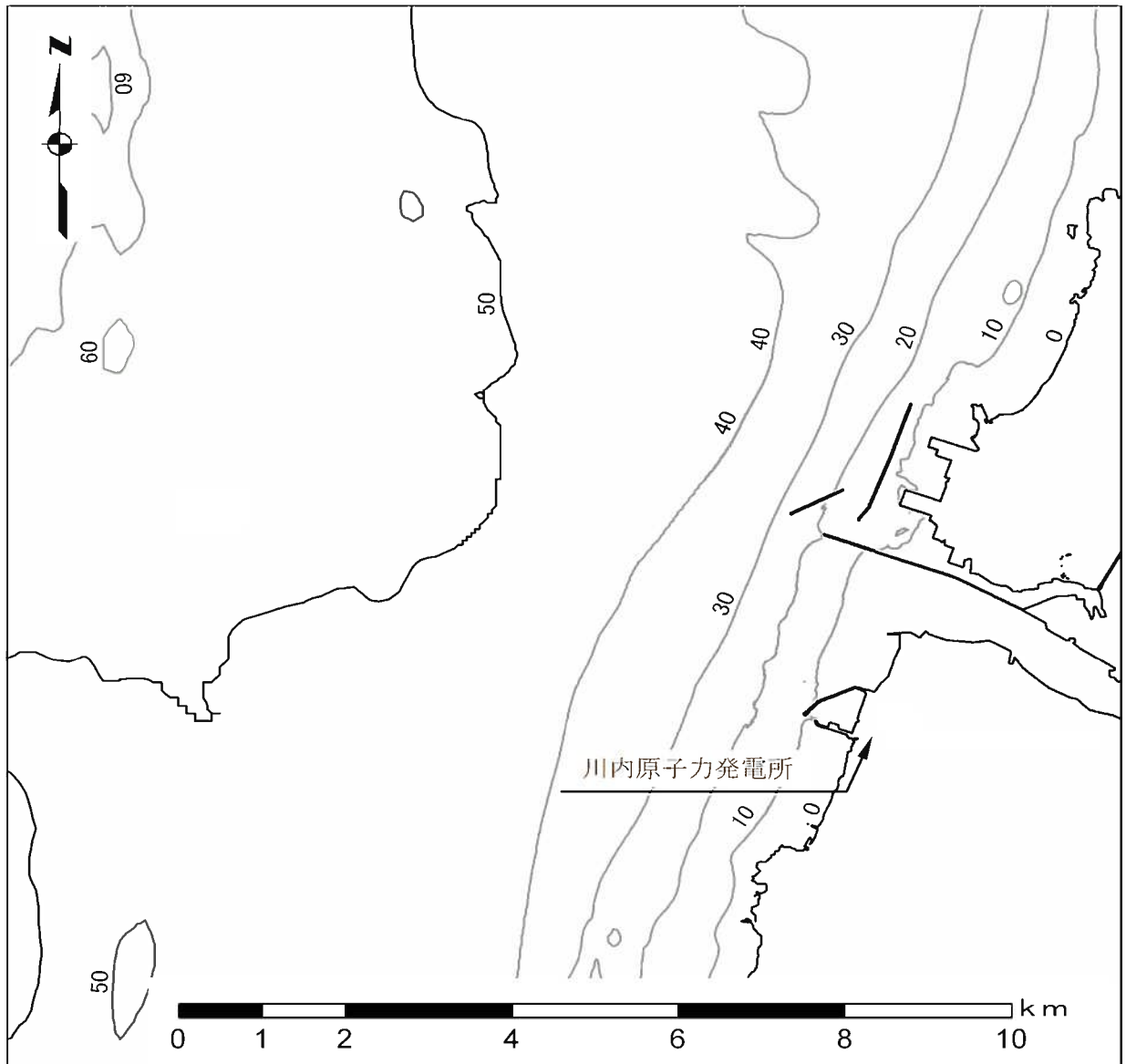
第1.2-11図(2) 計算格子分割(敷地前面海域)



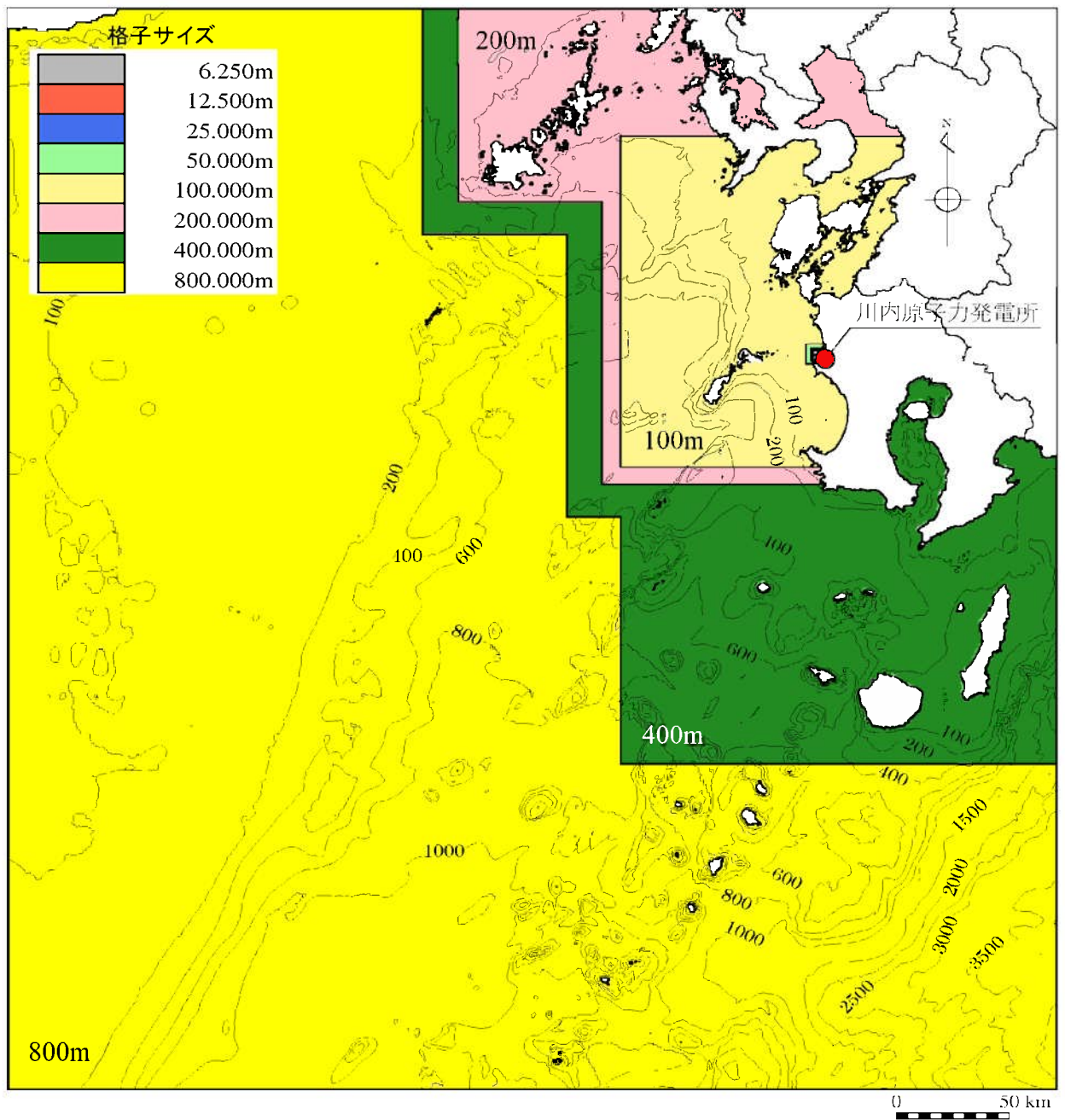
第1.2-12図 敷地周辺の海域活断層の津波波源



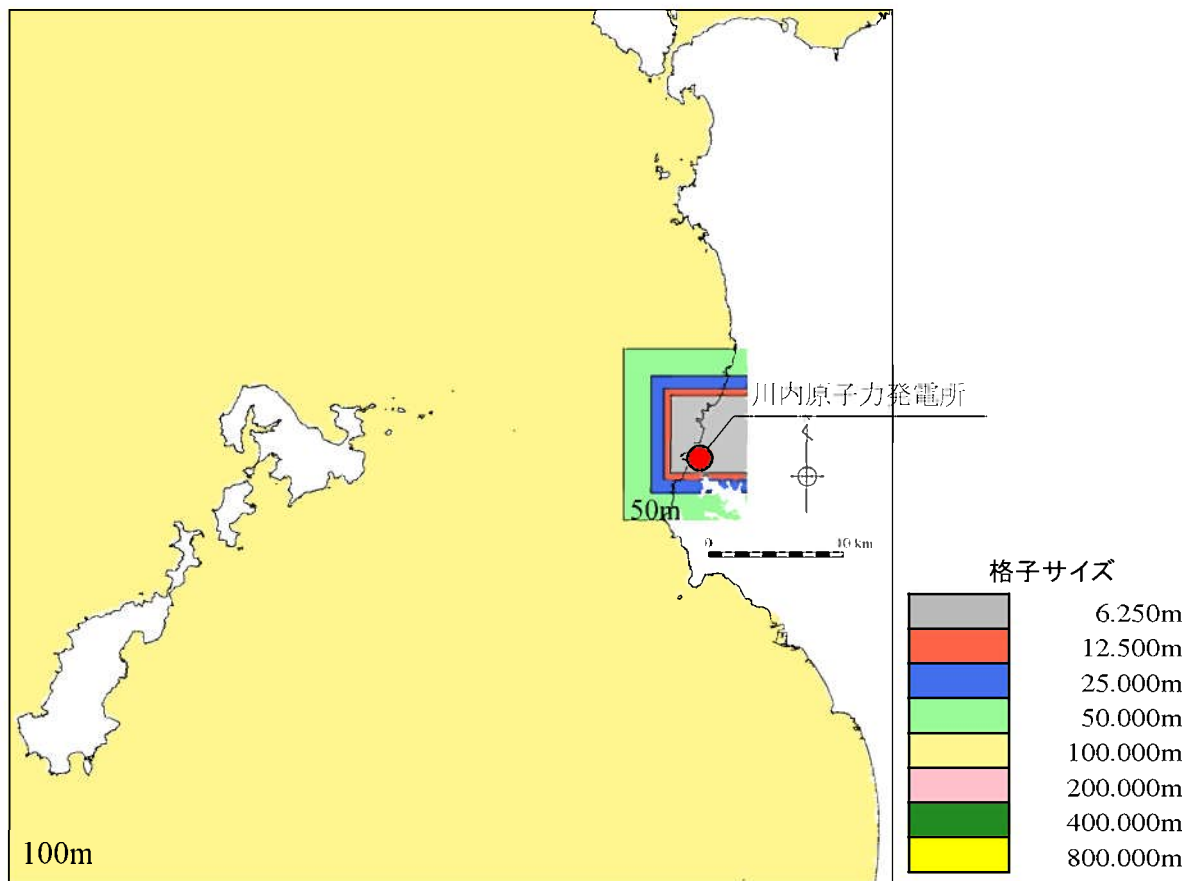
第1.2-13図(1) 海底地形(計算領域全体)



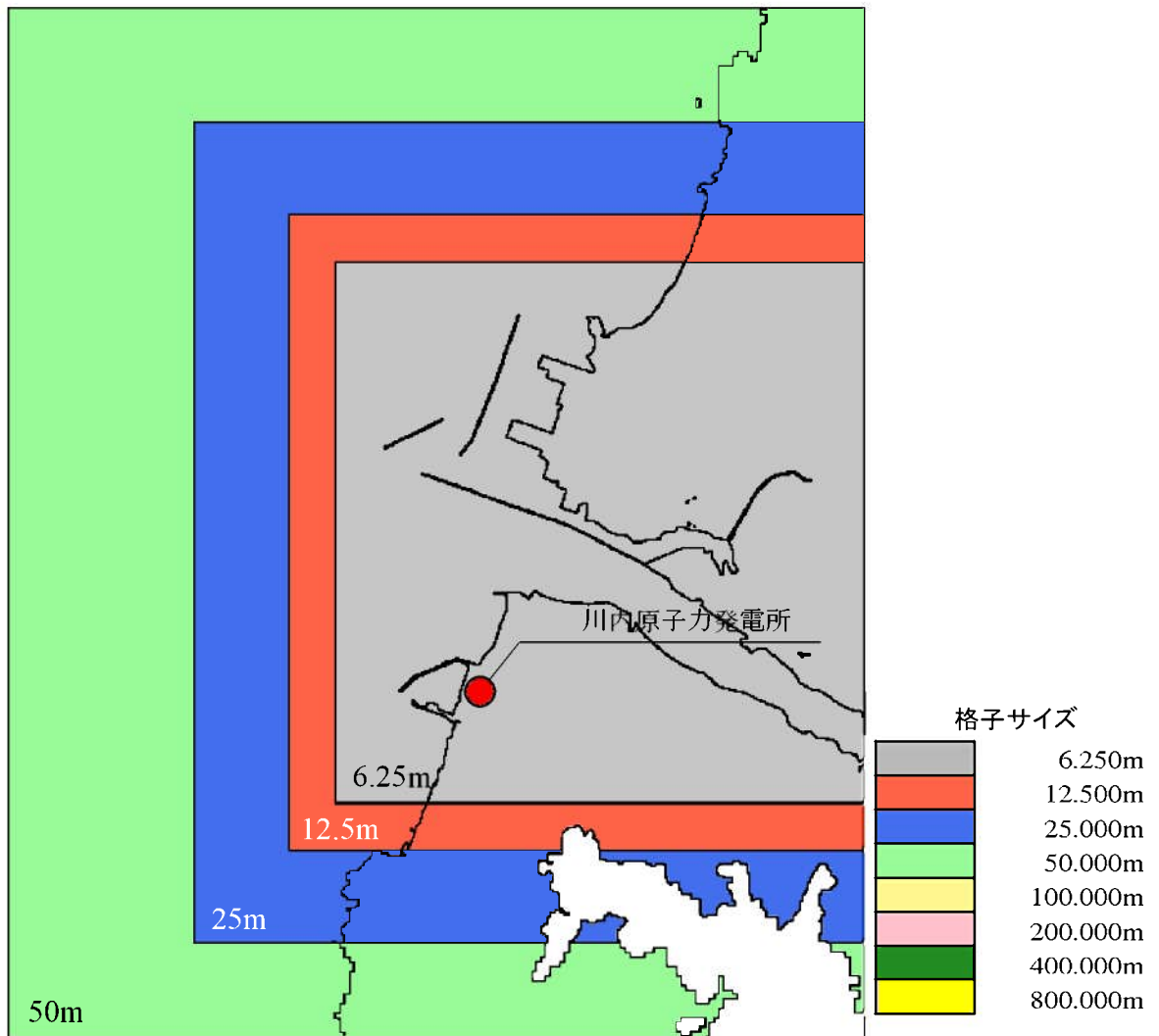
第1.2-13図(2) 海底地形(敷地近傍海域)



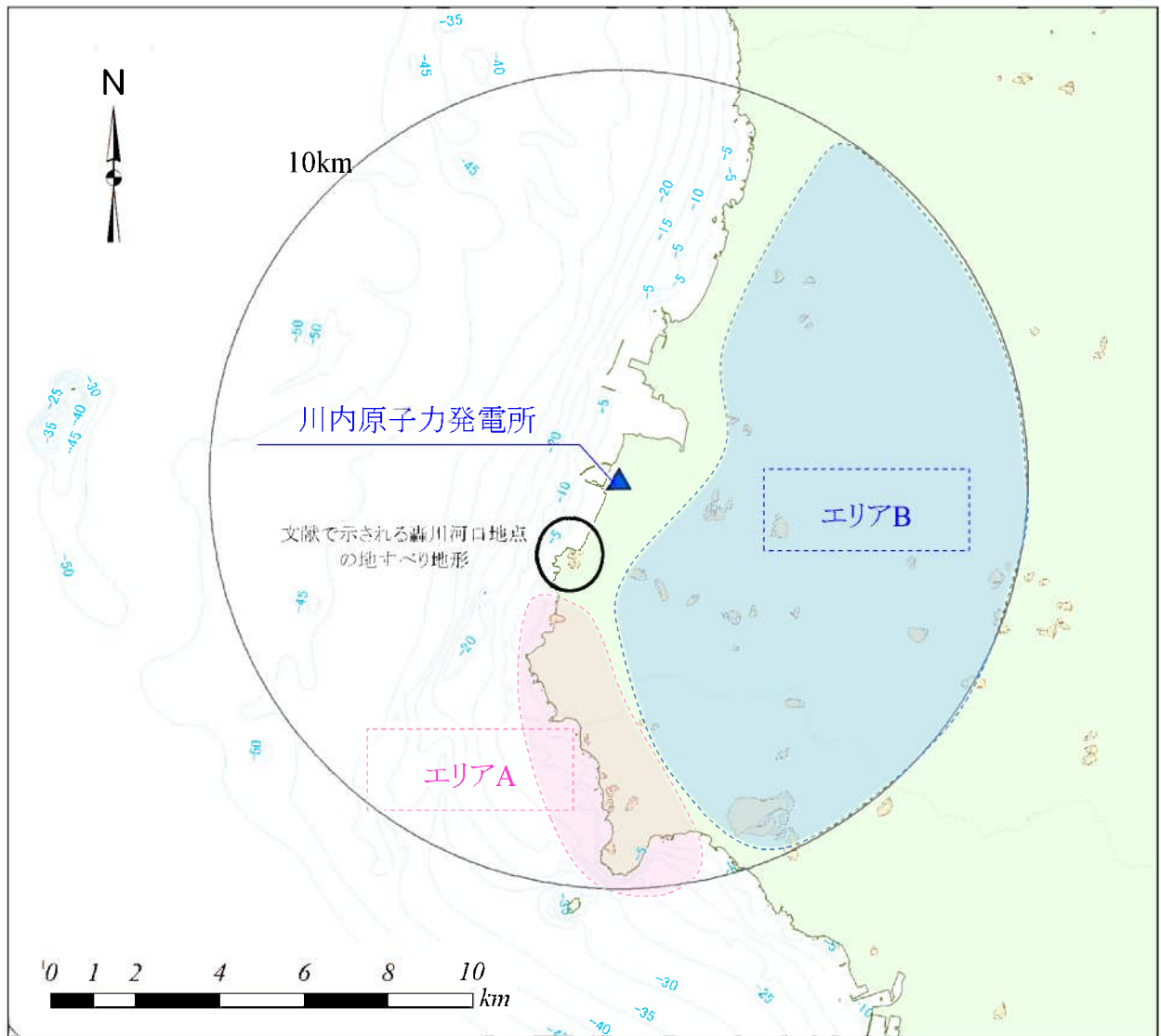
第1.2-14図(1) 計算格子分割(計算領域全体)



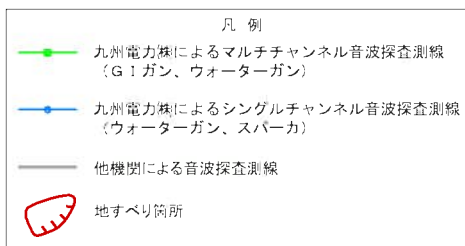
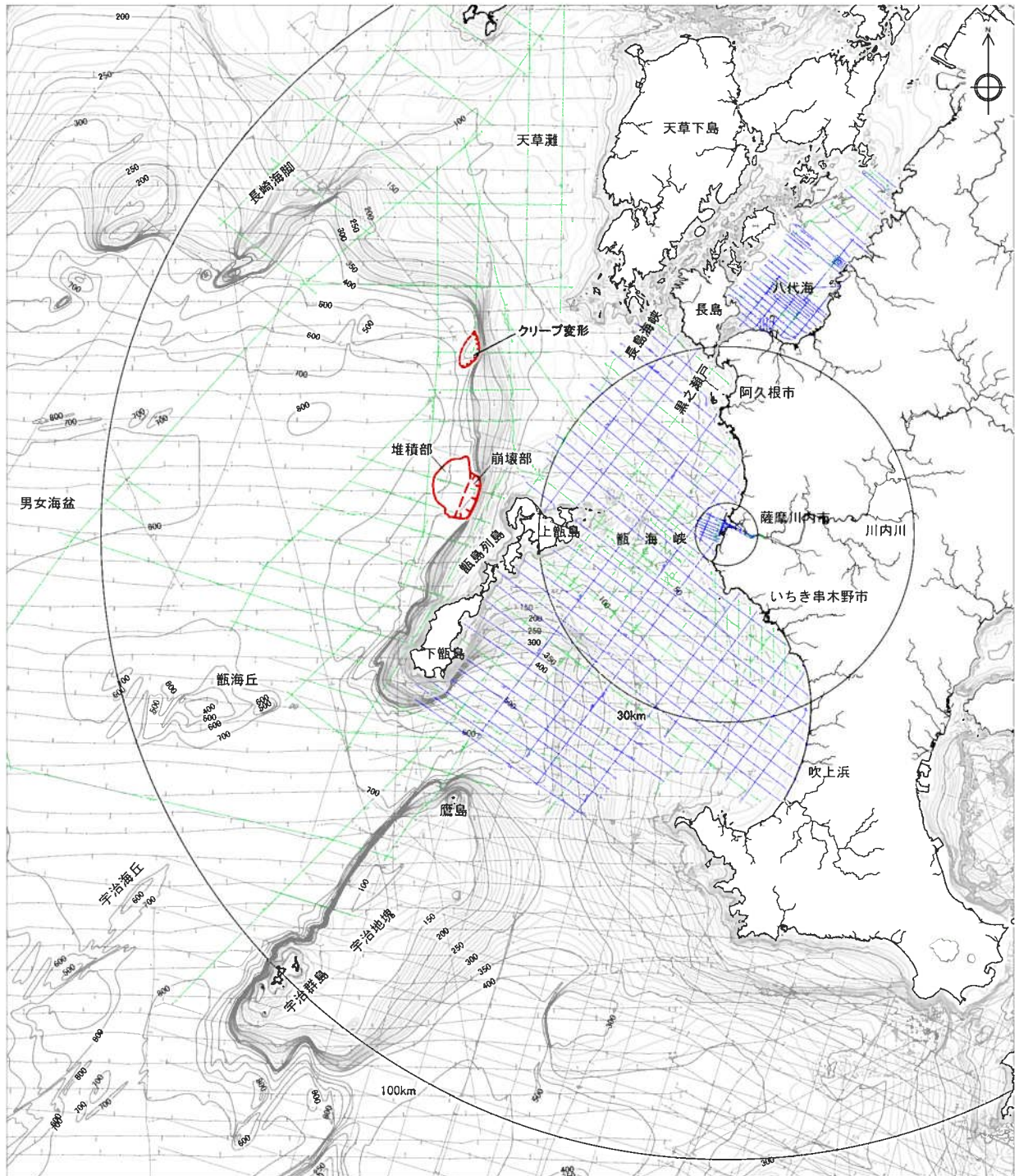
第1.2-14図(2) 計算格子分割(敷地前面海域)



第1.2-14図(3) 計算格子分割(敷地近傍海域)



第1.2-15図 沿岸陸域の地すべり地形の位置

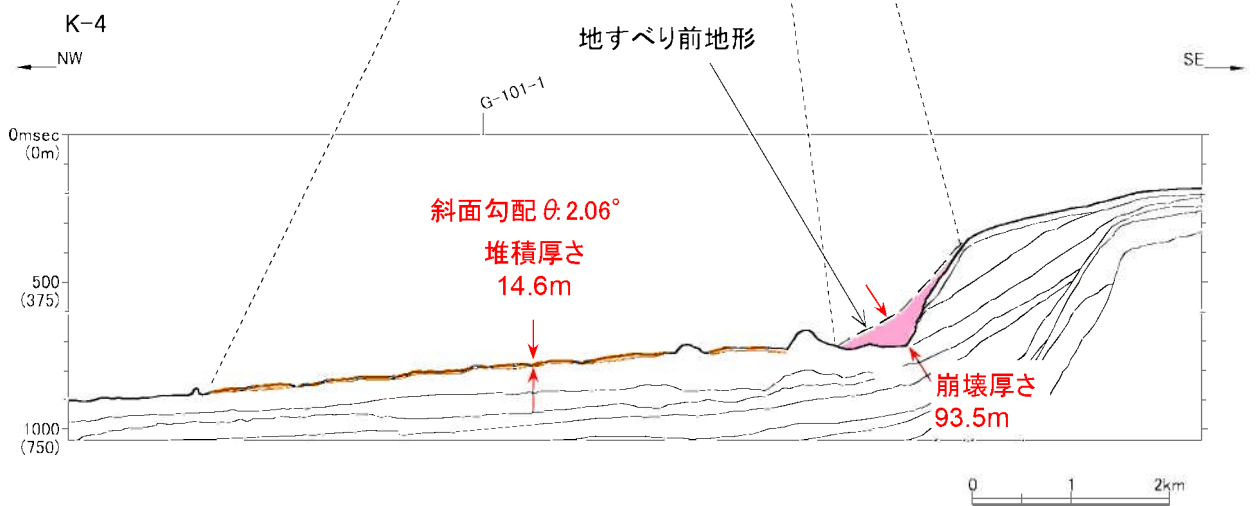
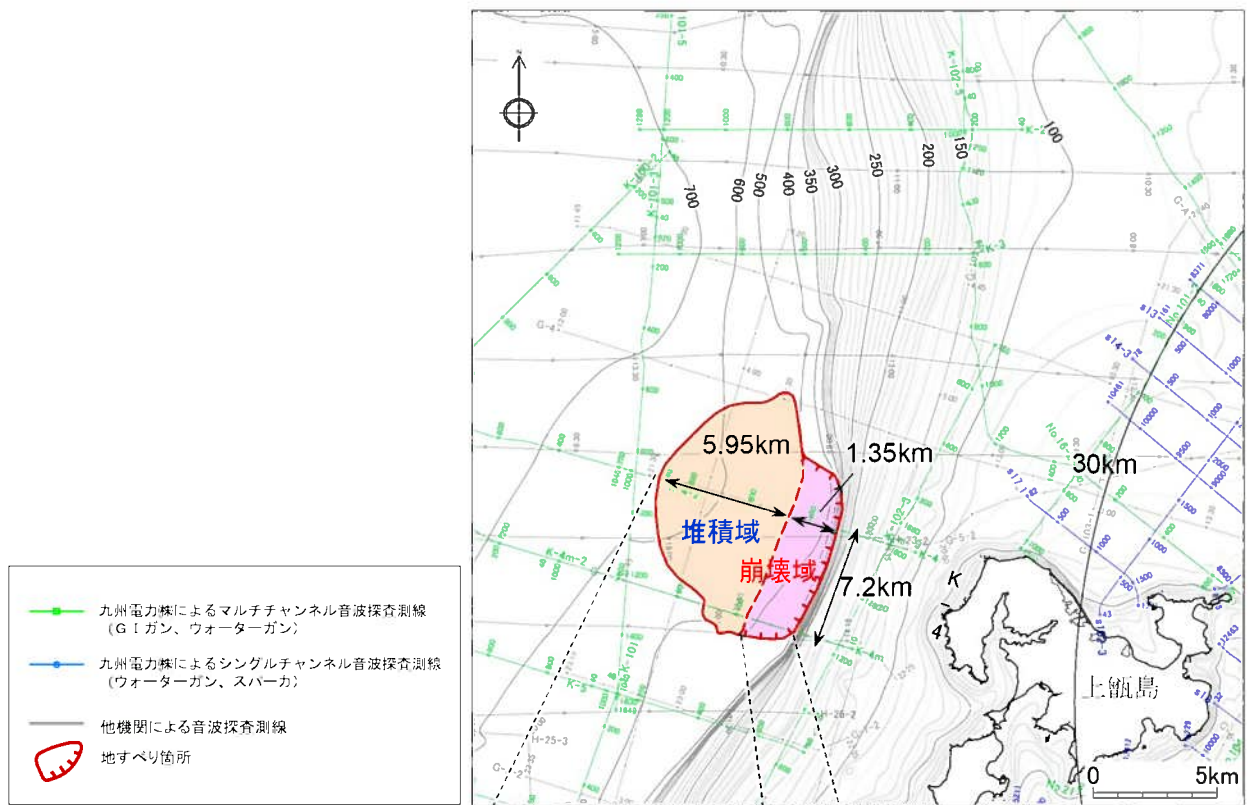


水深線は、国土地理院発行の数値地図25000空間データ基盤(熊本・鹿児島)を編集したものである。海域の地図は、国土地理院発行の2万5千分の1沿岸海域地形図(水俣)他・海上保安庁発行の5万分の1沿岸の海の基本図(串木野)他・20万分の1大陸棚の海の基本図(天草灘)他を編集したものである。

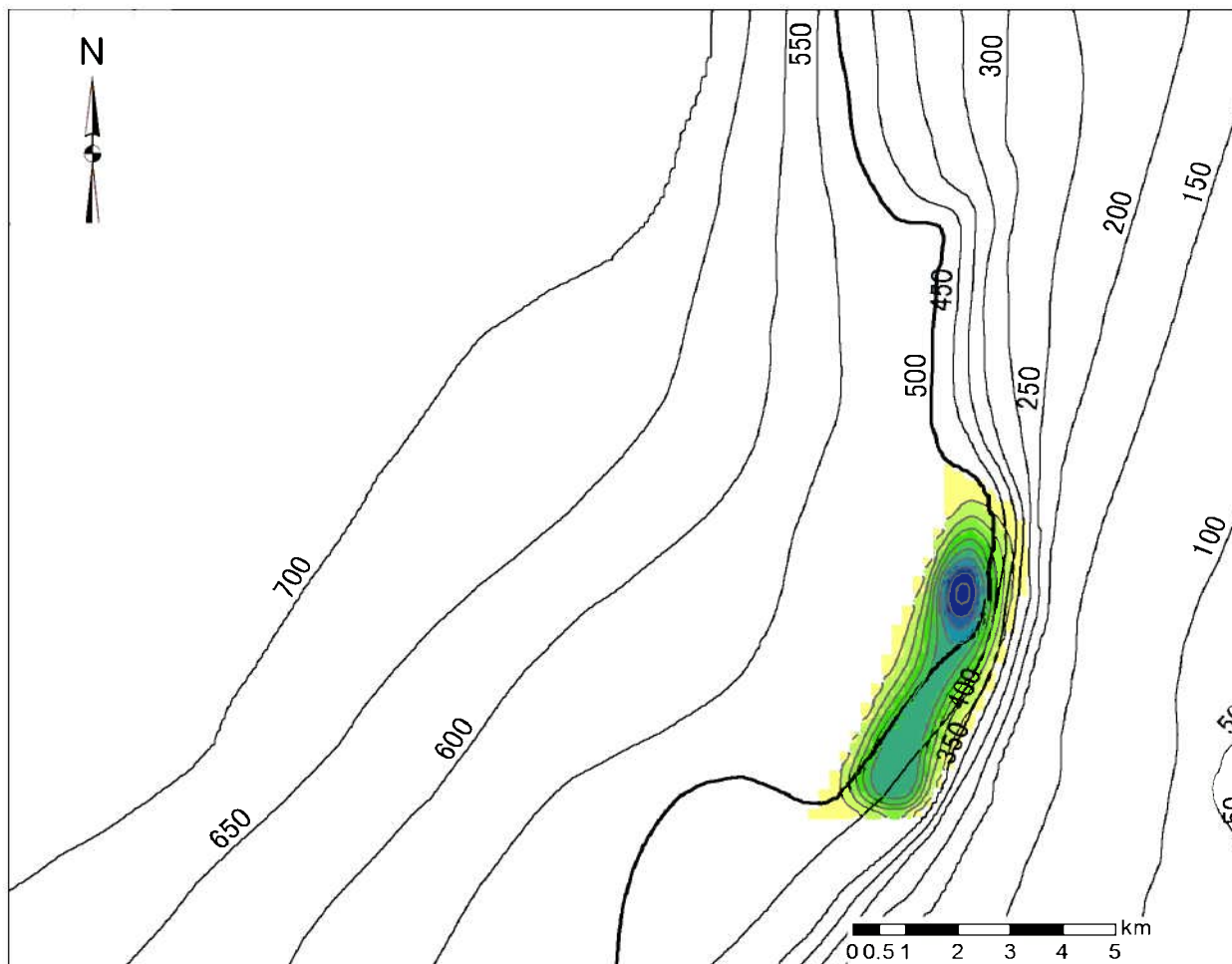
(注) 海域の地形コンターの数字は深度を示す



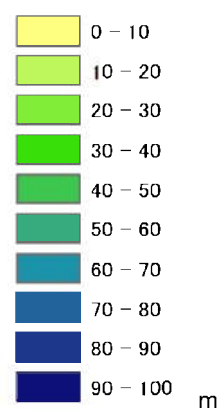
第1.2-16図 海底地すべり地形の位置



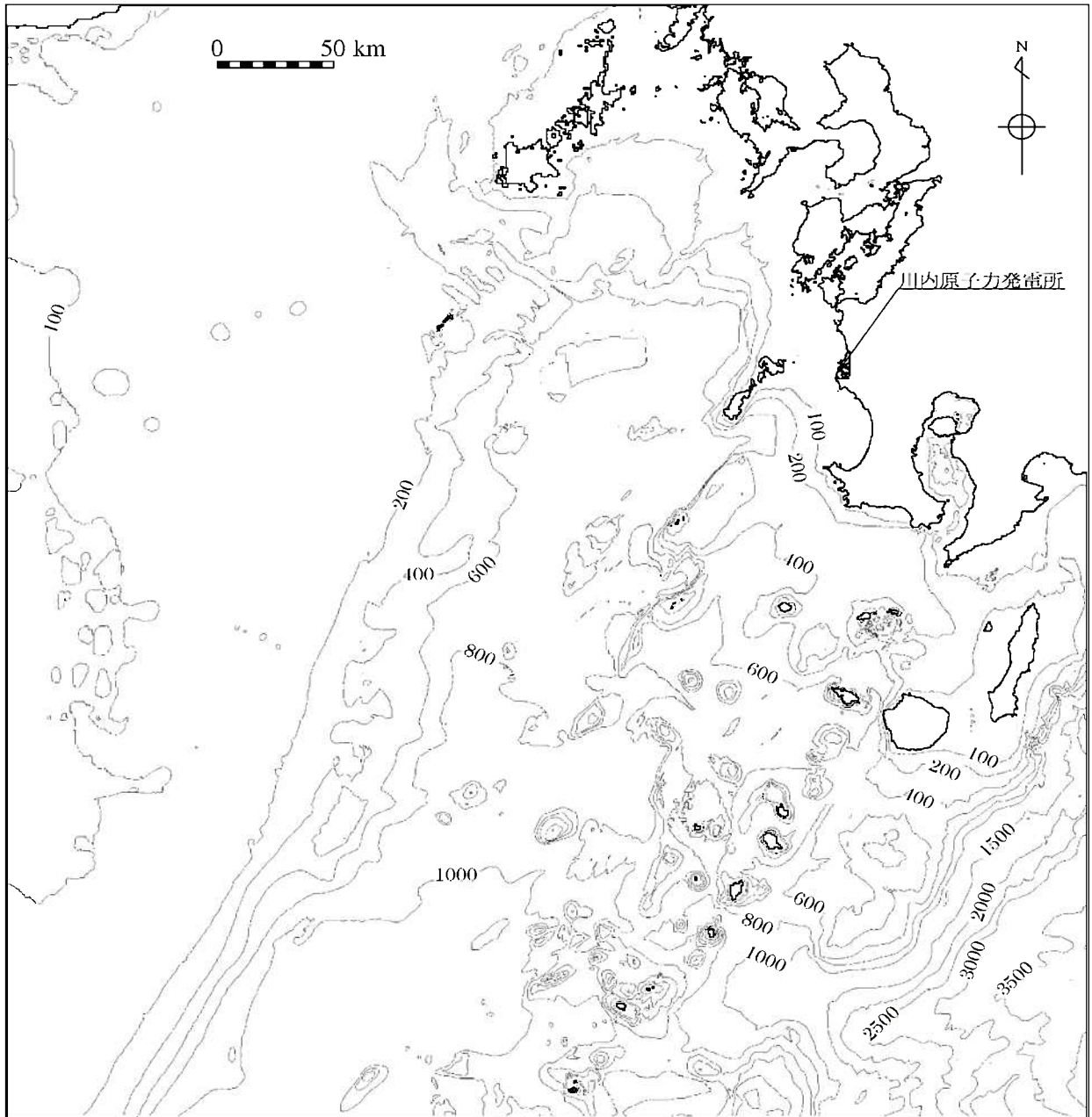
第1.2-17図(1) 海底地すべりモデル
(Watts et al. (2005) の予測式に基づく手法)



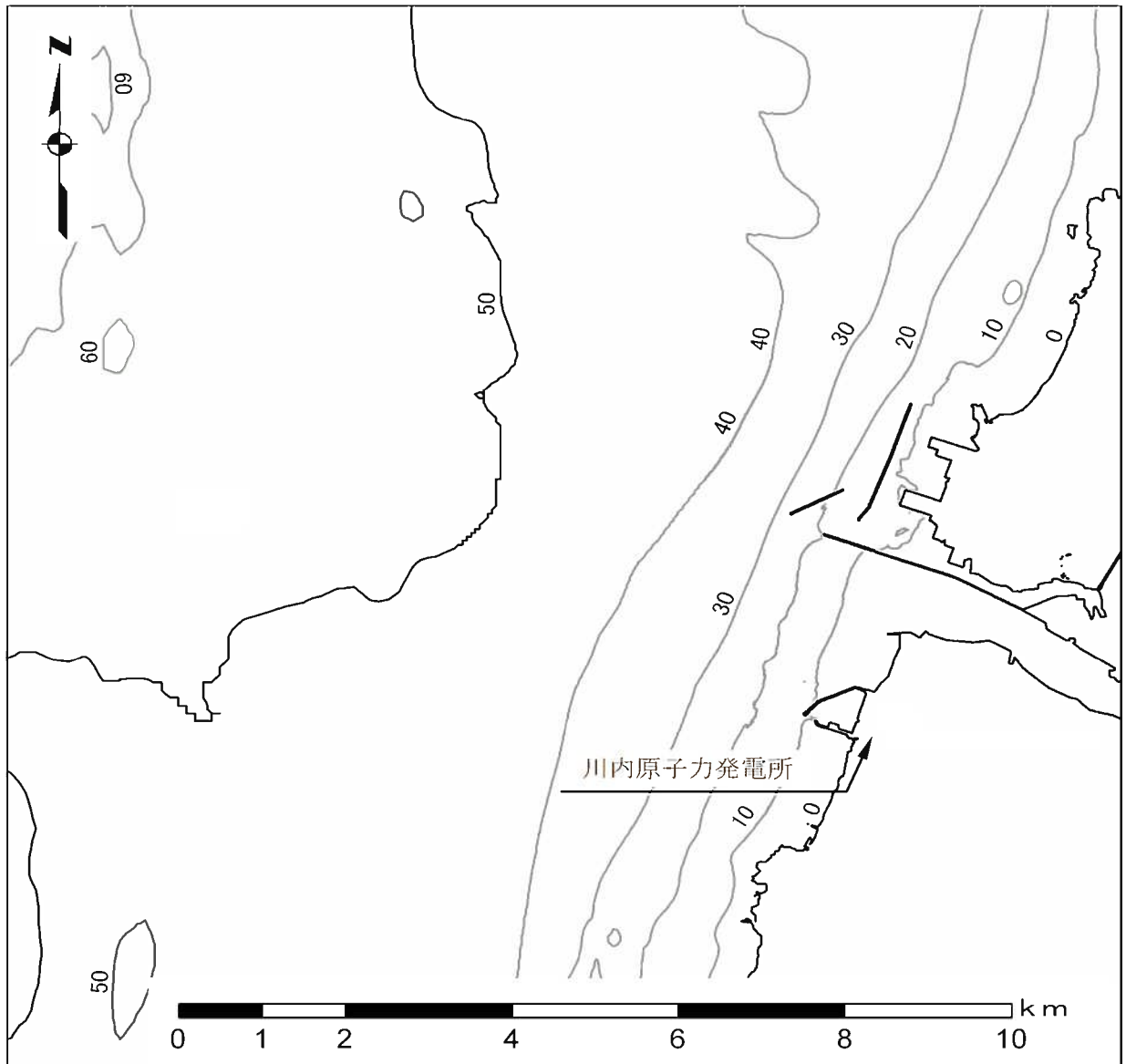
地すべり地塊厚さ



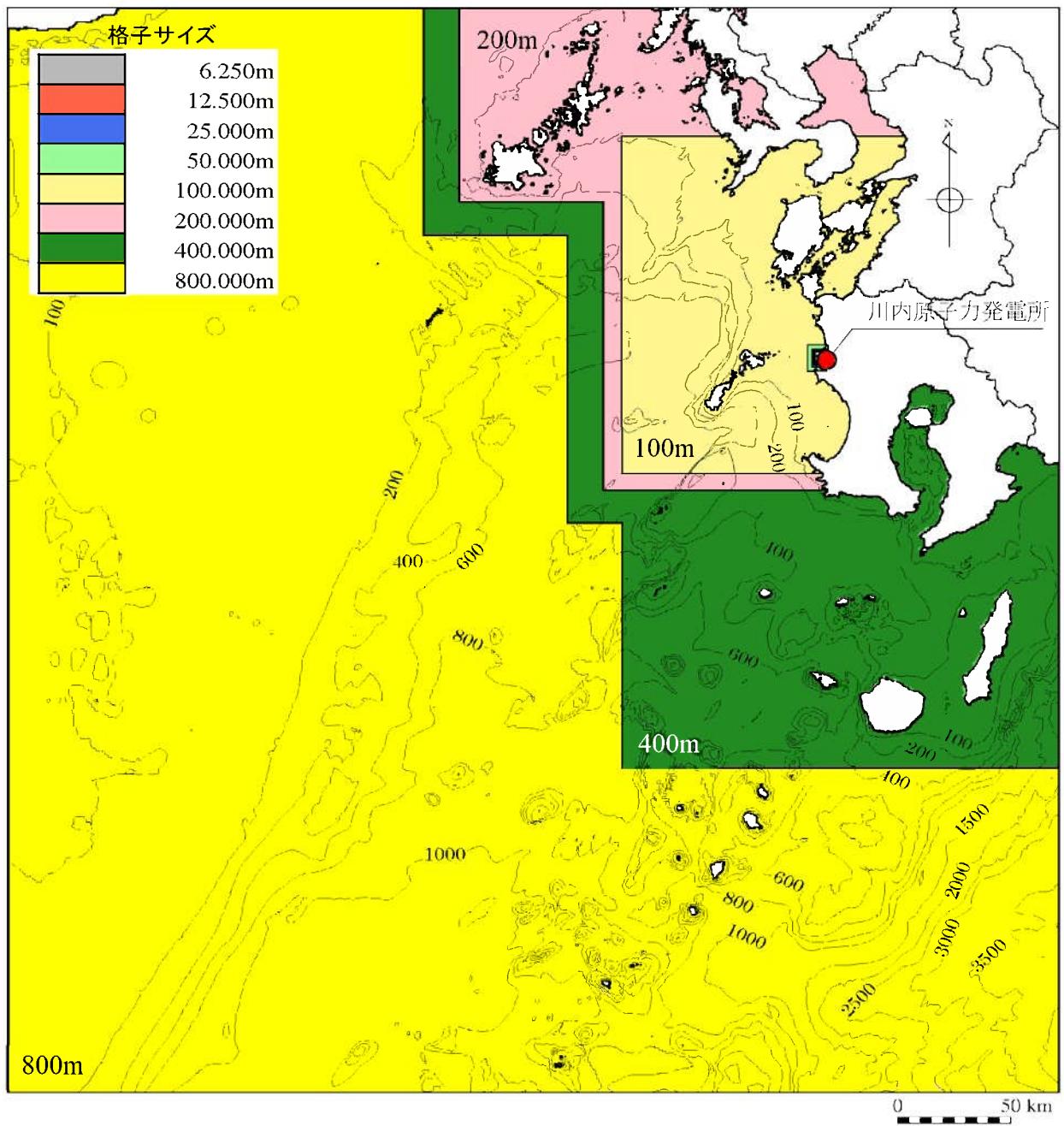
第1.2-17図(2) 海底地すべりモデル
(二層流モデルに基づく手法)



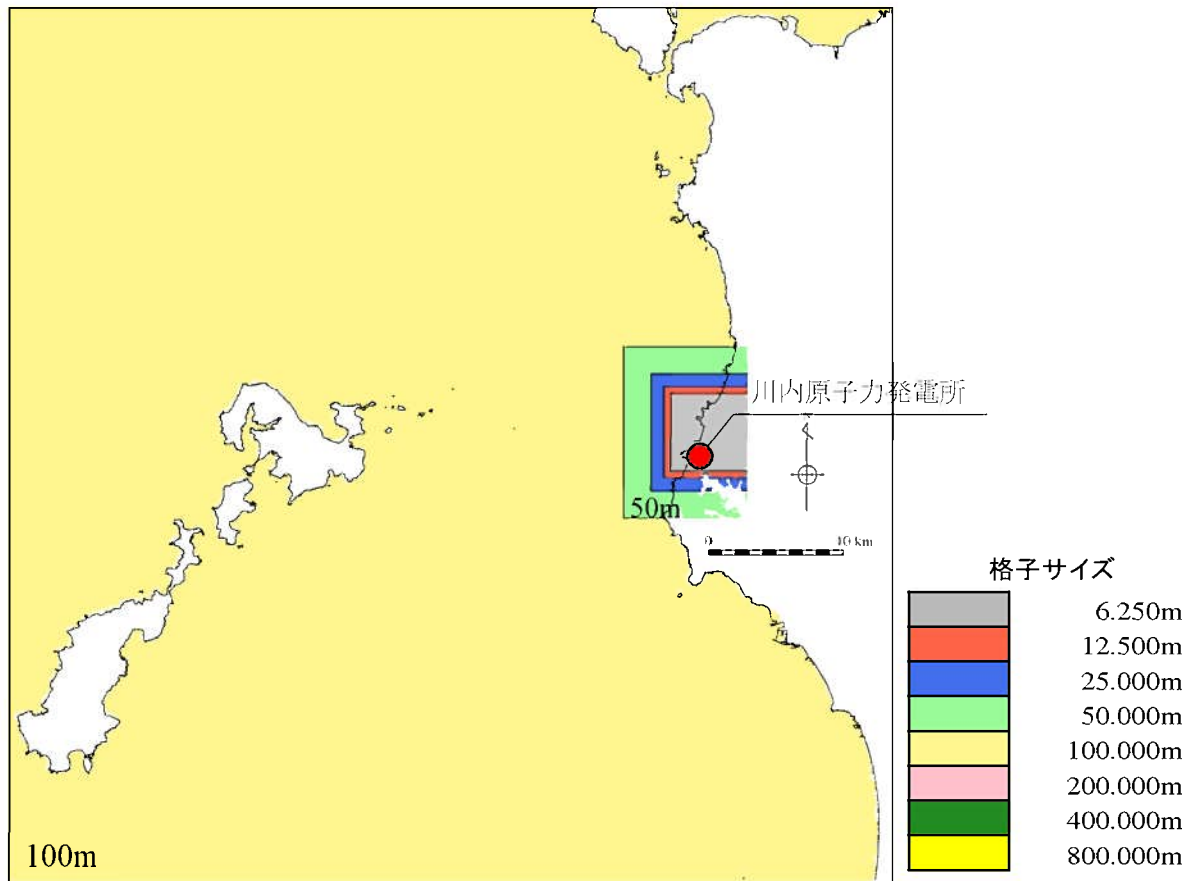
第1.2-18図(1) 海底地形(計算領域全体)



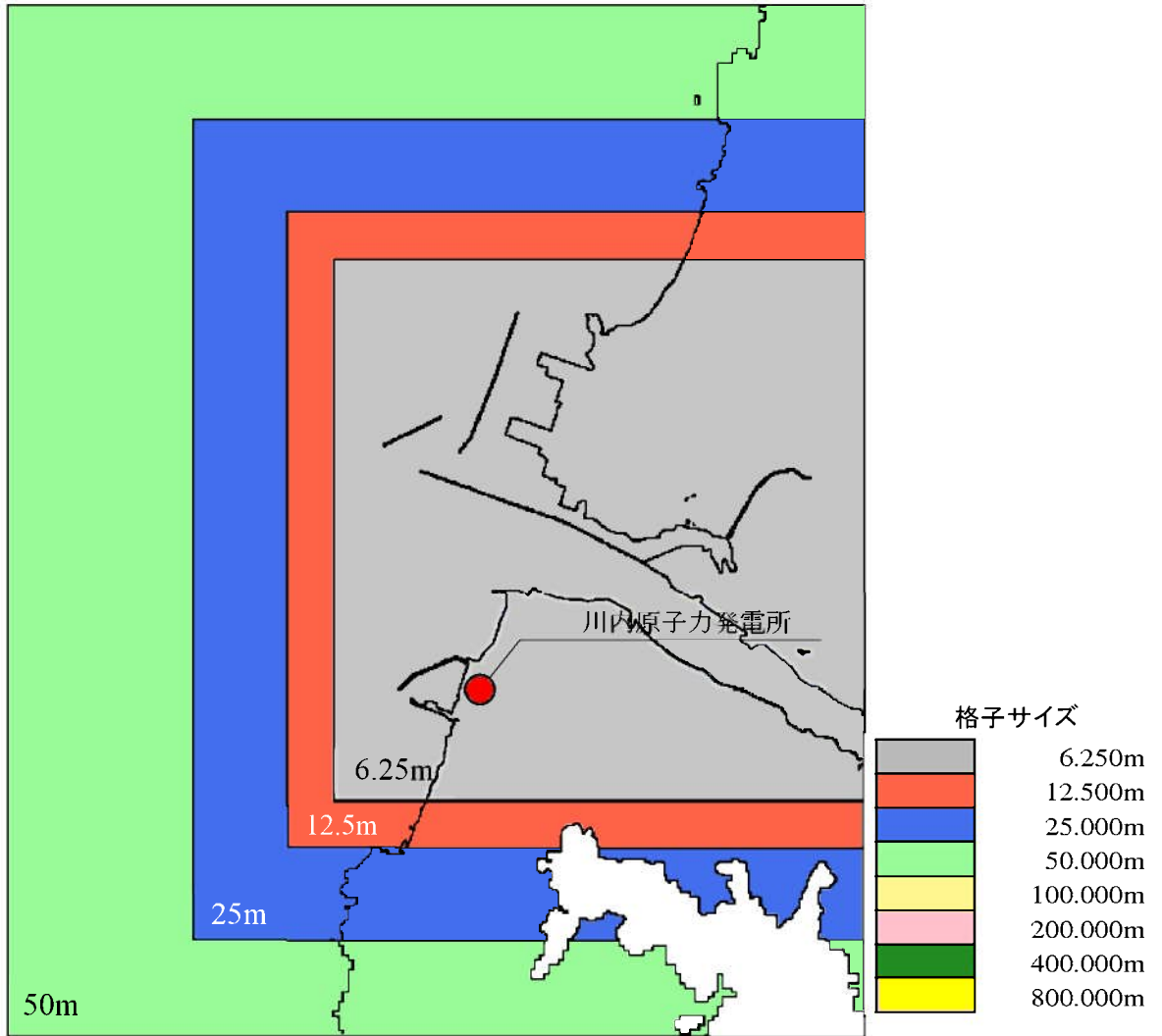
第1.2-18図(2) 海底地形(敷地近傍海域)



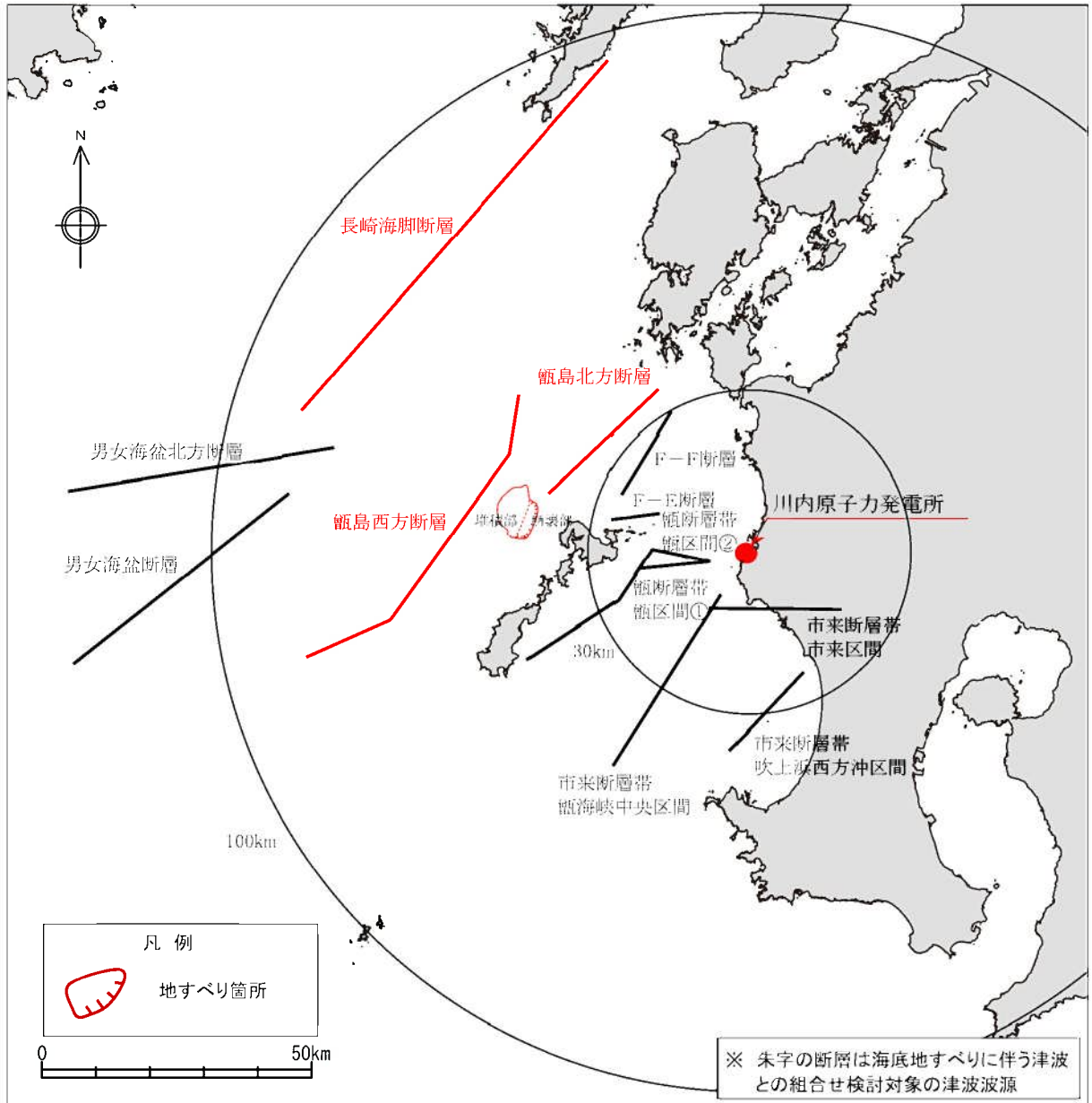
第1.2-19図(1) 計算格子分割(計算領域全体)



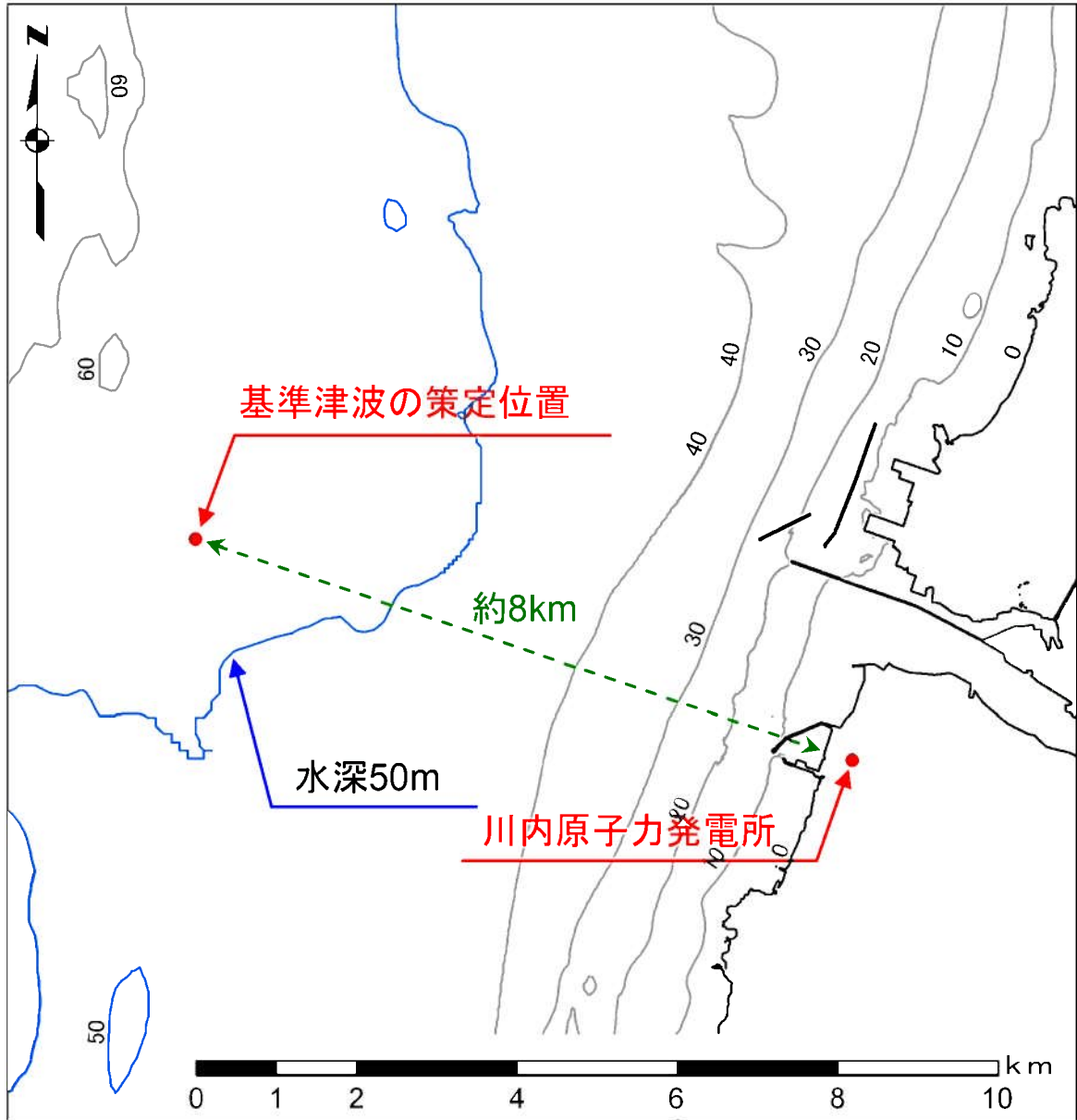
第1.2-19図(2) 計算格子分割(敷地前面海域)



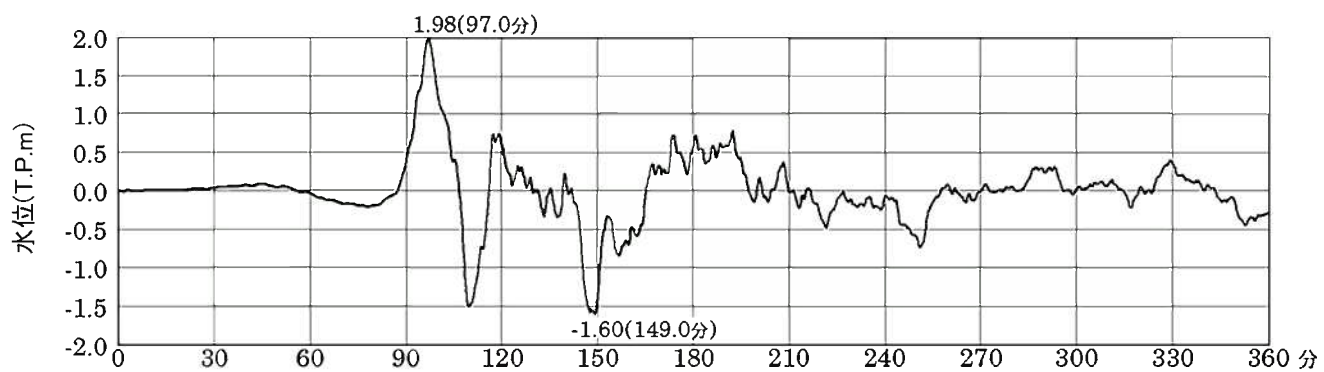
第1.2-19図(3) 計算格子分割(敷地近傍海域)



第1.2-20図 敷地周辺の海域活断層の津波波源
及び海底地すべりの位置



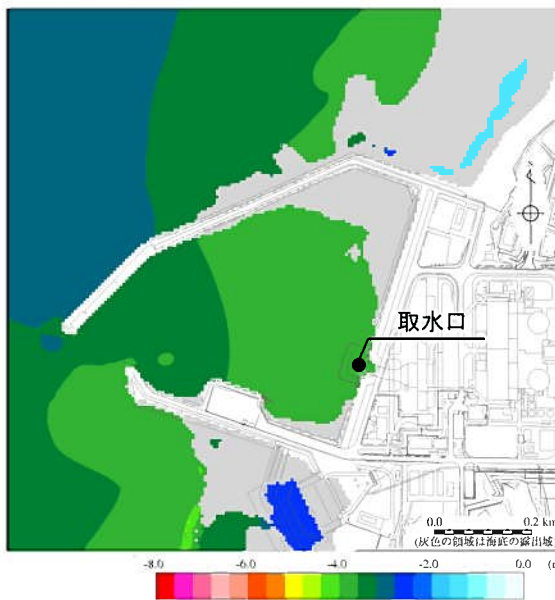
第1.2-21図 基準津波の策定位置



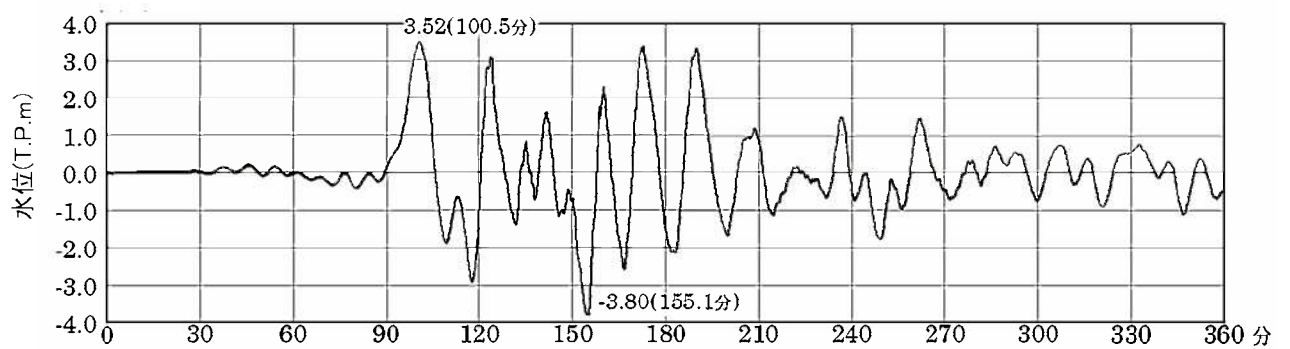
第1.2-22図 基準津波の時刻歴波形(初期潮位:T.P.±0.00m)



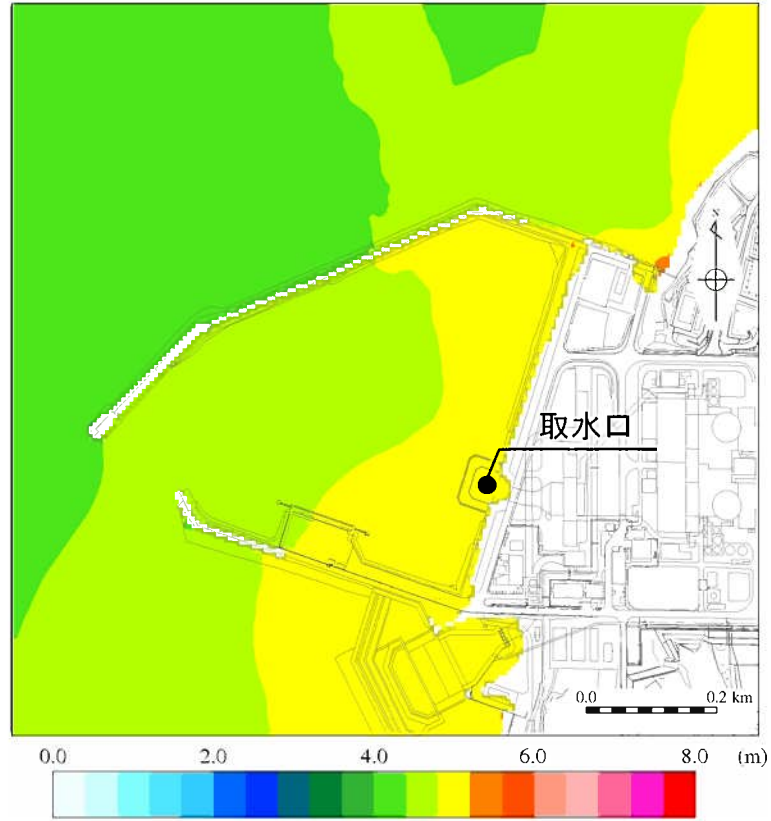
第1.2-23図(1) 基準津波の最大水位上昇量分布
(初期潮位: T.P.±0.00m)



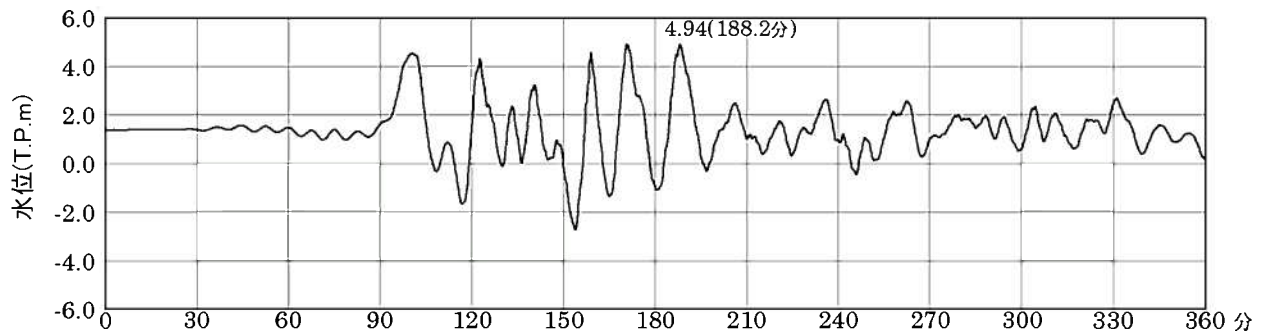
第1.2-23図(2) 基準津波の最大水位下降量分布
(初期潮位: T.P.±0.00m)



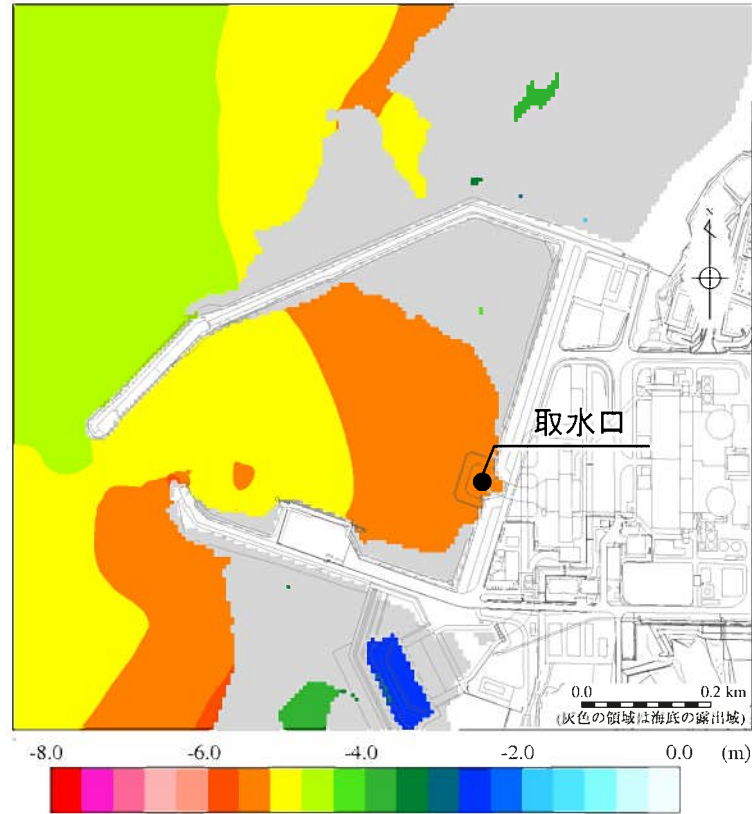
第1.2-23図(3) 基準津波の取水口位置での時刻歴波形
(初期潮位: T.P.±0.00m)



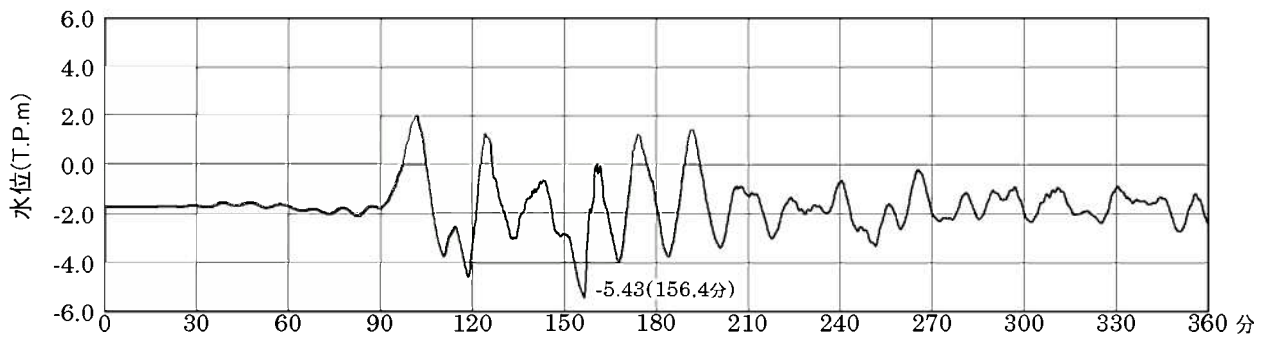
第1.2-24図(1) 基準津波の最高水位分布(朔望平均満潮位を考慮)



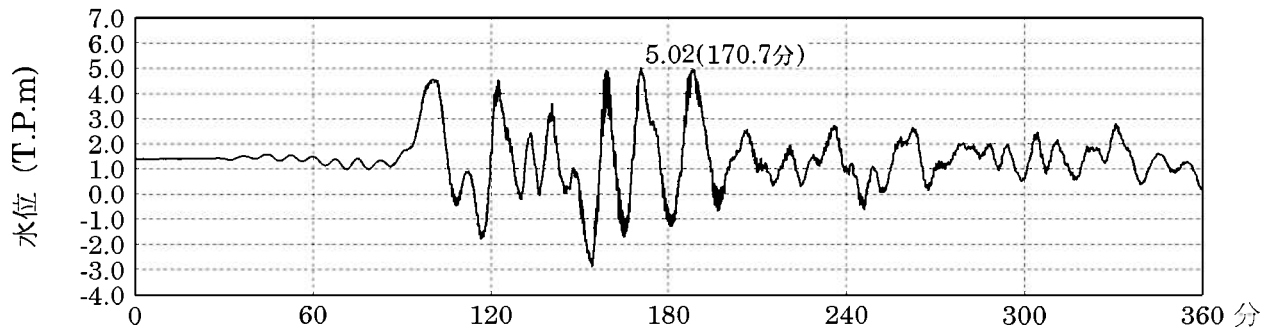
第1.2-24図(2) 基準津波の取水口位置での時刻歴波形
(朔望平均満潮位を考慮)



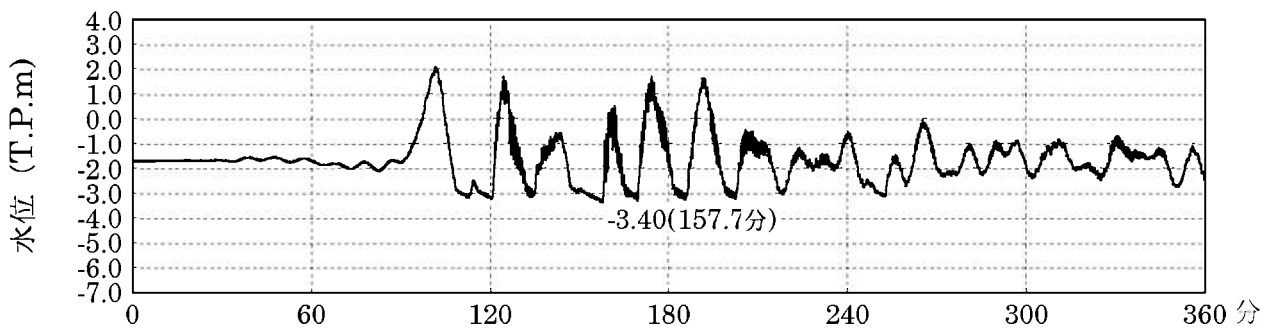
第1.2-24図(3) 基準津波の最低水位分布(朔望平均干潮位を考慮)



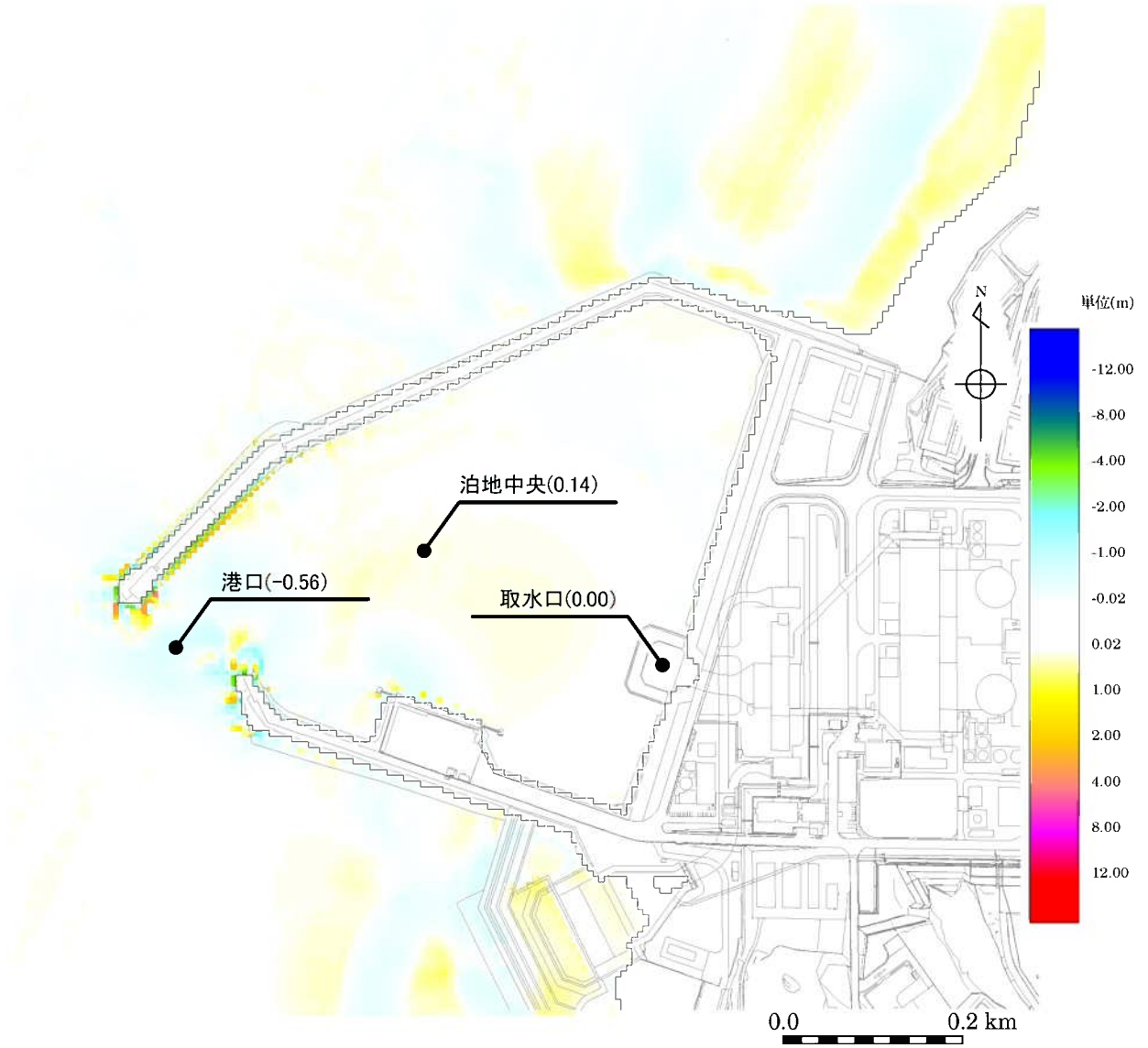
第1.2-24図(4) 基準津波の取水口位置での時刻歴波形
(朔望平均干潮位を考慮)



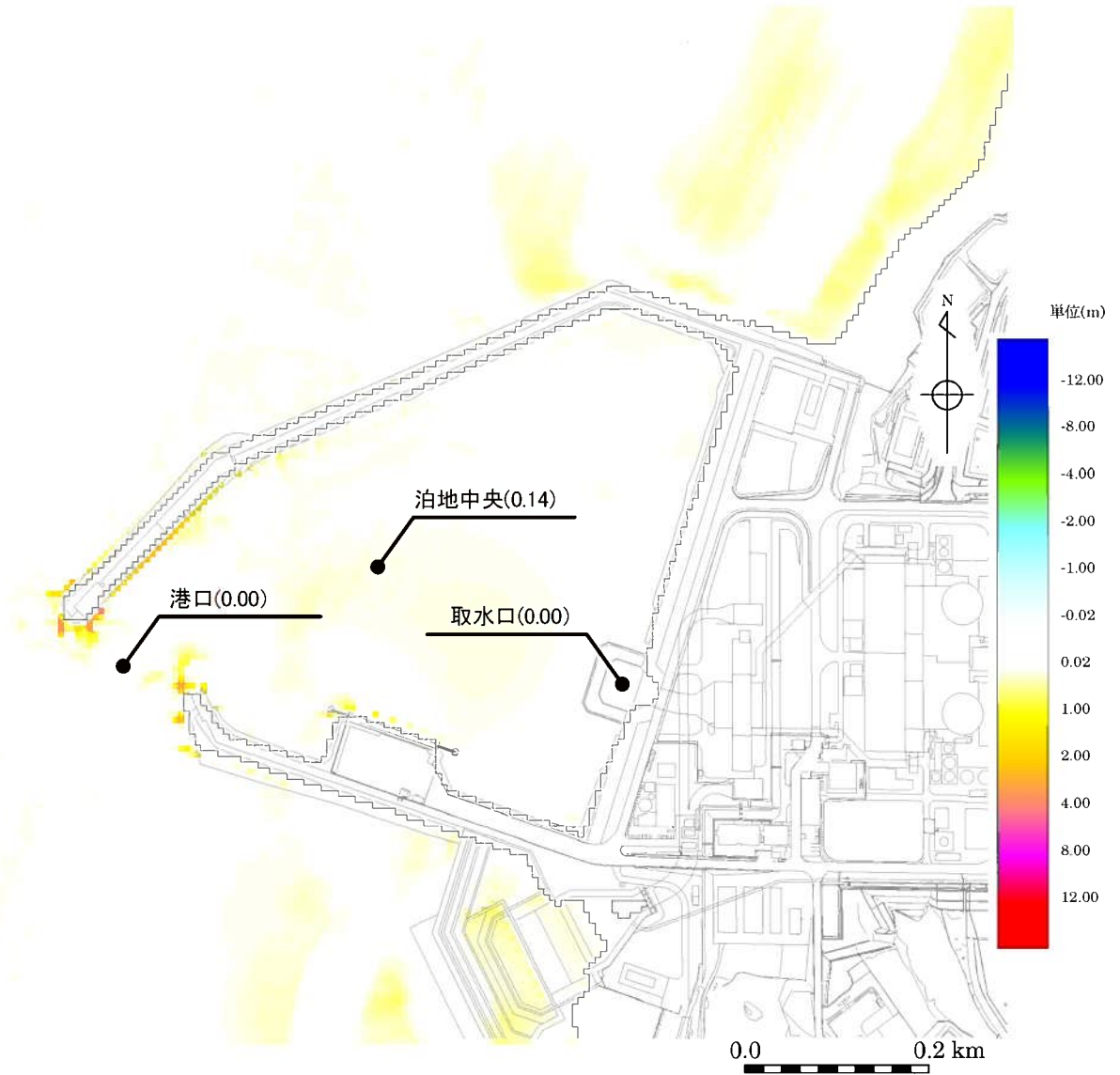
第1.2-26図(1) 取水ピットでの時刻歴波形
 (水位上昇側、朔望平均満潮位を考慮)



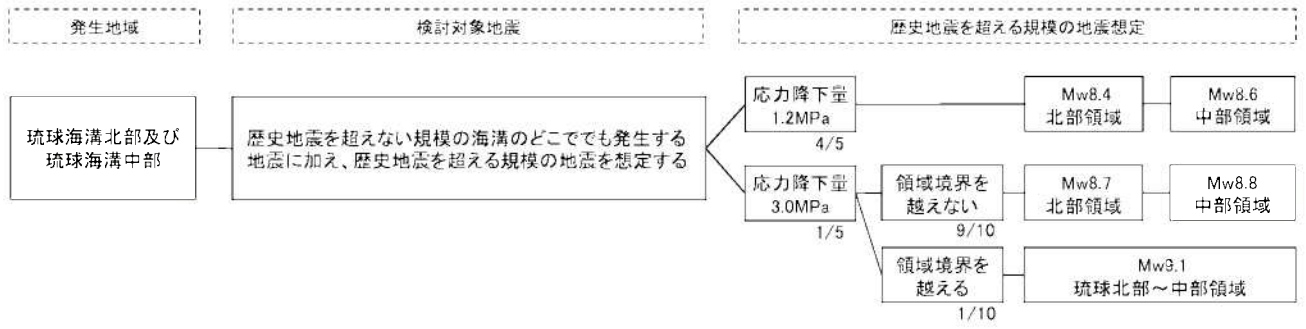
第1.2-26図(2) 取水ピットでの時刻歴波形
 (水位下降側、朔望平均干潮位を考慮)



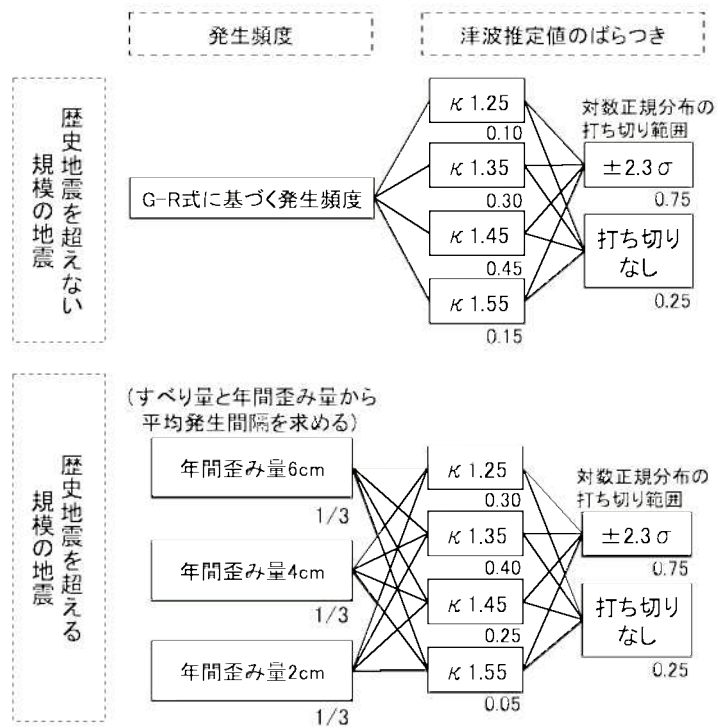
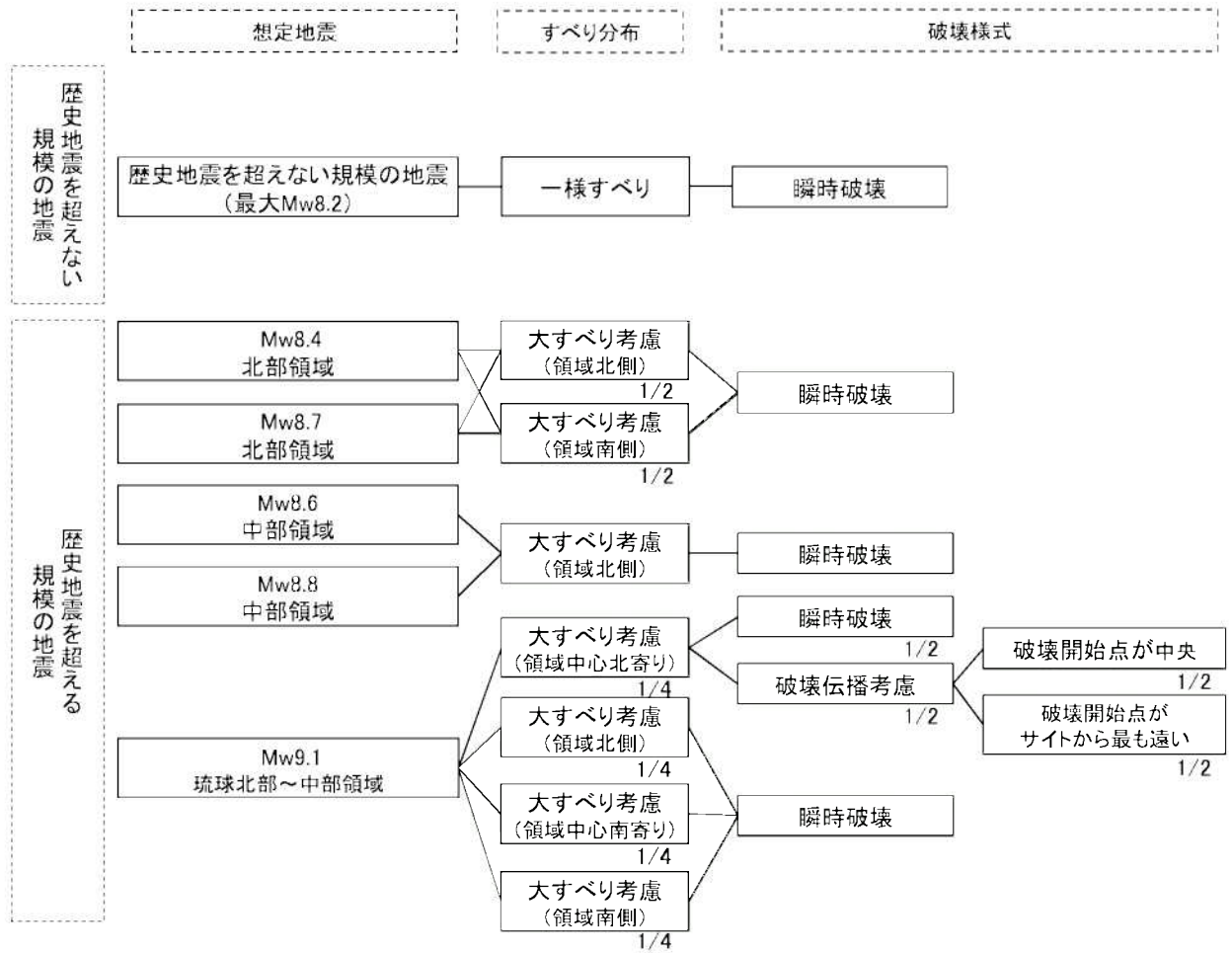
第1.2-27図(1) 砂移動による最終地形変化量



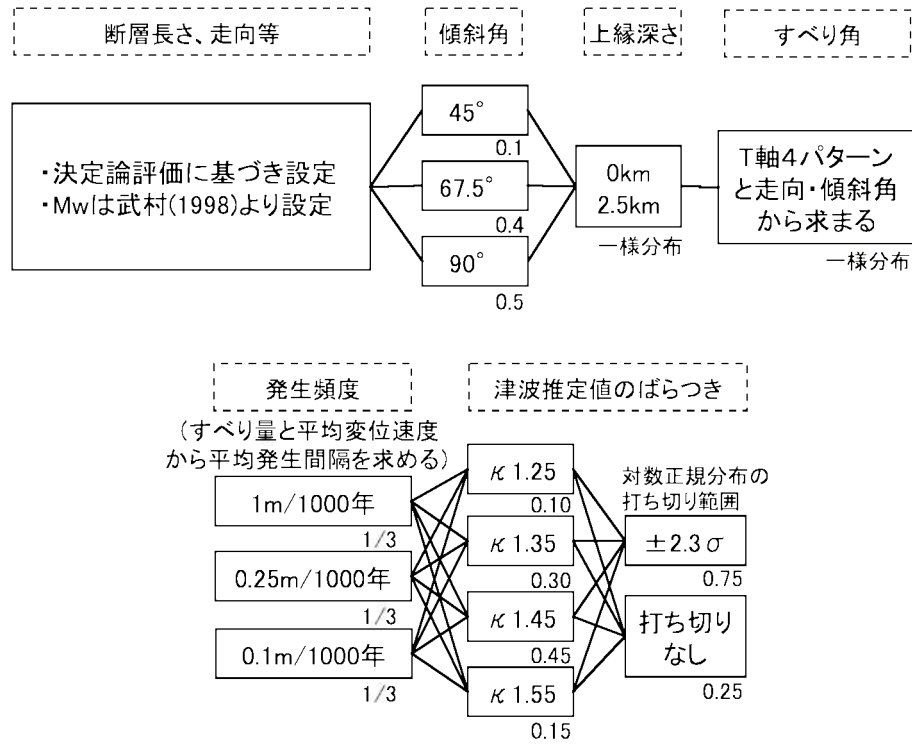
第1.2-27図(2) 砂移動による最大堆積厚



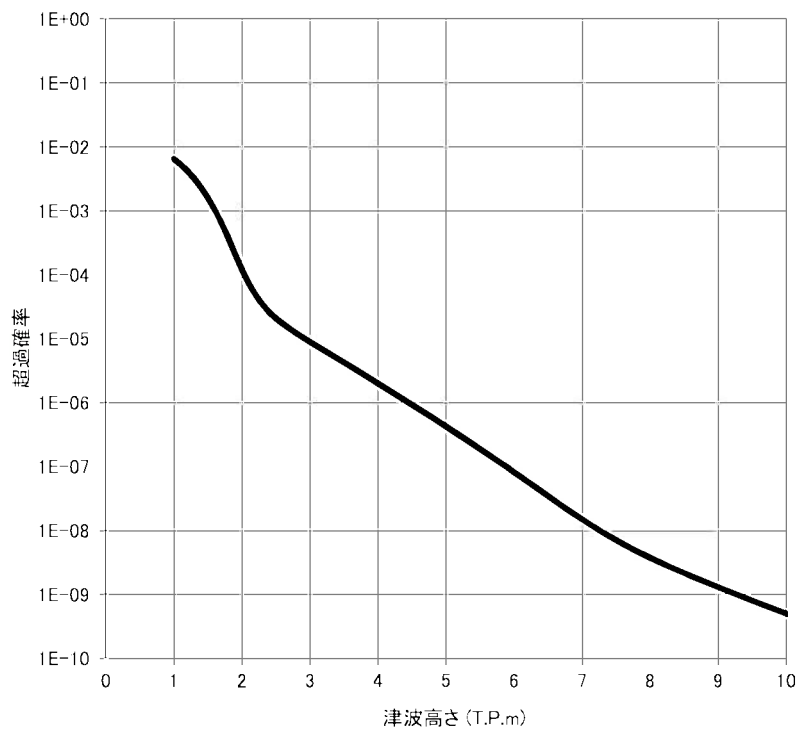
第1.2-28図(1) ロジックツリー(プレート間地震)



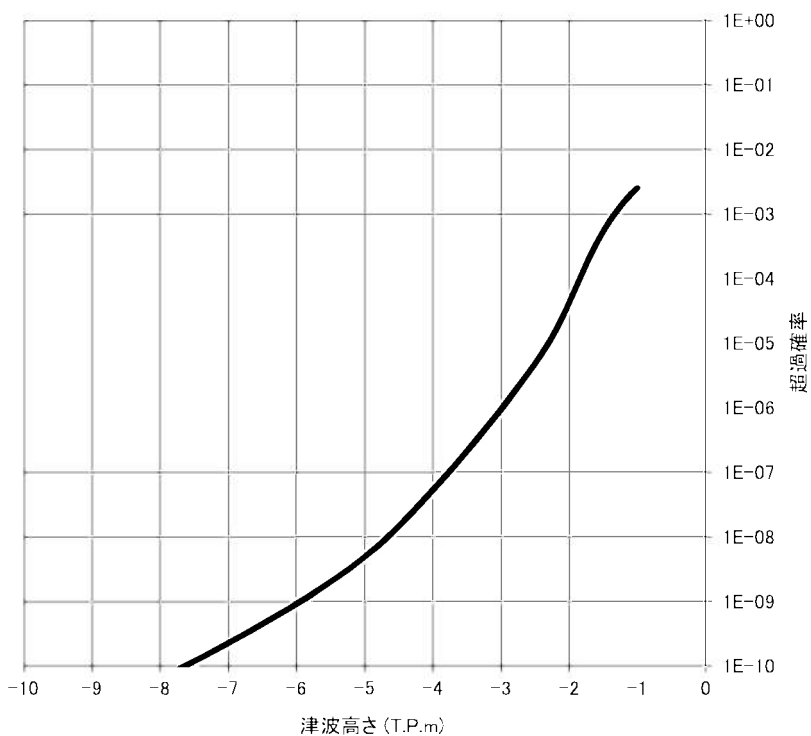
第1.2-28図(2) ロジックツリー(プレート間地震)



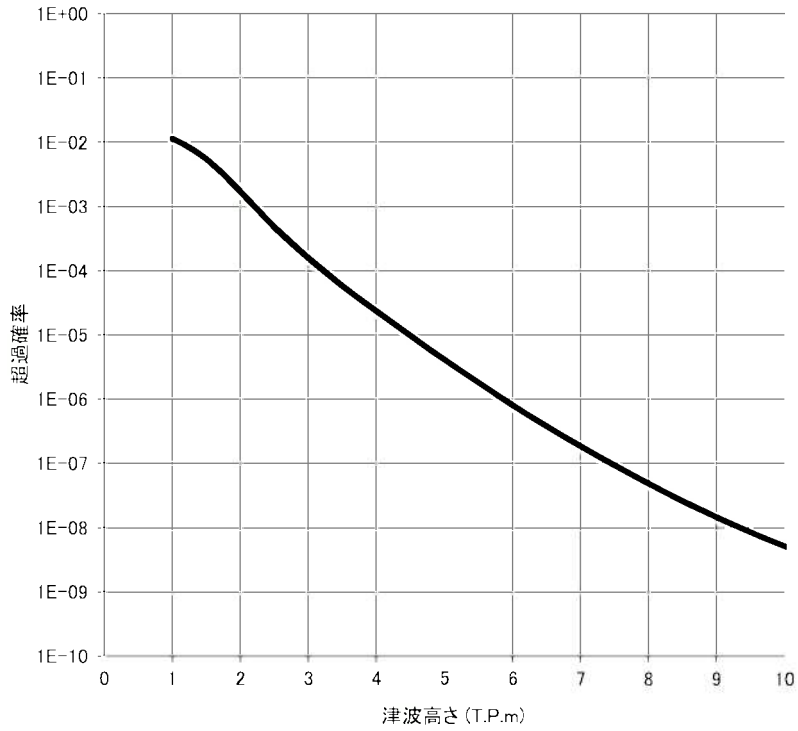
第1.2-28図(3) ロジックツリー(海域活断層による地殻内地震)



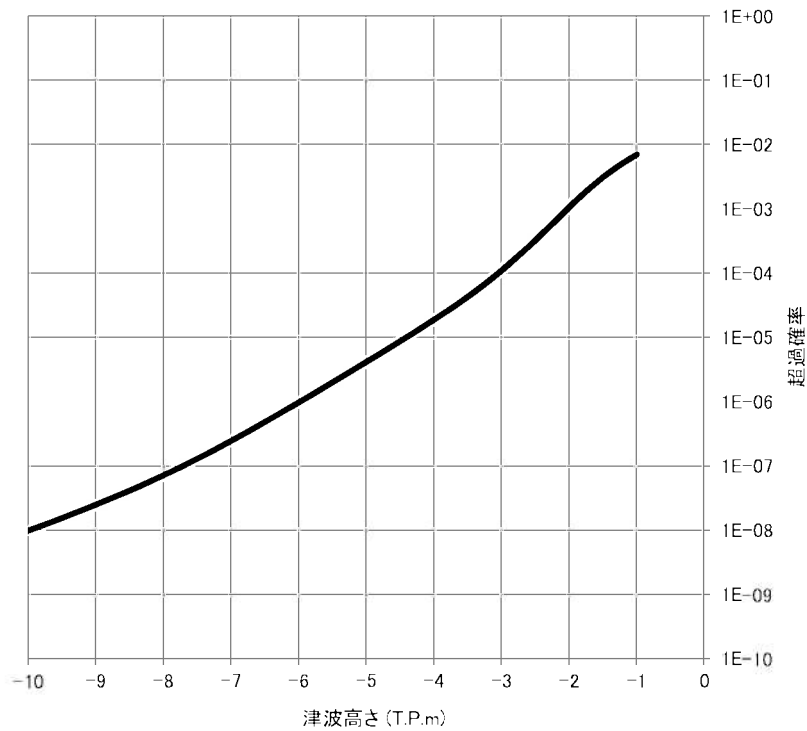
第1.2-29図(1) 基準津波の策定位置における
水位と年超過確率の関係(水位上昇側)



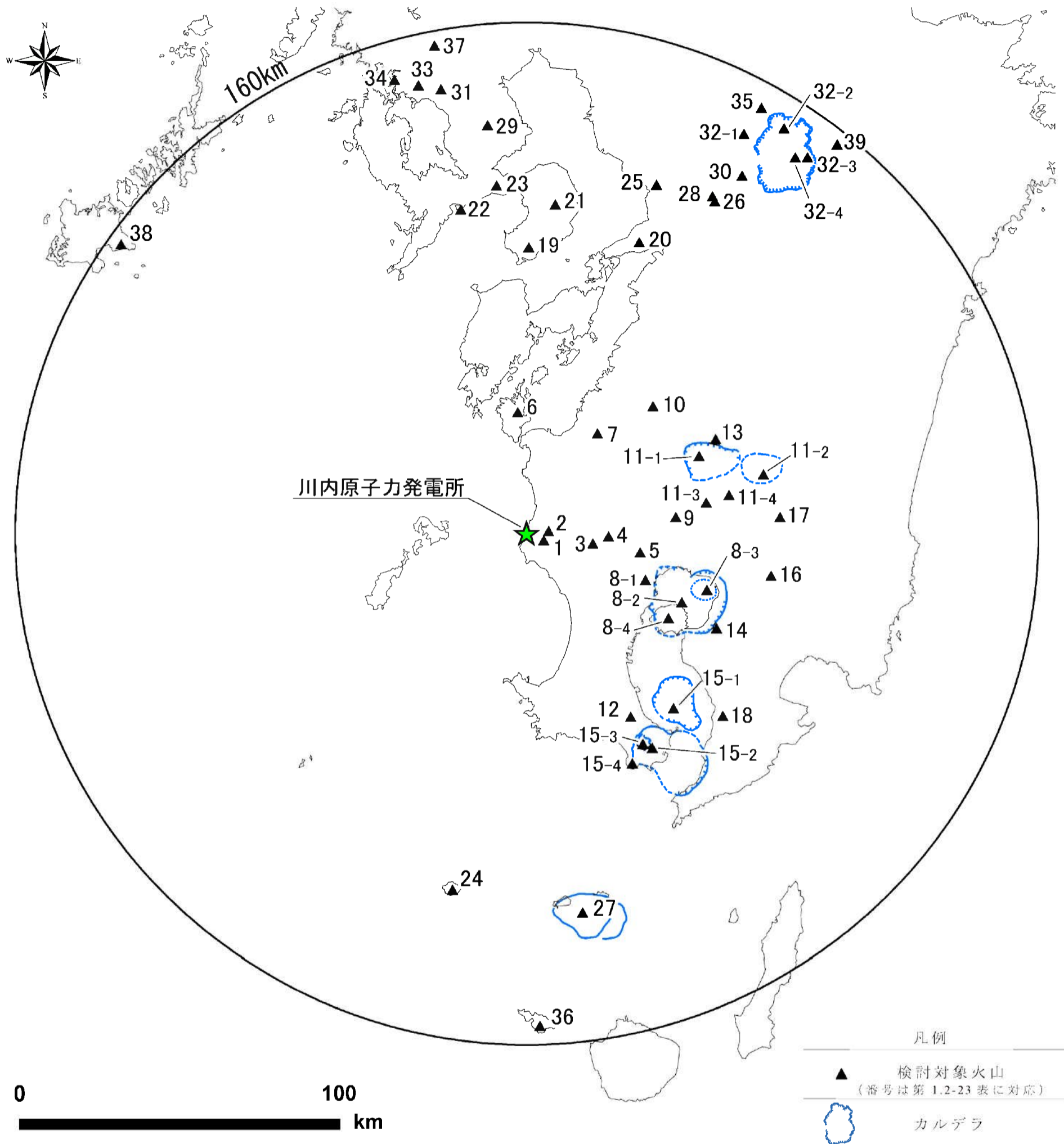
第1.2-29図(2) 基準津波の策定位置における
水位と年超過確率の関係(水位下降側)



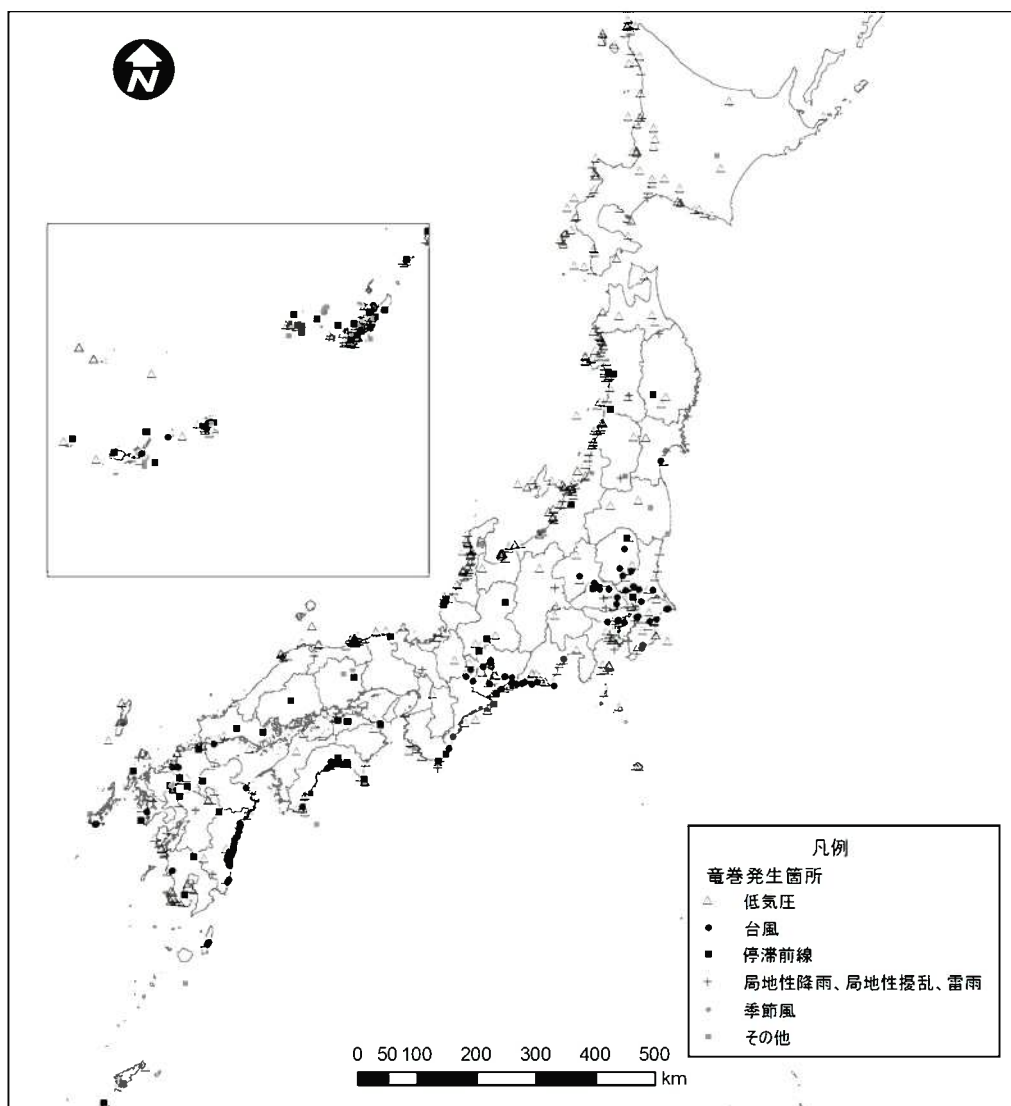
第1.2-29図(3) 取水口位置における
水位と年超過確率の関係(水位上昇側)



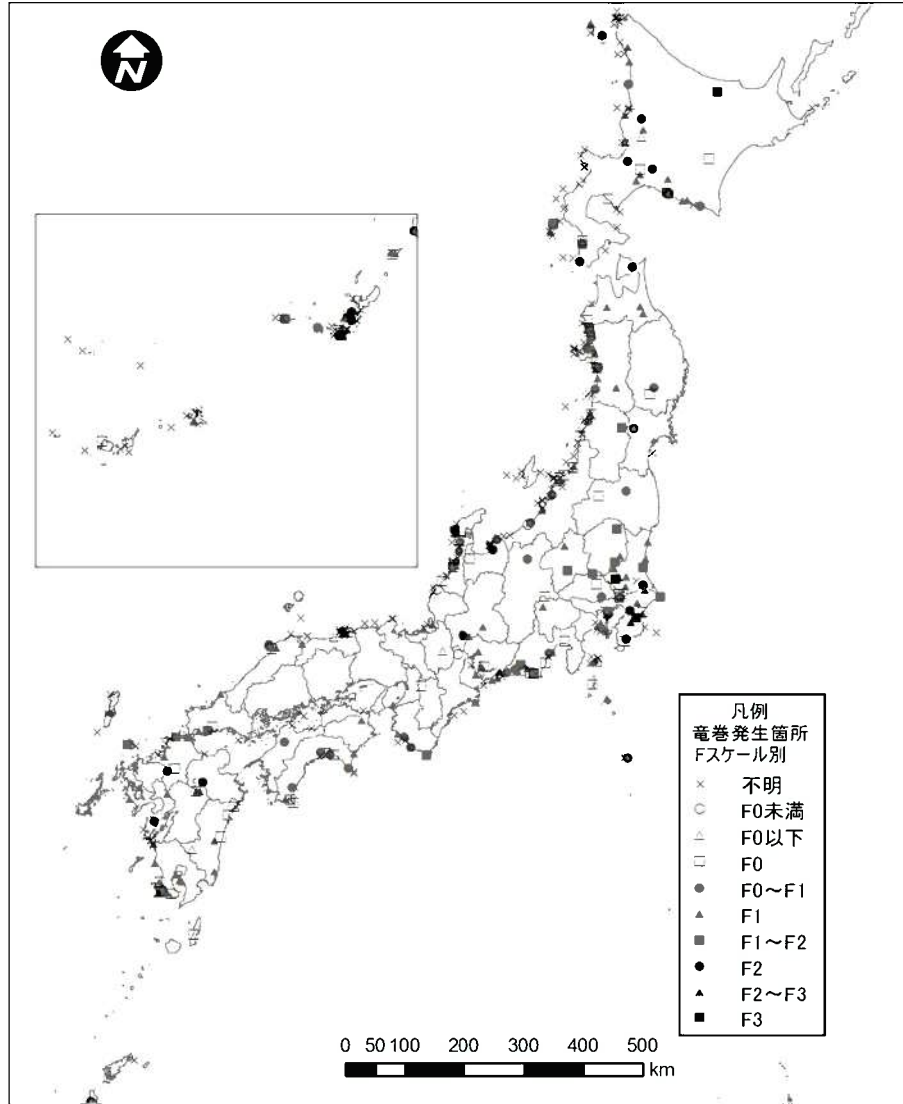
第1.2-29図(4) 取水口位置における
水位と年超過確率の関係(水位下降側)



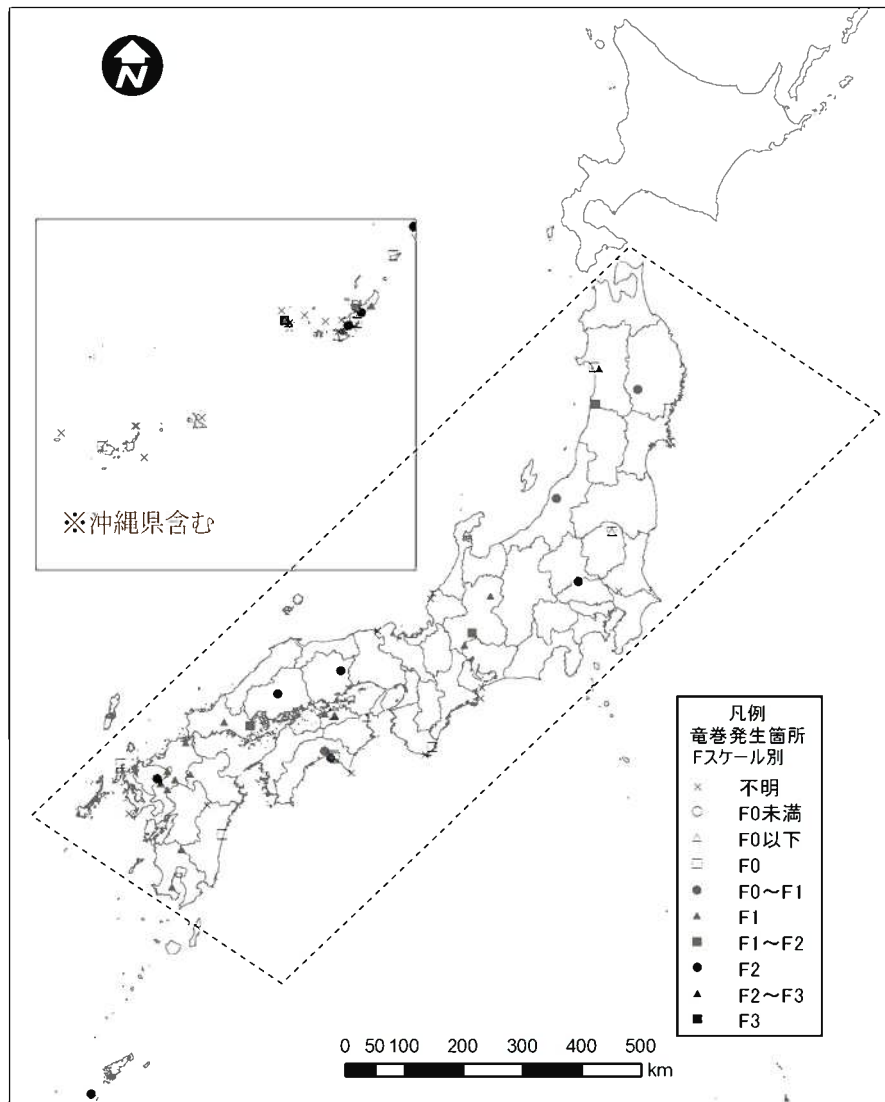
第1.2-30図 地理的領域の検討対象火山の位置



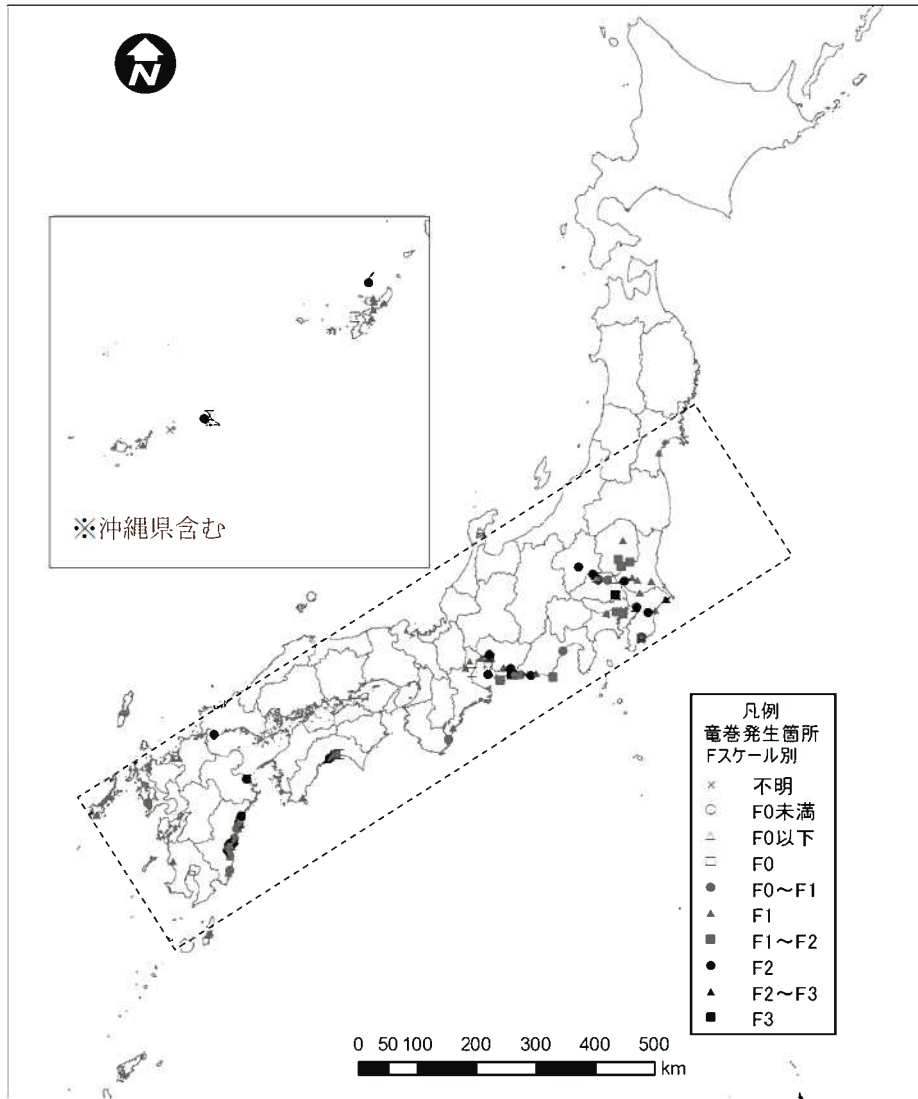
第1.2-31図 気象要因別の竜巻発生位置



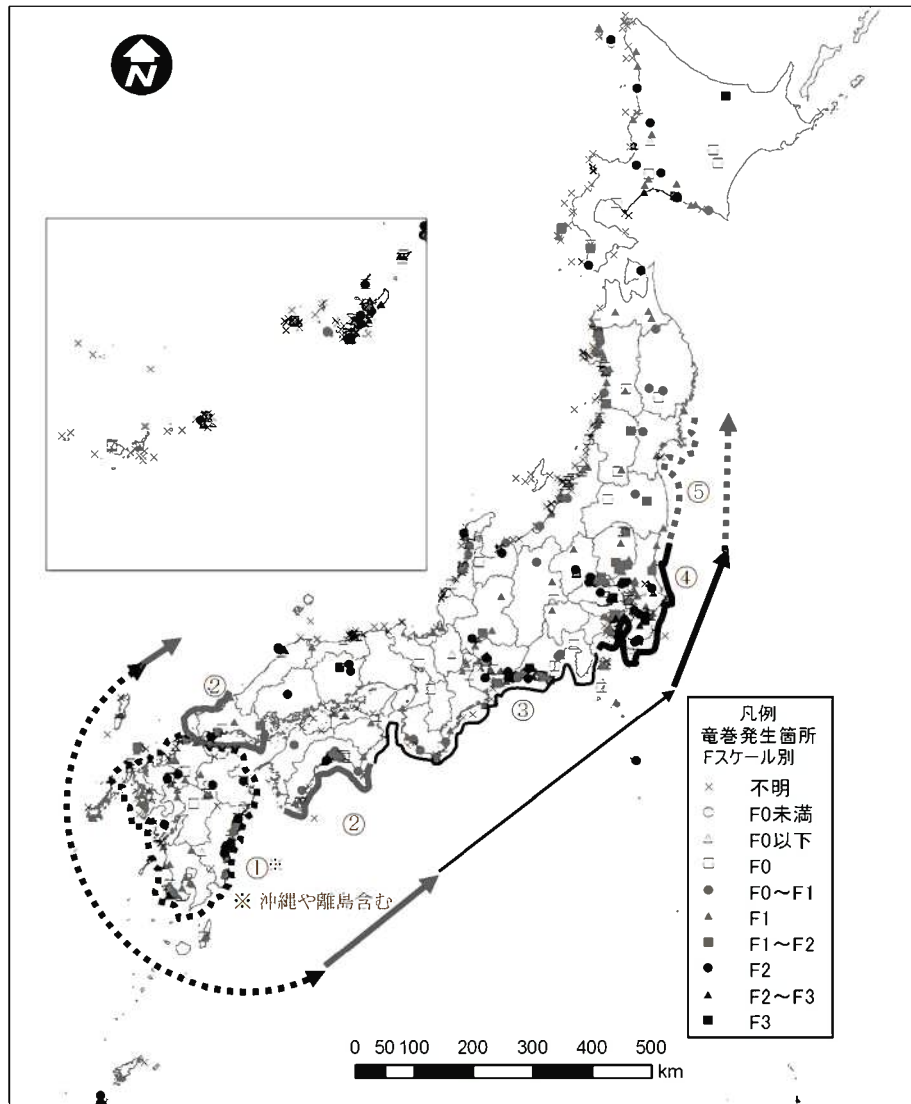
第1.2-32図 竜巻発生位置(低気圧起因)



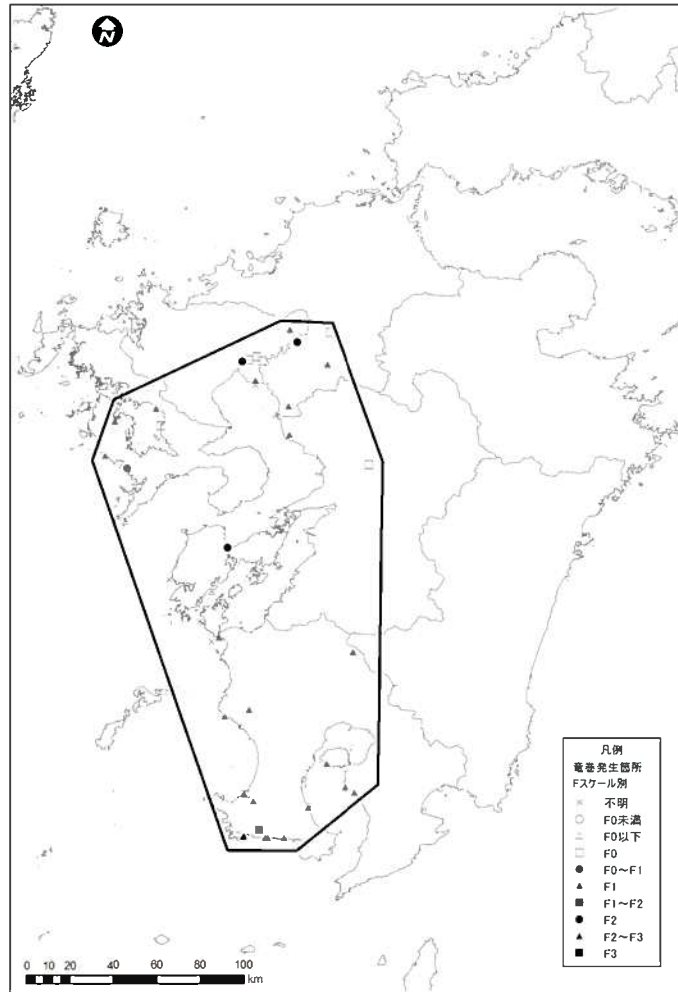
第1.2-33図 竜巻発生位置(停滞前線起因)



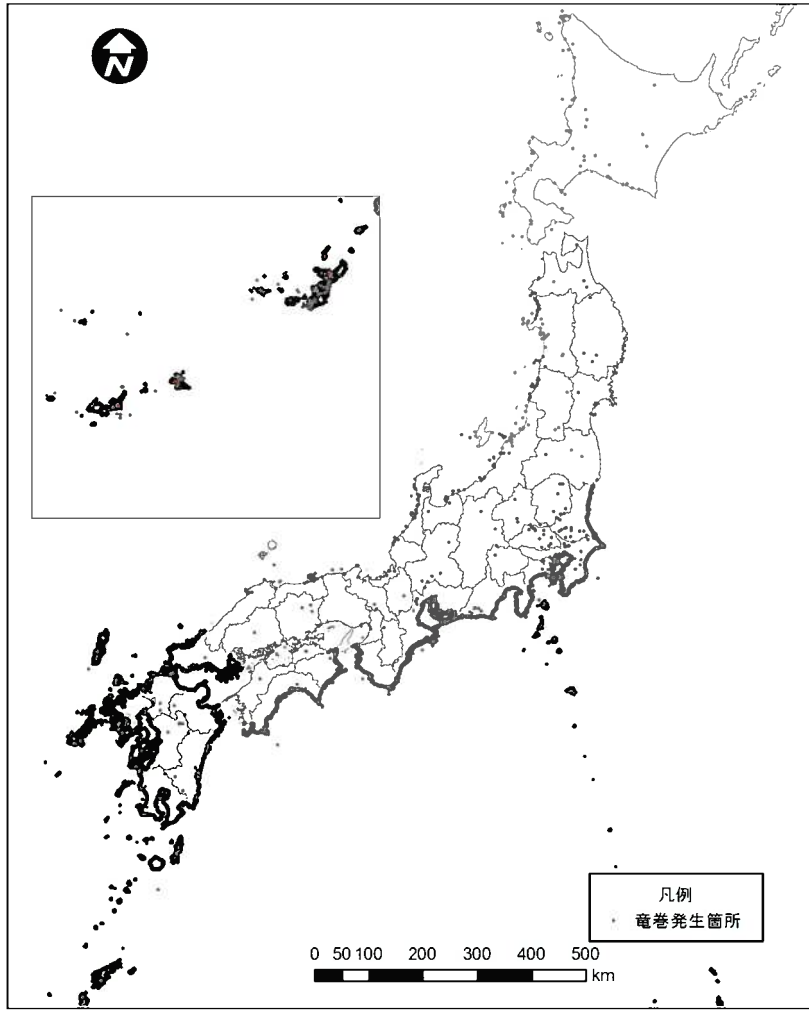
第1.2-34図 竜巻発生位置(台風起因)



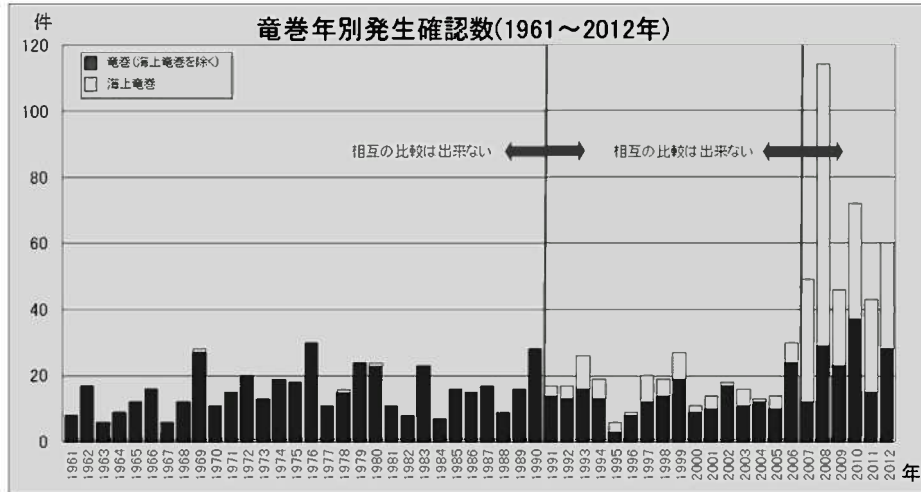
第1.2-35図 Fスケール別の竜巻発生位置



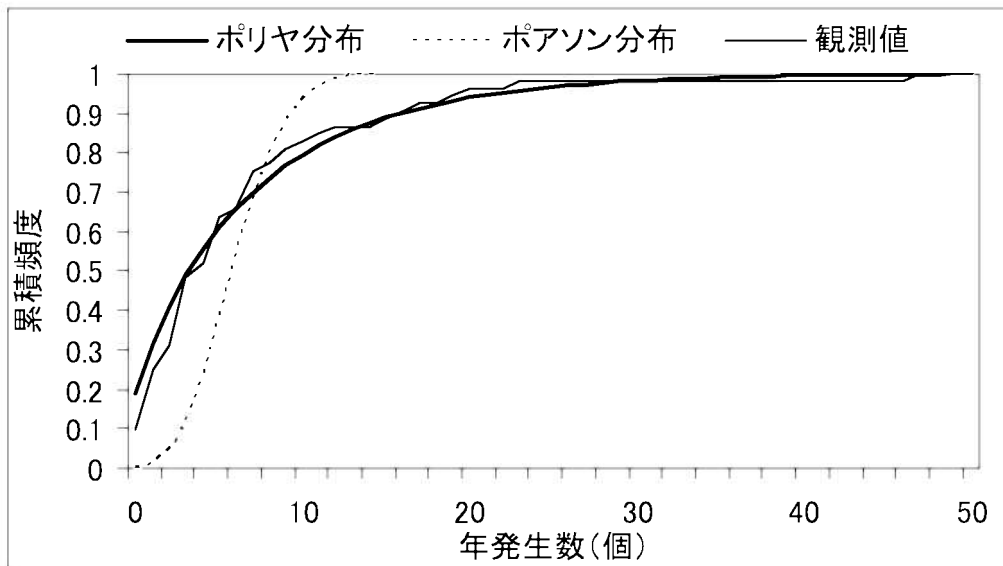
第1.2-36図 集中地域⑨におけるFスケール別竜巻発生位置



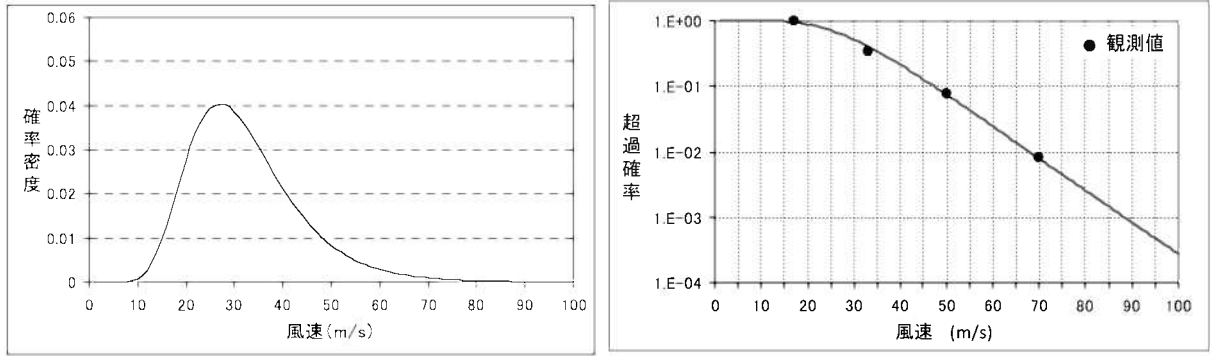
第1.2-37図 竜巻検討地域



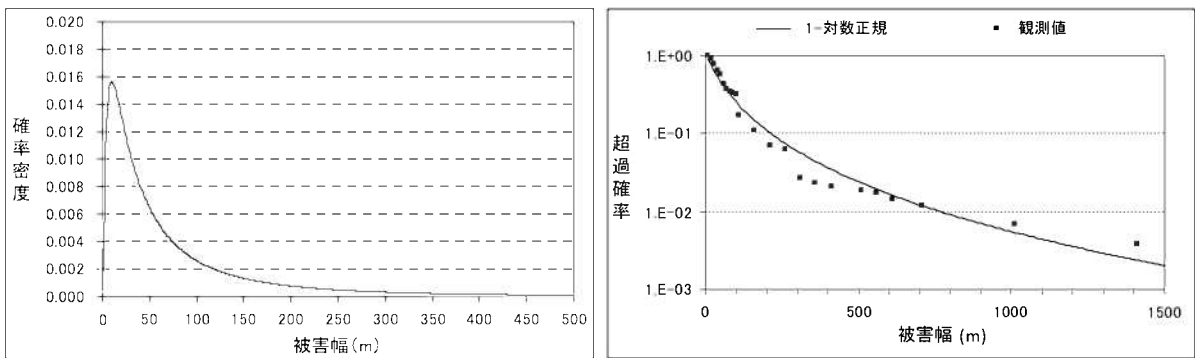
第1.2-38図 竜巻の年発生数(出典:気象庁ホームページ)



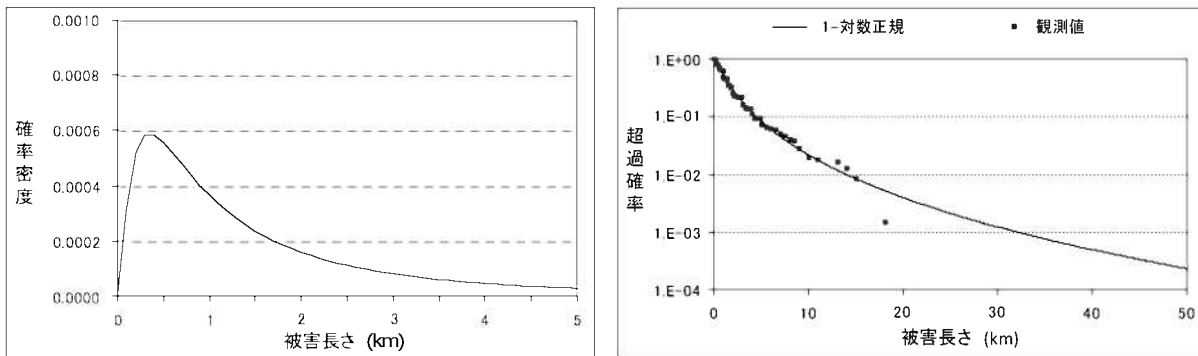
第1.2-39図 竜巻検討地域における竜巻の年発生数の累積頻度



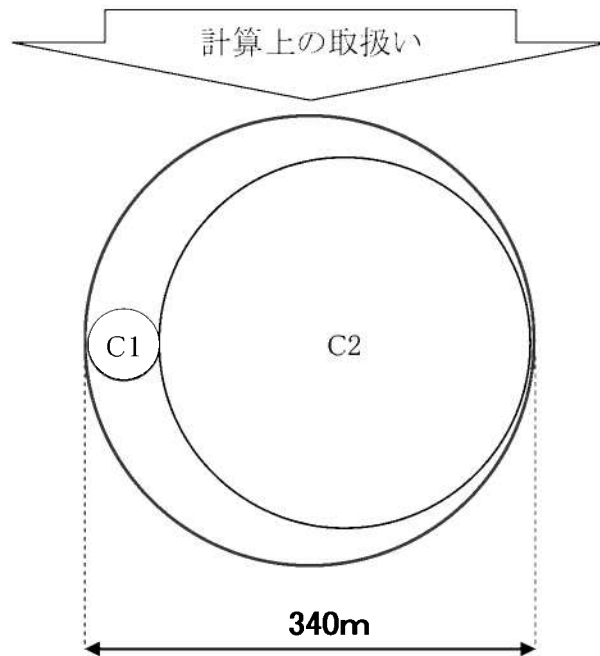
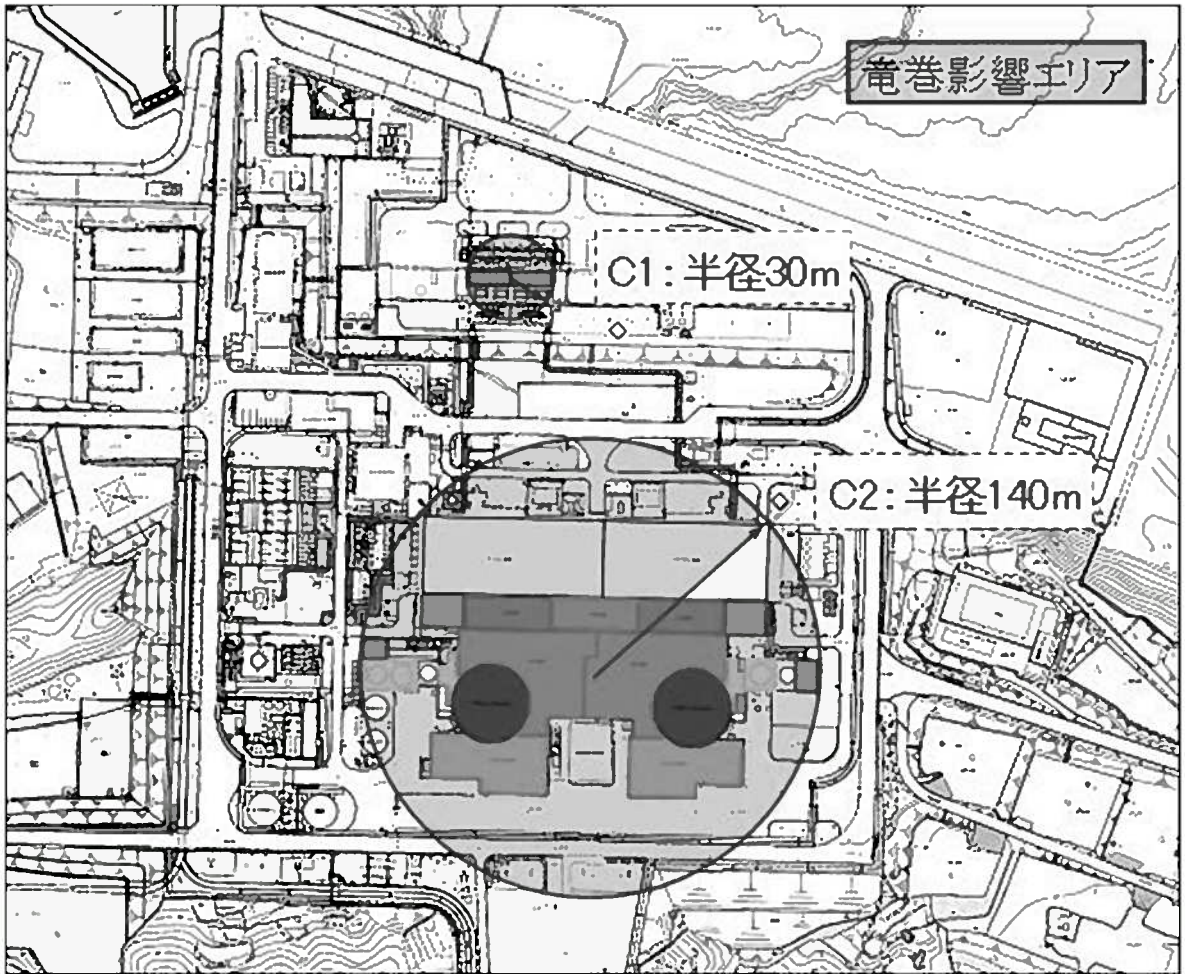
第1.2-40図 風速の確率密度分布(左)と超過確率(右)



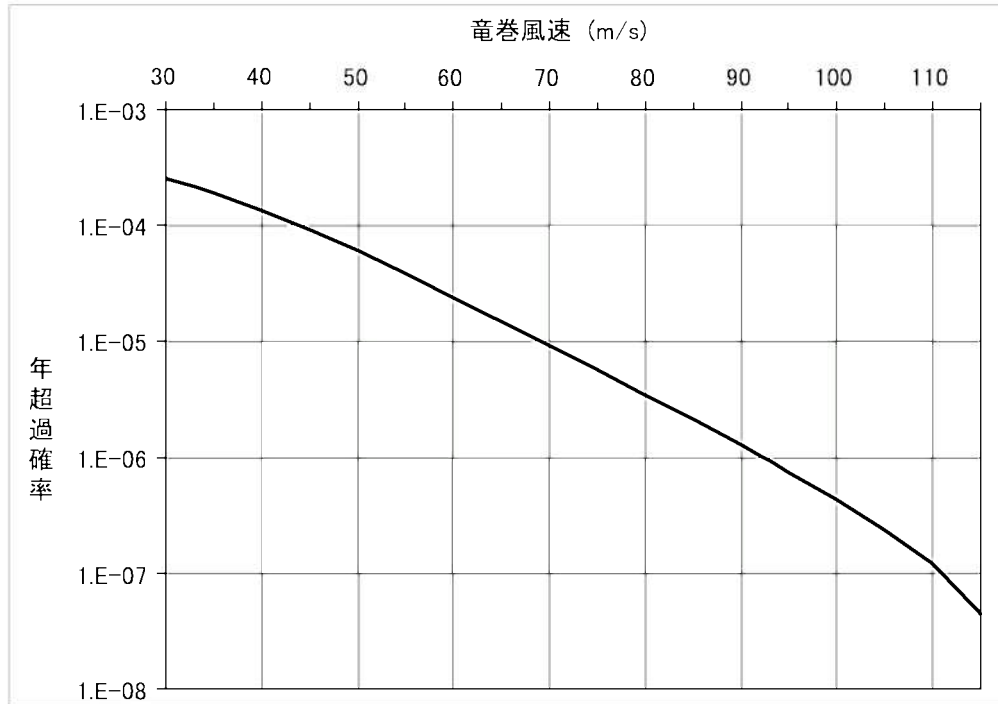
第1.2-41図 被害幅の確率密度分布(左)と超過確率(右)



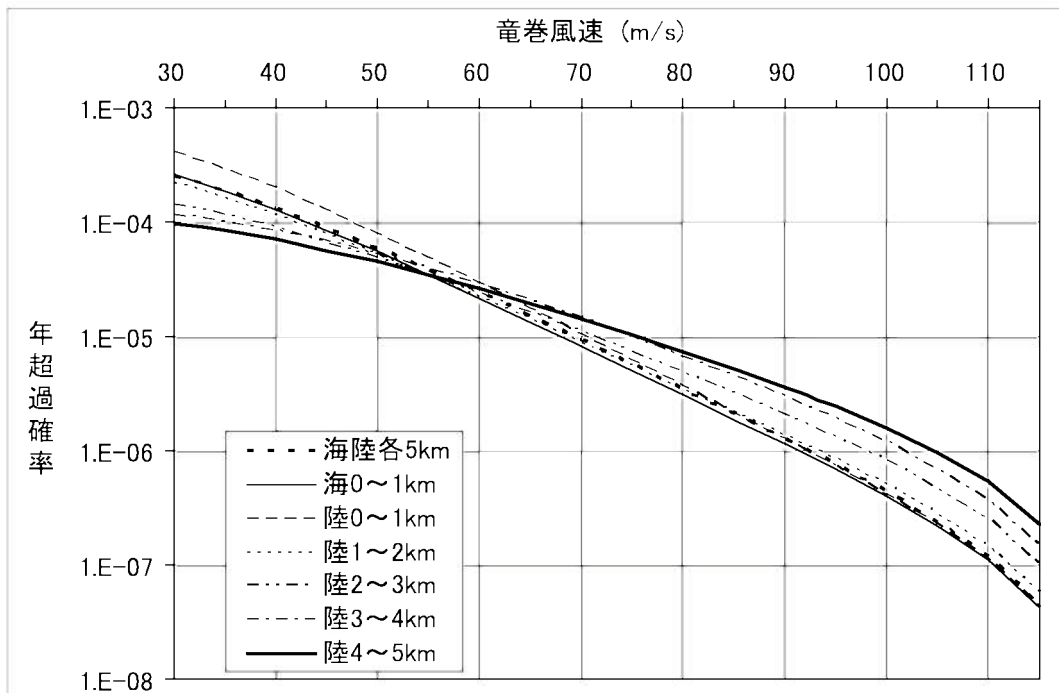
第1.2-42図 被害長さの確率密度分布(左)と超過確率(右)



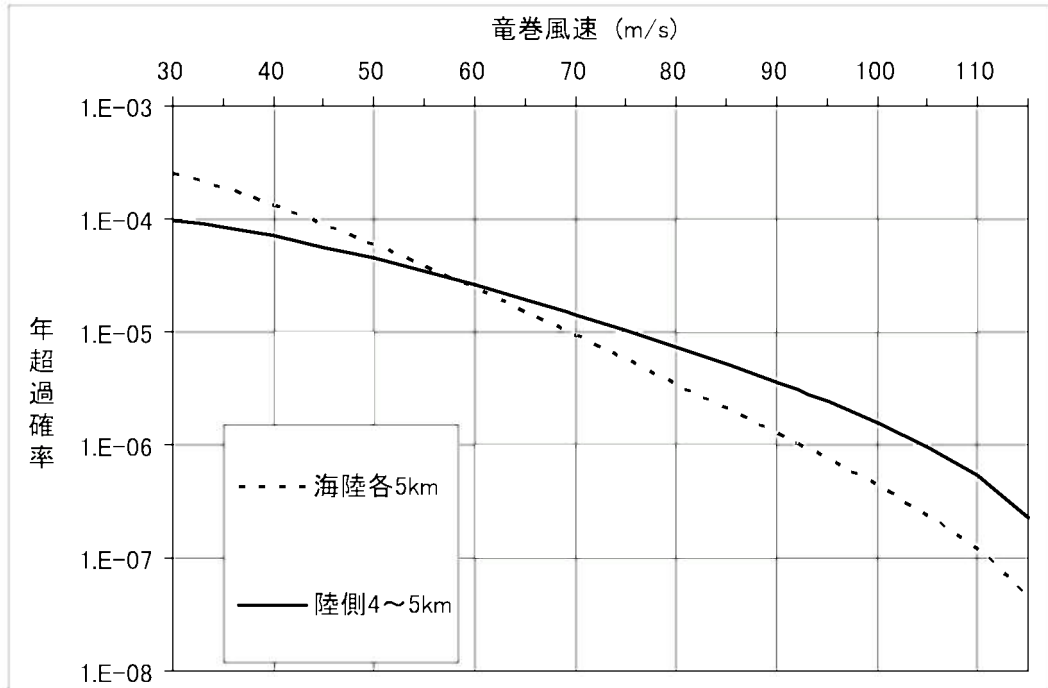
第1.2-43図 竜巻影響エリア



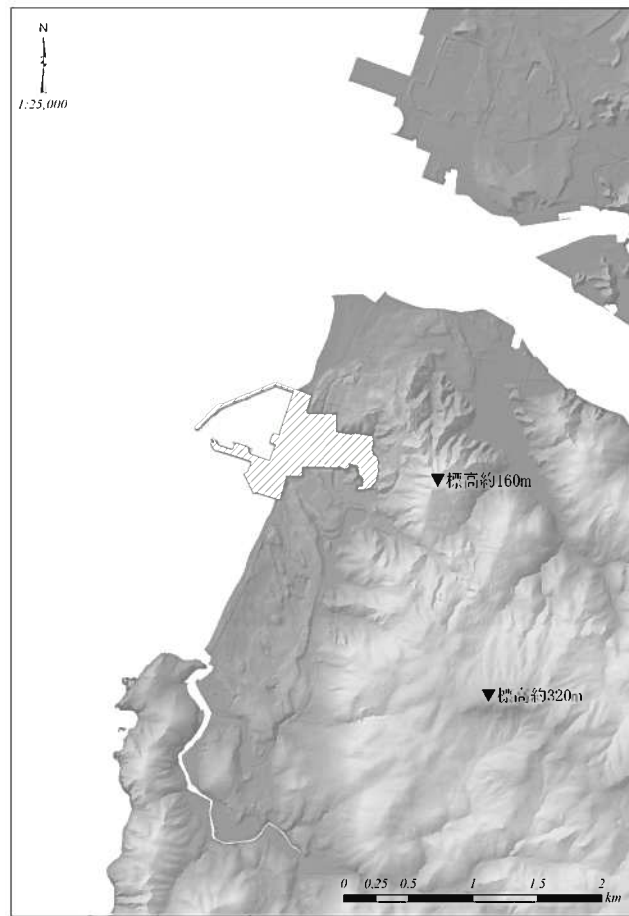
第1.2-44図 竜巻最大風速のハザード曲線(海側、陸側5km範囲)



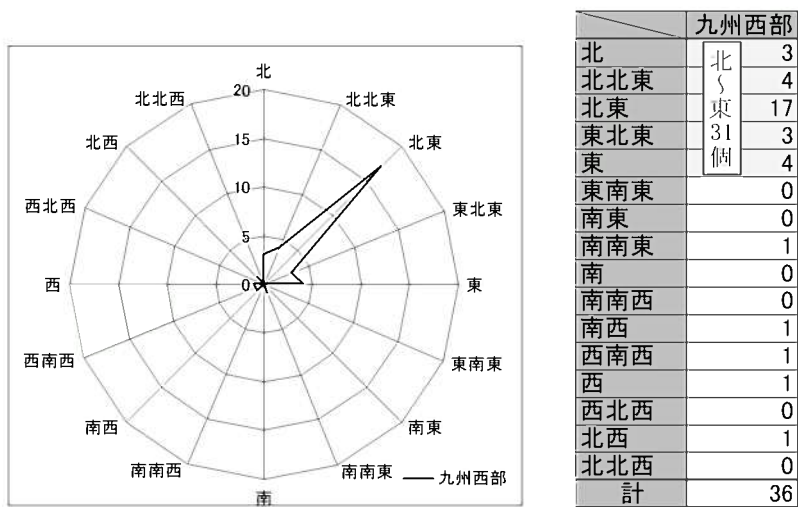
第1.2-45図 竜巻最大風速のハザード曲線(1km範囲)



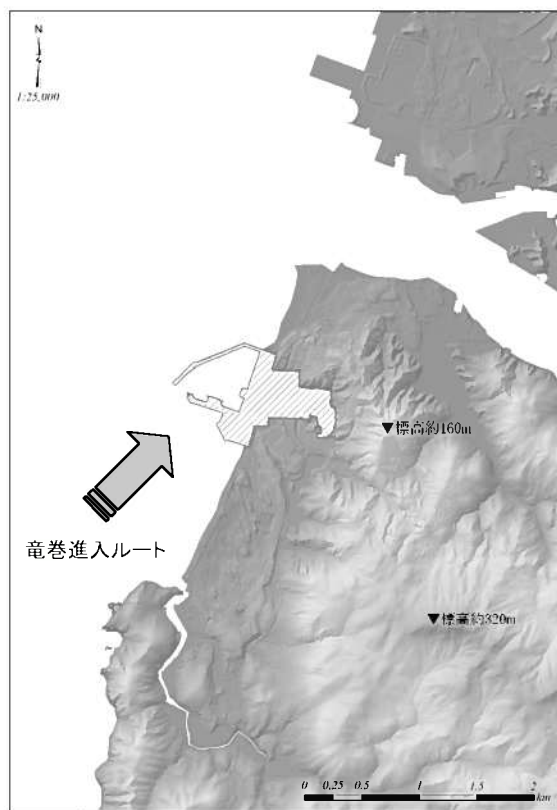
第1.2-46図 竜巻最大風速のハザード曲線



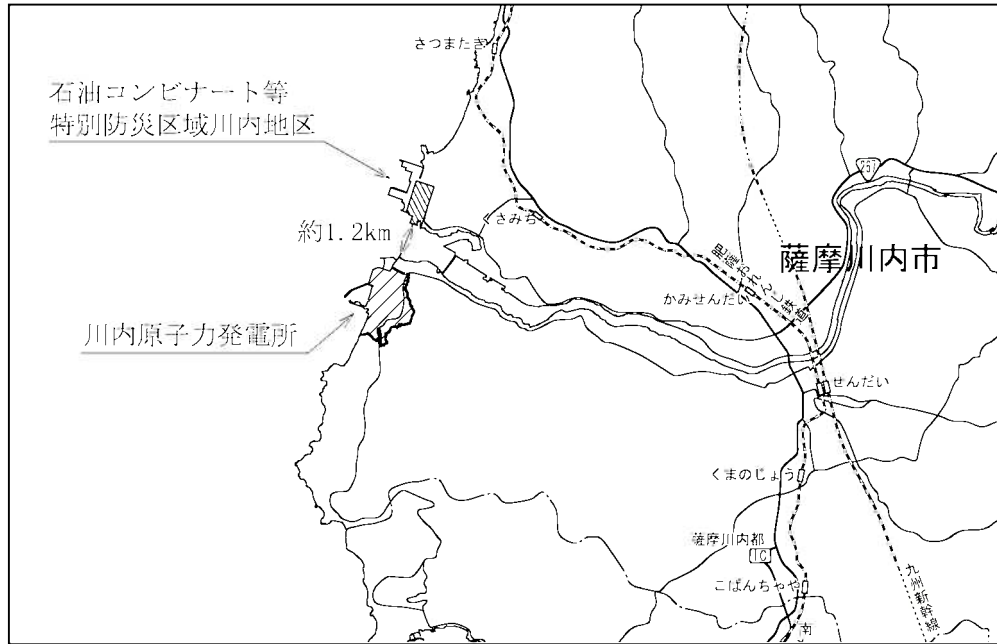
第1.2-47図 川内原子力発電所周辺の地形



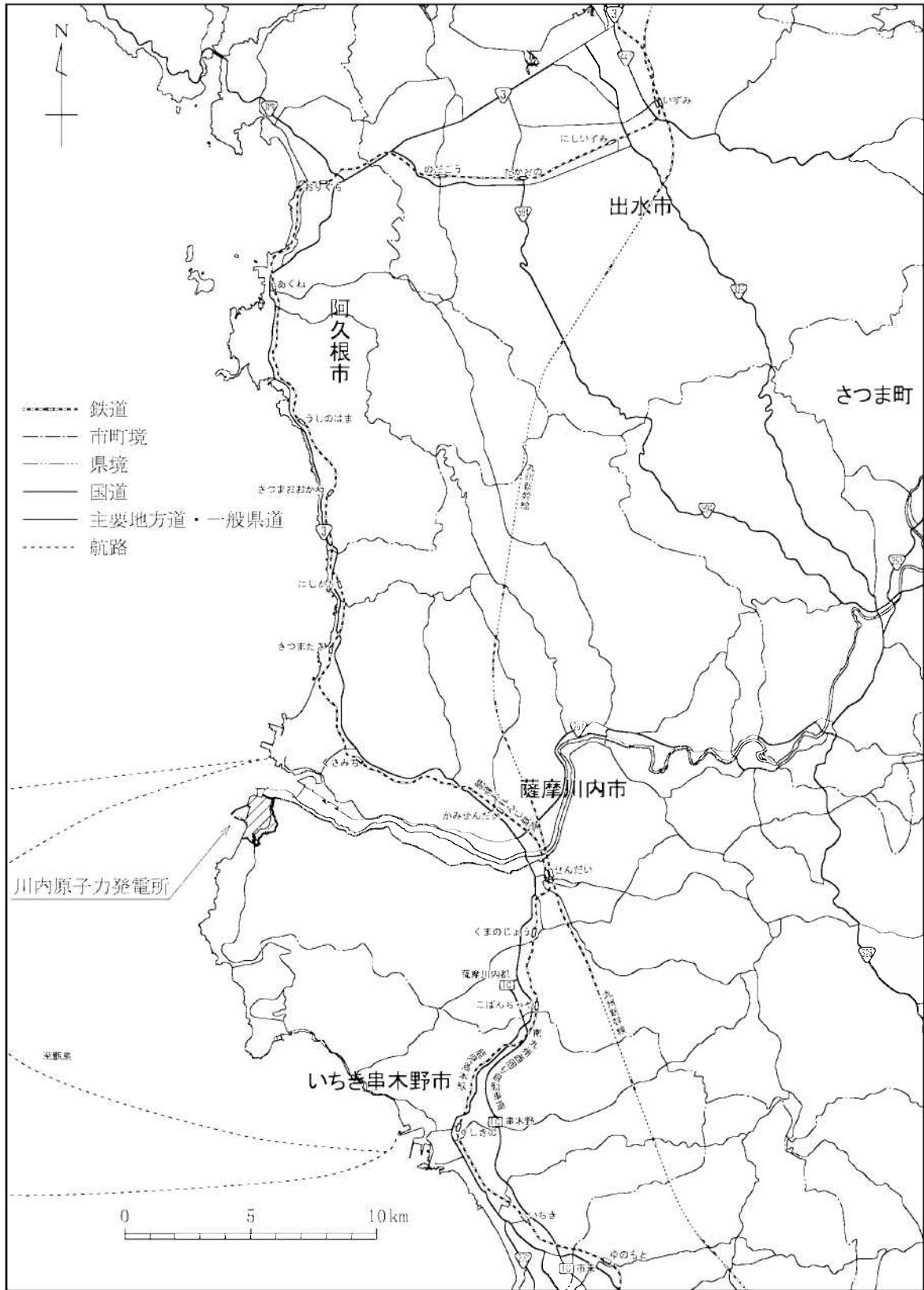
第1.2-48図 九州西部で発生した竜巻の移動方向



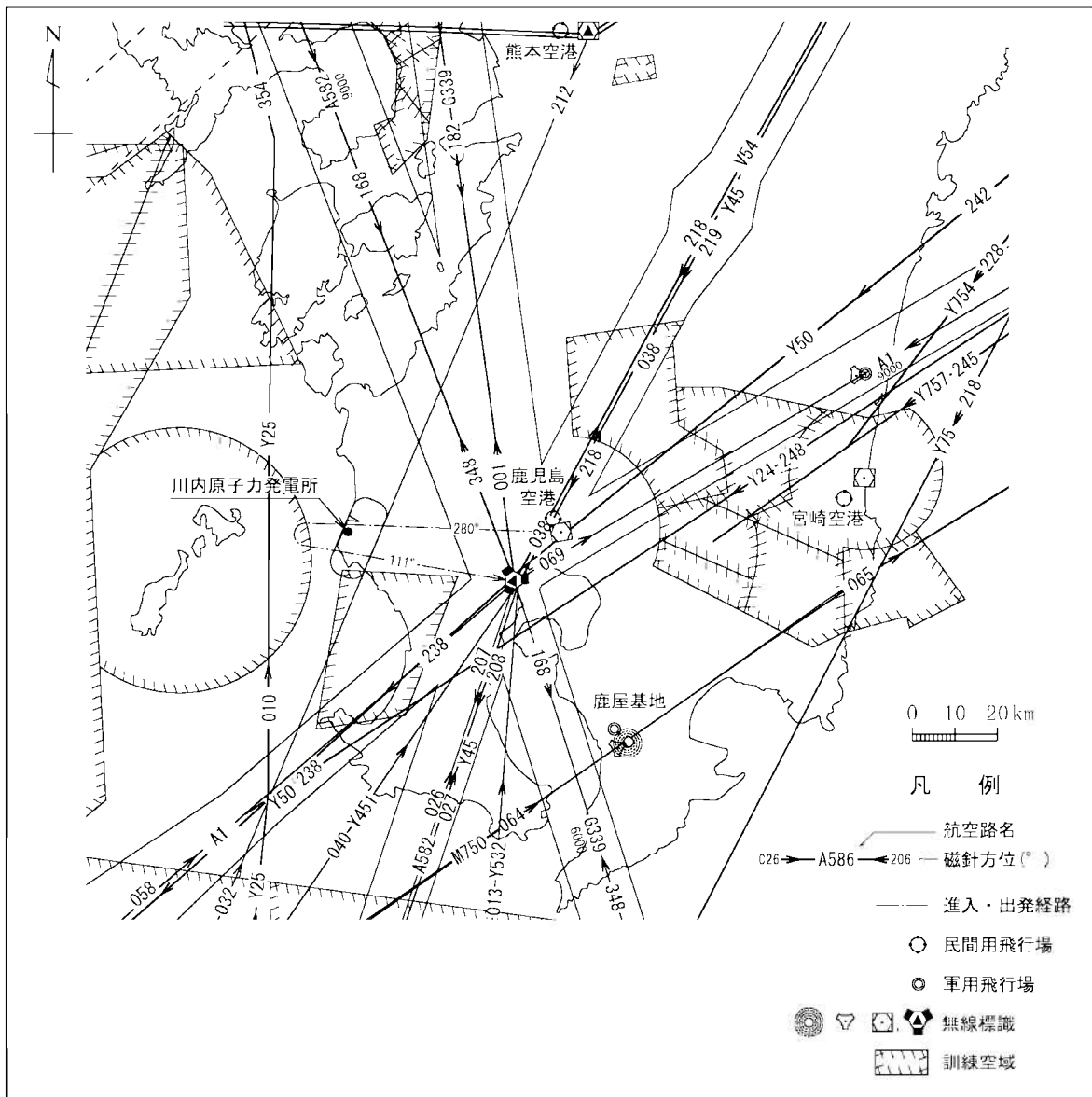
第1.2-49図 竜巻の移動方向と川内原子力発電所の位置関係



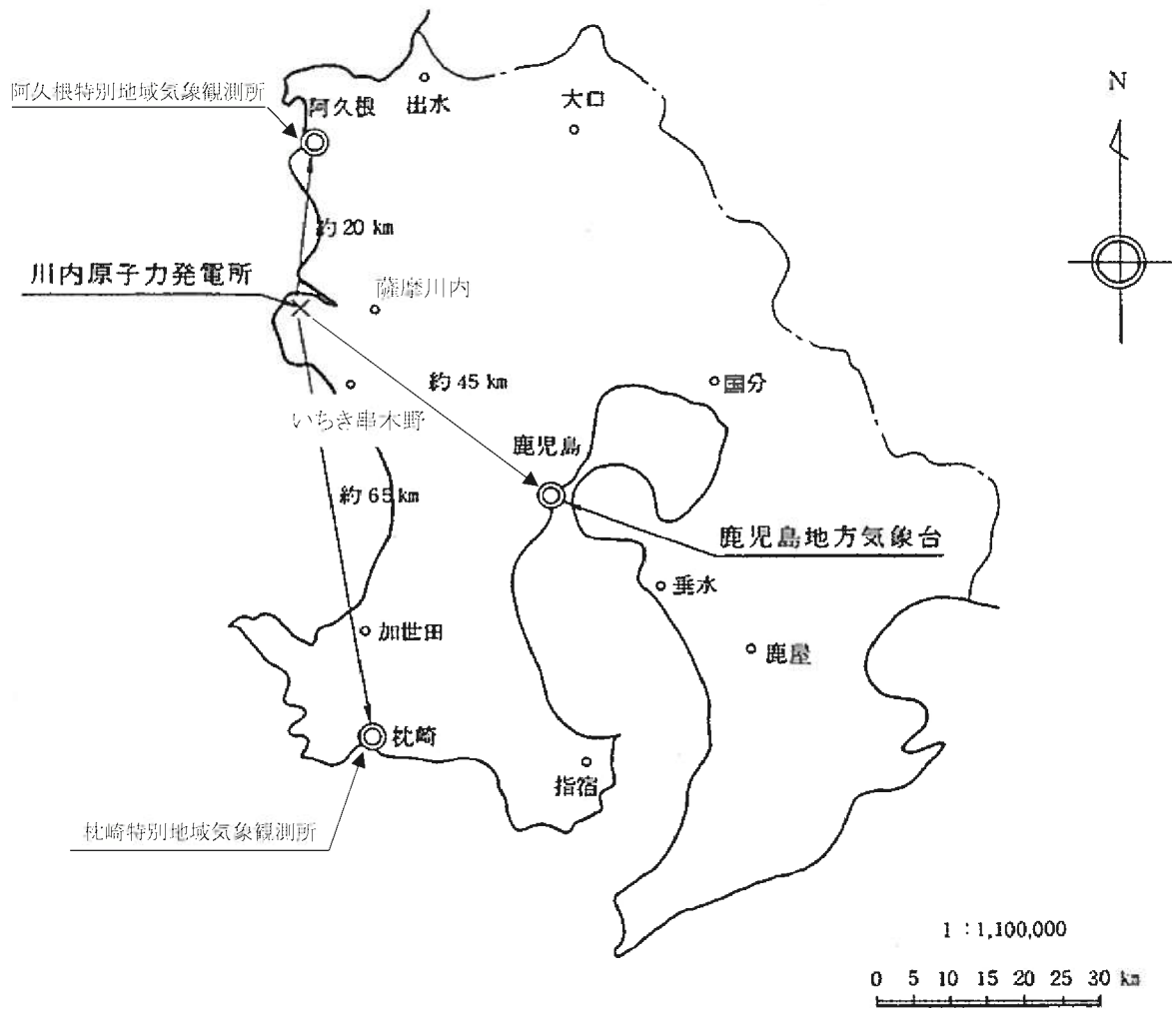
第1.2-50図 川内原子力発電所周辺のコンビナート施設の位置図



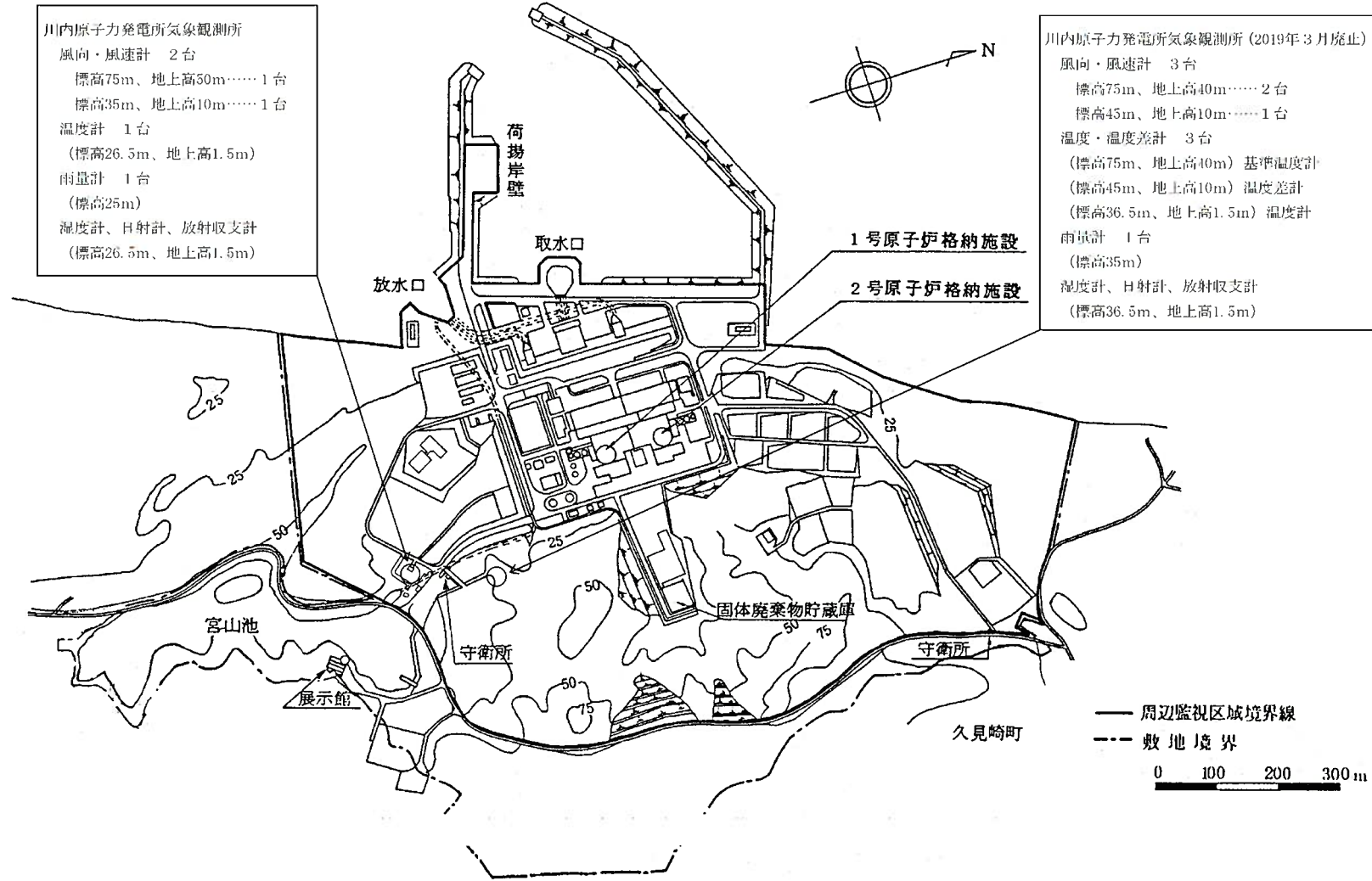
第1.2-51図 川内原子力発電所周辺の幹線道路、鉄道路線及び航路図



第1.2-52図 航空路等図

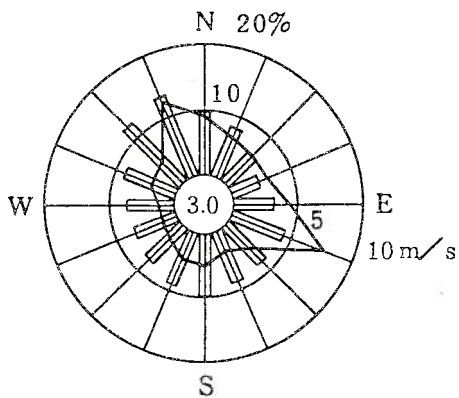


第1.2-53図 気象官署の所在地



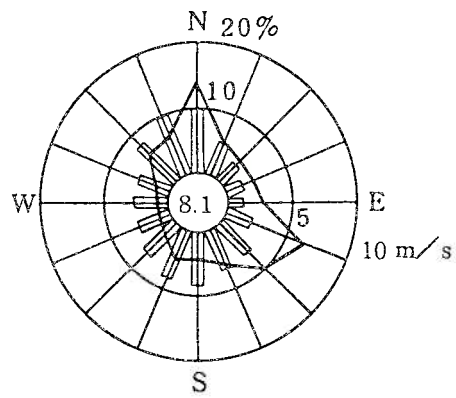
第1.2-54図 気象観測設備配置図

標高75m
(地上高40m)



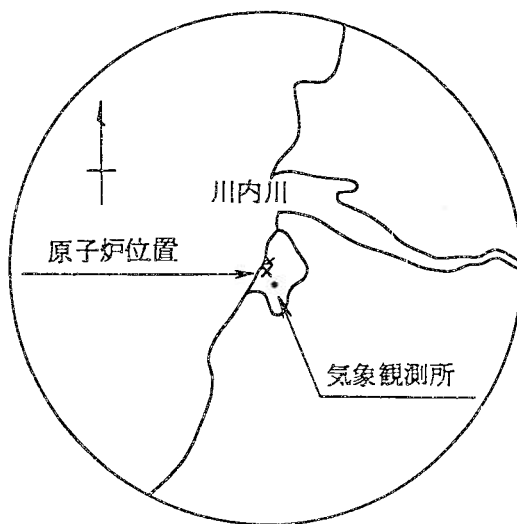
欠測率: 0.9%

標高45m
(地上高10m)



欠測率: 1.1%

- 注) 1. — 風向出現頻度(%)
 □ 平均風速(m/s)
 2. 小円内の数字は静穏(0.5 m/s未滿)の頻度(%)

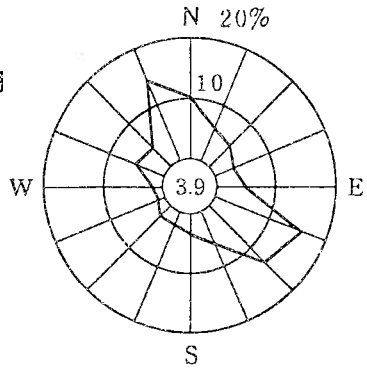


第1.2-55図 敷地の風配図(全年)

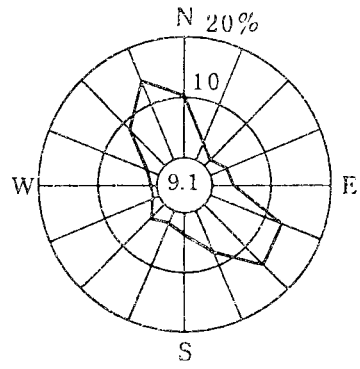
標高 75 m
(地上高 40 m)

標高 45 m
(地上高 10 m)

昭和 61 年 4 月

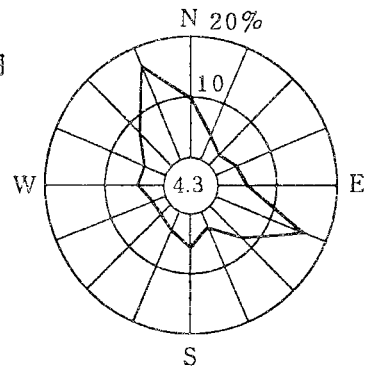


欠測率：1.1 %

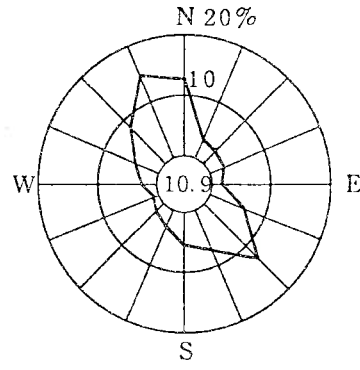


欠測率：1.0 %

昭和 61 年 5 月

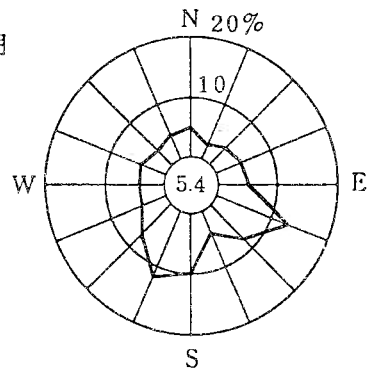


欠測率：0.1 %

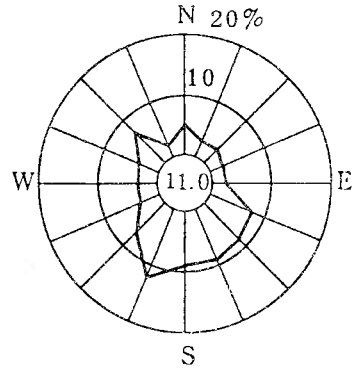


欠測率：0.3 %

昭和 61 年 6 月



欠測率：0.1 %



欠測率：0 %

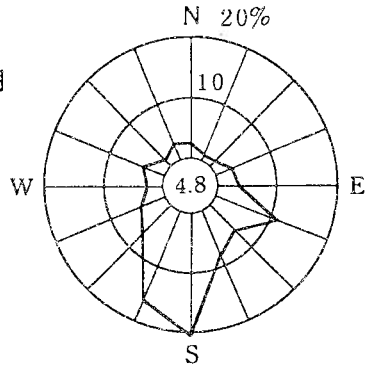
注) 小円内の数字は静穏 (0.5 m/s 未満) の頻度 (%)

第1.2-56図(1) 敷地の風配図(その1)(4~6月)

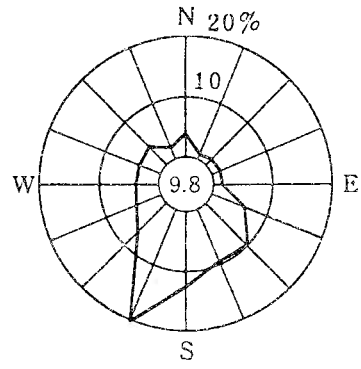
標高 75 m
(地上高 40 m)

標高 45 m
(地上高 10 m)

昭和 61 年 7 月

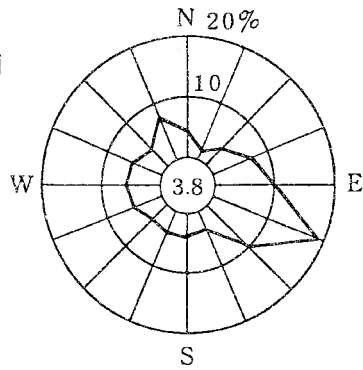


欠測率: 0%

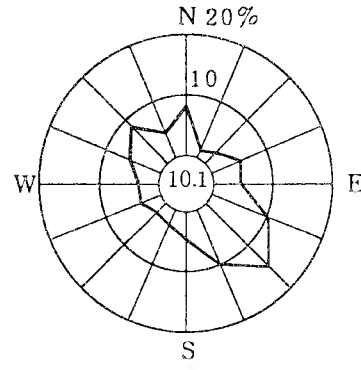


欠測率: 0%

昭和 61 年 8 月

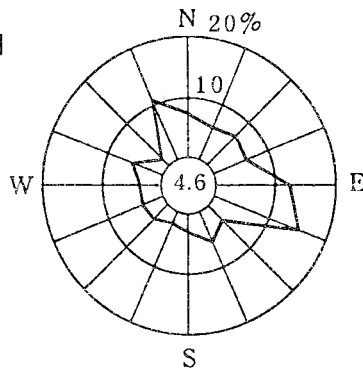


欠測率: 0.1%

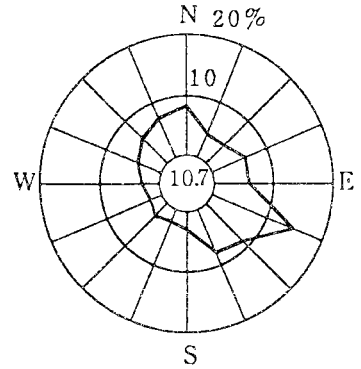


欠測率: 0%

昭和 61 年 9 月



欠測率: 0.1%



欠測率: 0.1%

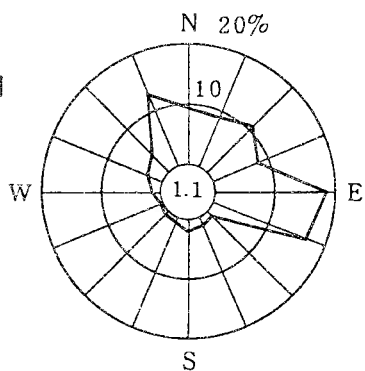
注) 小円内の数字は静穏 (0.5 m/s 未満) の頻度 (%)

第1.2-56図(2) 敷地の風配図(その2)(7~9月)

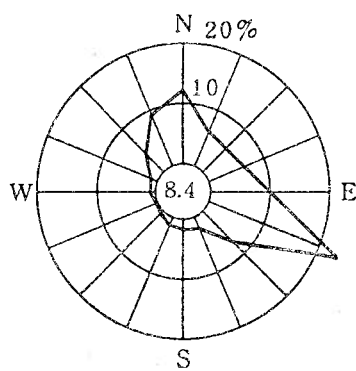
標高 75 m
(地上高 40 m)

標高 45 m
(地上高 10 m)

昭和 61 年 10 月

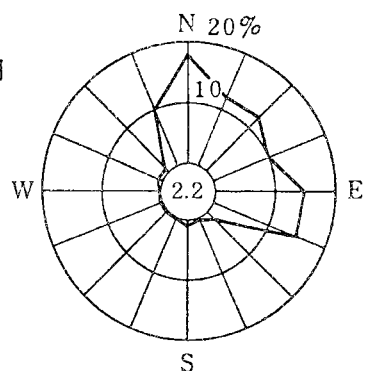


欠測率：0.9 %

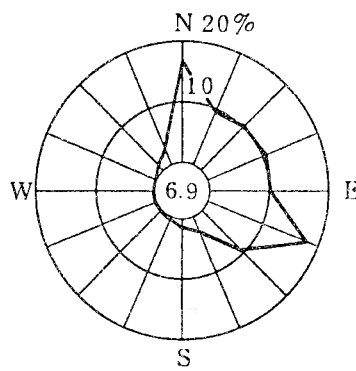


欠測率：0.5 %

昭和 61 年 11 月

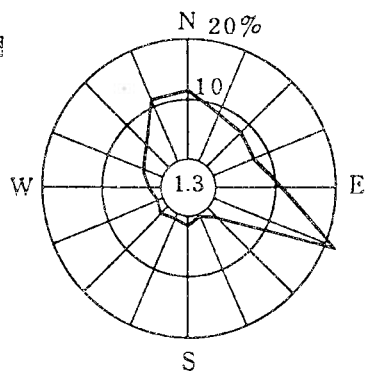


欠測率：0 %

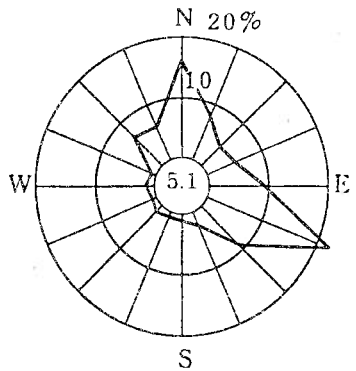


欠測率：0 %

昭和 61 年 12 月



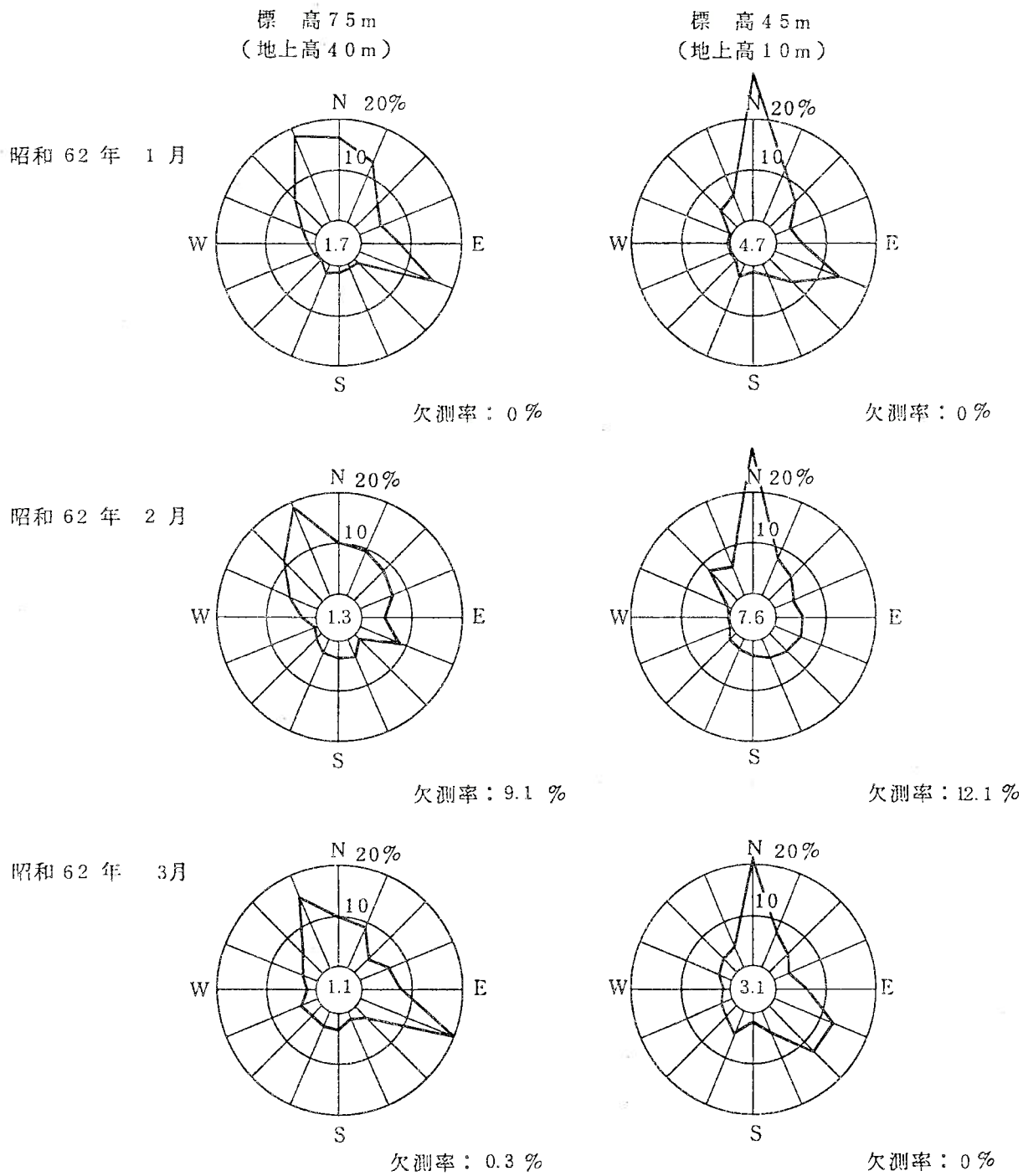
欠測率：0 %



欠測率：0 %

注) 小円内の数字は静穏 (0.5 m/s 未満) の頻度 (%)。

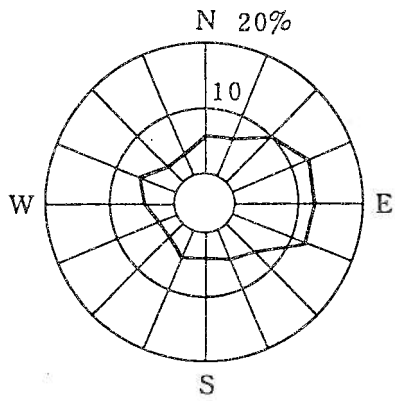
第1.2-56図(3) 敷地の風配図(その3)(10~12月)



注) 小円内の数字は静穏 (0.5 m/s 未満) の頻度 (%)。

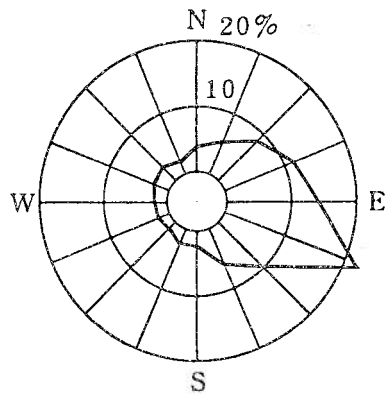
第1.2-56図(4) 敷地の風配図(その4)(1~3月)

標高 75 m
(地上高 40 m)



欠測率：0.9 %

標高 45 m
(地上高 10 m)

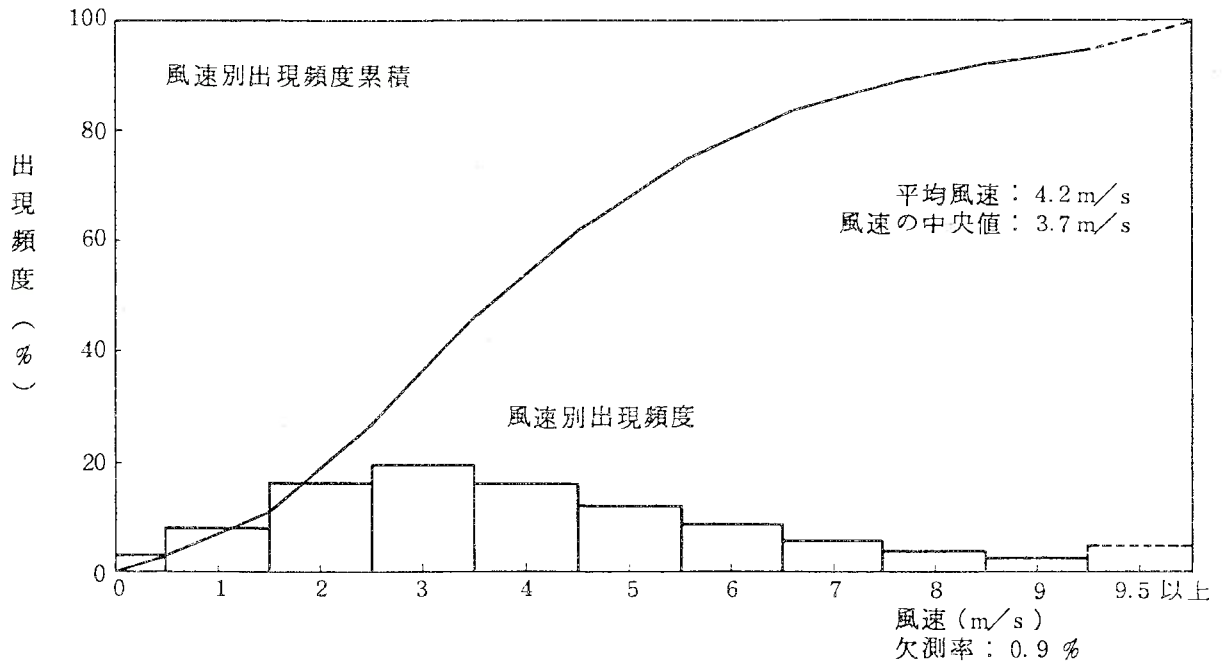


欠測率：1.1 %

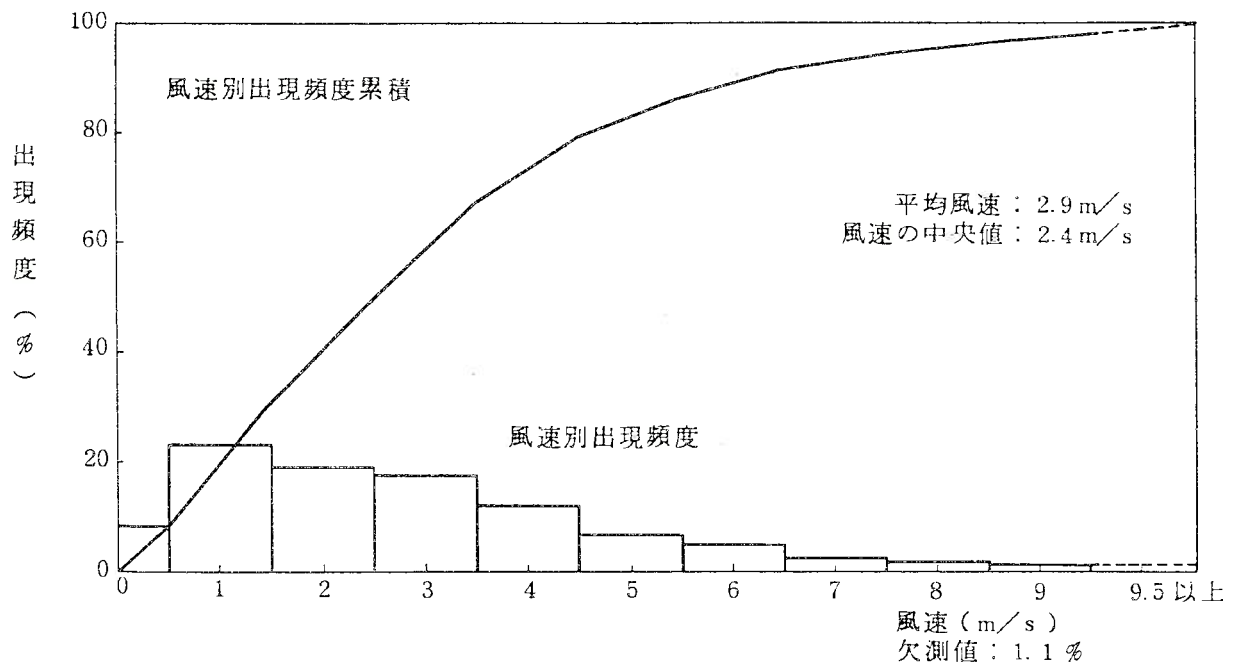
低風速 (0.5 ~ 2.0 m/s) の出現頻度

観測点	出現頻度 (%)
標高 45 m	34.8
標高 75 m	16.8

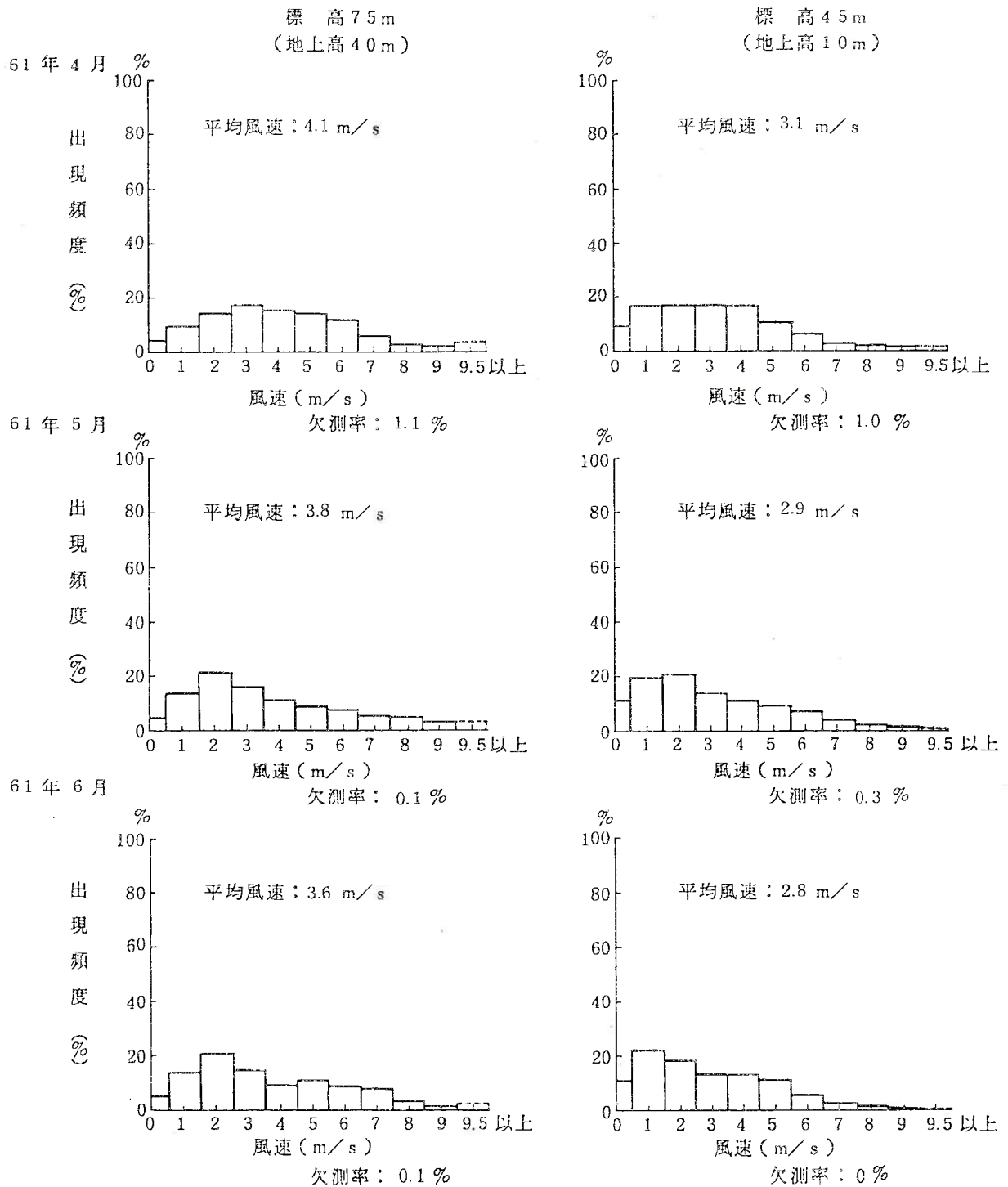
第1.2-57図 低風速 (0.5 ~ 2.0 m/s) 時の風配図



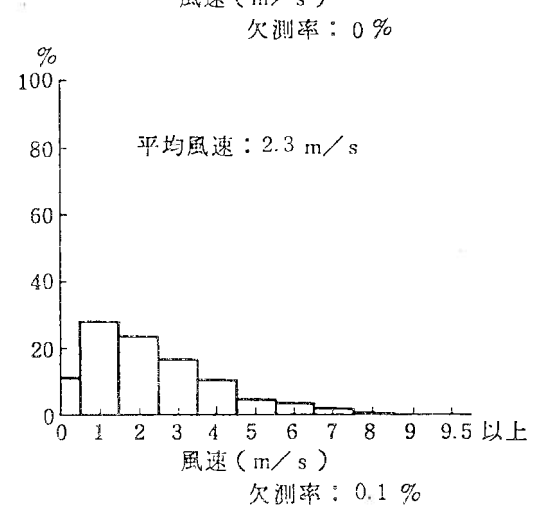
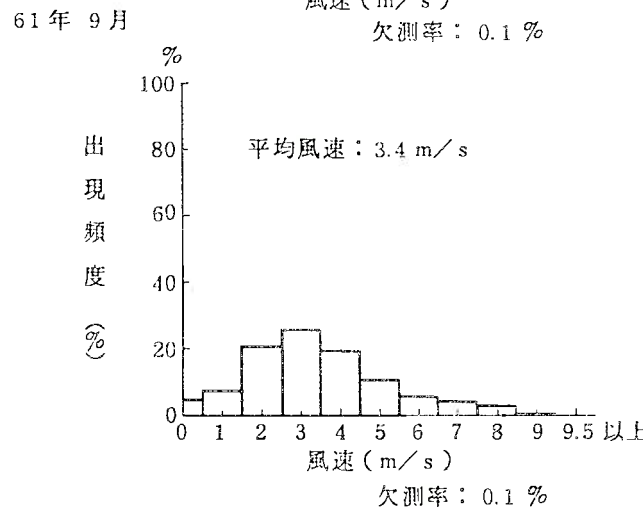
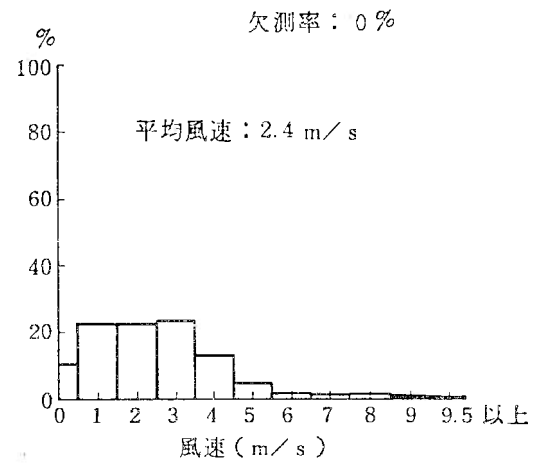
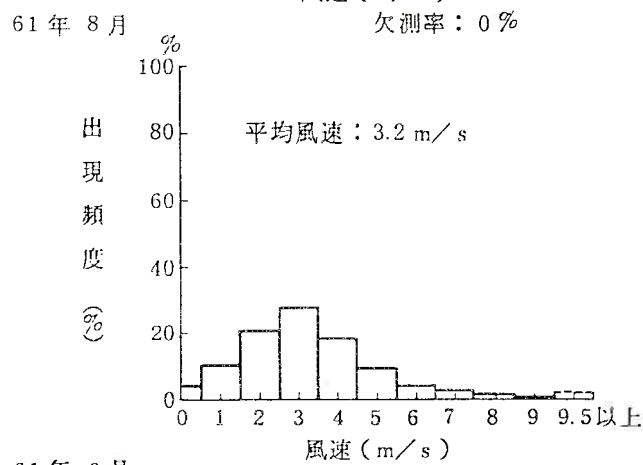
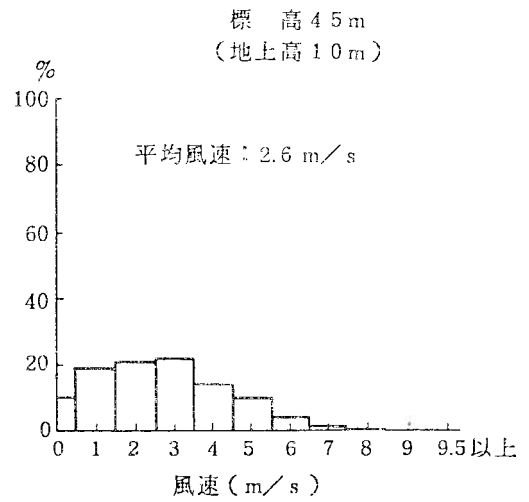
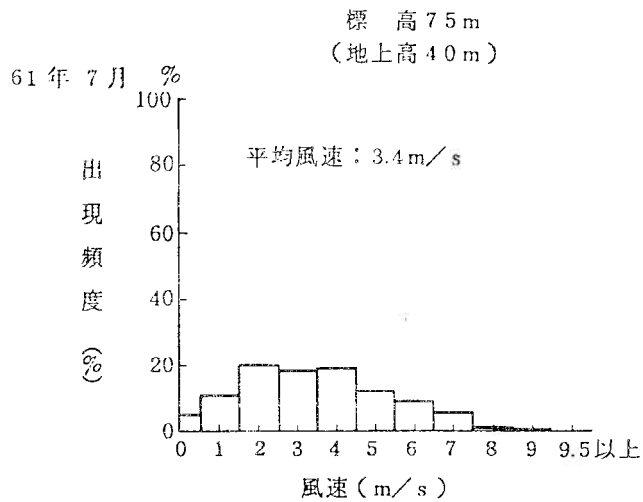
第1.2-58図(1) 年間風速別出現頻度及び風速別出現頻度累積
(標高75m、地上高40m)



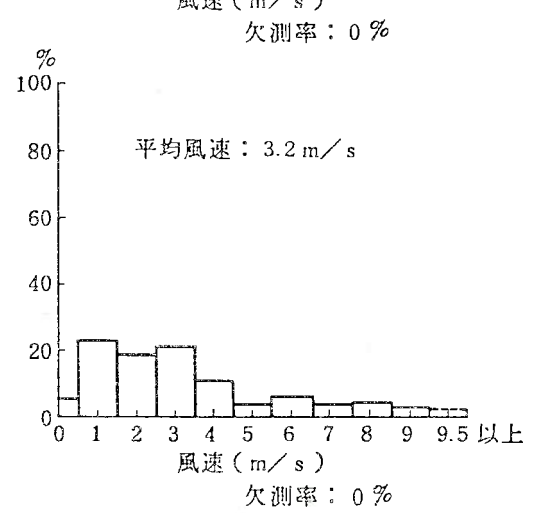
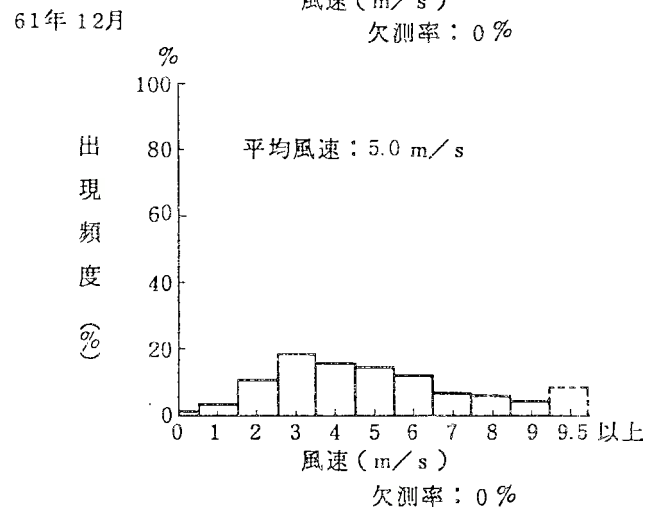
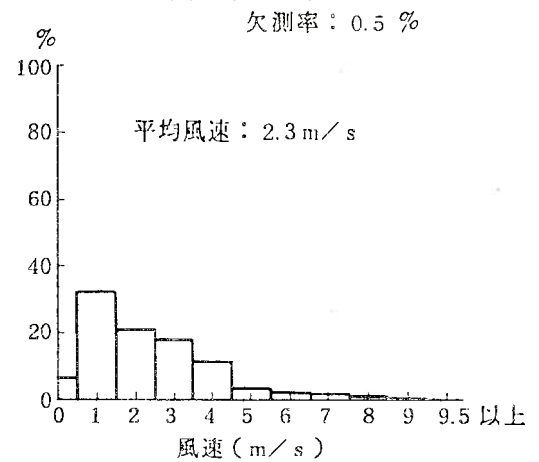
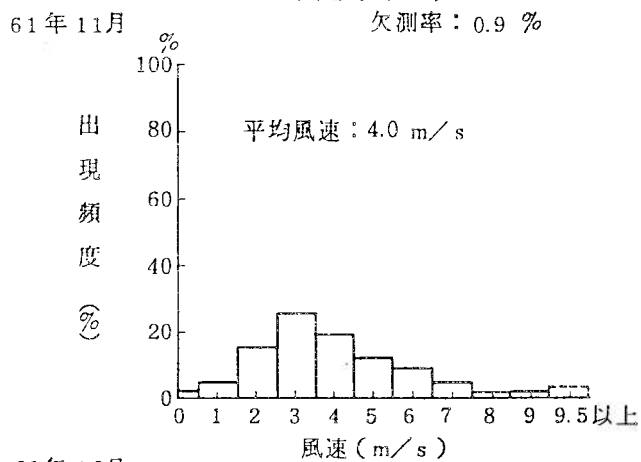
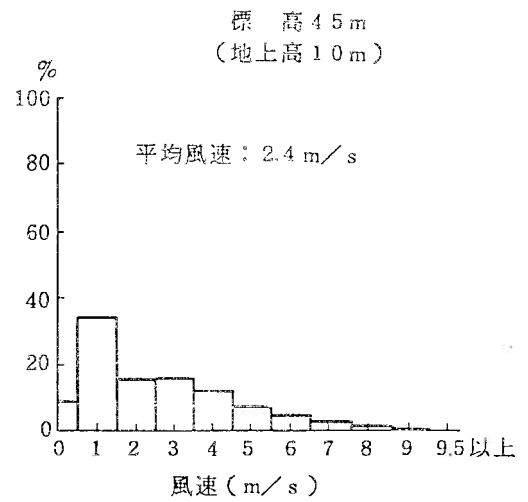
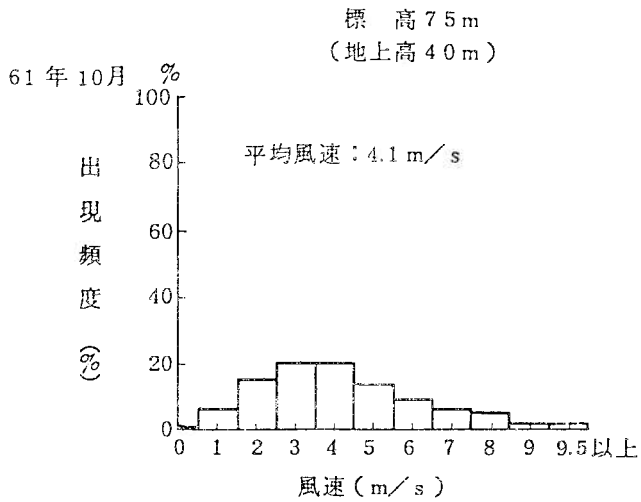
第1.2-58図(2) 年間風速別出現頻度及び風速別出現頻度累積
(標高45m、地上高10m)



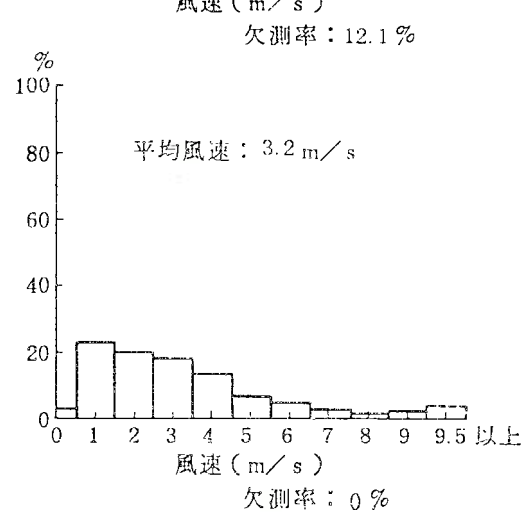
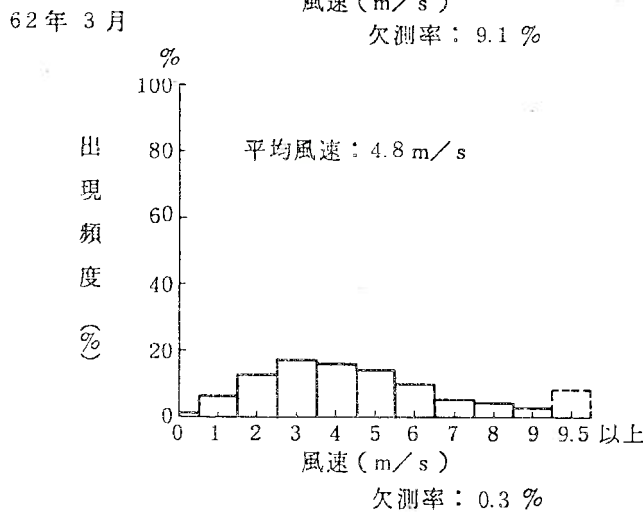
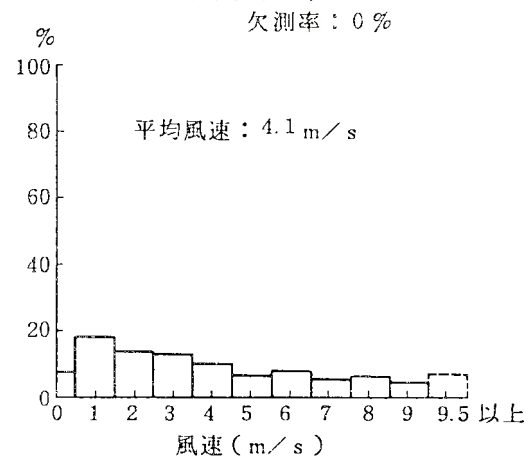
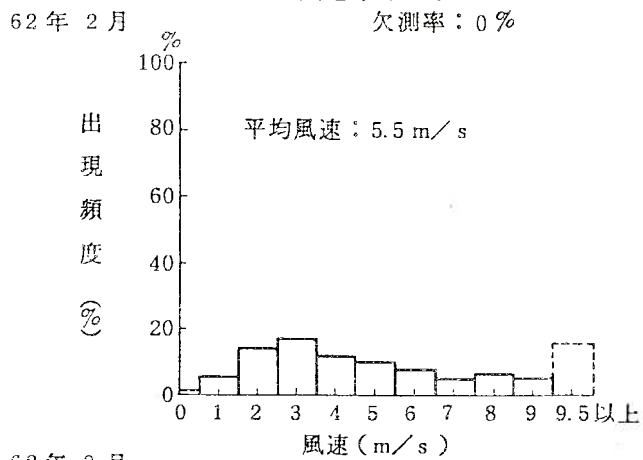
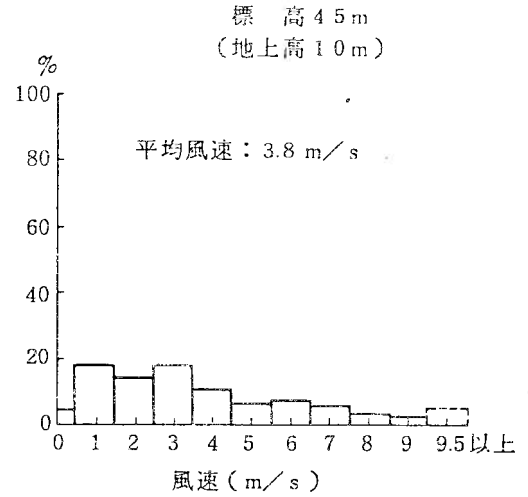
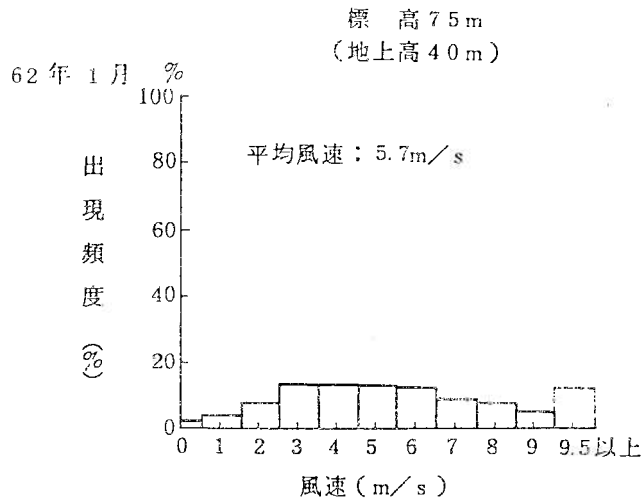
第1.2-59図(1) 月別風速別出現頻度(その1)(4~6月)



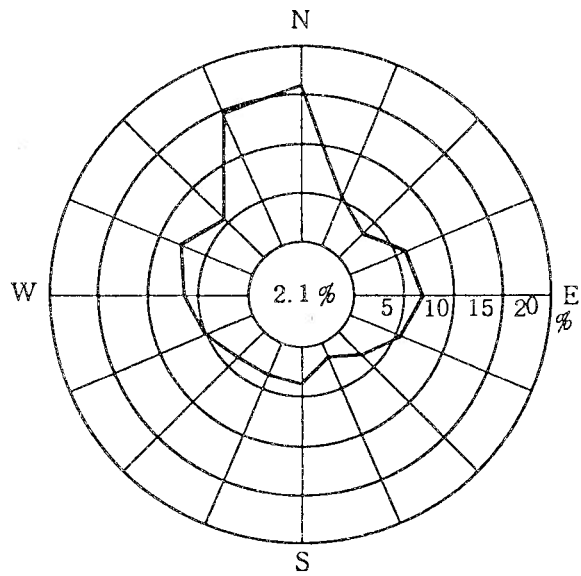
第1.2-59図(2) 月別風速別出現頻度(その2)(7~9月)



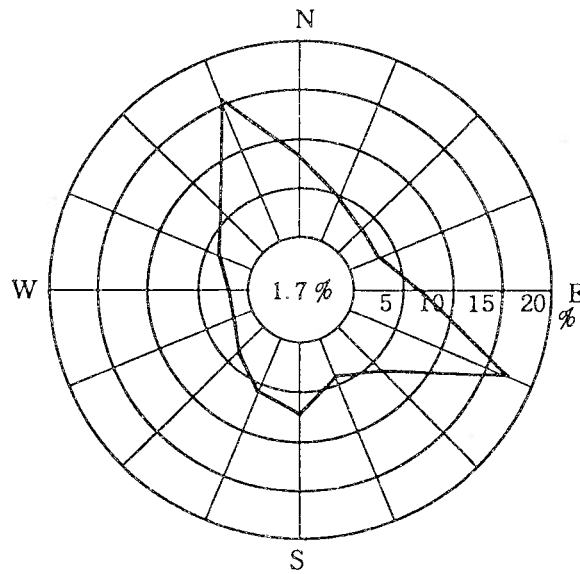
第1.2-59図(3) 月別風速別出現頻度(その3)(10~12月)



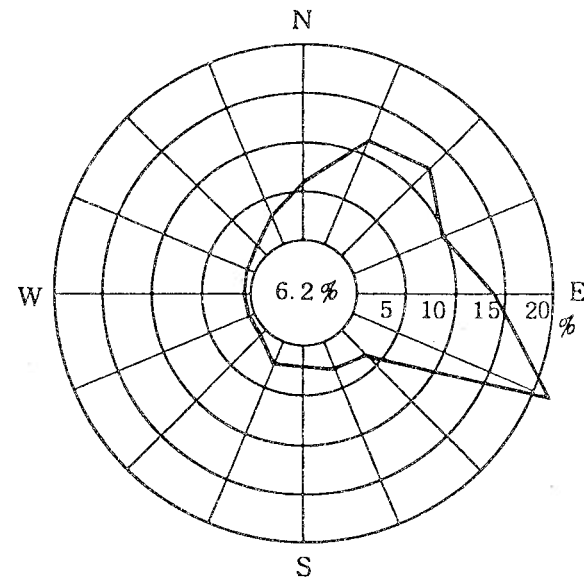
第1.2-59図(4) 月別風速別出現頻度(その4)(1~3月)



安定度 A, B, C型
(出現頻度 23.8%)



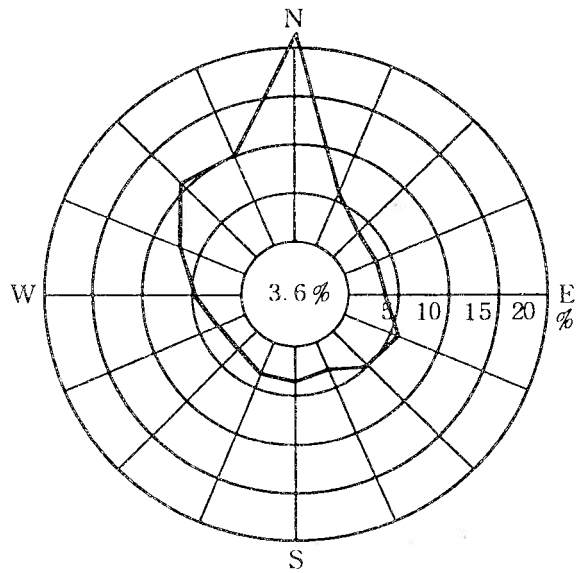
安定度 D型
(出現頻度 49.4%)



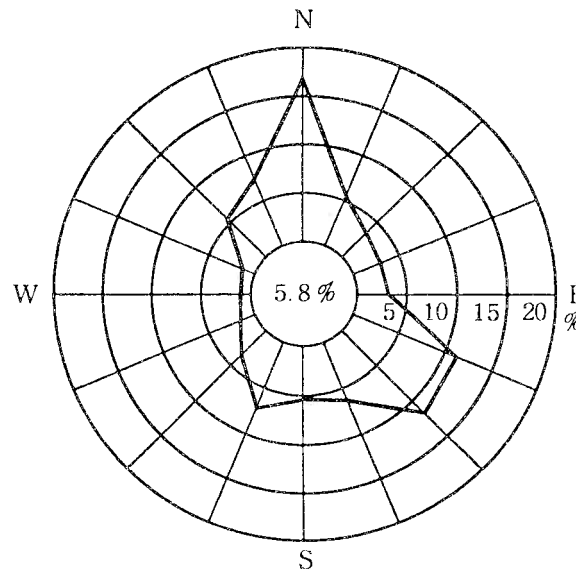
安定度 E, F, G型
(出現頻度 26.9%)

注) 円内は静穏の出現頻度を示す。

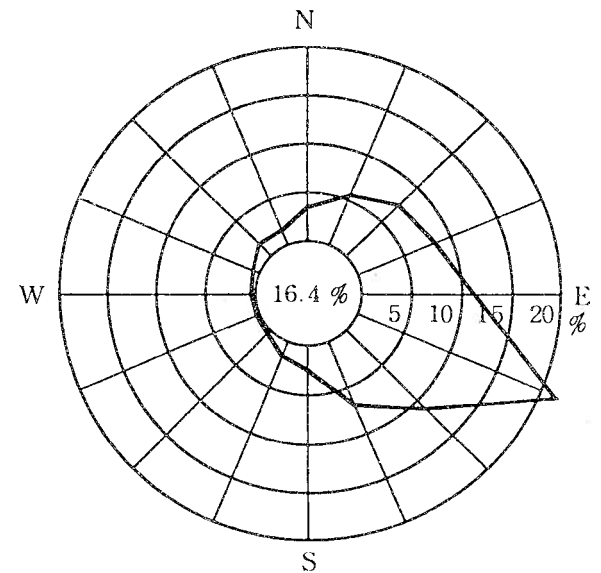
第1.2-60図(1) 年間大気安定度別風配図(標高75m、地上高40m)



安定度 A, B, C型
(出現頻度 23.8%)



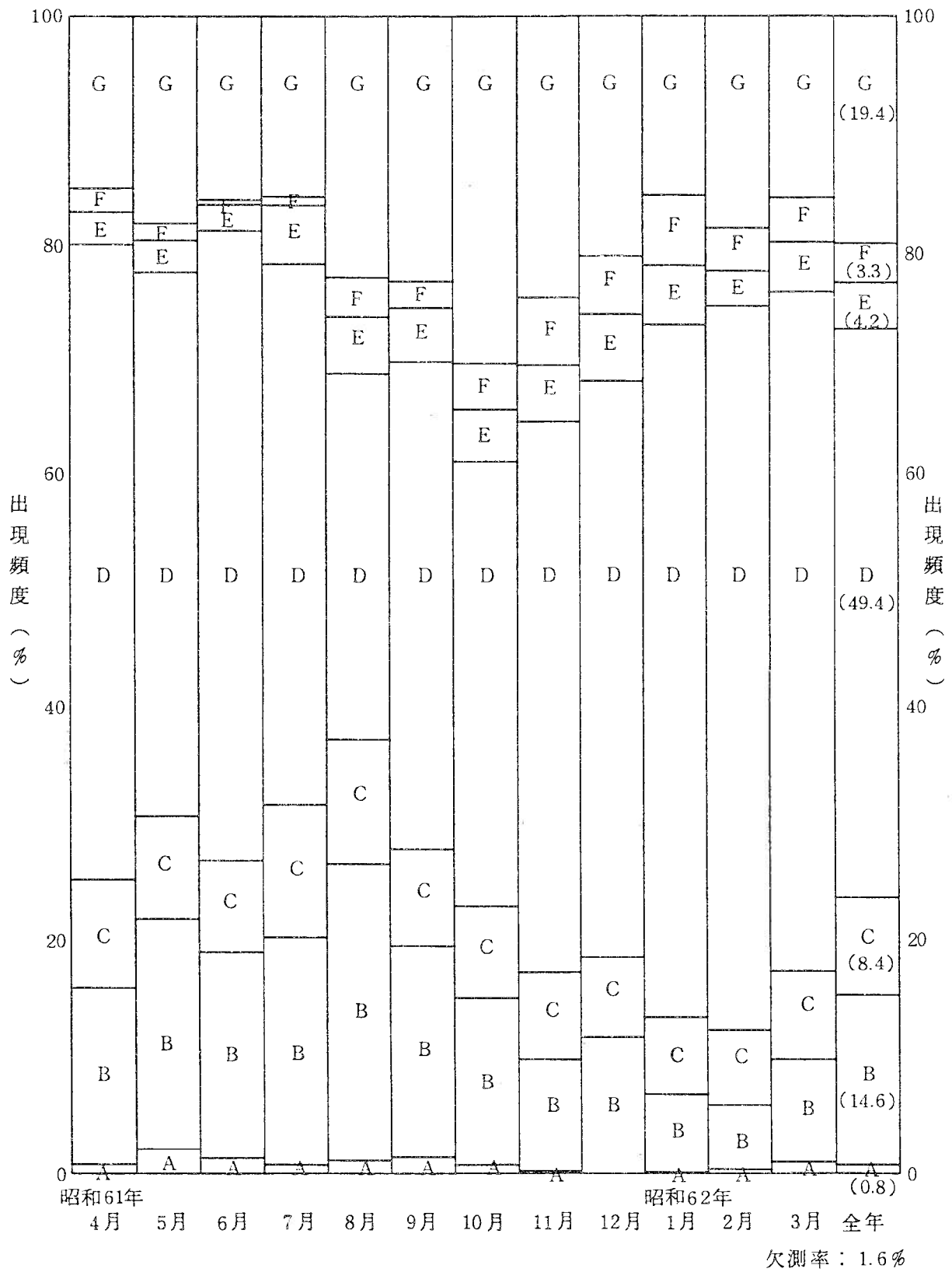
安定度 D型
(出現頻度 49.4%)



安定度 E, F, G型
(出現頻度 26.9%)

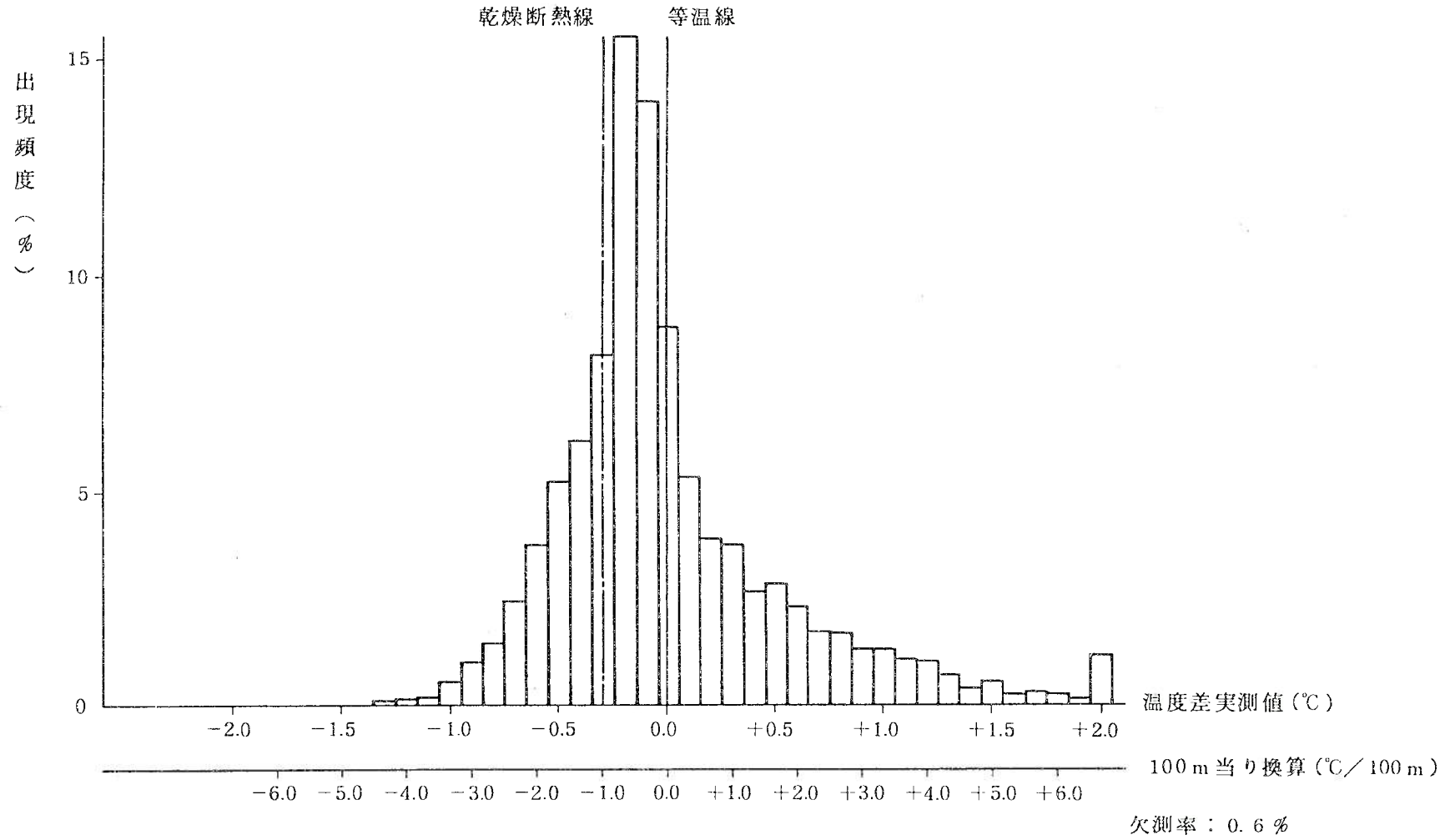
注) 円内は静穏の出現頻度を示す。

第1.2-60図(2) 年間大気安定度別風配図(標高45m、地上高10m)

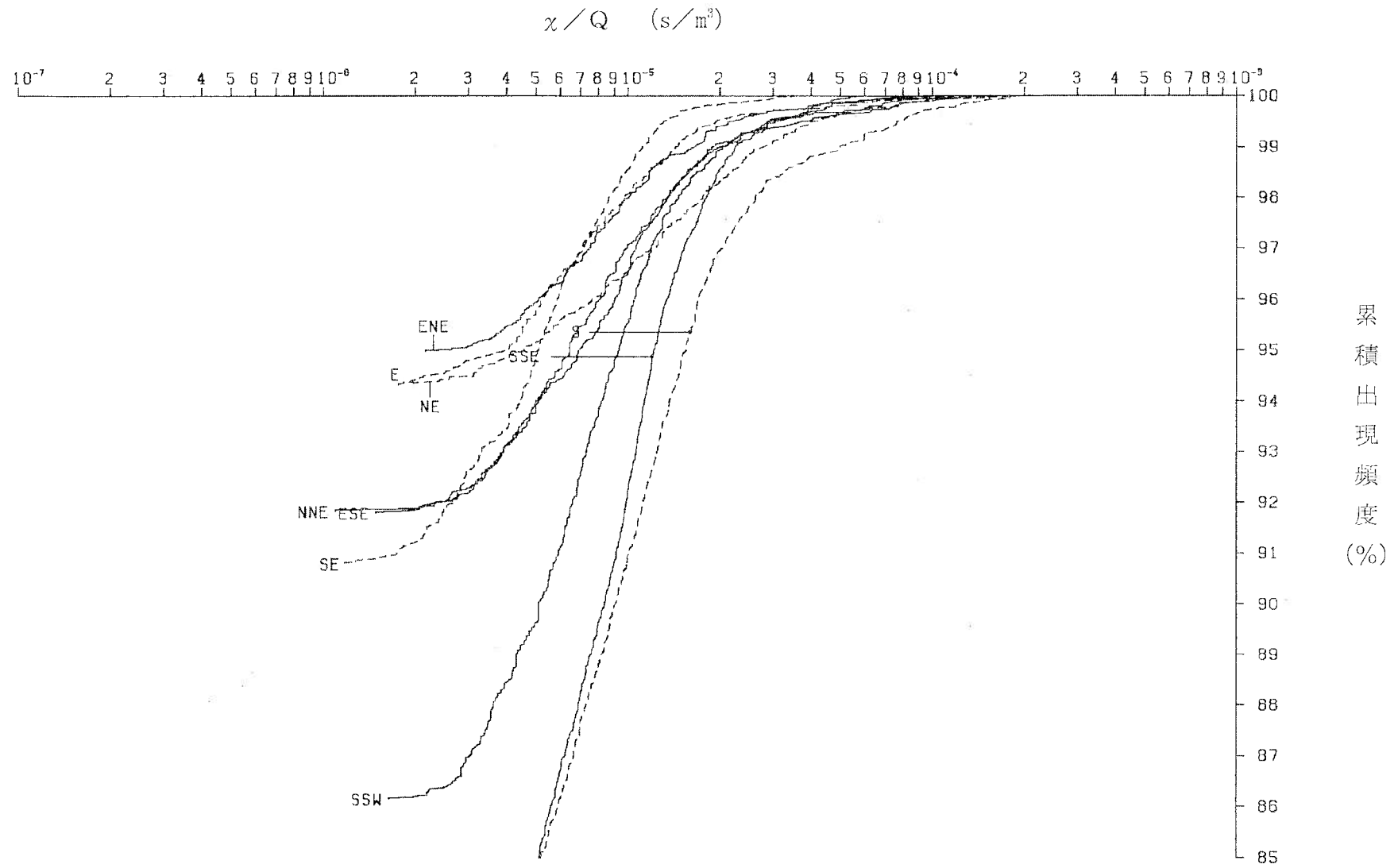


第1.2-61図 年間及び月別の大気安定度出現頻度

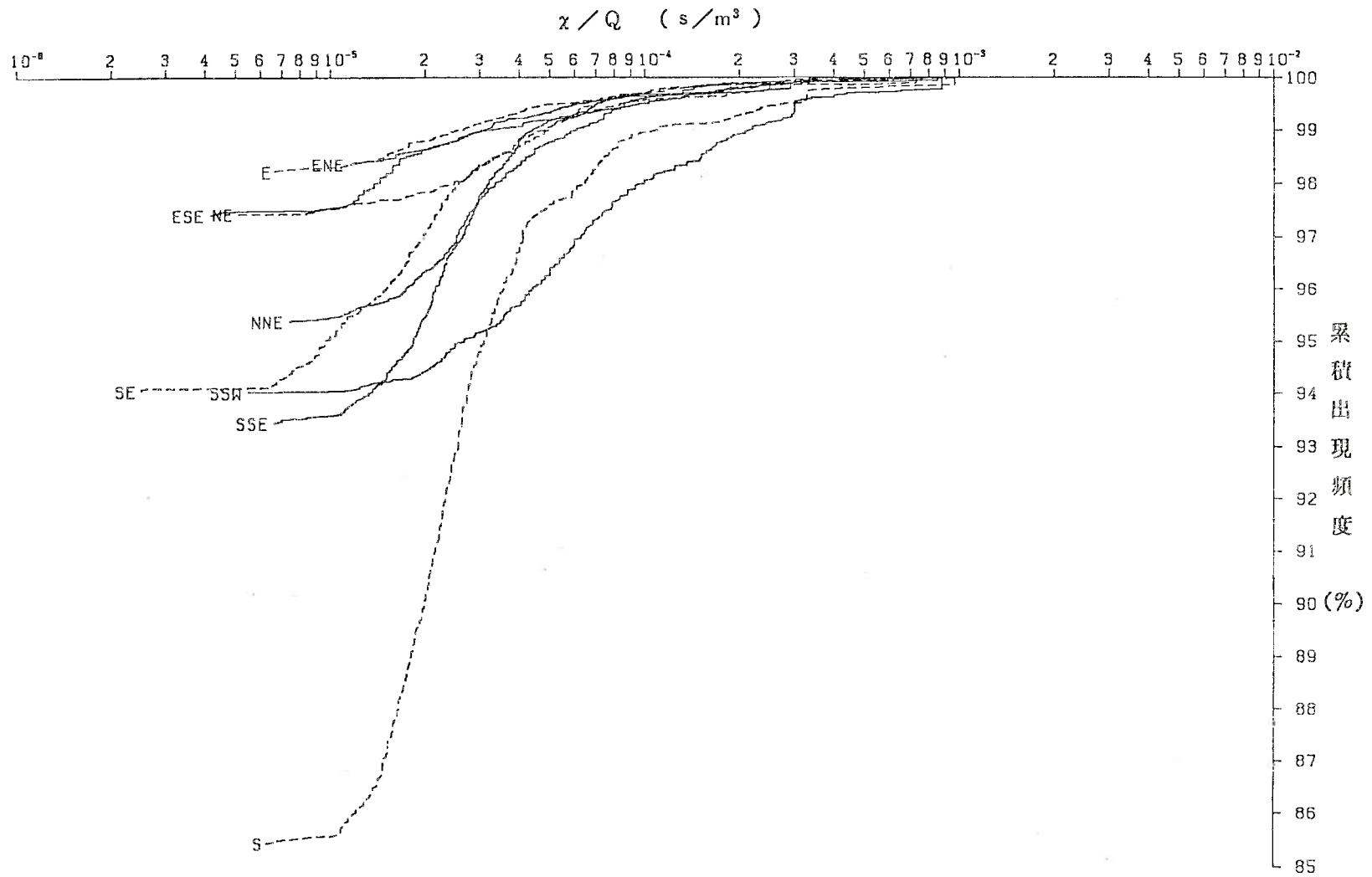
測定場所：川内原子力発電所気象観測所



第1.2-62図 年間気温差出現頻度(標高75m—標高45m)

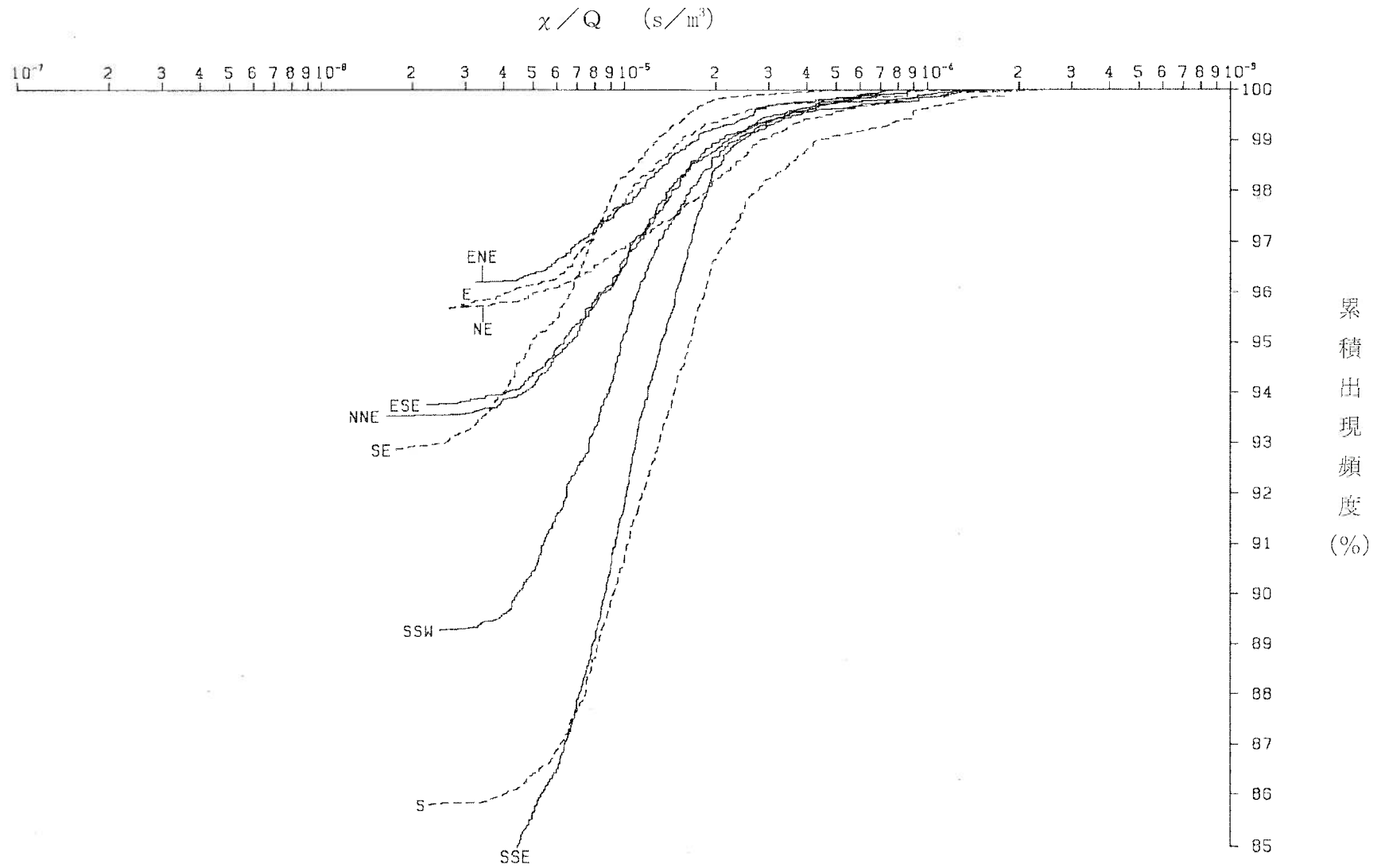


第1.2-63図(1) 方位別相対濃度(γ/Q)の累積出現頻度
〔原子炉冷却材喪失(事故時)〕

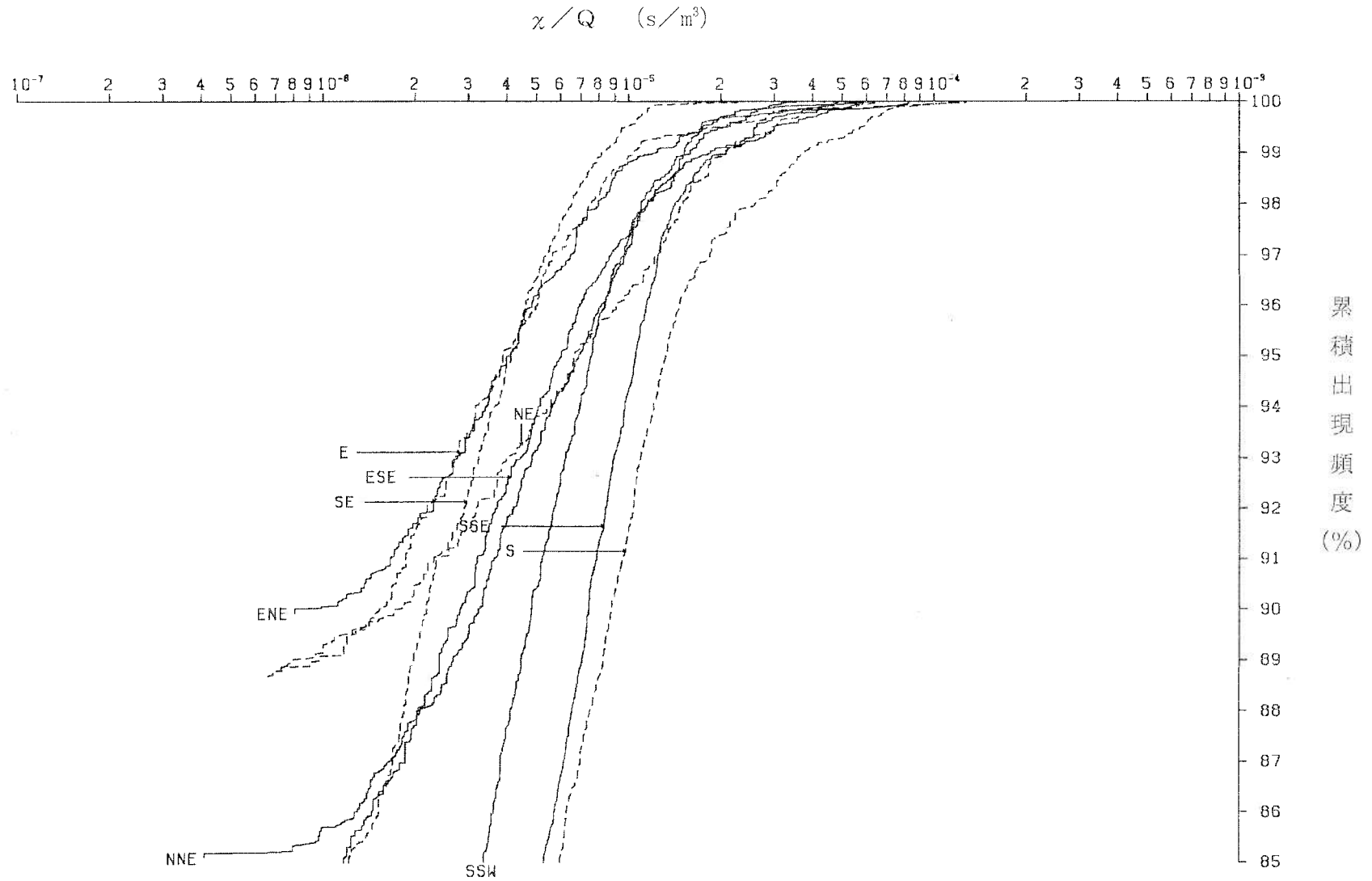


第1.2-63図(2) 方位別相対濃度(χ/Q)の累積出現頻度

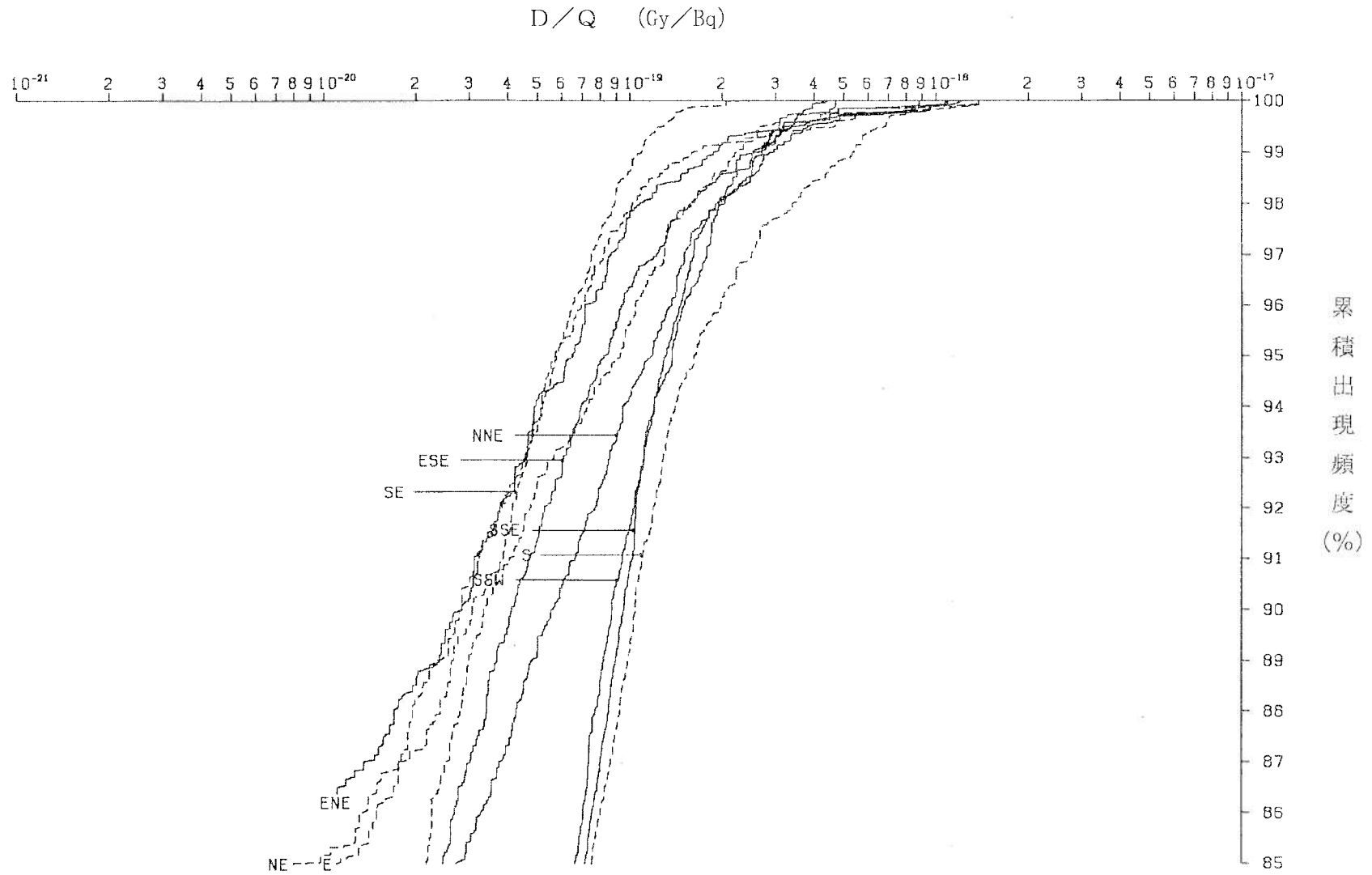
放射性気体廃棄物処理施設の破損、蒸気発生器伝熱管破損(事故、重大事故及び仮想事項時)、燃料集合体の落下



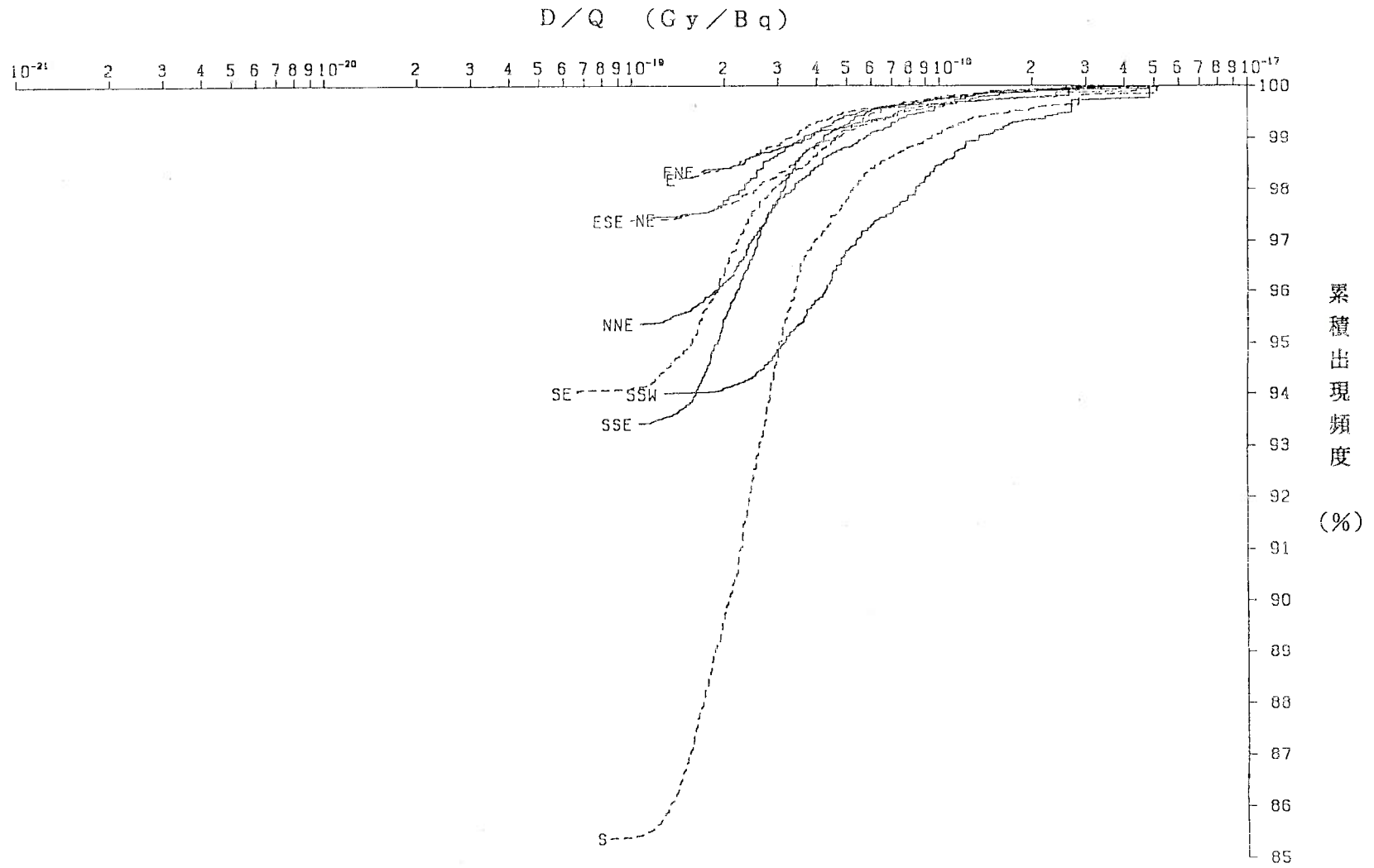
第1.2-63図(3) 方位別相対濃度(χ/Q)の累積出現頻度
[制御棒飛び出し]



第1.2-63図(4) 方位別相対濃度(χ/Q)の累積出現頻度
 [原子炉冷却材喪失(重大事故及び仮想事故時)]

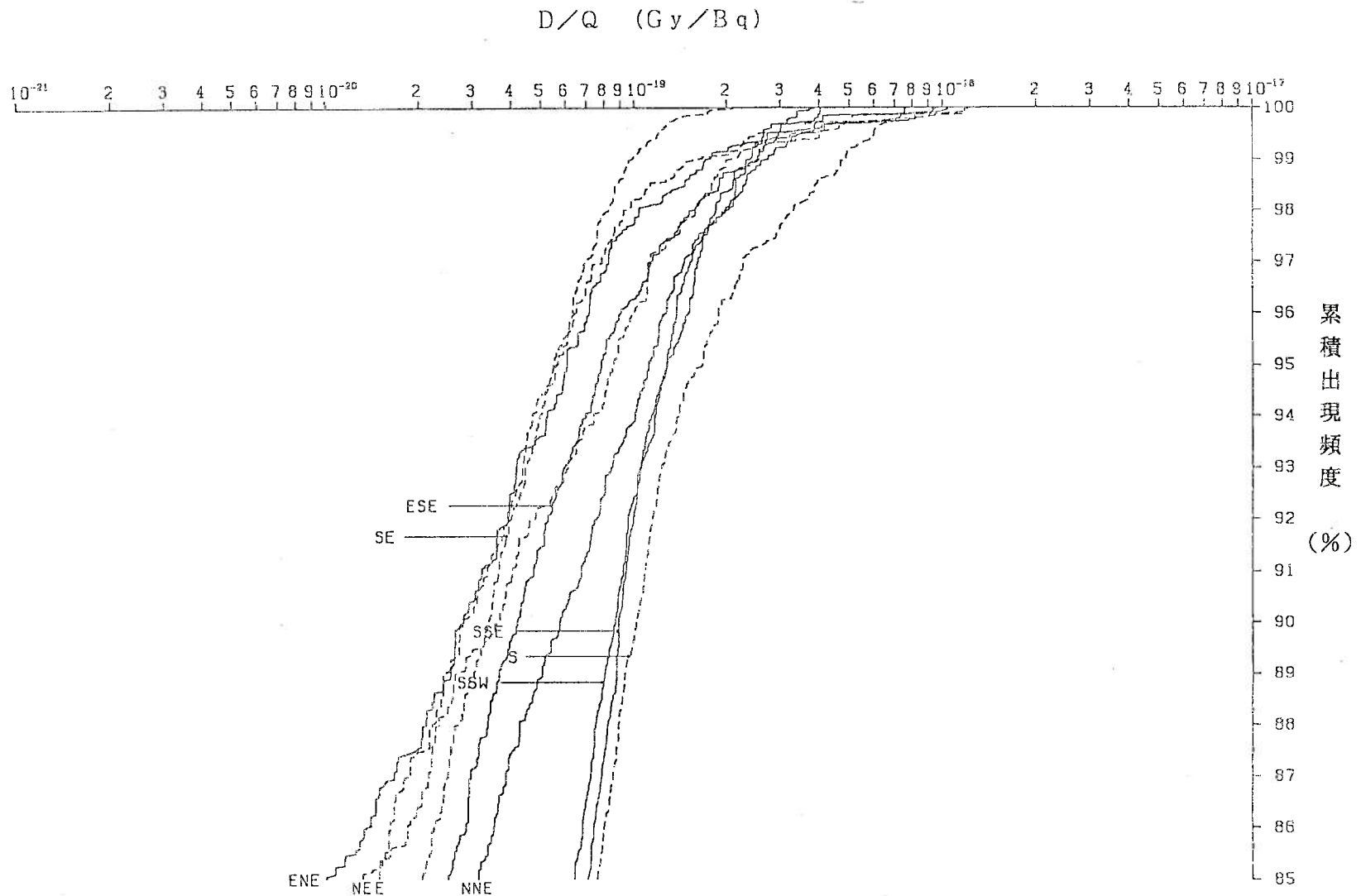


第1.2-63図(5) 方位別相対線量(D/Q)の累積出現頻度
〔原子炉冷却材喪失(事故時)〕



第1.2-63図(6) 方位別相対線量(D/Q)の累積出現頻度

〔放射性気体廃棄物処理施設の破損、蒸気発生器伝熱管破損(事故、重大事故及び仮想事項時)、燃料集合体の落下〕

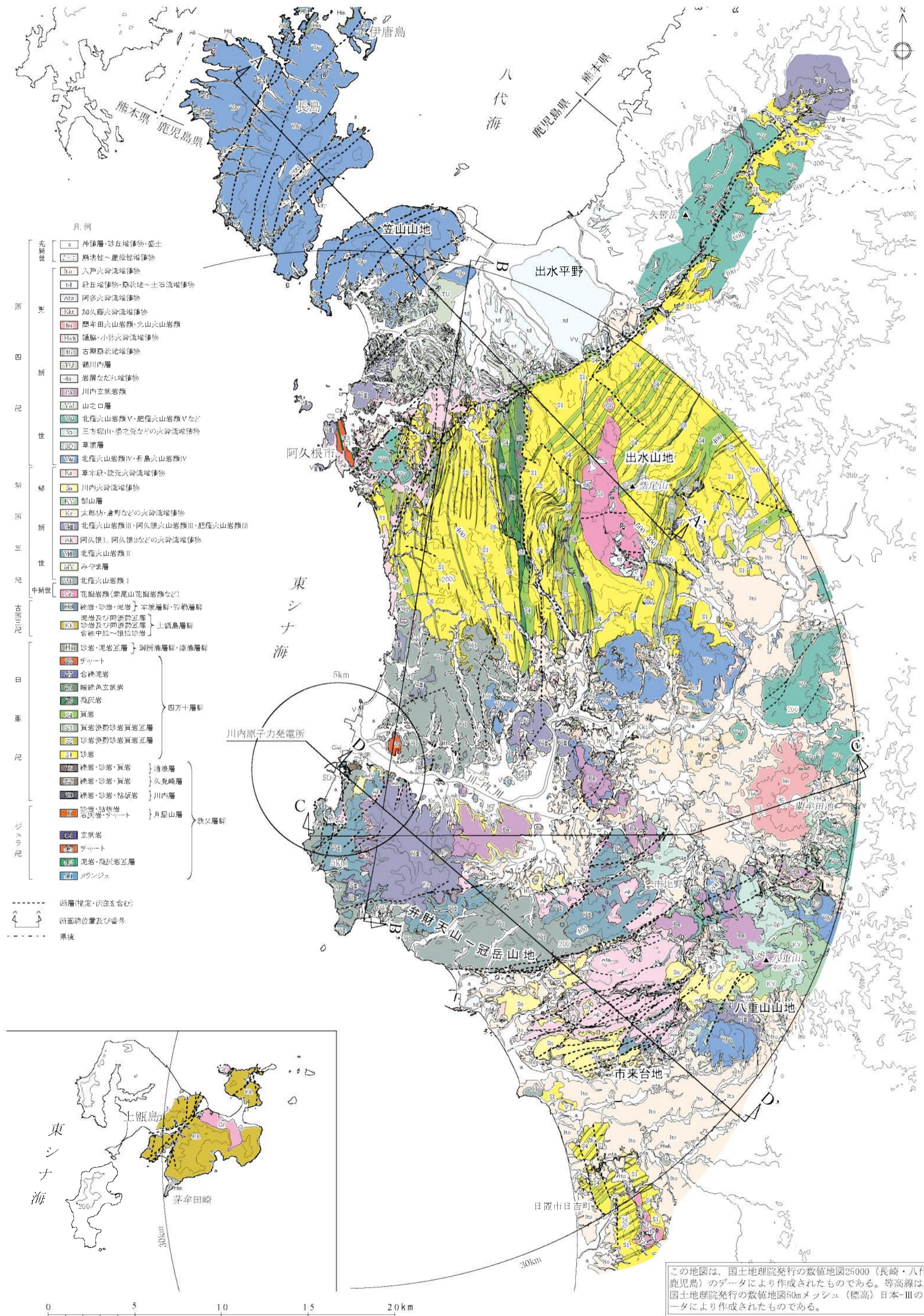


第1.2-63図(7) 方位別相対線量(D/Q)の累積出現頻度

制御棒飛び出し
 原子炉冷却材喪失(重大事故及び仮想事故時)

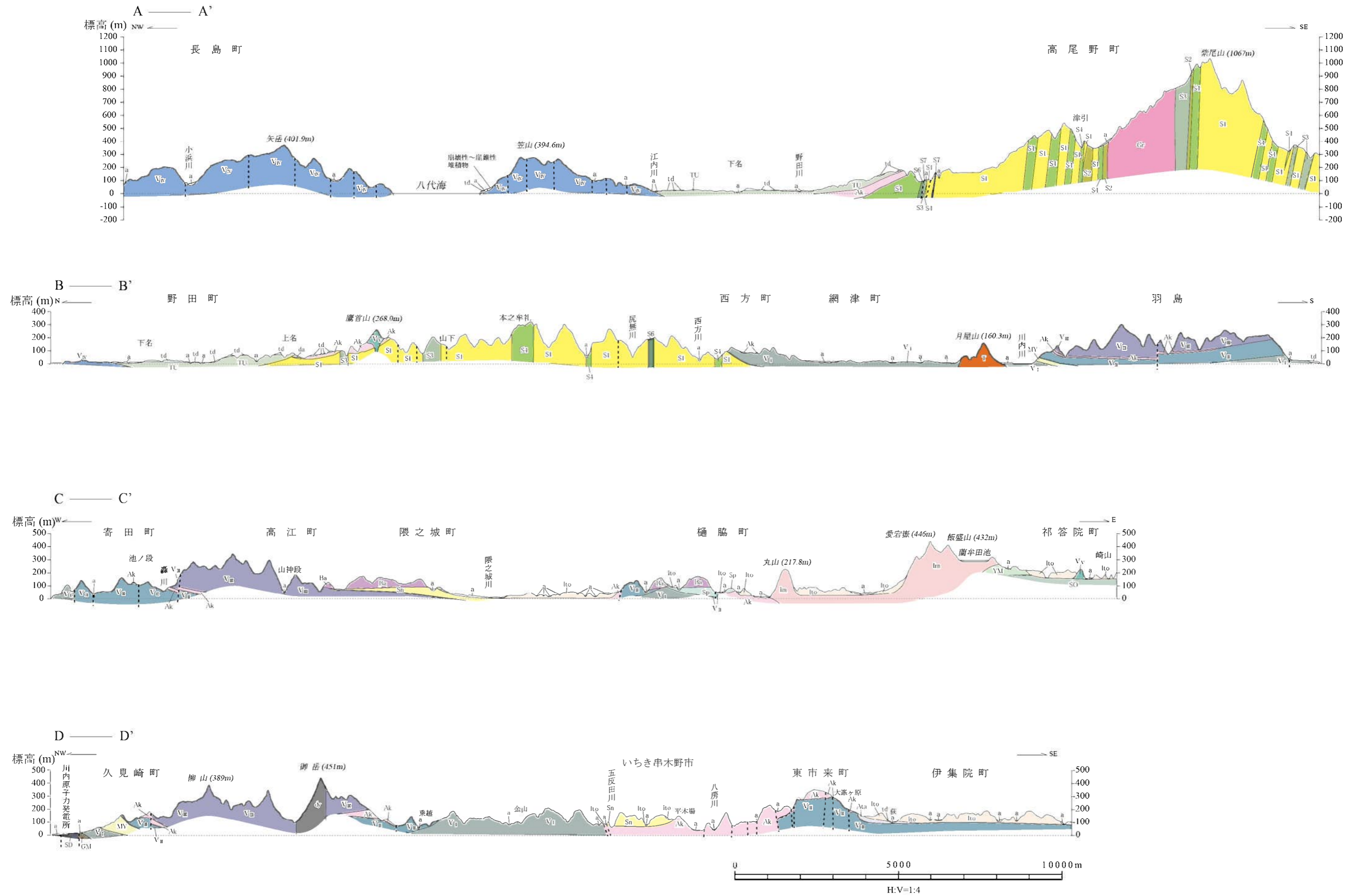


第1.2-64図 敷地周辺陸域の地形図



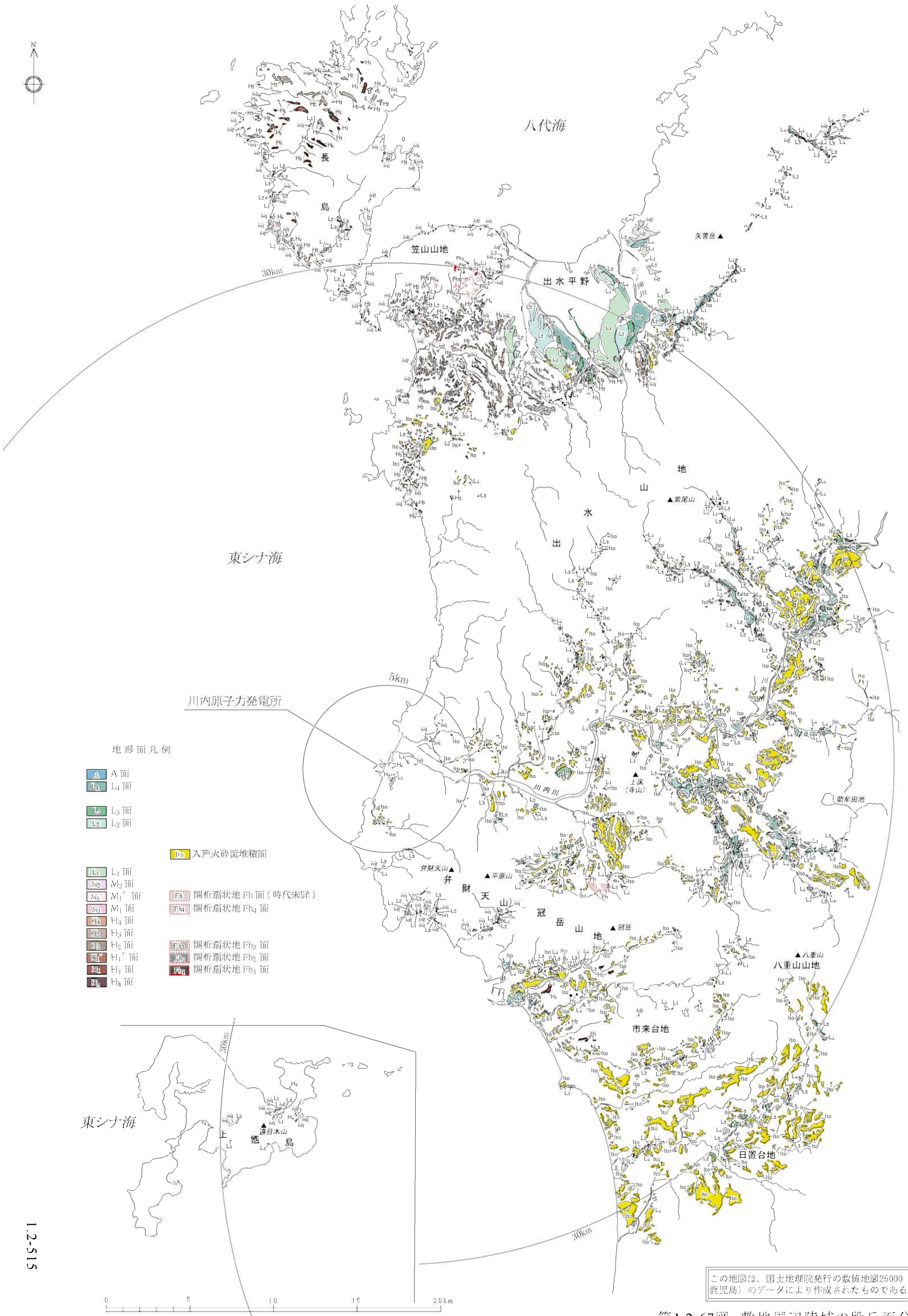
この地図は、国土地理院発行の数値地図25000(長崎・八代・鹿児島)のデータにより作成されたものである。等高線は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)日本-IIIのデータにより作成されたものである。

第1.2-65図 敷地周辺陸域の地質図



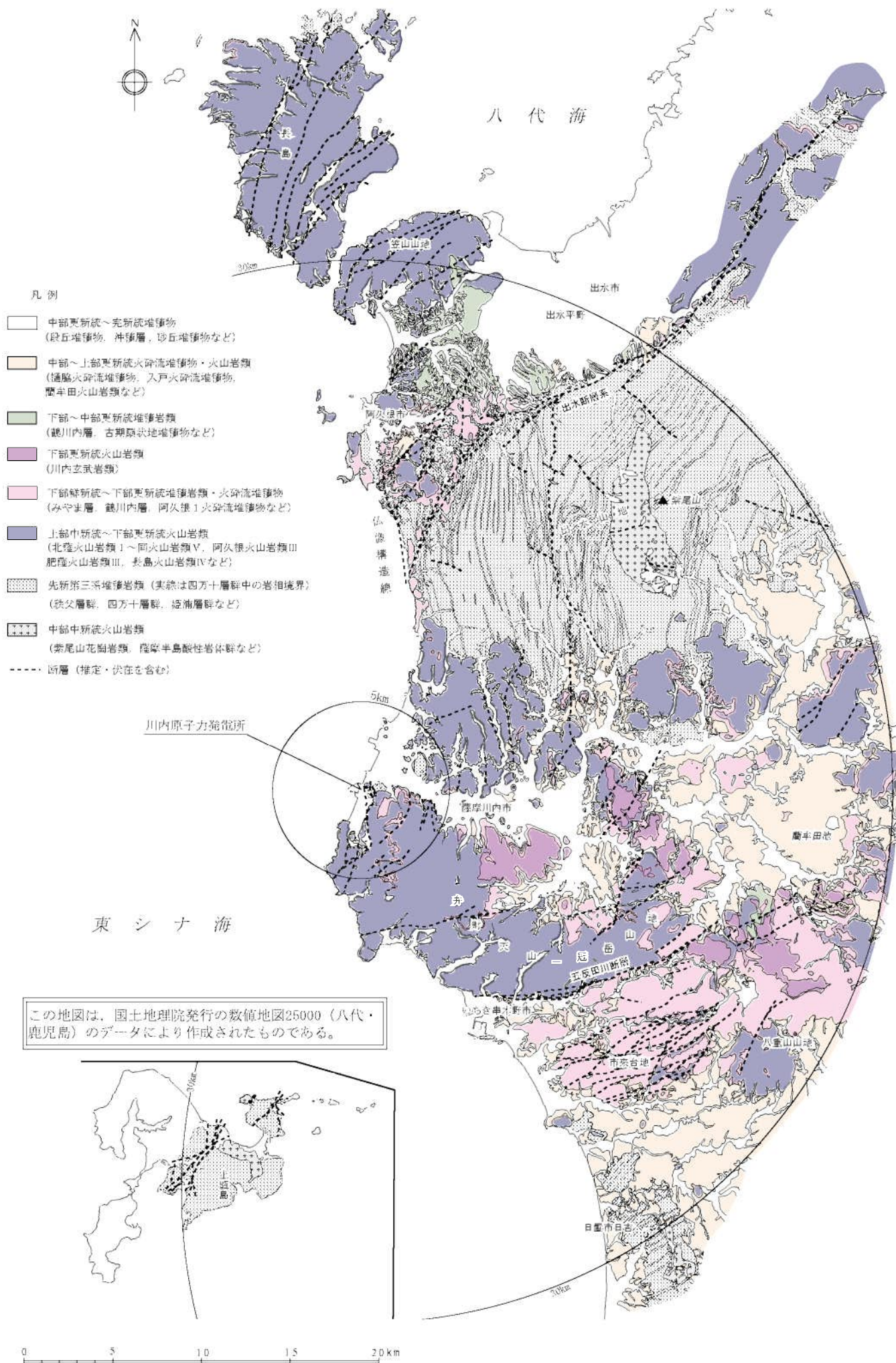
(注) 凡例は、第1.2-65図を参照。

第1.2-66図 敷地周辺陸域の地質断面図

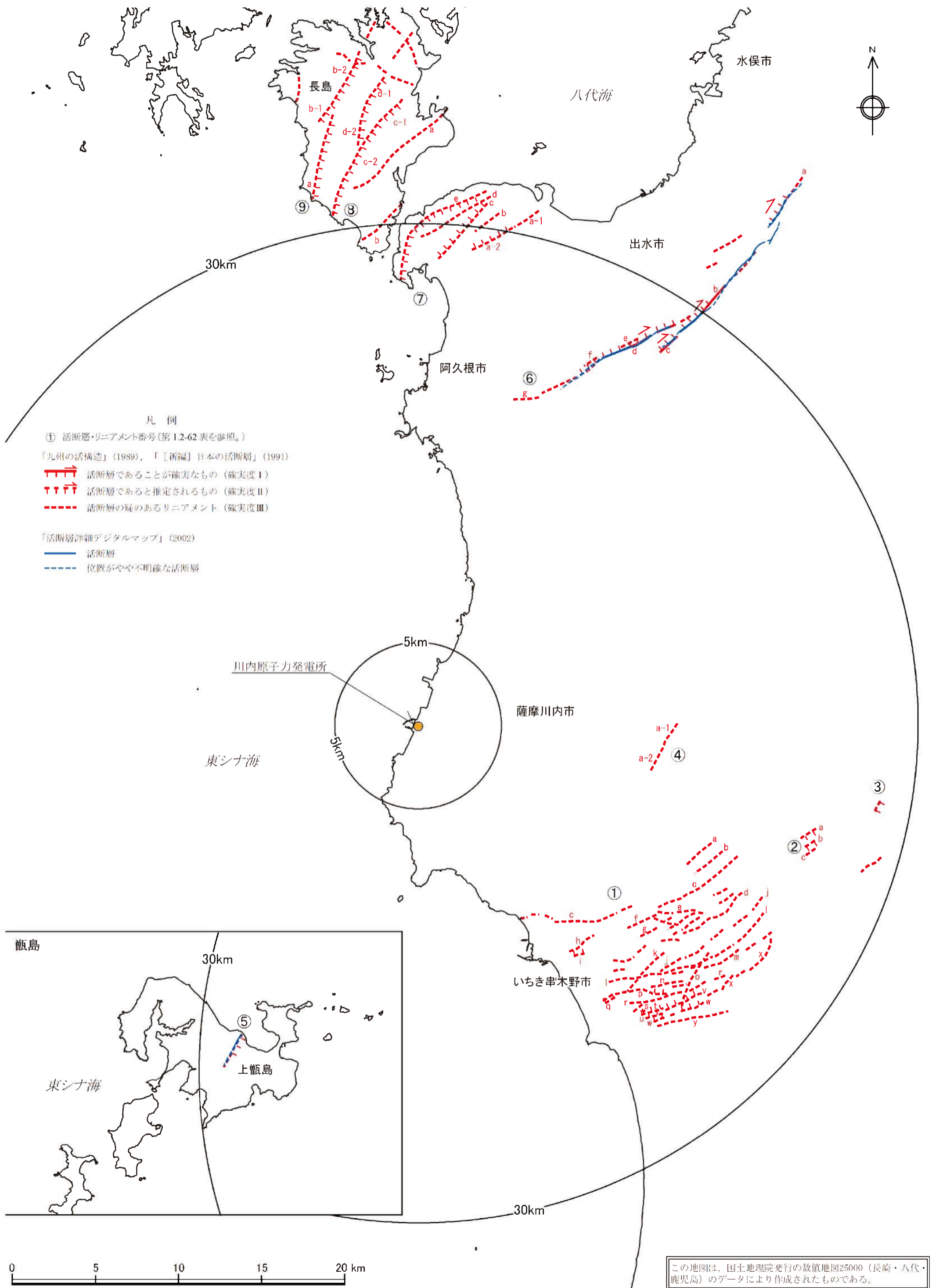


この地図は、国土地理院発行の数値地図25000（八代・鹿児島）のデータにより作成されたものである。

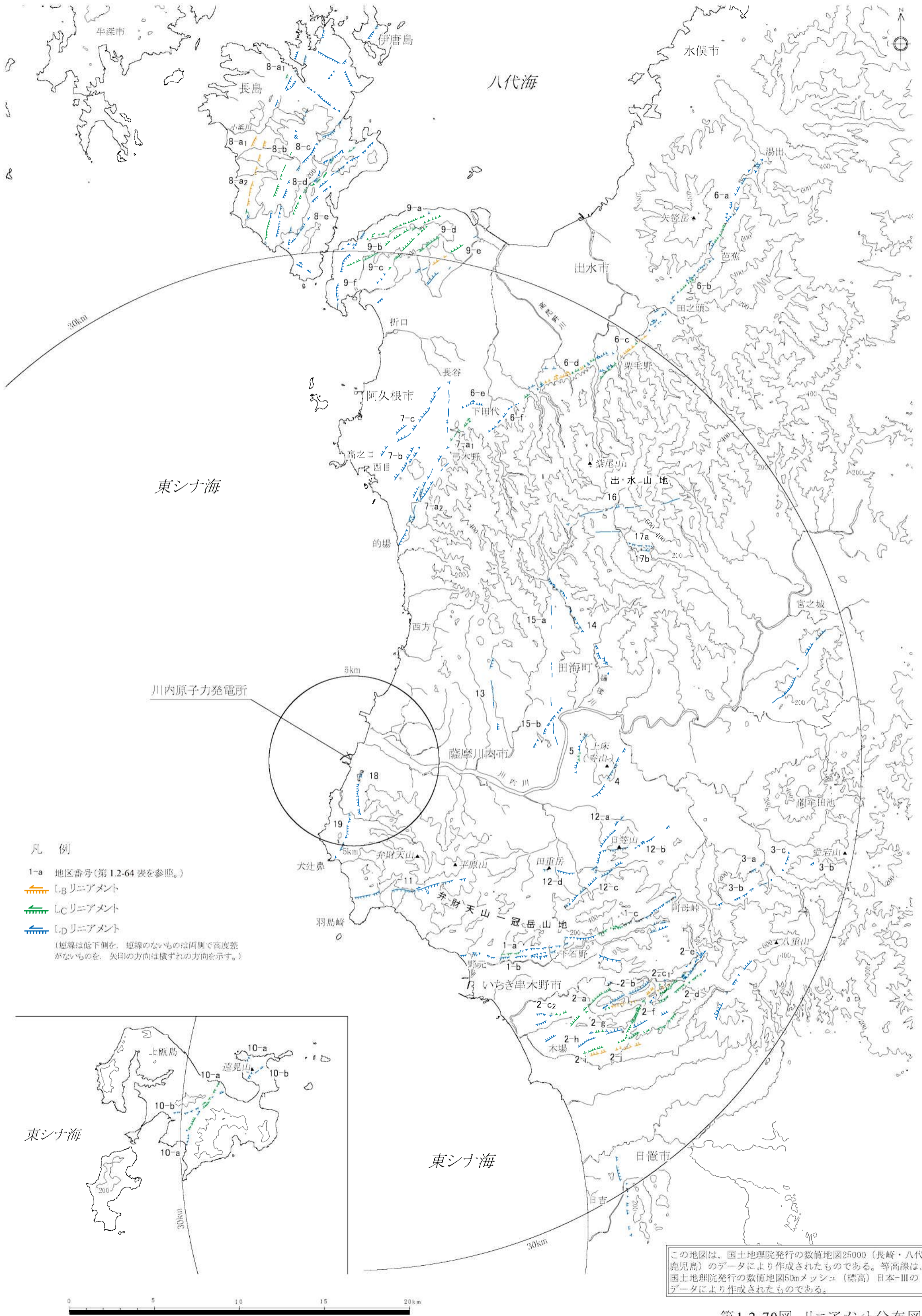
第1.2-67図 敷地周辺陸域の段丘面分布図



第1.2-68図 敷地周辺陸域の地質構造図

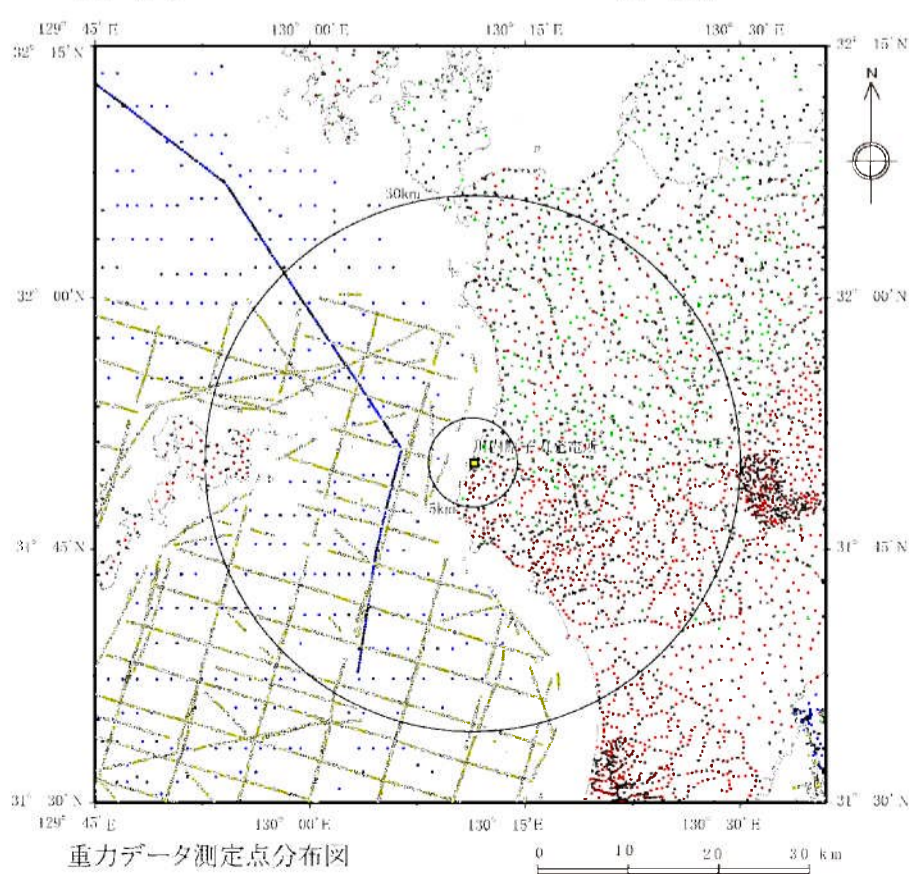
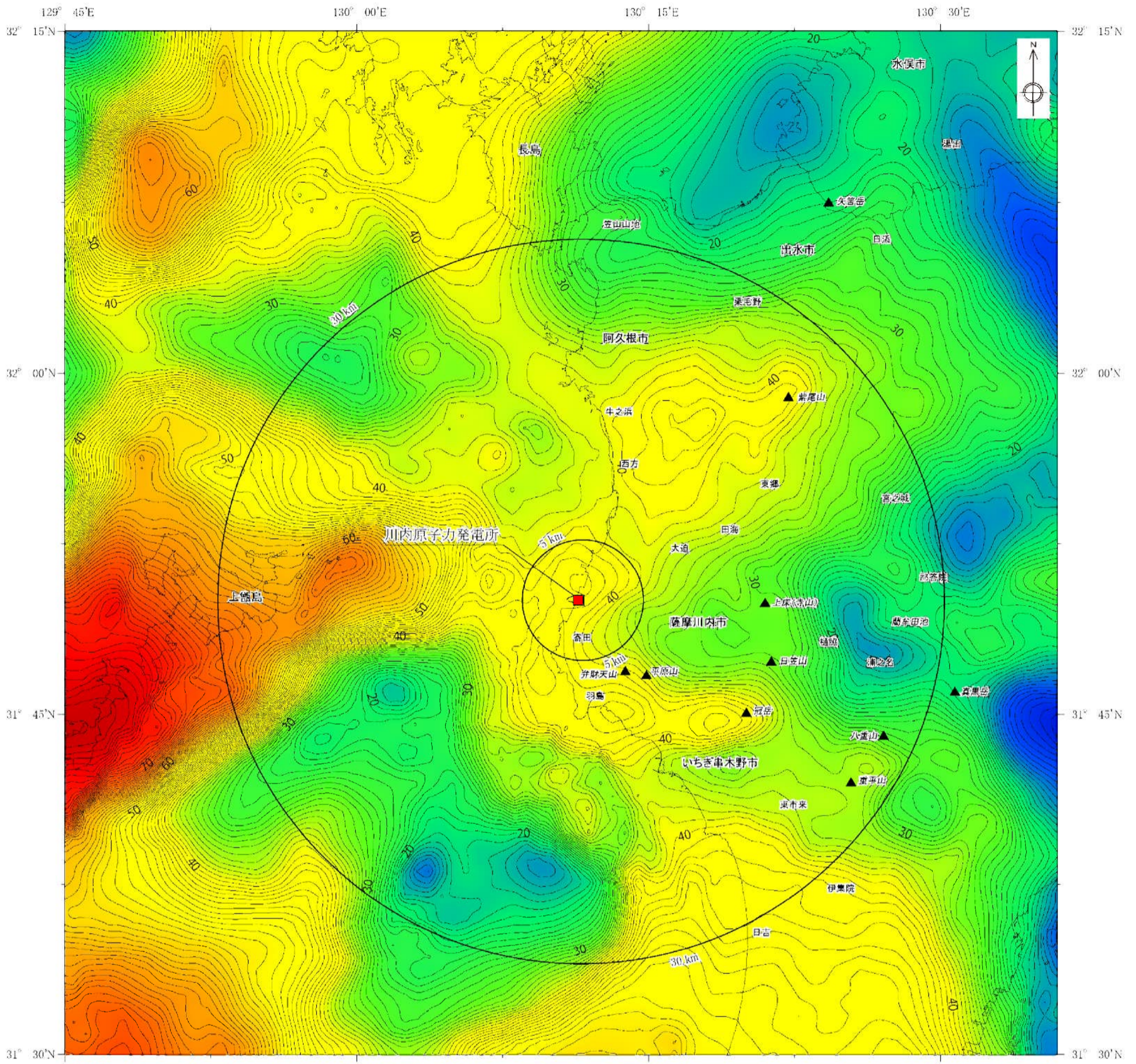


第1.2-69図 文献による活断層・リニアメント分布図



この地図は、国土地理院発行の数値地図25000（長崎・八代・鹿児島）のデータにより作成されたものである。等高線は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）日本-IIIのデータにより作成されたものである。

第1.2-70図 リニアメント分布図

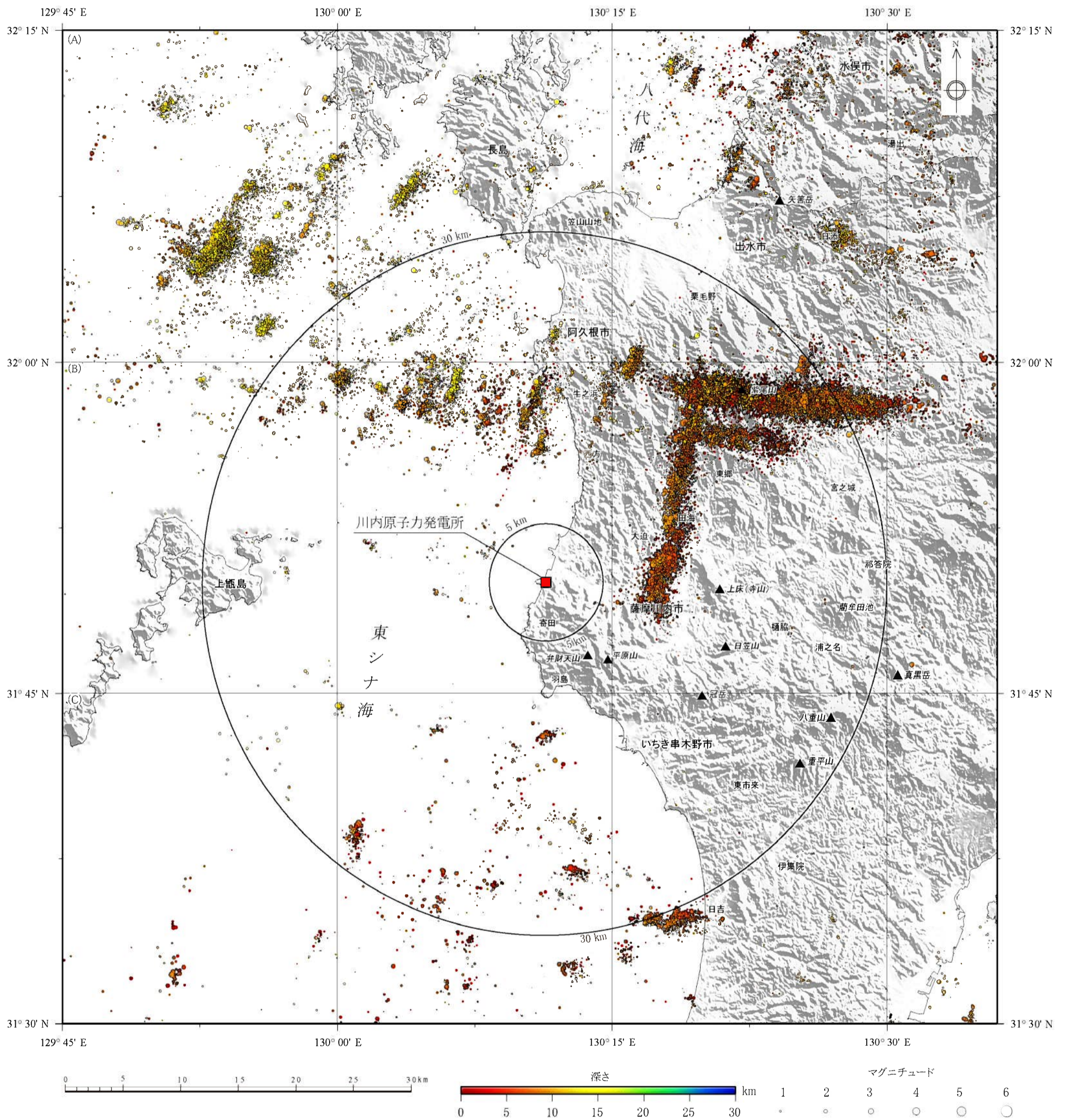


重力異常図は、陸域については、地質調査総合センター編(2013)「日本重力データベース DVD版」、Shichi and Yamamoto (2001) Gravity Database of Southwest Japan (CD-ROM)及びYamamoto et al.(2011) Gravity Database of Japan (CD-ROM)、海域については、日本海洋データセンター(2006)「MGD77データ」及び地質調査所 昭和59年度 GH841、GH843航海による重力データを使用。

- 重力データ測定点分布凡例
- 日本海洋データセンター
 - 地質調査所
 - 地質調査総合センター
 - Shichi and Yamamoto (2001)
 - Yamamoto et al. (2011)

この地図は、国土地理院発行の数値地図25000(長崎・八代・鹿児島)のデータにより作成されたものである。

第1.2-71図 敷地周辺の重力異常図

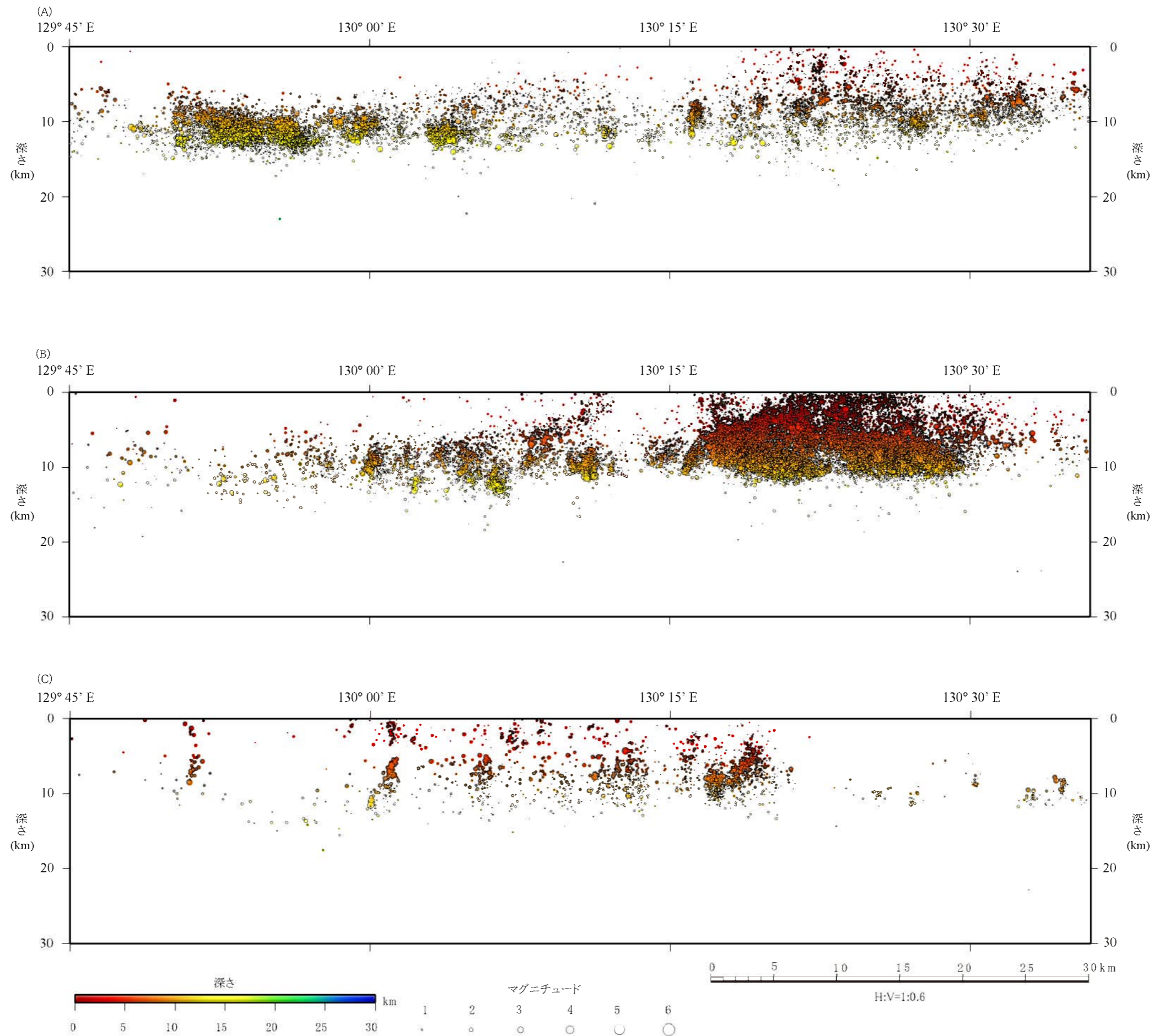


震源分布図は、気象庁一元化震源(1997年10月-2011年12月, 30km以浅)による。

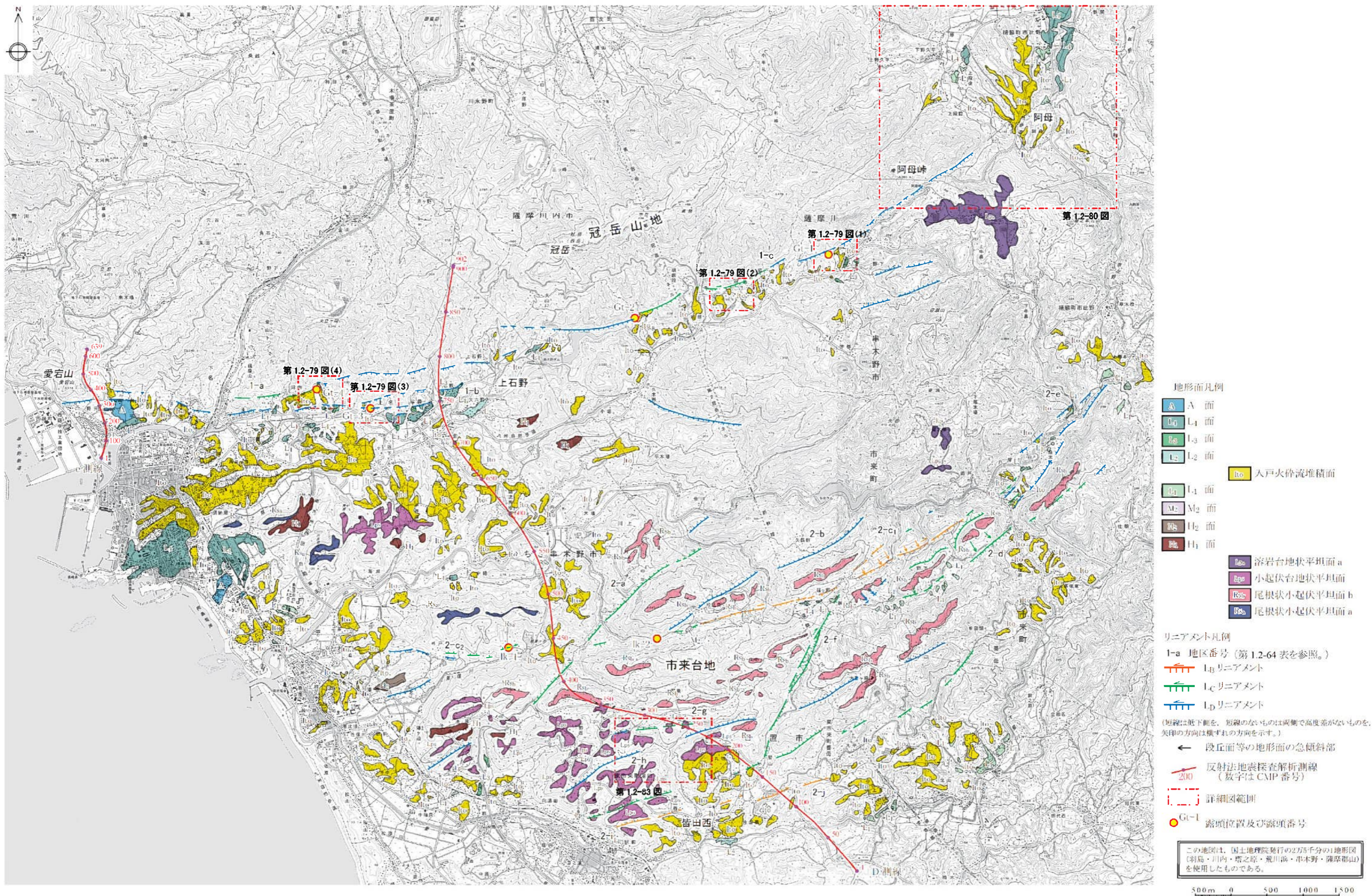
この地図は、国土地理院発行の数値地図 25000(長崎・八代・鹿児島)のデータにより作成されたものである。地形陰影図は、国土地理院発行の数値地図 50mメッシュ(標高)日本-IIIのデータにより作成されたものである。

(A)、(B)、(C)は第1.2-72図(2)に示す敷地周辺の微小地震分布断面の位置を示す。

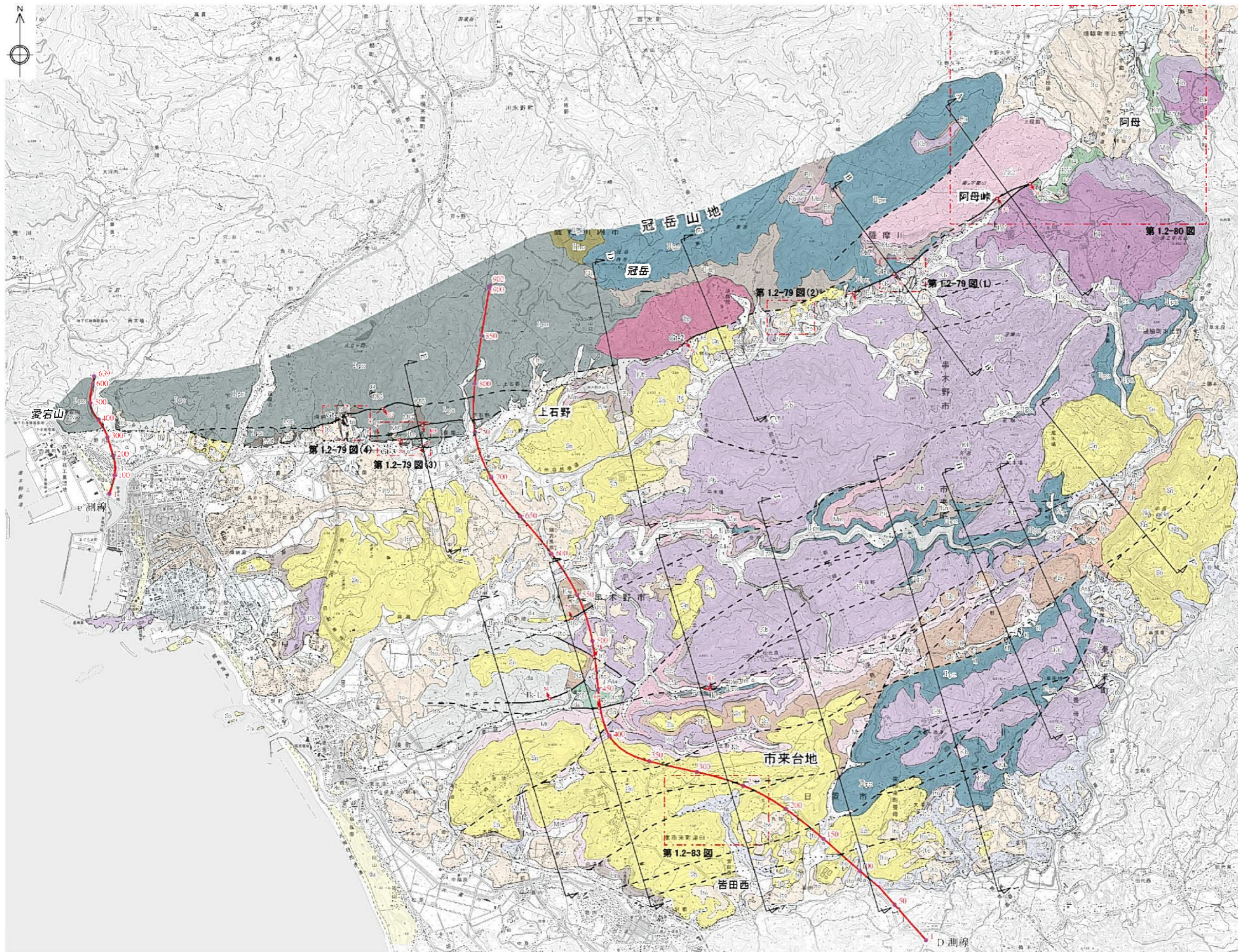
第1.2-72図(1) 敷地周辺の微小地震分布図



第1.2-72図(2) 敷地周辺の微小地震分布断面図



第1.2-73図 市来断層系周辺(五反田川断層含む)の空中写真判読図



凡 例

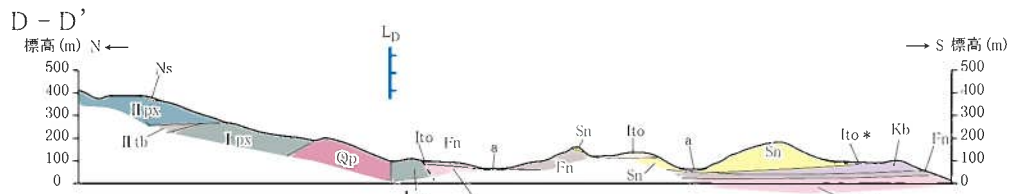
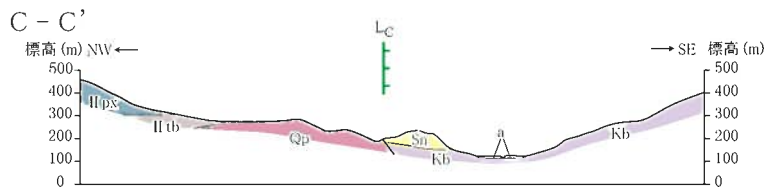
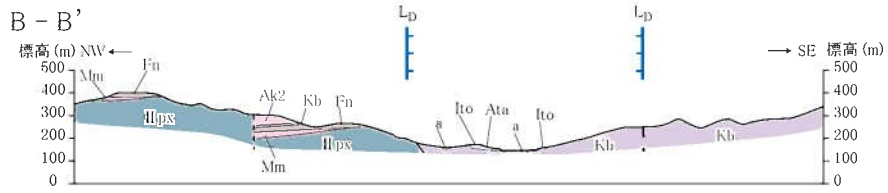
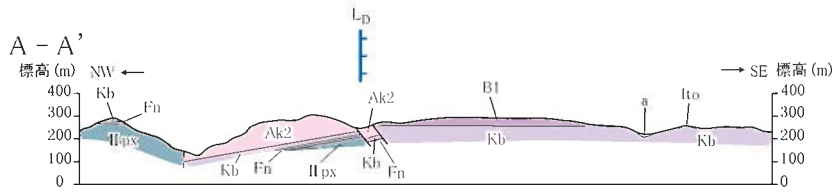
- du 砂丘砂層
- a 沖積層
- tl 低位段丘堆積物
- △△△ 崖礫性堆積物
- lto 入戸火砕流堆積物
- ltoa 阿多火砕流堆積物
- tm 中段段丘堆積物
- lhm 樋脇火砕流堆積物
- lbu 川内玄武岩1(溶岩)川内玄武岩類
- lbu 八重山火砕流堆積物
- ym 山之口層
- lbu 市比野玄武岩質火砕岩類|北薩火山岩類V
- lh 中岳火砕流堆積物
- lbu 輝石安山岩溶岩|北薩火山岩類IV
- lka 草木段火砕流堆積物
- lbu 川内火砕流堆積物
- lsv 郡山層
- kr 倉野火砕流堆積物
- sm 鹿丸の口火砕流堆積物
- kn 観音池層
- ds 岩屑なだれ堆積物
- nb 野下火砕流堆積物
- mb 松比良火砕流堆積物
- lk 桑木野火砕流堆積物
- lbu 川上火砕流堆積物
- ak2 阿久根2火砕流堆積物
- lbu 久保野火砕流堆積物
- lbu 舟川火砕流堆積物
- lbu 百次火砕流堆積物
- lbu 浦田火砕流堆積物
- lbu 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類II
- lbu 火山・凝灰角礫岩 } 北薩火山岩類I
- lbu 二俣川火砕流堆積物
- gy 岩脈
- lbu 角閃石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類I
- lbu 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類I
- lbu 変質安山岩～石英斑岩 } 北薩火山岩類I
- mb 馬込礫岩層

Gr-1 断層面の走向・傾斜及び断層露頭番号
 114 層理面の走向・傾斜
 地質境界
 断層(破線は推定、点線は伏在)
 断面線位置及び番号
 反射法地震探査解析測線(数字はCMP番号)
 詳細図範囲

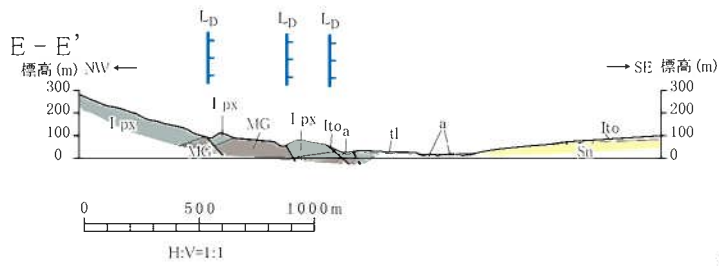
この地区は、国土院発行の2万5千分の地形図(朝島・川内・霧之原・荒川浜・串木野・霧津郡山)を使用したものである。

500m 0 500 1000 1500

第1.2-74図 市来断層系周辺(五反出川断層含む)の地質図

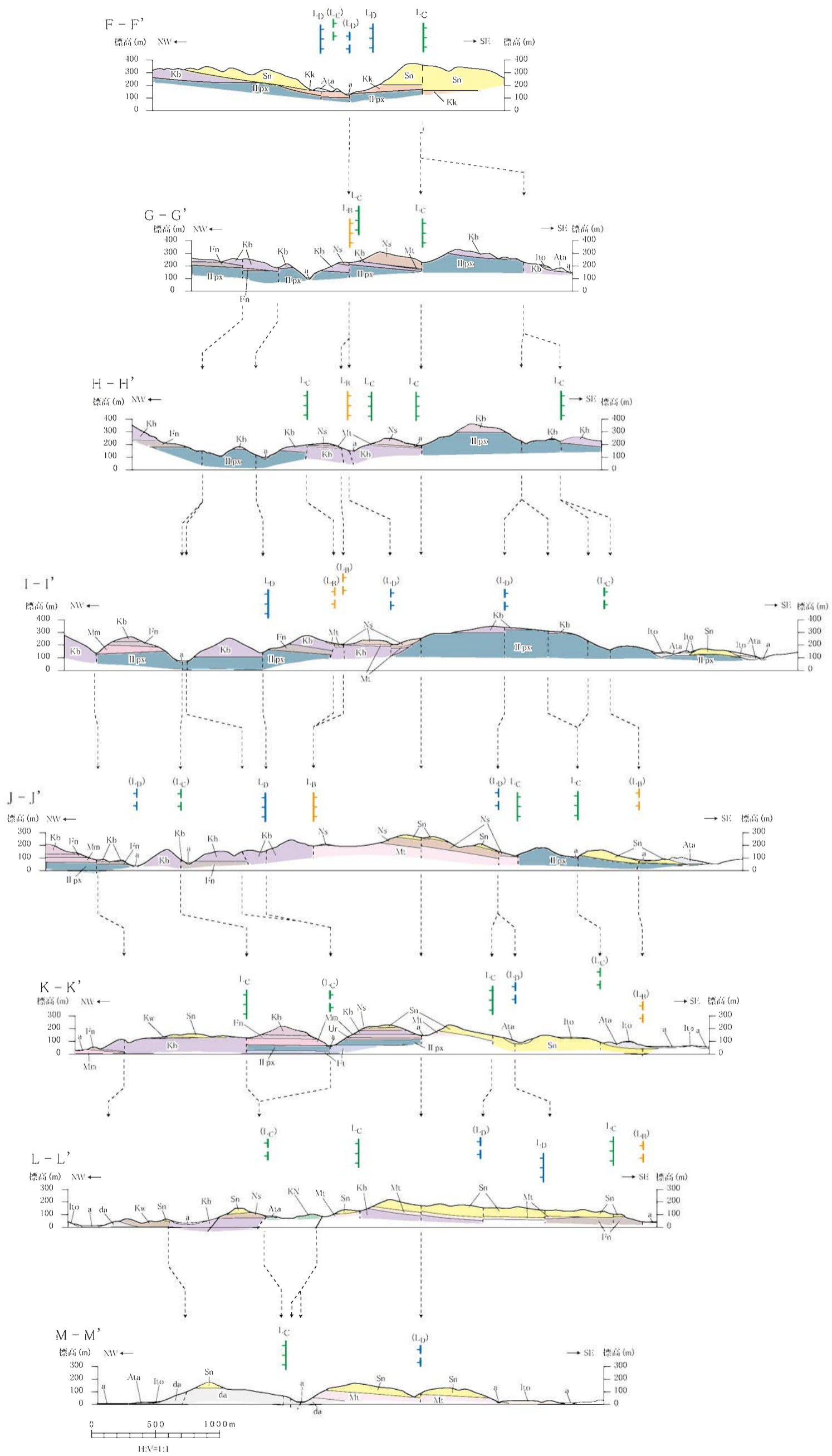


* : 崖錐性堆積物を表示していない。



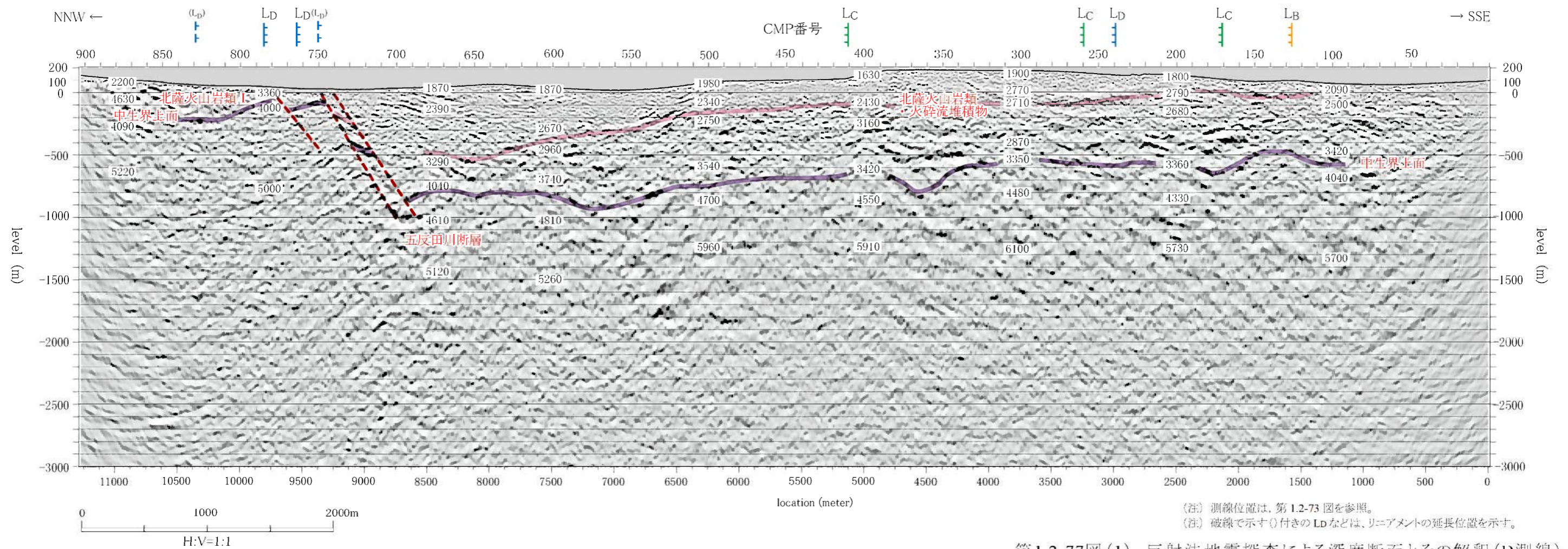
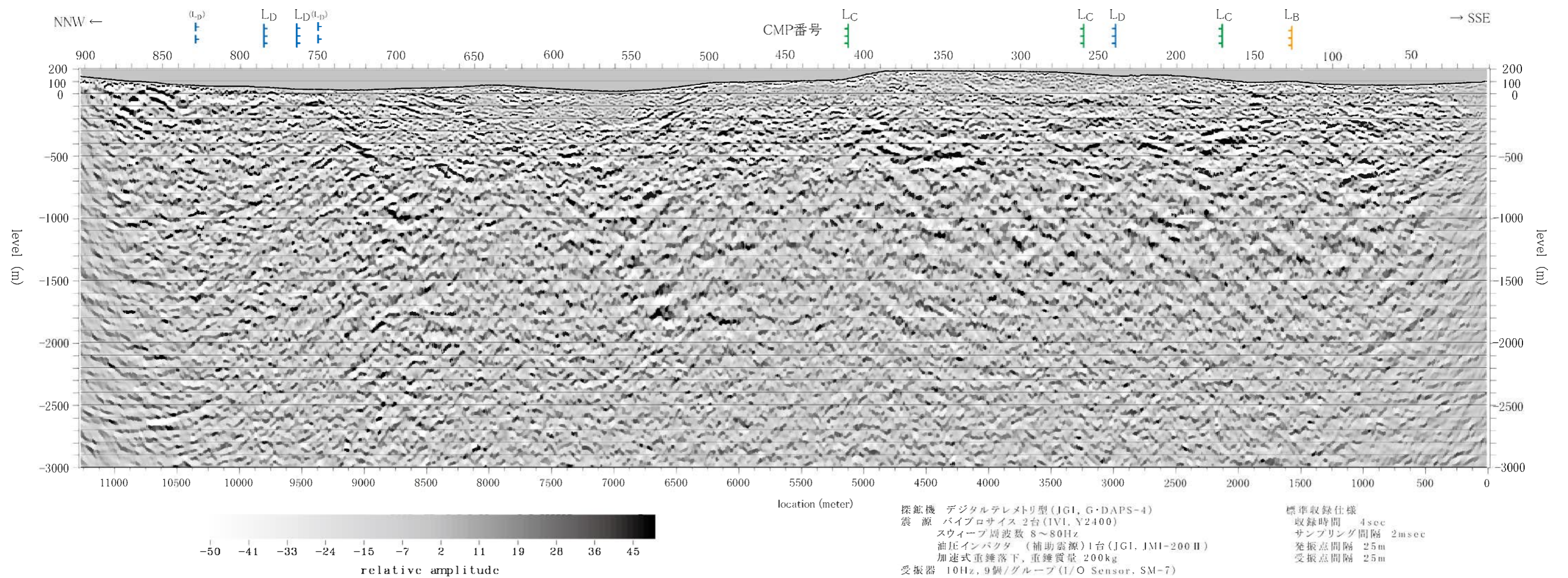
(注) 凡例は、第 1.2-74 図を参照。

第 1.2-75 図 五反田川断層周辺の地質断面図

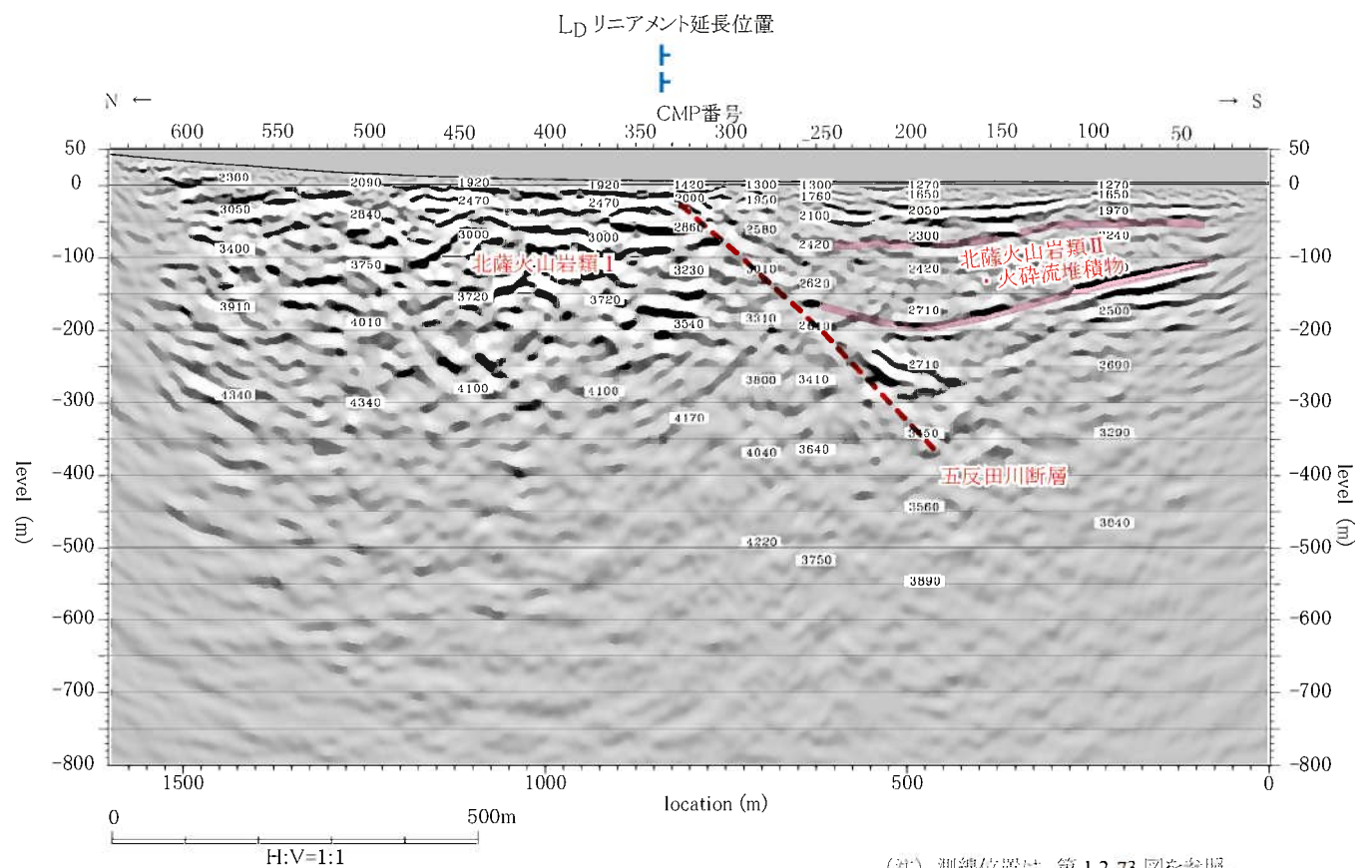
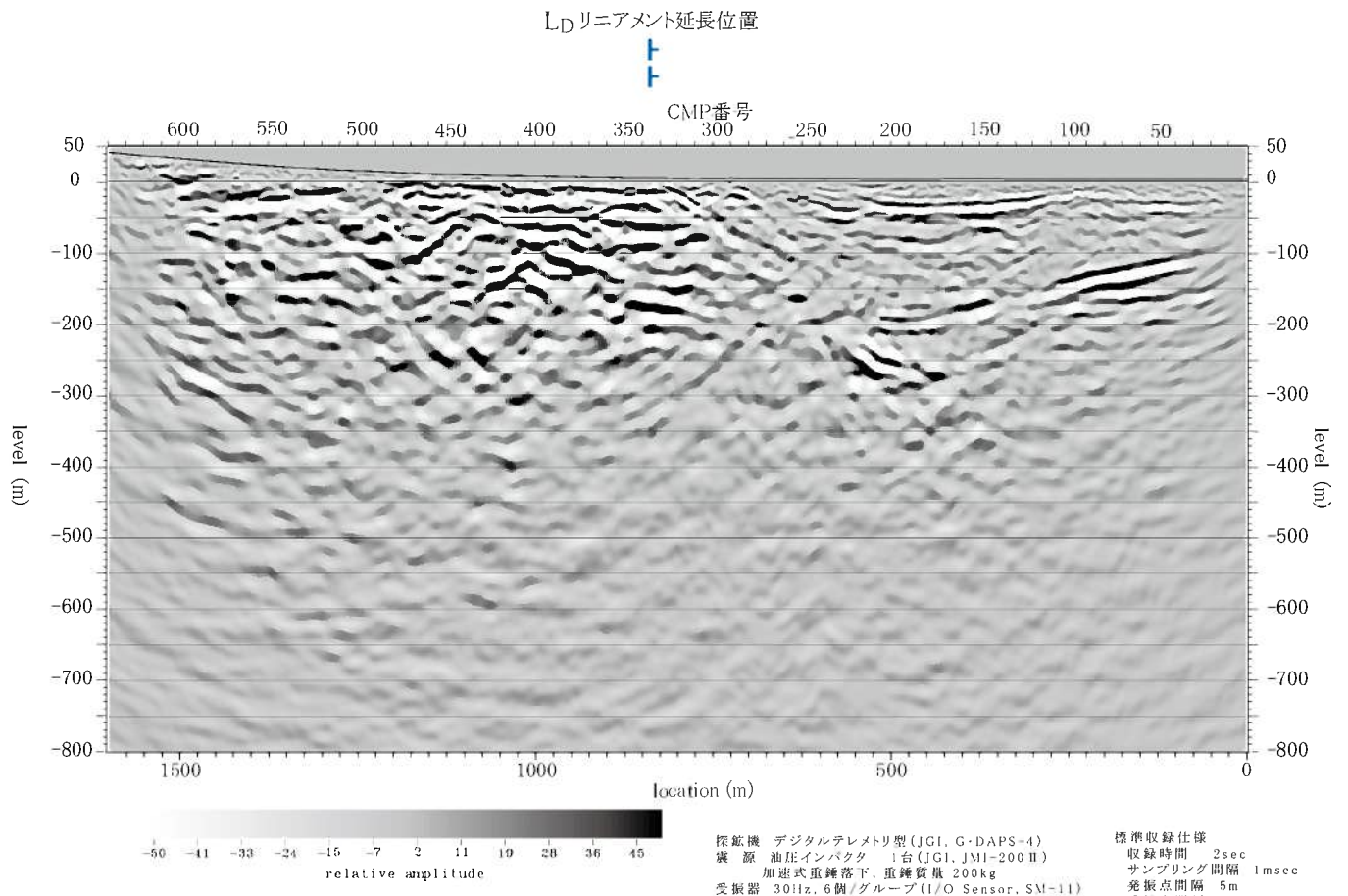


(注) 凡例は、第1.2-74図を参照。
 (注) 破線で示す()付きのL_Dなどは、リニアメントの延長位置を示す。

第1.2-76図 市来断層系周辺の地質断面図



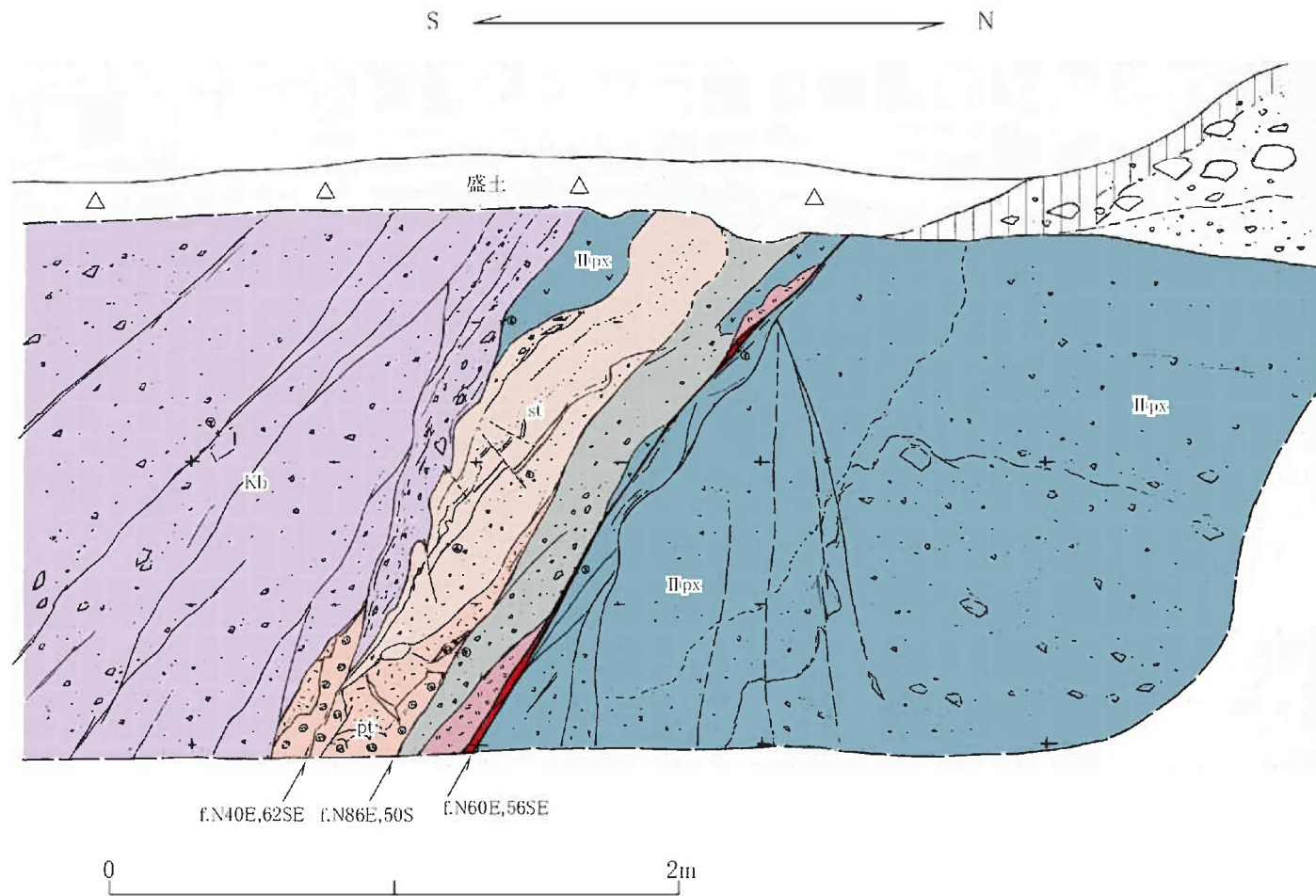
第1.2-77図(1) 反射法地震探査による深度断面とその解釈 (D測線)



(注) 測線位置は、第 1.2-73 図を参照。

第 1.2-77 図 (2) 反射法地震探査による深度断面とその解釈 (e測線)

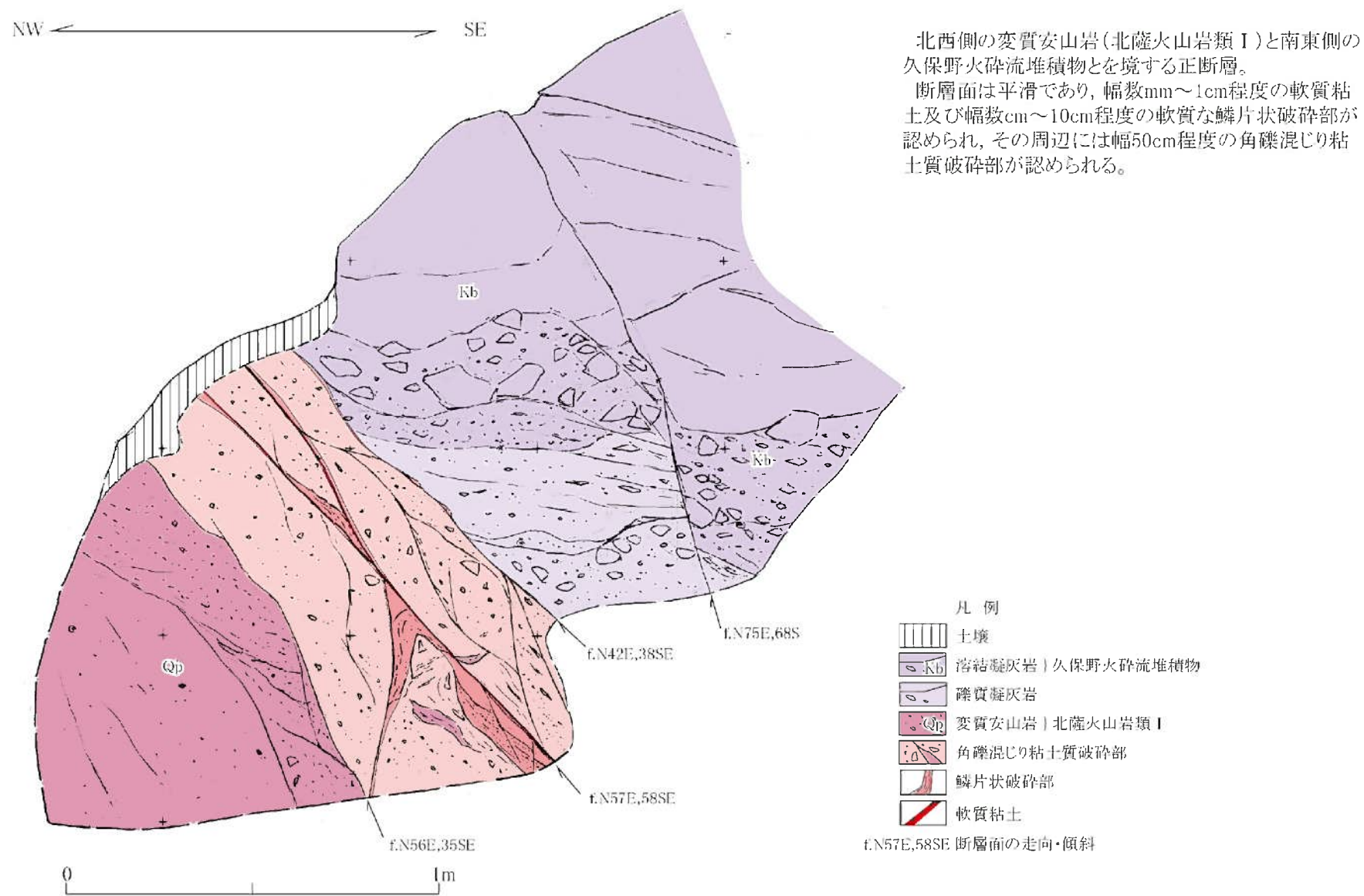
1.2-528



南側の久保野火砕流堆積物と北側の輝石安山岩溶岩（北薩火山岩類Ⅱ）とを境する正断層。
断層面は緩く湾曲するものの、平滑であり、幅数mm～2cm程度の軟質粘土が認められる。断層面上盤側には角礫状破碎部及び安山岩溶岩、凝灰岩などの擾乱部が認められる。

- 凡例
- 暗褐色土壌
 - 旧河床礫層 } 沖積層
 - Kb 溶結凝灰岩 } 久保野火砕流堆積物
 - 砂質凝灰岩
 - 軽石凝灰岩
 - 凝灰岩
 - IIpx 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類Ⅱ
 - 角礫状破碎部
 - 軟質粘土
- f.N86E.50S 断層面の走向・傾斜

第1.2-78図(1) 露頭スケッチ (Loc.Gt-1, 薩摩川内市野下)



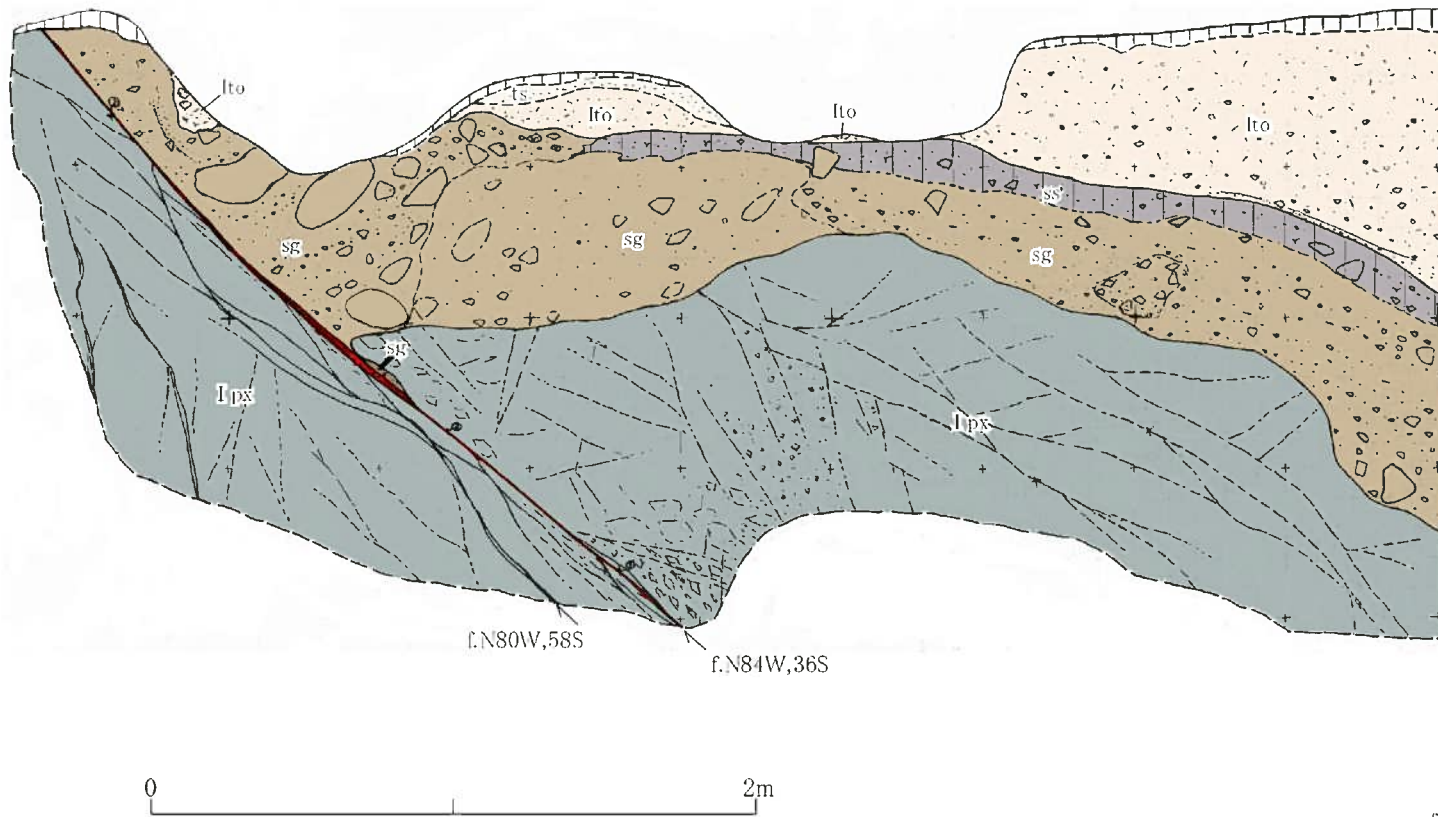
北西側の変質安山岩(北薩火山岩類 I)と南東側の久保野火砕流堆積物とを境する正断層。

断層面は平滑であり、幅数mm~1cm程度の軟質粘土及び幅数cm~10cm程度の軟質な鱗片状破砕部が認められ、その周辺には幅50cm程度の角礫混じり粘土質破砕部が認められる。

第1.2-78図(2) 露頭スケッチ (Loc.Gt-2, いちき串木野市八牟礼)

N ← → S

1.2-530



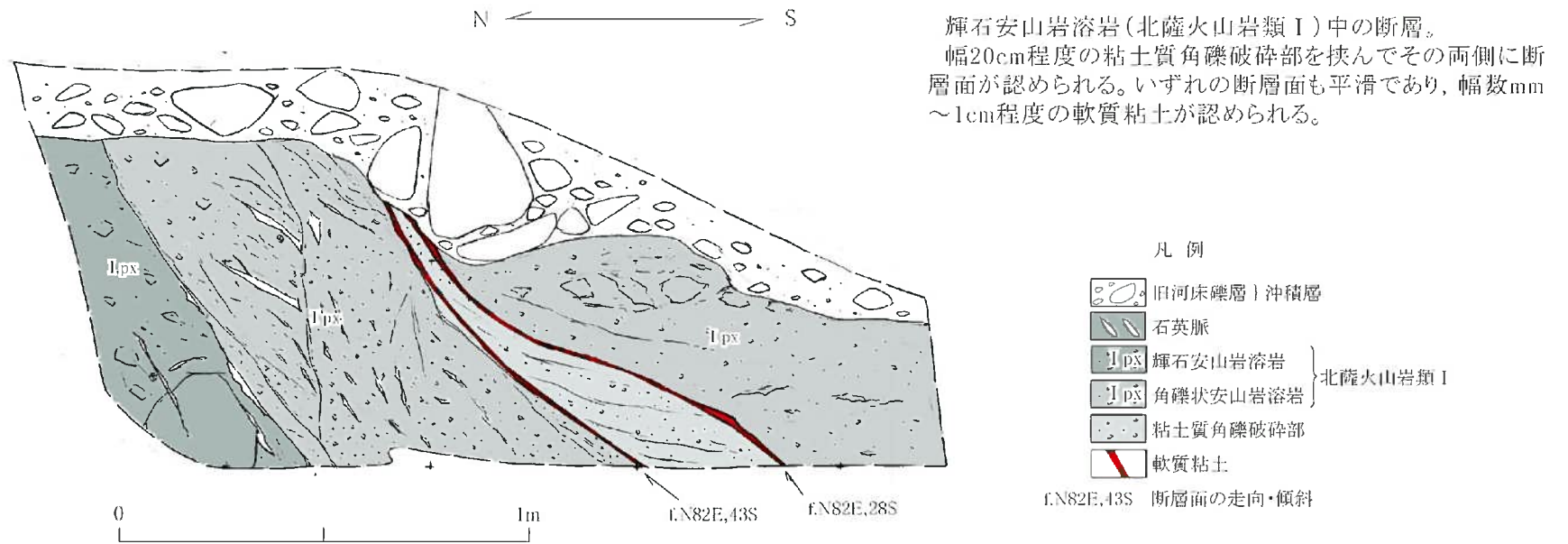
輝石安山岩溶岩（北薩火山岩類 I）中の断層。
断層面は平滑であり、顕著な破碎は認められないものの、幅数 mm ~ 1cm 程度の軟質粘土が認められる。同断層は古期崖錐堆積物に鉛直 1m 以上の南落ちの変位を与えている。

凡例

- 茶褐色土壤
- 凝灰質砂層 } 入戸火砕流二次堆積物
- 軽石流堆積物 } 入戸火砕流堆積物
- シルト質黒色土壤 } 埋没土壤
- シルト質礫層 } 古期崖錐堆積物
- 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類 I
- 軟質粘土

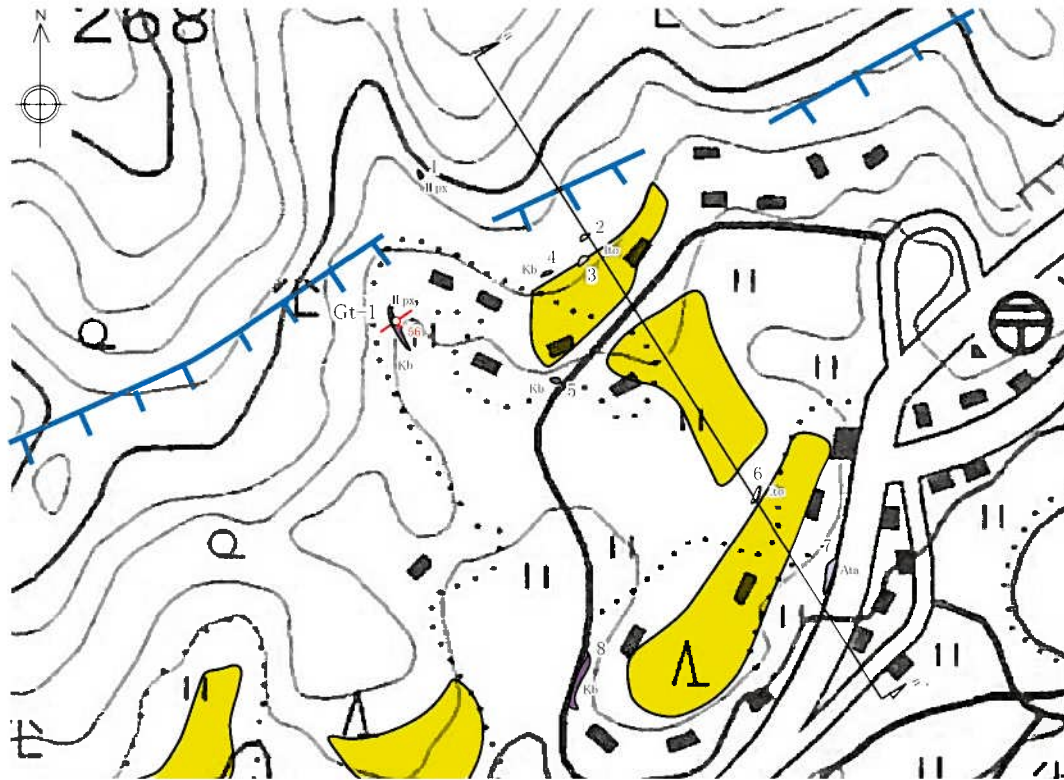
f.N84W,36S 断層面の走向・傾斜

第1.2-78図(3) 露頭スケッチ (Loc.Gt-3, いちき串木野市上名)



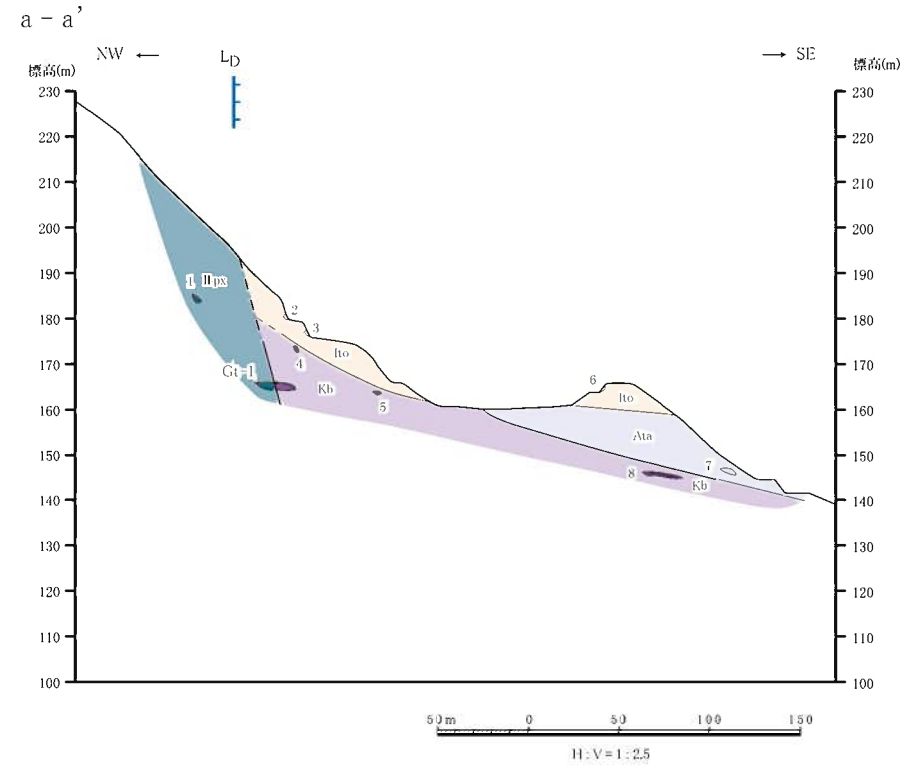
第1.2-78図(4) 露頭スケッチ (Loc.Gt-4, いちき串木野市河内)

1.2-532



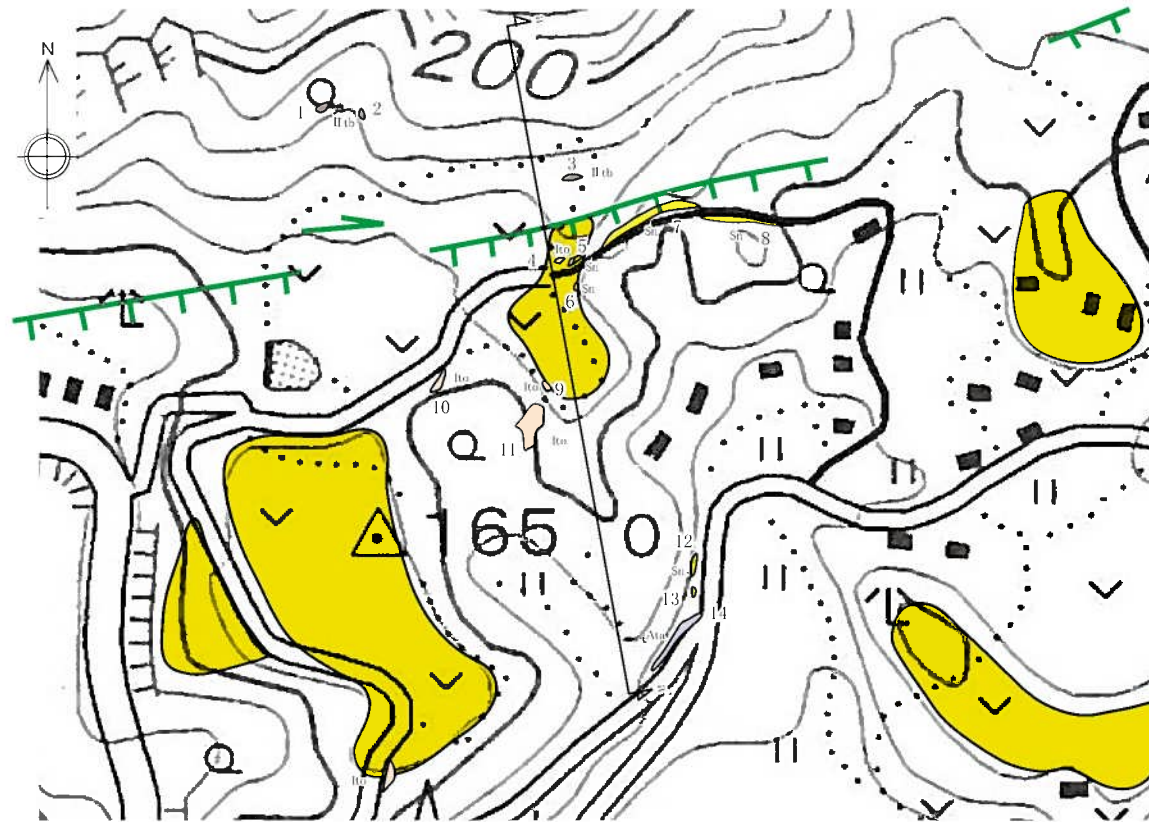
この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(串木野)を使用したものである。

- 地形面凡例
- 入戸火砕流堆積面
- リニアメント凡例
- Lp リニアメント
(短線は低下側を示す。)
- 露頭凡例
- 露頭位置及び露頭番号
 - Ito 入戸火砕流堆積物
 - Ata 阿多火砕流堆積物
 - Kb 久保野火砕流堆積物
 - Itpx 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類II
 - Itpx 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類II
 - Gt-1 断層面の走向・傾斜
 - Gt-1 断層面の走向・傾斜
- a-a' 地質断面線位置



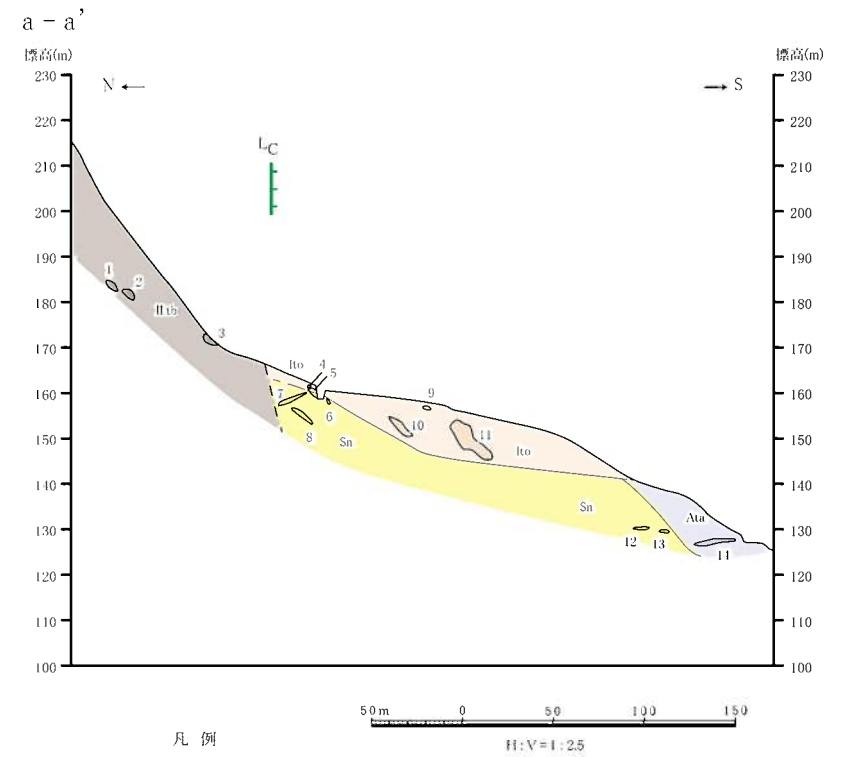
- 凡例
- Ito 入戸火砕流堆積物
 - Ata 阿多火砕流堆積物
 - Kb 久保野火砕流堆積物
 - Itpx 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類II
 - Itpx 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類II
 - 断層
 - 推定断層
 - 投影露頭位置及び露頭番号

第1.2-79図(1) ルートマップ・地質断面図(薩摩川内市野下付近)



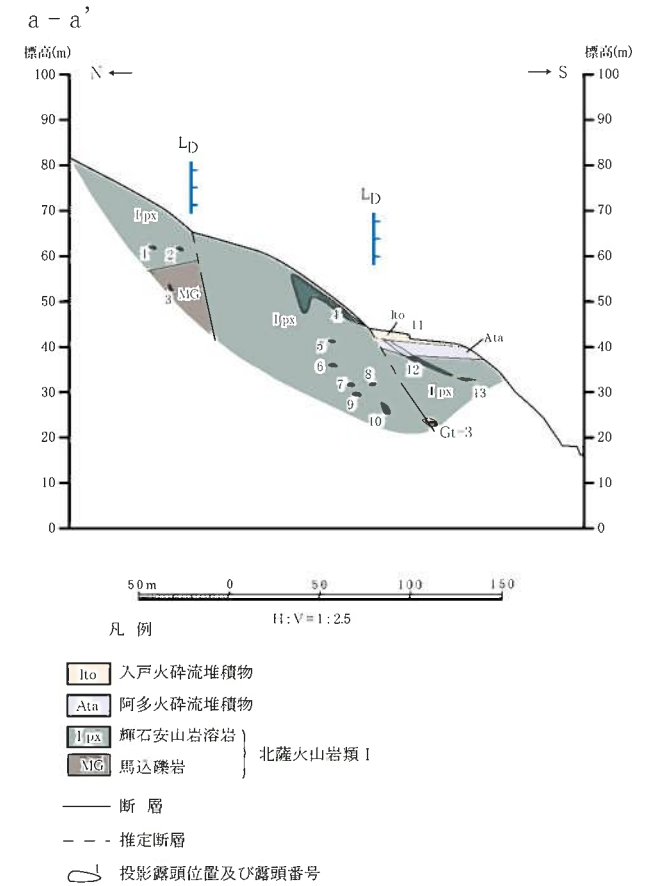
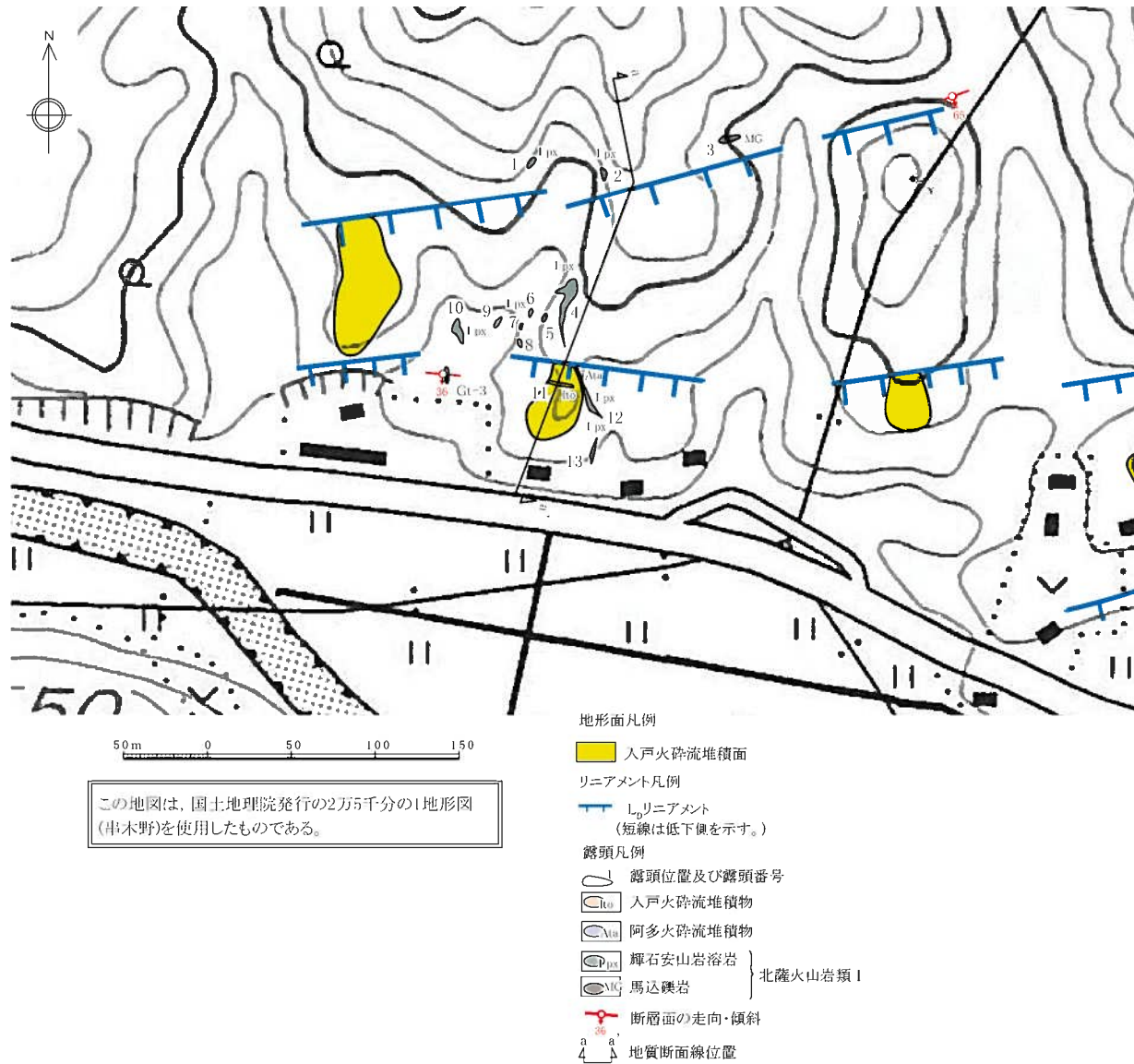
この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(串木野)を使用したものである。

- 地形面凡例
 入戸火砕流堆積面
- リニアメント凡例
→ L₂リニアメント
 (短線は低下側を、矢印の方向は横ずれの方向を示す。)
- 露頭凡例
○ 露頭位置及び露頭番号
lto 入戸火砕流堆積物
Ata 阿多火砕流堆積物
Sn 川内火砕流堆積物
Kb 久保野火砕流堆積物
lltb 火山・凝灰角礫岩 | 北薩火山岩類II
a a' 地質断面線位置



- 凡例
- lto 入戸火砕流堆積物
 - Ata 阿多火砕流堆積物
 - Sn 川内火砕流堆積物
 - lltb 火山・凝灰角礫岩 | 北薩火山岩類II
 - 推定断層
 - 投影露頭位置及び露頭番号

第1.2-79図(2) ルートマップ・地質断面図(いちき串木野市岩下付近)

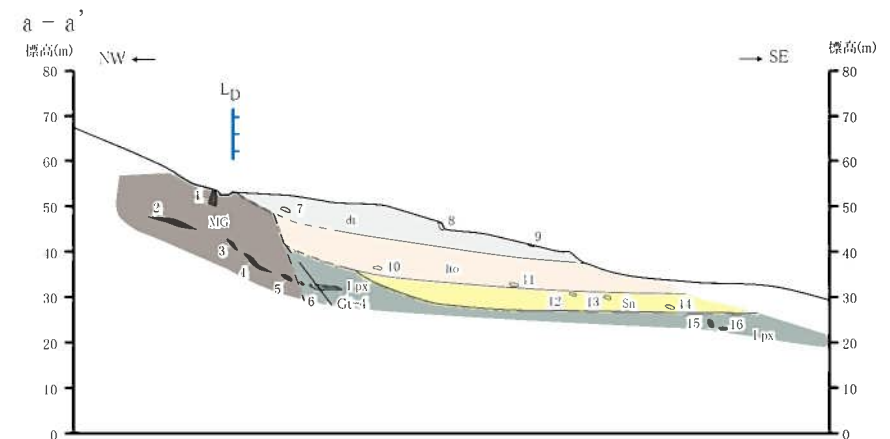


第1.2-79図(3) ルートマップ・地質断面図(いちき串木野市馬込付近)



- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 地形面凡例 | 露頭凡例 |
| ■ 入戸火砕流堆積面 | ○ 露頭位置及び露頭番号 |
| リニアメント凡例 | dt 崖錐性堆積物 |
| — L ₁ リニアメント | to 入戸火砕流堆積物 |
| — L ₂ リニアメント | Sn 川内火砕流堆積物 |
| (短線は低下側を示す。) | px 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類 I |
| | MG 馬込礫岩 |
| | — 断層 |
| | - - - 推定断層 |
| | ○ 投影露頭位置及び露頭番号 |
| | a-a' 地質断面線位置 |

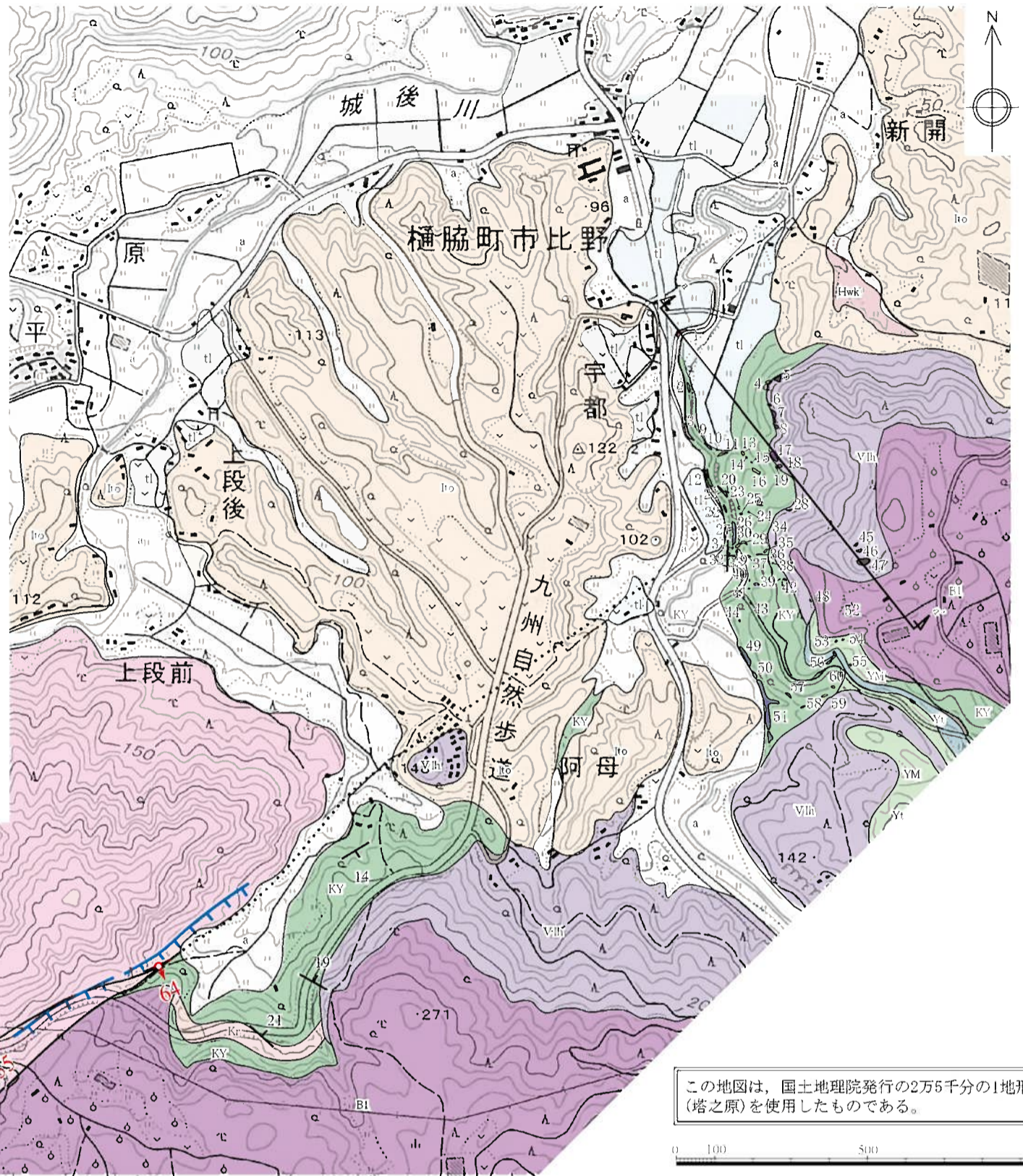
この地区は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(串木野)を使用したものである。



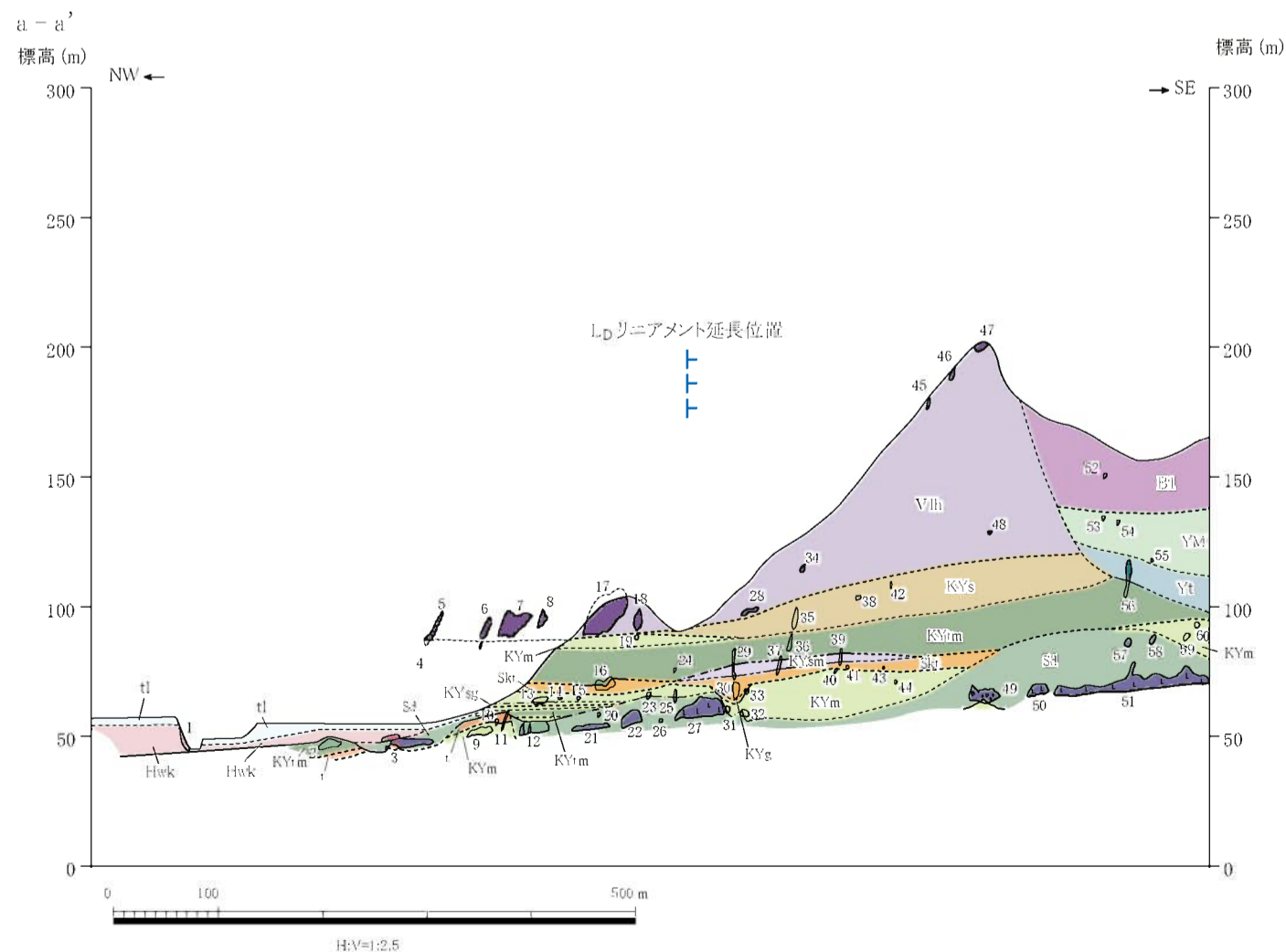
- 凡例
- | | |
|-------|--------------|
| dt | 崖錐性堆積物 |
| to | 入戸火砕流堆積物 |
| Sn | 川内火砕流堆積物 |
| px | 輝石安山岩溶岩 |
| MG | 馬込礫岩 |
| — | 断層 |
| - - - | 推定断層 |
| ○ | 投影露頭位置及び露頭番号 |

第1.2-79図(4) ルートマップ・地質断面図(いちき串木野市河内付近)

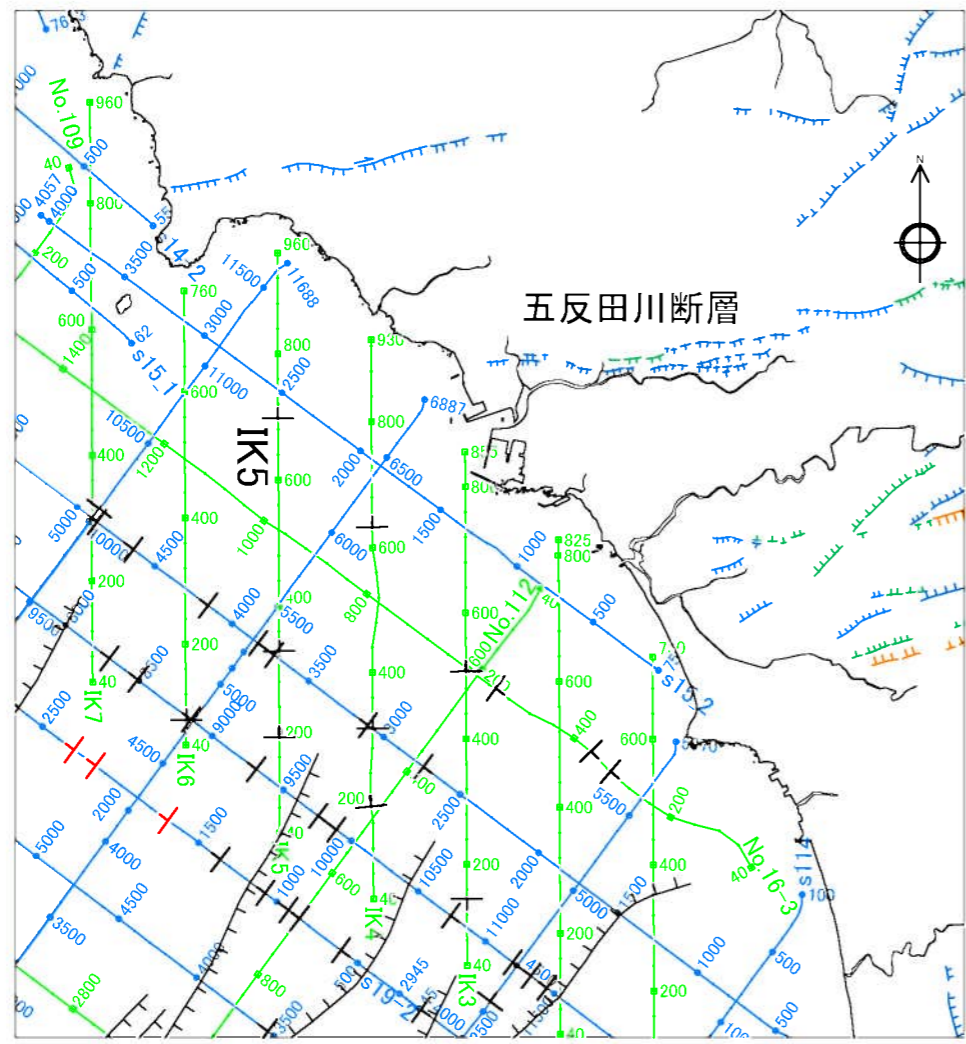
- 凡例
- a 沖積層
 - tl 低位段丘堆積物
 - lto 入戸火砕流堆積物
 - Hwk 樋脇火砕流堆積物
 - B1 川内玄武岩1(溶岩) 川内玄武岩類
 - Yt 八重山火砕流堆積物
 - YM 山之口層
 - Vlh 市比野玄武岩質火砕岩類 北薩火山岩類V
 - KY 郡山層
 - Kr 倉野火砕流堆積物
 - Ak2 溶結凝灰岩 阿久根2火砕流堆積物
 - Kb 久保野火砕流堆積物
 - IIpx 輝石安山岩溶岩 北薩火山岩類II
- 断層 (破線は推定, 点線は伏在)
- 断層面の走向・傾斜
- 層理面の走向・傾斜
- 露頭位置及び露頭番号
(露頭の凡例は断面図凡例を参照)
- 地質断面位置
- リニアメント凡例
- L_Dリニアメント (短線は低下側を示す。)



この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(塔之原)を使用したものである。



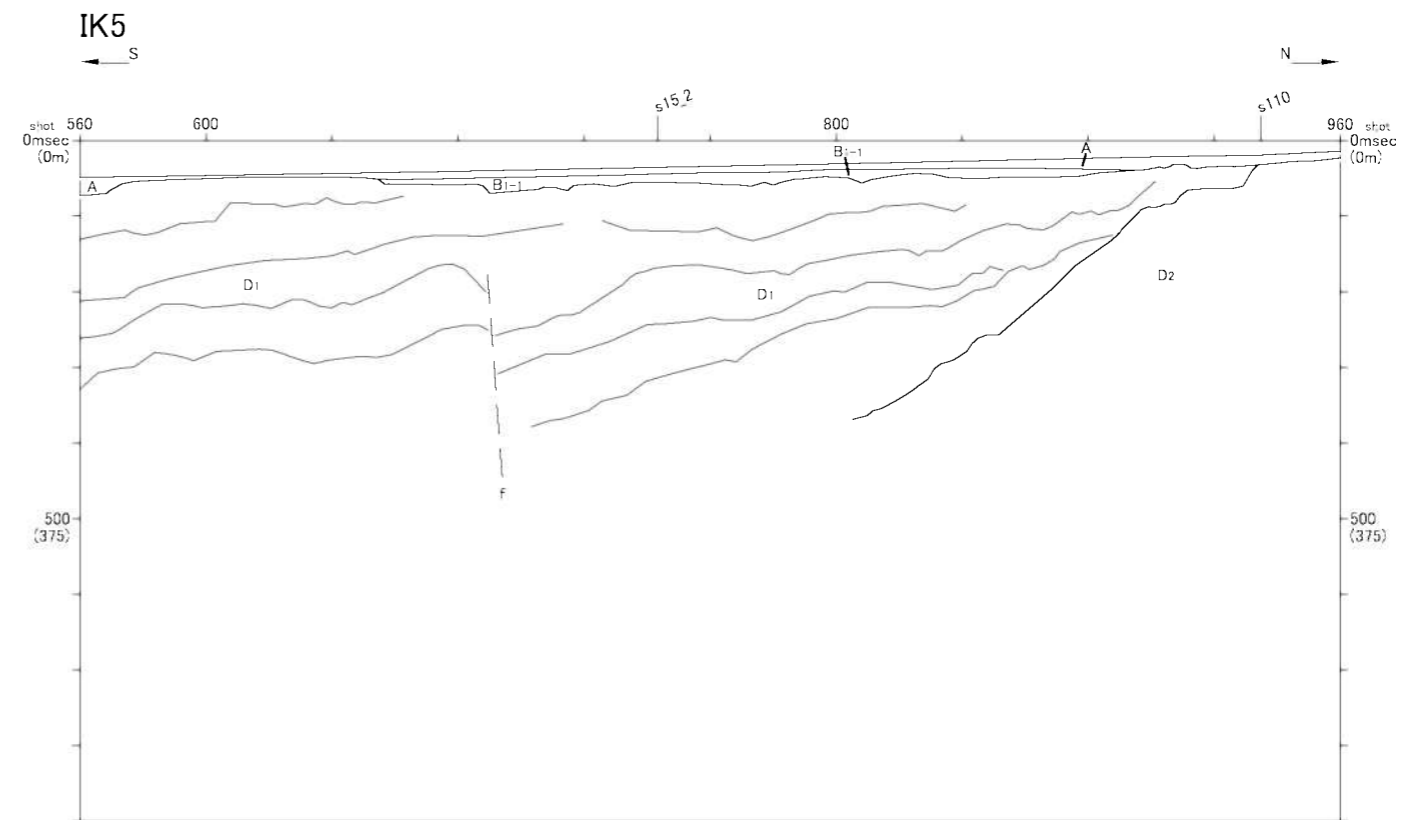
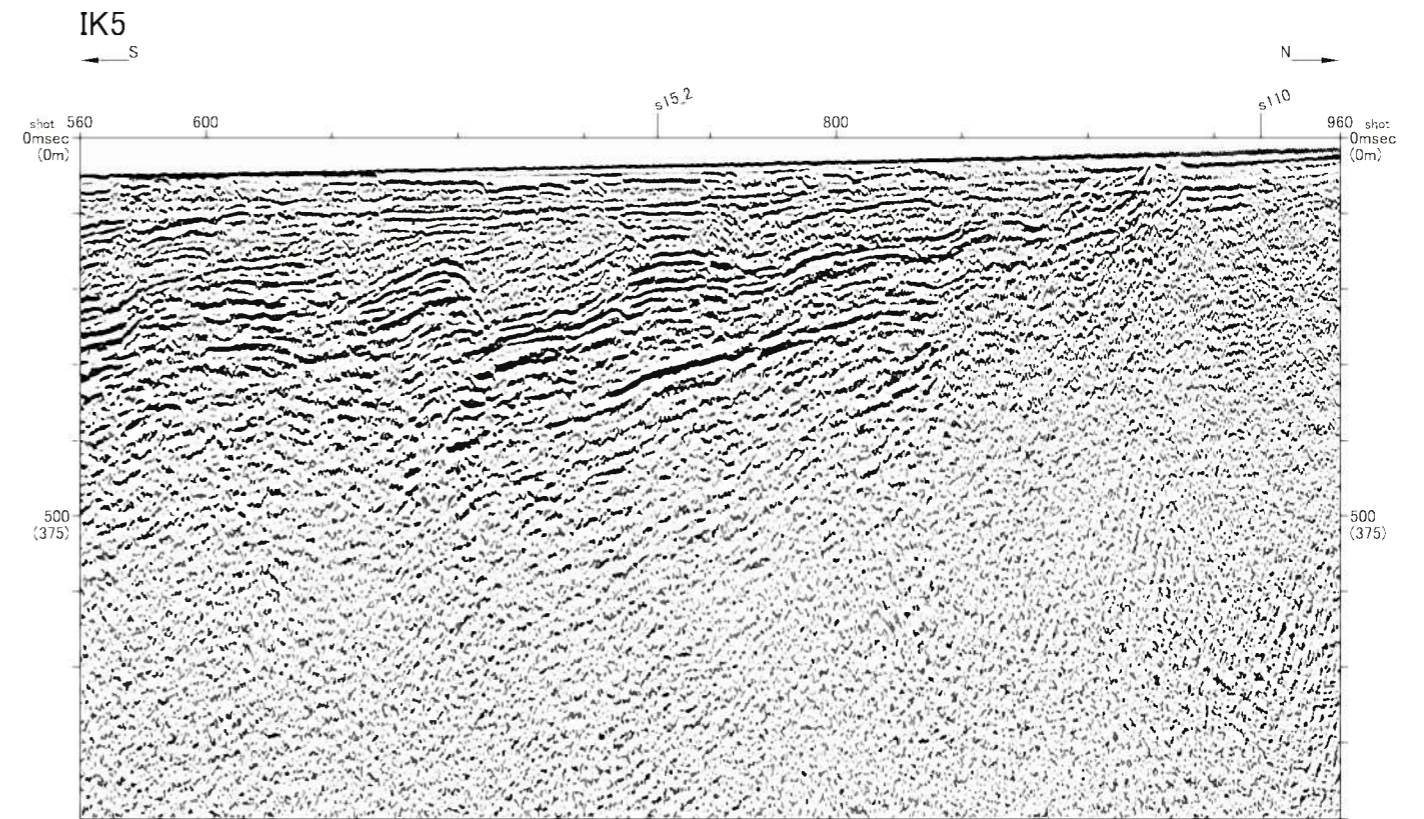
- 凡例
- tl 低位段丘堆積物
 - Hwk 樋脇火砕流堆積物
 - B1 川内玄武岩
 - YM 山之口層
 - Yt 八重山火砕流堆積物
 - Vlh 市比野玄武岩質火砕岩類
 - KYs 中粒砂岩
 - KYtm 凝灰質泥岩
 - KYm 砂質泥岩～泥質砂岩
 - KYsm 軽石質砂岩・泥岩互層
 - Skt 新開火砕流堆積物
 - KYsg 泥岩・砂岩・礫岩互層
 - KYg 礫岩
 - t 火砕流堆積物
 - Sd スランプ堆積物
 - Sd 〓 スランプ堆積物中の安山岩ブロック
 - 13 露頭位置・番号
- 郡山層



五反田川断層位置図

凡 例

- | | | | |
|--|--|--|-----------------------|
| | 連続性のある断層 | | L _B リニアメント |
| | 連続性のある伏在断層 | | L _C リニアメント |
| | 連続性のない断層 | | L _D リニアメント |
| | 連続性のない伏在断層 | | |
| | 九州電力株によるマルチチャンネル音波探査測線
(G1ガン、ウォーターガン) | | |
| | 九州電力株によるシングルチャンネル音波探査測線
(ウォーターガン、スーパーカ) | | |

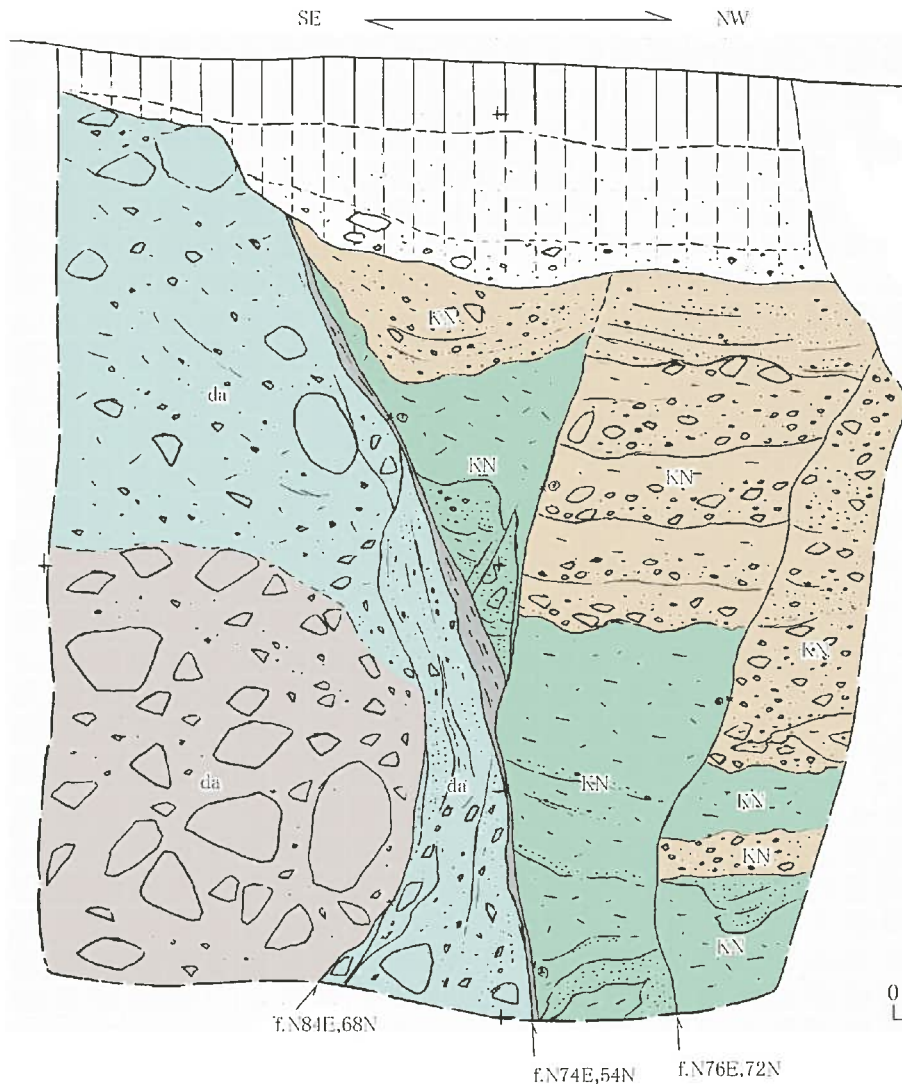


音波探査記録断面図

- 凡 例
- | | | | |
|------|---------------|--|--------------------------------|
| A | 後新第三紀～古第三紀 | | 構造不明 |
| B1-1 | 後新第三紀 | | 天候: 連続性のある断層
構造: 連続性のある伏在断層 |
| B1-2 | 中期～後新第三紀 | | 天候: 連続性のない断層
構造: 連続性のない伏在断層 |
| B2-1 | 中期～後新第三紀 | | |
| B2-2 | 中期～後新第三紀 | | |
| B3 | 前期～後新第三紀 | | |
| C | 前期～後新第三紀 | | |
| D1 | 中期～後新第三紀 | | |
| D2 | 中期～後新第三紀 | | |
| E | ジュラ紀～前期～後新第三紀 | | |

水涯線は、国土地理院発行の数値地図25000空間データ基盤(鹿児島)を編集したものである。

第1.2-81図 五反田川断層海域延長部(IK5測線)



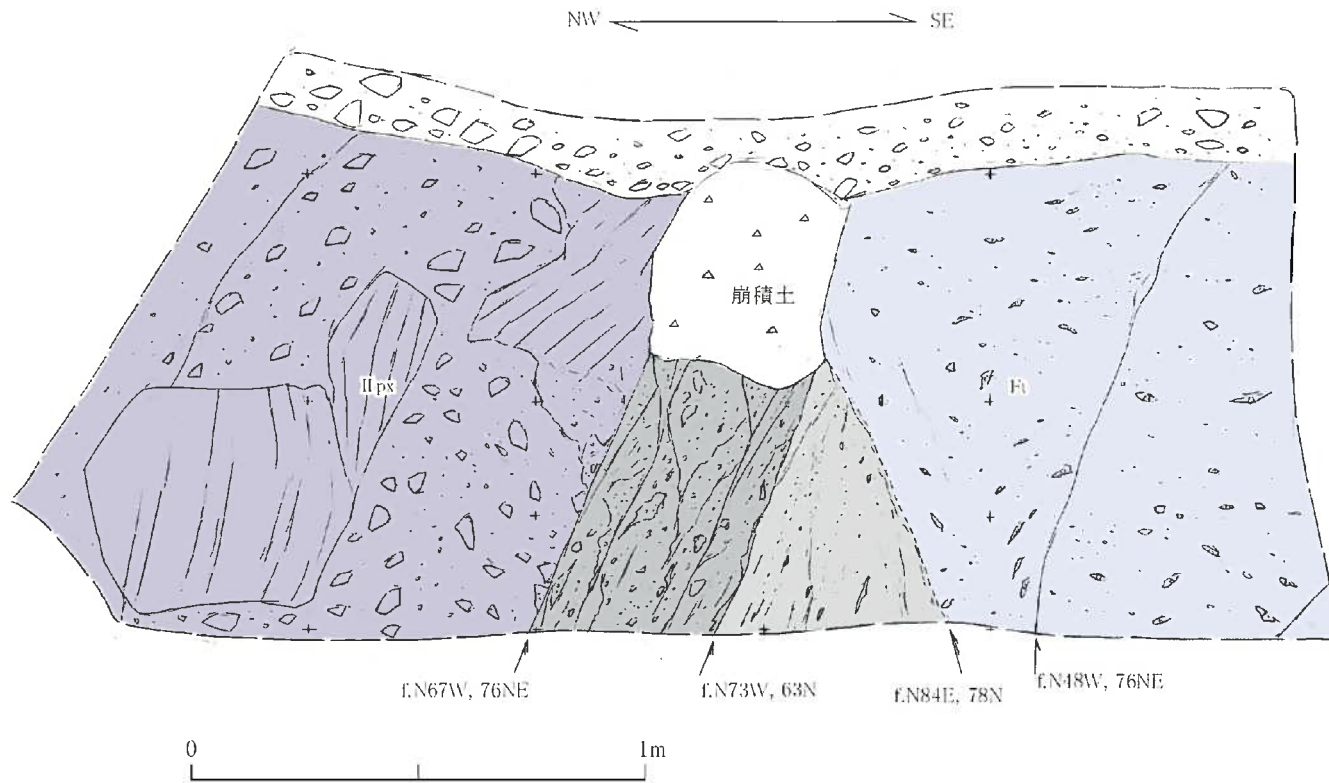
南東側の岩屑なだれ堆積物と北西側の観音ヶ池層とを境する正断層。
 断層面は湾曲・凹凸し、連続する平滑な断層面は認められない。
 幅数 cm ~ 10cm 程度の砂・シルト擾乱部が認められるものの、固結している。

凡例

- 褐色土壌
 - シルト質砂礫層
 - 凝灰質砂・シルト層
 - 細～中礫角礫層
 - 大礫角礫層
 - 砂・シルト擾乱部
- 観音ヶ池層
- 岩屑なだれ堆積物

f.N74E,54N 断層面の走向・傾斜

第1.2-82図(1) 露頭スケッチ (Loc.Ik-1, いちき串木野市観音ヶ池西方)



北西側の輝石安山岩自破碎溶岩(北薩火山岩類Ⅱ)と南東側の二俣川火砕流堆積物とを境する正断層。

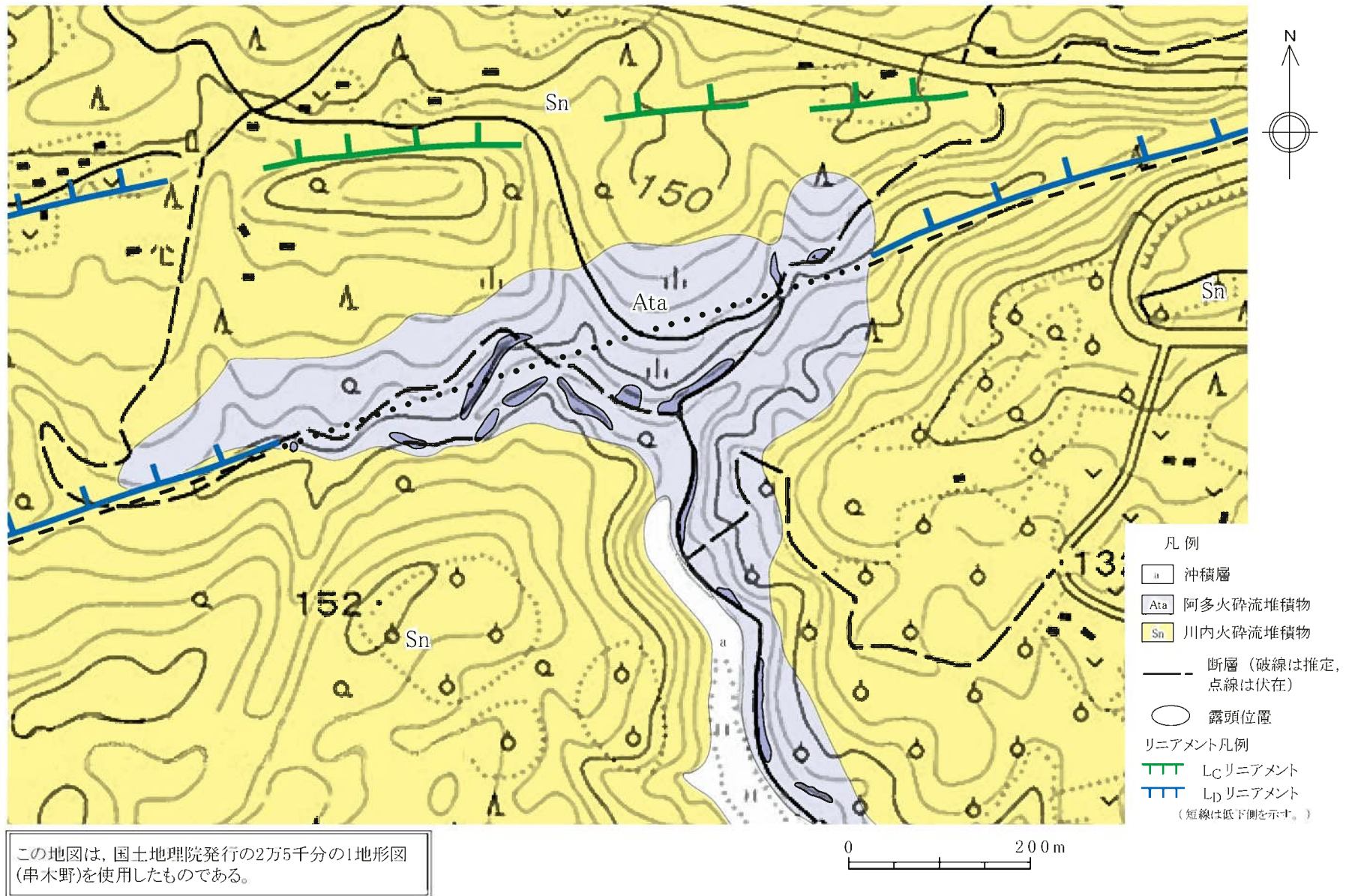
断層面は一部で平滑であるが、細かく凹凸するところも多く、いずれも癒着しており、破碎部も固結している。

凡例

- 旧河床礫層}沖積層
- 輝石安山岩自破碎溶岩}北薩火山岩類Ⅱ
- 弱溶結凝灰岩}二俣川火砕流堆積物
- 輝石安山岩溶岩角礫状破碎部
- 溶結凝灰岩角礫状破碎部

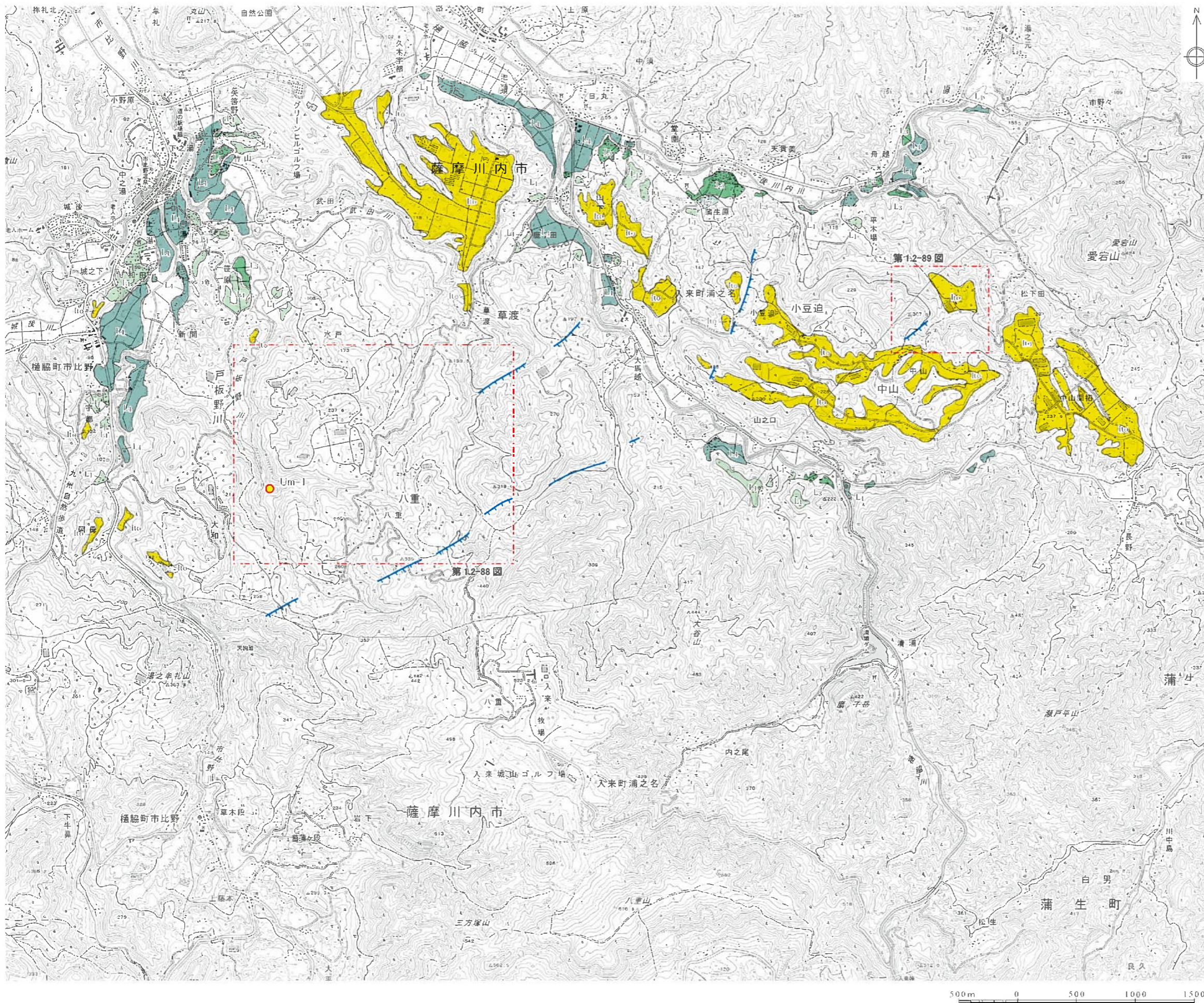
E.N73W,63N 断層面の走向・傾斜

第1.2-82図(2) 露頭スケッチ(Loc.Ik-2, いちき串木野市松比良南西)



（注）推定断層はリニアメントを通過するが，推定断層の位置を明確にするために，リニアメントと平行するように表示している。

第1.2-83図 ルートマップ（日置市皆田西北方付近）



地形面凡例

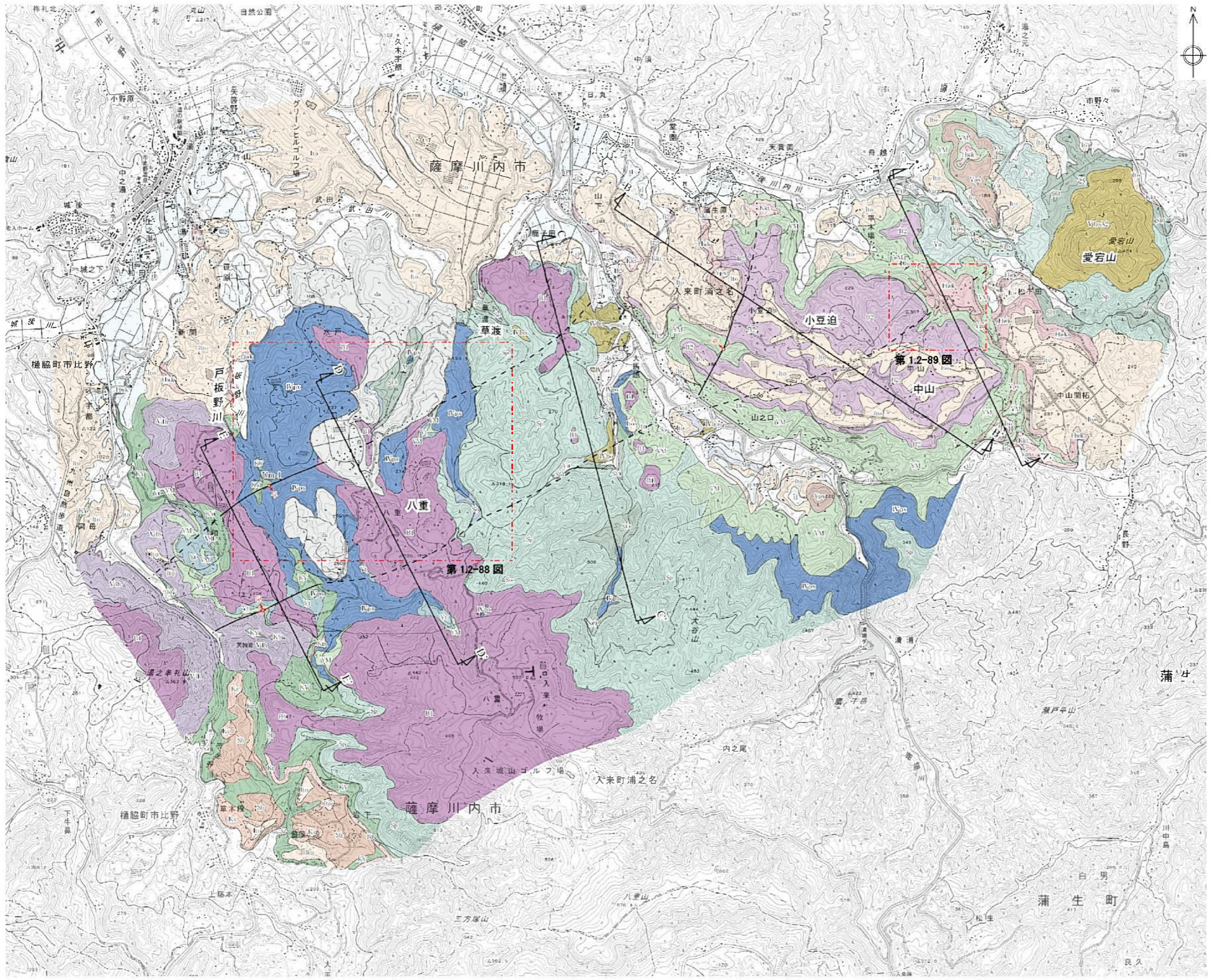
- L4 L1 面
- L3 面
- L2 面
- L1 面
- 入戸火砕流堆積面

リニアメント凡例

- L10 リニアメント
(短線は低下側を、短線のななめは両側で高度差がないものを示す。)
- 「九州の活構造」(1989) による
愛宕山西方断層
- 詳細図範囲
- Um-1 露頭位置及び露頭番号

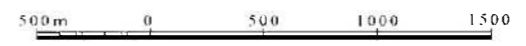
この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(塔之原・薩摩郡山)を使用したものである。

第1.2-84図 浦之名断層系周辺の空中写真判読図

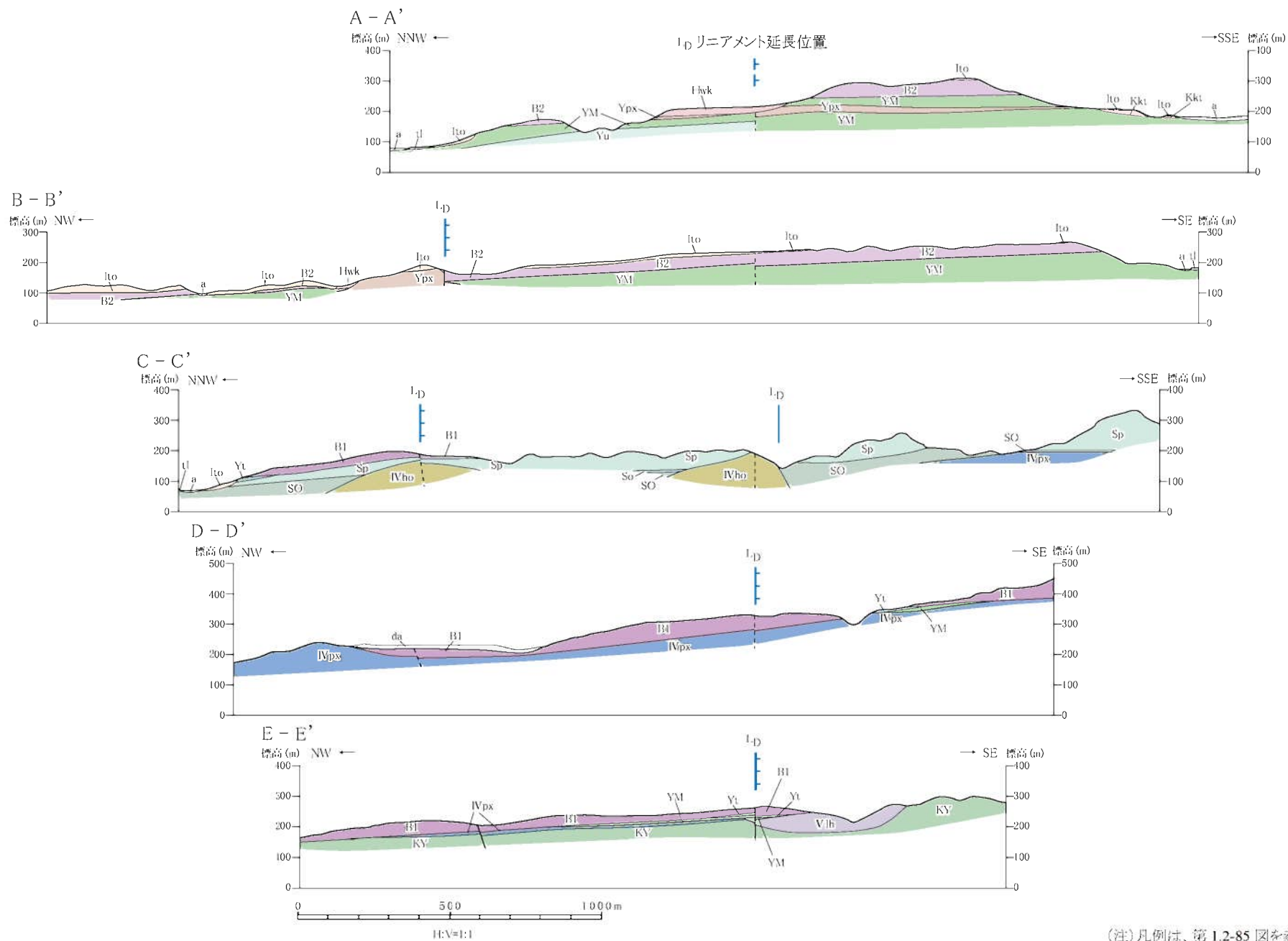


- 凡 例
- [Symbol] 沖積層
 - [Symbol] 低位段丘堆積物
 - [Symbol] 入戸火砕流堆積物
 - [Symbol] 阿多火砕流堆積物
 - [Symbol] 加久藤火砕流堆積物
 - [Symbol] 樋脇火砕流堆積物
 - [Symbol] 岩屑なだれ堆積物
 - [Symbol] 川内玄武岩2(溶岩)
 - [Symbol] 川内玄武岩1(溶岩)
 - [Symbol] 八重山火砕流堆積物
 - [Symbol] 輝石安山岩溶岩
 - [Symbol] 山之口層
 - [Symbol] 愛宕山角閃石安山岩溶岩
 - [Symbol] 市比野玄武岩質火砕岩類
 - [Symbol] 三方塚山火砕流堆積物
 - [Symbol] 湯之元火砕流堆積物
 - [Symbol] 草渡火砕流堆積物
 - [Symbol] 草渡層
 - [Symbol] 輝石安山岩溶岩
 - [Symbol] 角閃石安山岩溶岩
 - [Symbol] 草木段火砕流堆積物
 - [Symbol] 楠元火砕流堆積物
 - [Symbol] 菅浦ヶ段火砕流堆積物
 - [Symbol] 郡山層
 - [Symbol] 倉野火砕流堆積物
- Um-1 断層面の走向・傾斜及び断層露頭番号
- 層理面の走向・傾斜
- 地質境界
- 断層(破線は推定, 点線は伏在)
- 断面線位置及び番号
- 詳細図範囲

この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(塔之原・薩摩郡山)を使用したものである。

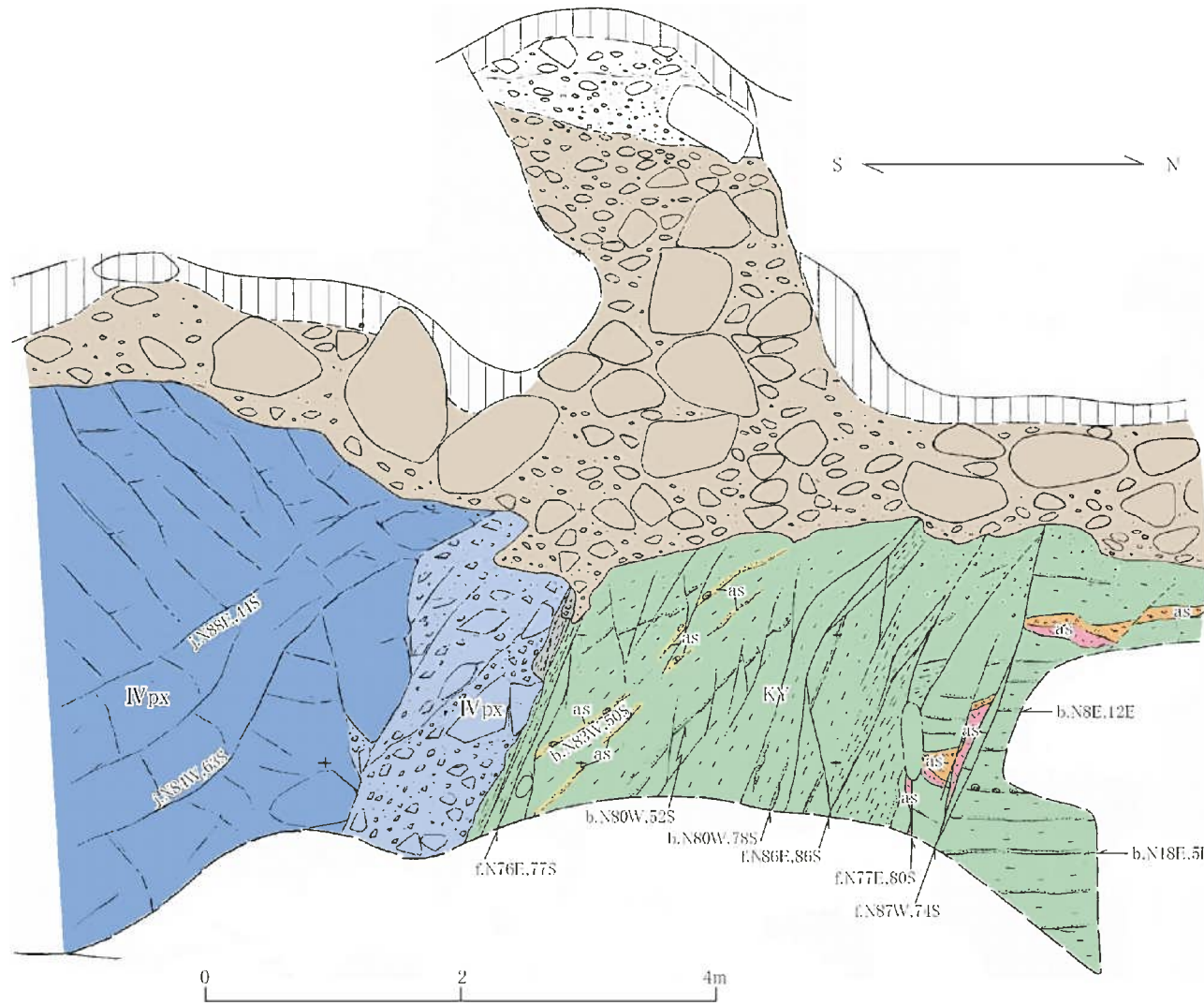


第1.2-85図 浦之名断層系周辺の地質図



(注) 凡例は、第 1.2-85 図を参照。

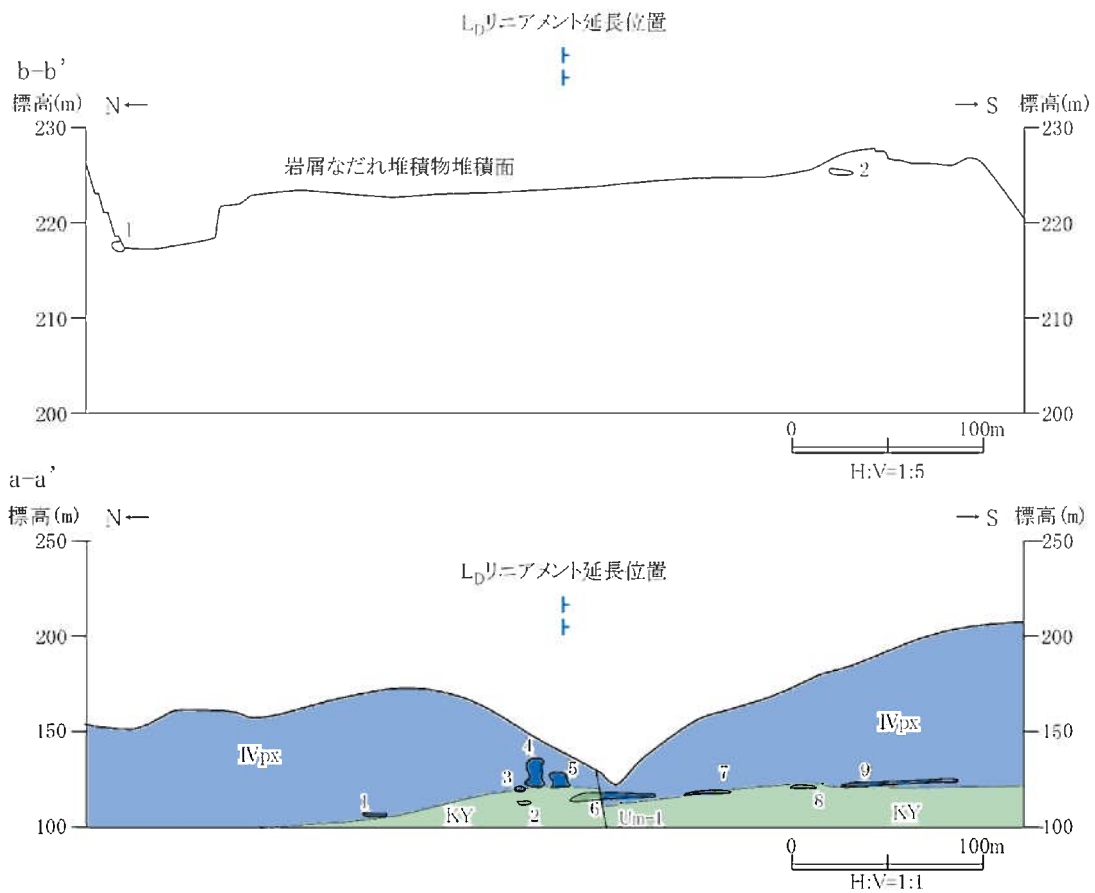
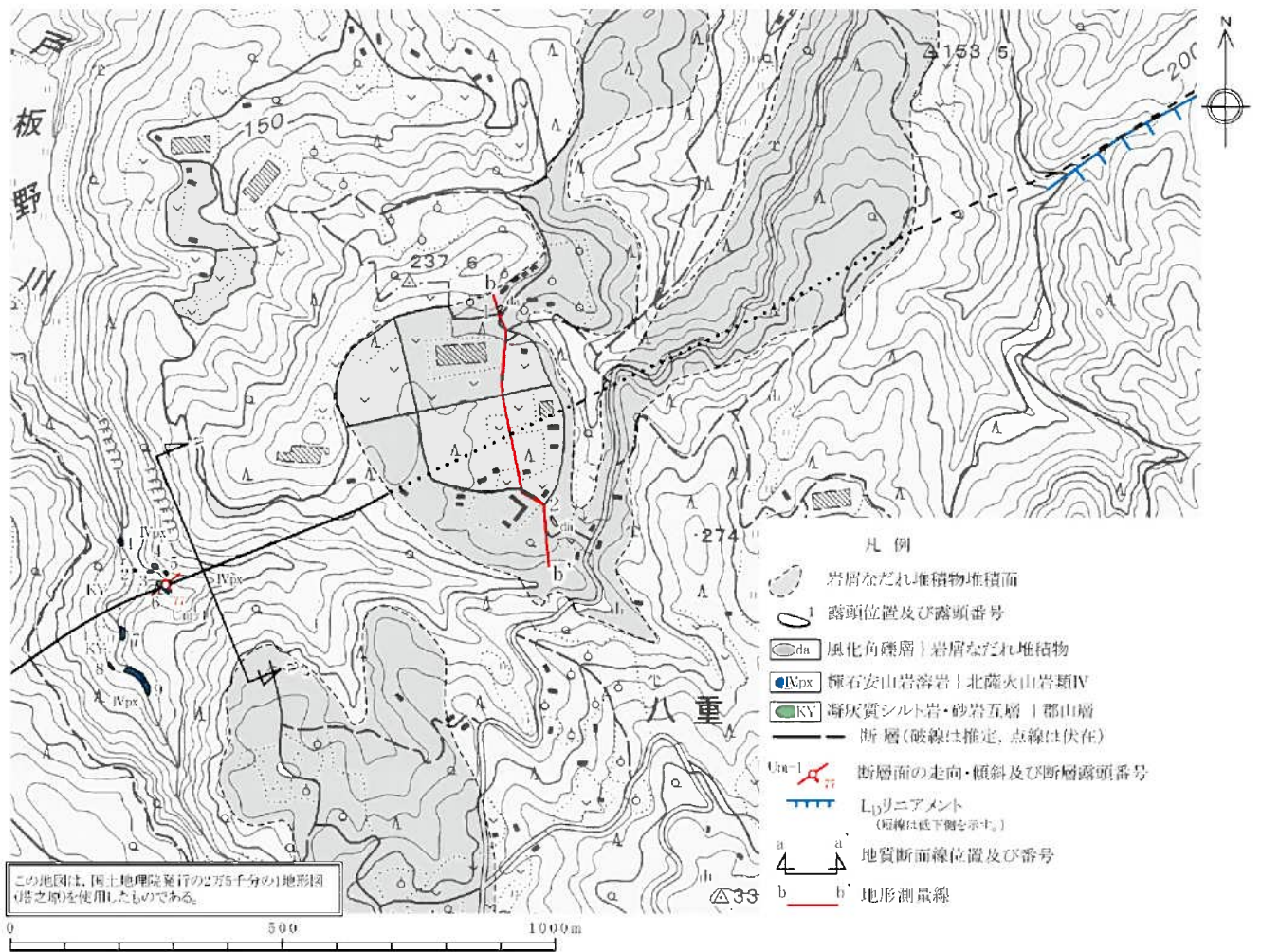
第1.2-86図 浦之名断層系周辺の地質断面図



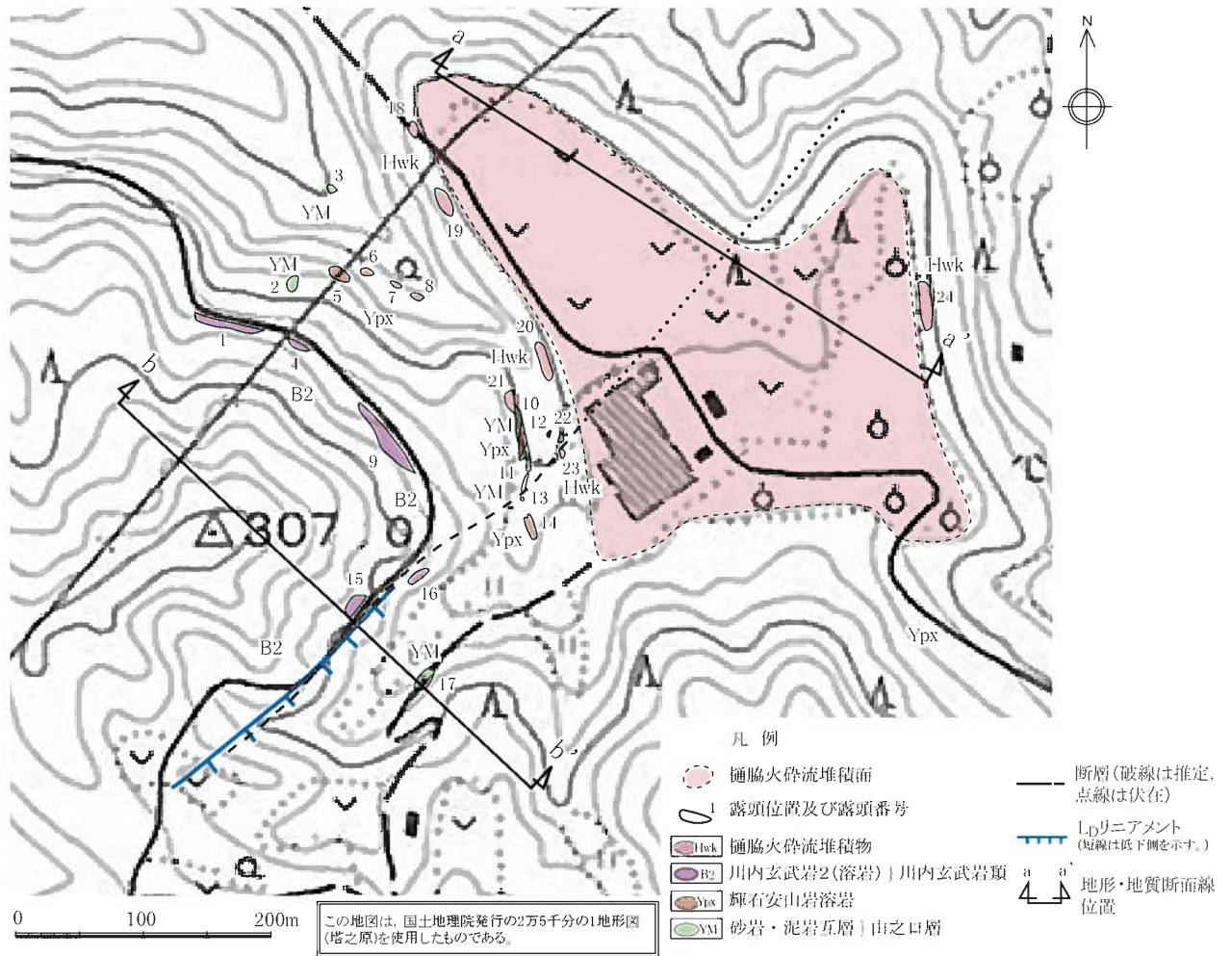
南側の輝石安山岩溶岩（北薩火山岩類Ⅳ）と北側の郡山層とを境する正断層。
 郡山層の凝灰質シルト岩中の断層面は、平面的であるが、癒着しており、破碎部は認められない。輝石安山岩溶岩（同火山岩類Ⅳ）と郡山層とを境する断層面沿いには、安山岩・シルト岩擾乱部が認められるものの、固結している。

- 凡例
- 黒色土壌
 - 不淘汰礫層
 - 亜円礫層 | 段丘堆積物
 - 塊状輝石安山岩溶岩
 - 輝石安山岩自破碎状溶岩
 - 火山灰層
 - 凝灰質シルト岩
 - 安山岩・シルト岩擾乱部
- 北薩火山岩類Ⅳ
- 郡山層
- f.N77E,80S 断層面の走向・傾斜
 j.N88E,44S 節理面の走向・傾斜
 b.N83W,50S 層理面の走向・傾斜

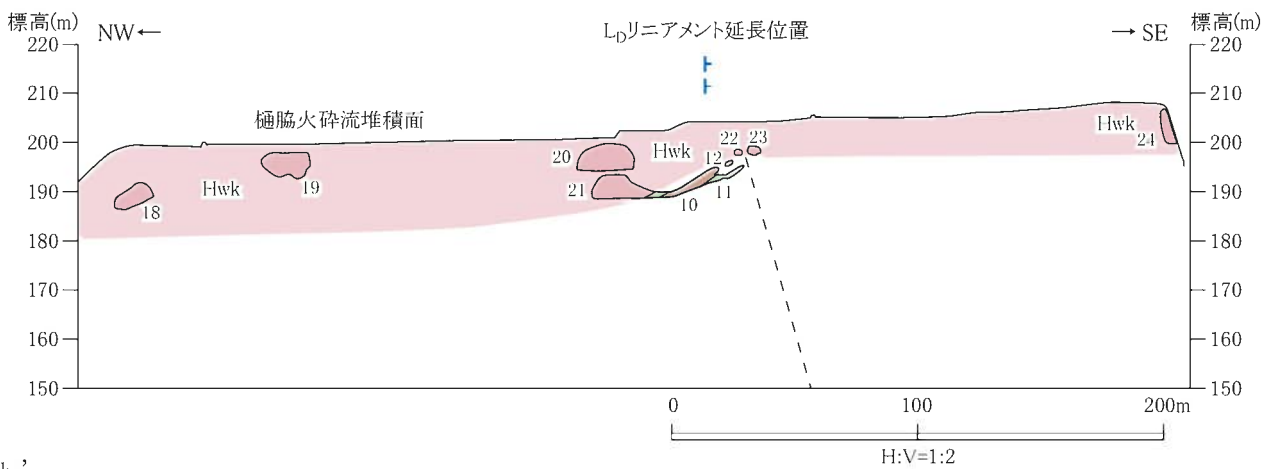
第1.2-87図 露頭スケッチ (Loc.Um-1, 薩摩川内市戸板野川支流左岸)



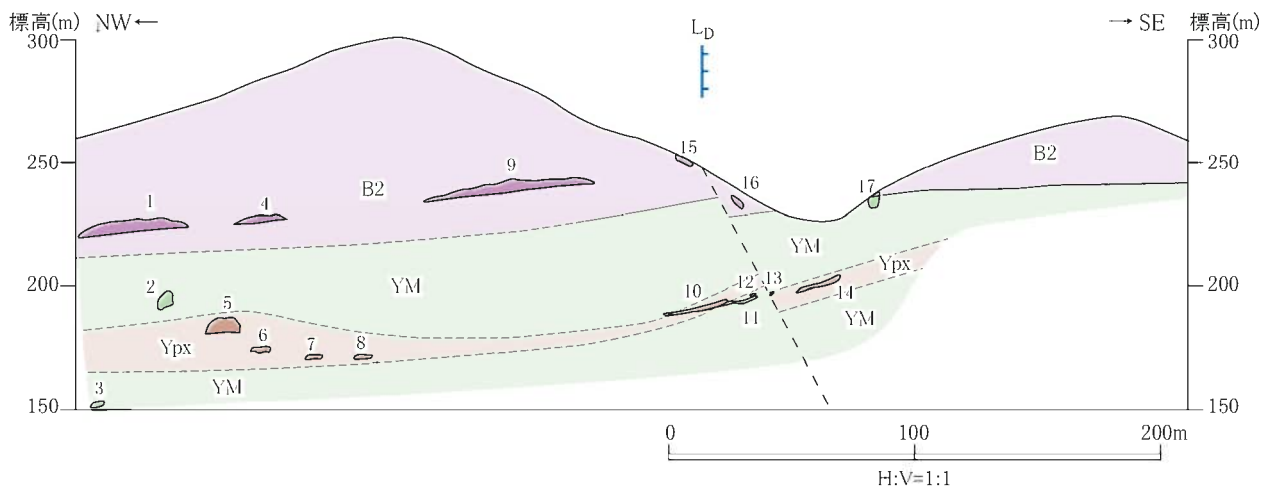
第1.2-88図 ルートマップ及び地形・地質断面図(薩摩川内市八重付近)



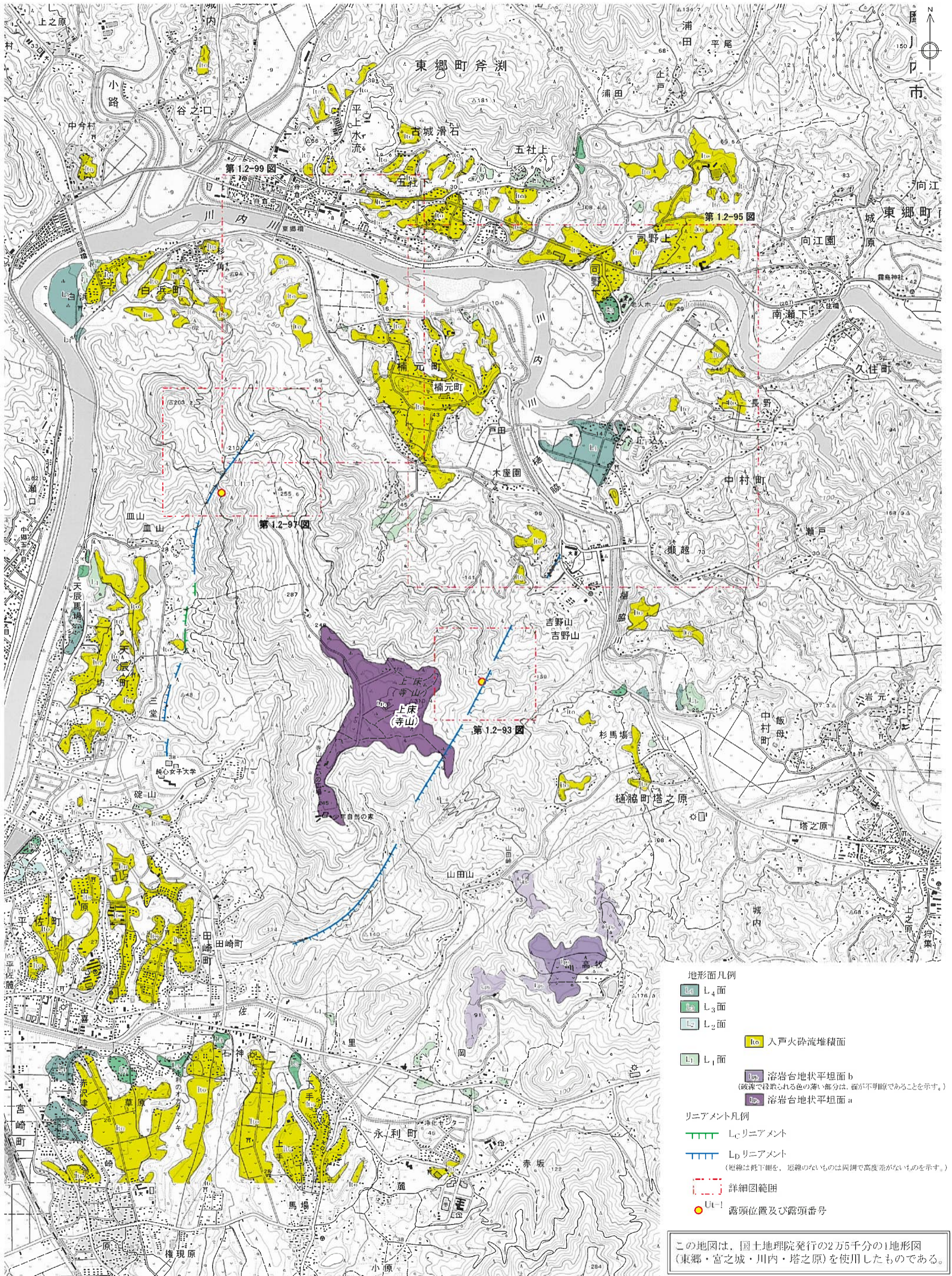
a-a'



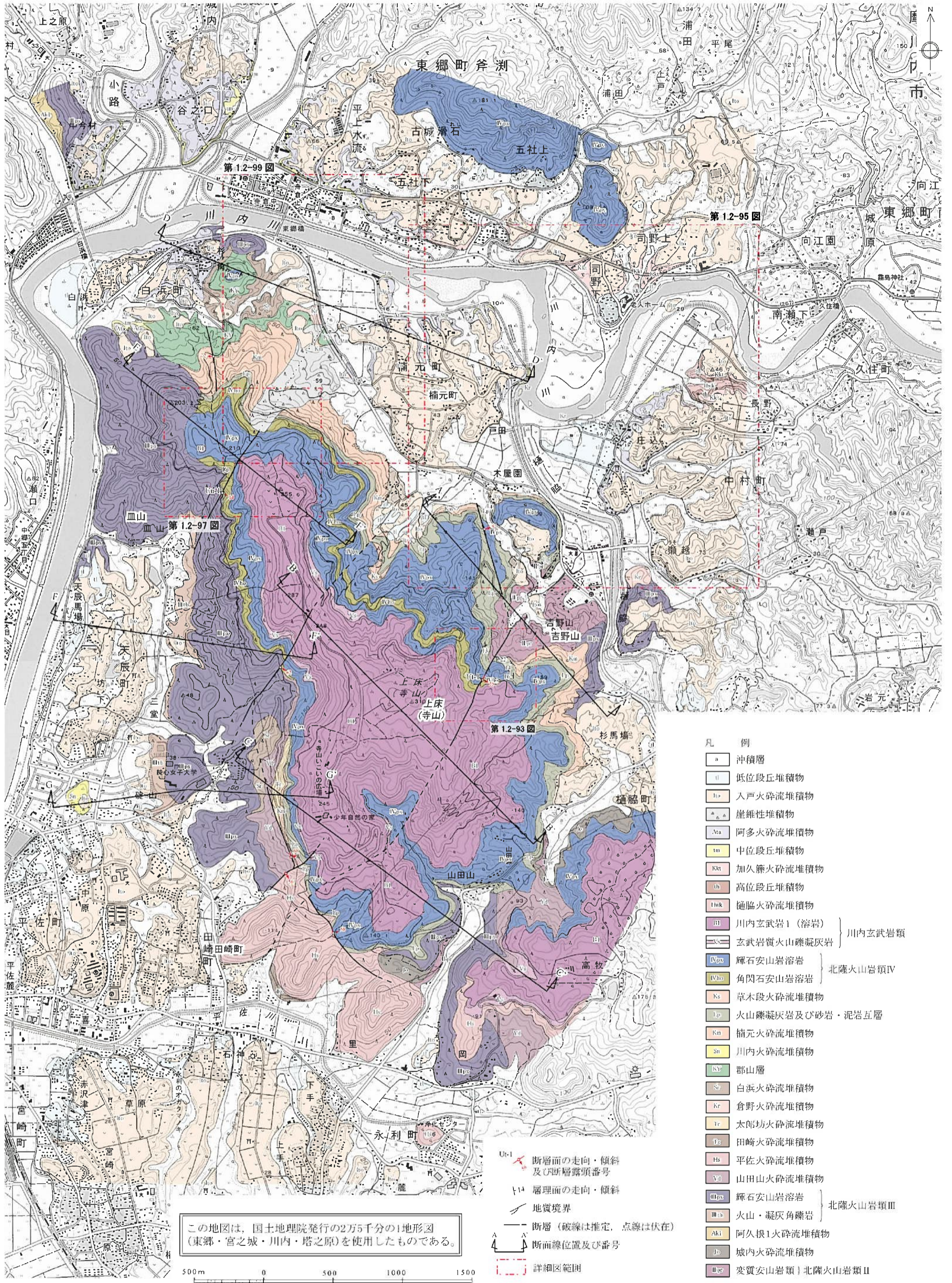
b-b'



第1.2-89図 ルートマップ及び地形・地質断面図(薩摩川内市中山北方付近)



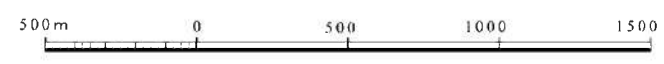
第1.2-90図 上床断層及び上床西リニアメント周辺の空中写真判読図



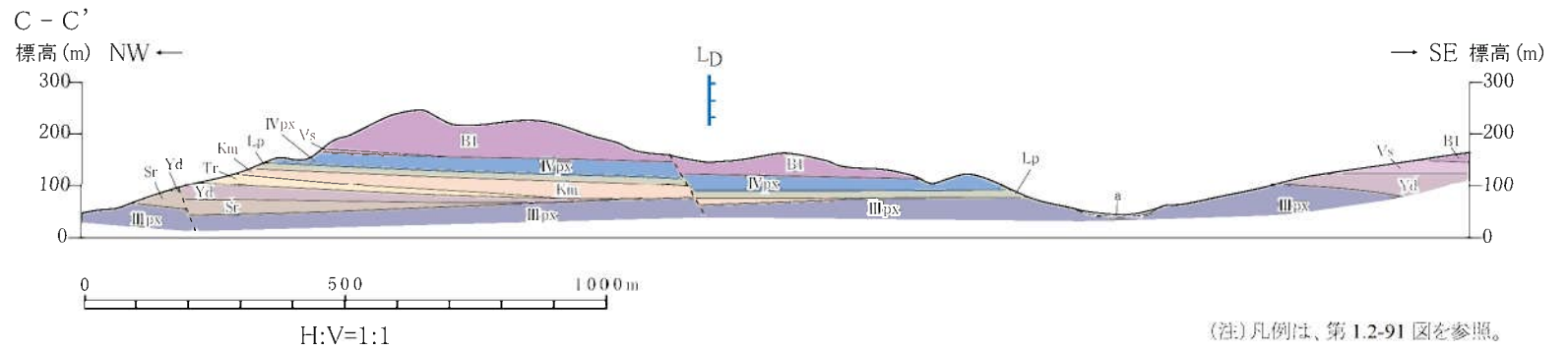
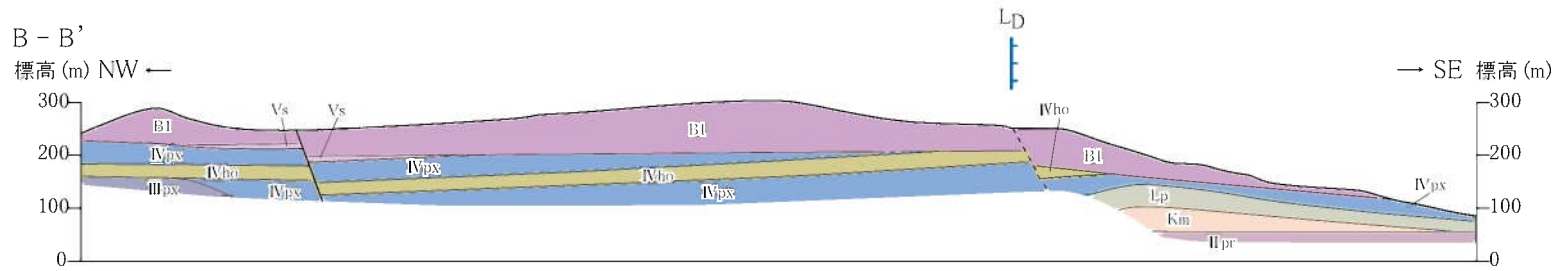
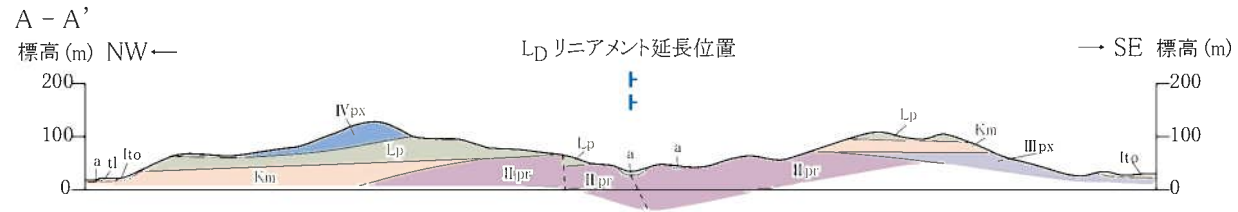
- 凡 例
- a 沖積層
 - u 低位段丘堆積物
 - lu 入戸火砕流堆積物
 - ▲▲ 崖錐性堆積物
 - Ata 阿多火砕流堆積物
 - tm 中位段丘堆積物
 - Kk 加久藤火砕流堆積物
 - th 高位段丘堆積物
 - lwk 樋脇火砕流堆積物
 - bl 川内玄武岩1 (溶岩)
 - bc 玄武岩質火山礫凝灰岩
 - lpx 輝石安山岩溶岩
 - lvo 角閃石安山岩溶岩
 - ks 草木段火砕流堆積物
 - lp 火山礫凝灰岩及び砂岩・泥岩互層
 - kn 楠元火砕流堆積物
 - sn 川内火砕流堆積物
 - lly 郡山層
 - st 白浜火砕流堆積物
 - kr 倉野火砕流堆積物
 - tr 太郎坊火砕流堆積物
 - td 田崎火砕流堆積物
 - hs 平佐火砕流堆積物
 - yd 山田山火砕流堆積物
 - lpx 輝石安山岩溶岩
 - lb 火山・凝灰岩礫岩
 - aki 阿久根火砕流堆積物
 - jb 城内火砕流堆積物
 - log 変質安山岩類 北薩火山岩類II
- 北薩火山岩類IV
- 北薩火山岩類III

- Ut-1 断層面の走向・傾斜及び断層露頭番号
- 層理面の走向・傾斜
- 地質境界
- 断層 (破線は推定, 点線は伏在)
- 断面線位置及び番号
- 詳細図範囲

この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(東郷・宮之城・川内・塔之原)を使用したものである。

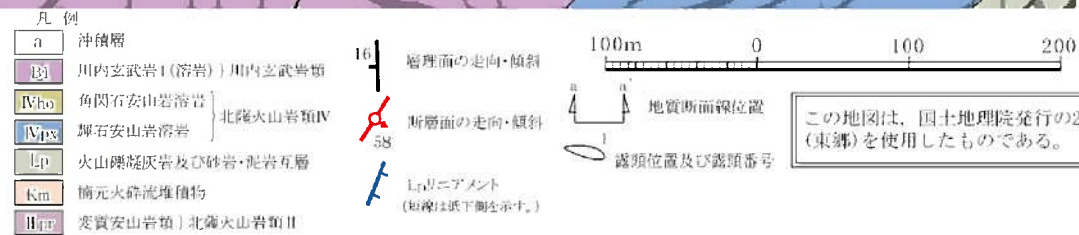
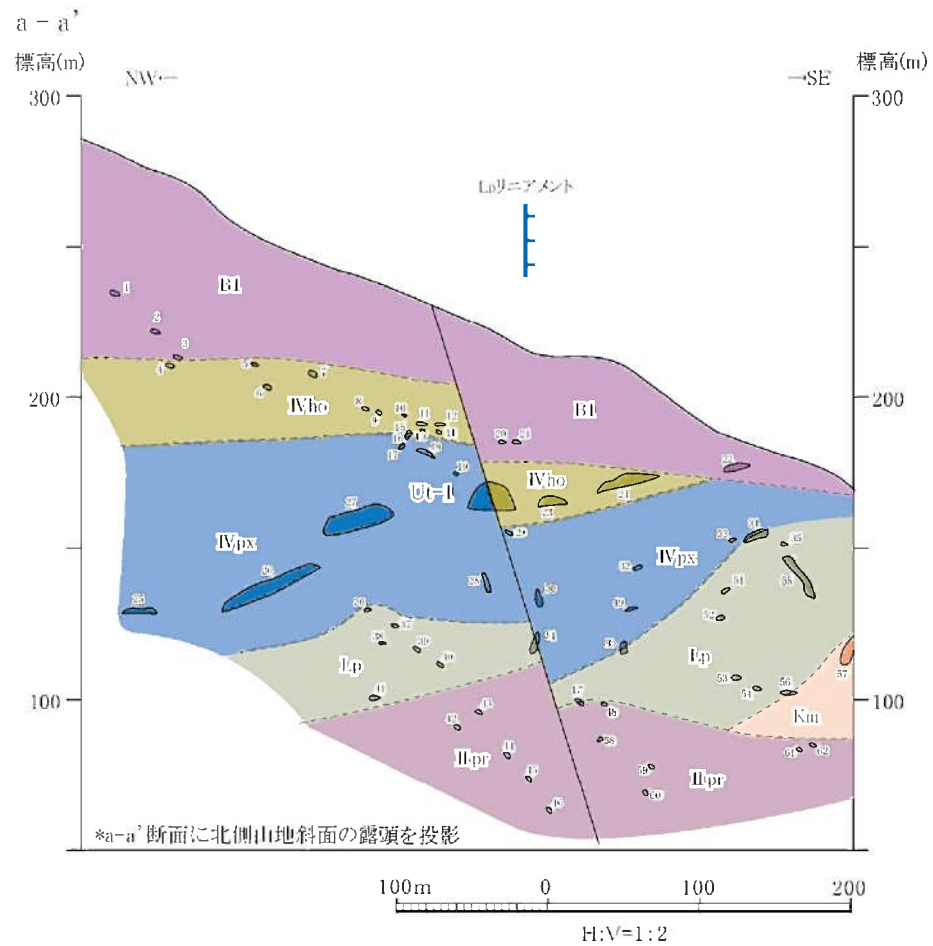
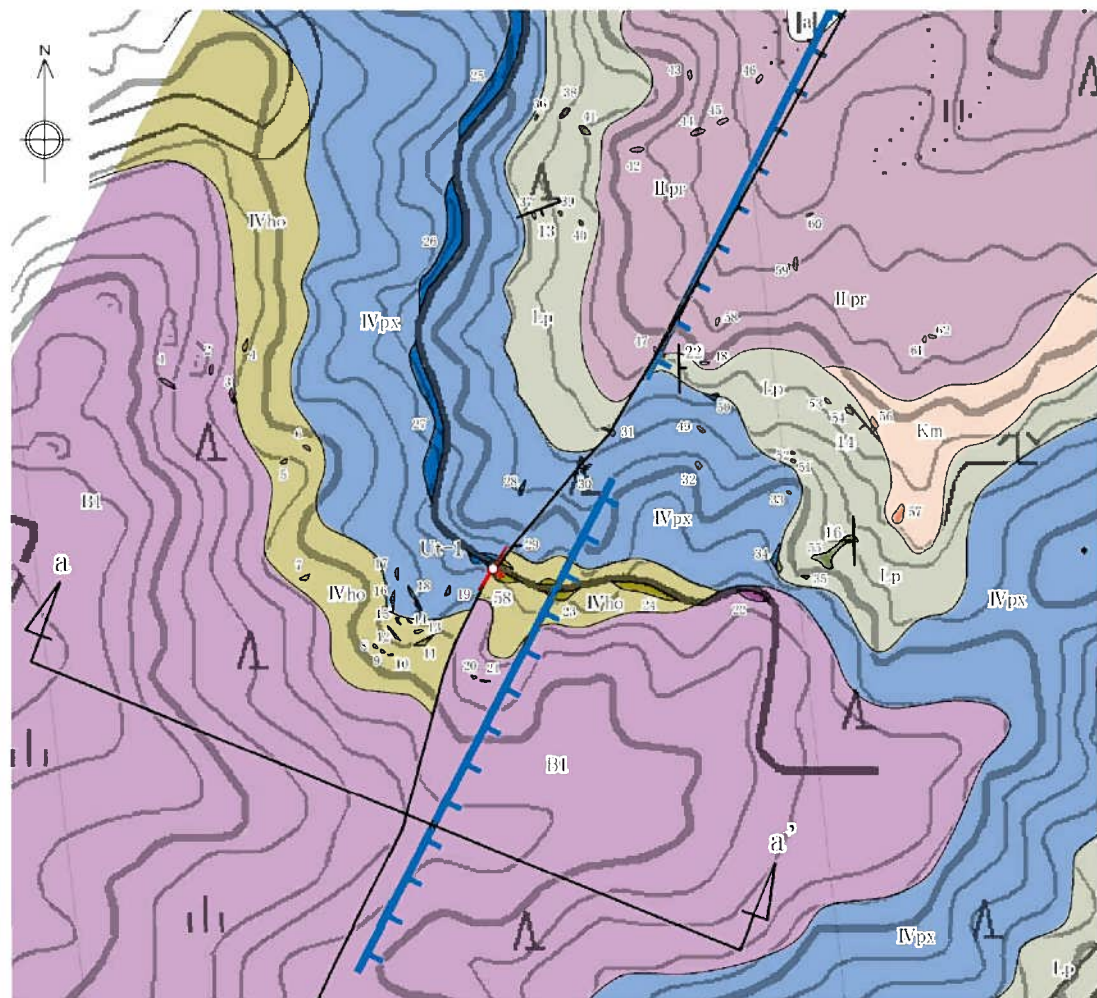


第1.2-91図 上床断層及び上床西リニアメント周辺の地質図



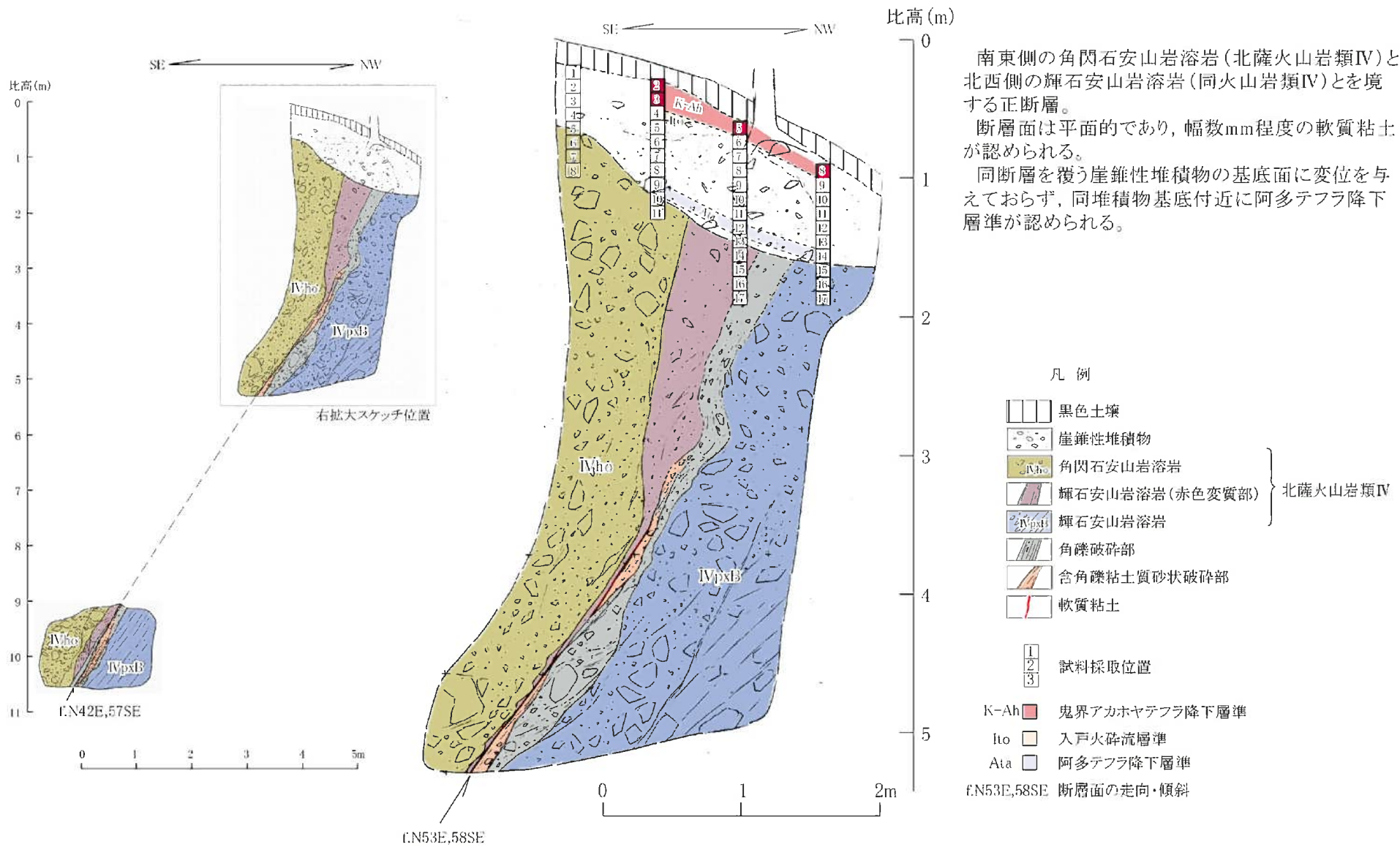
(注) 凡例は、第 1.2-91 図を参照。

第1.2-92図 上床断層周辺の地質断面図



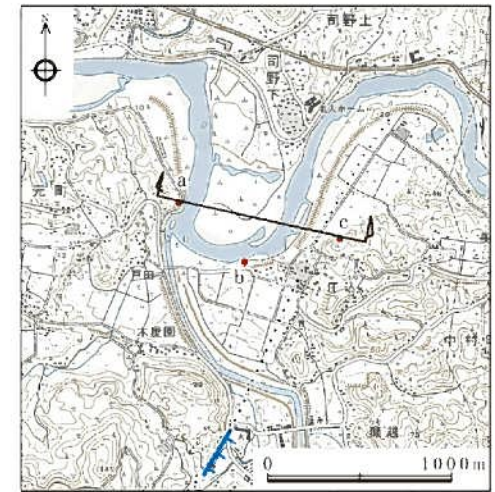
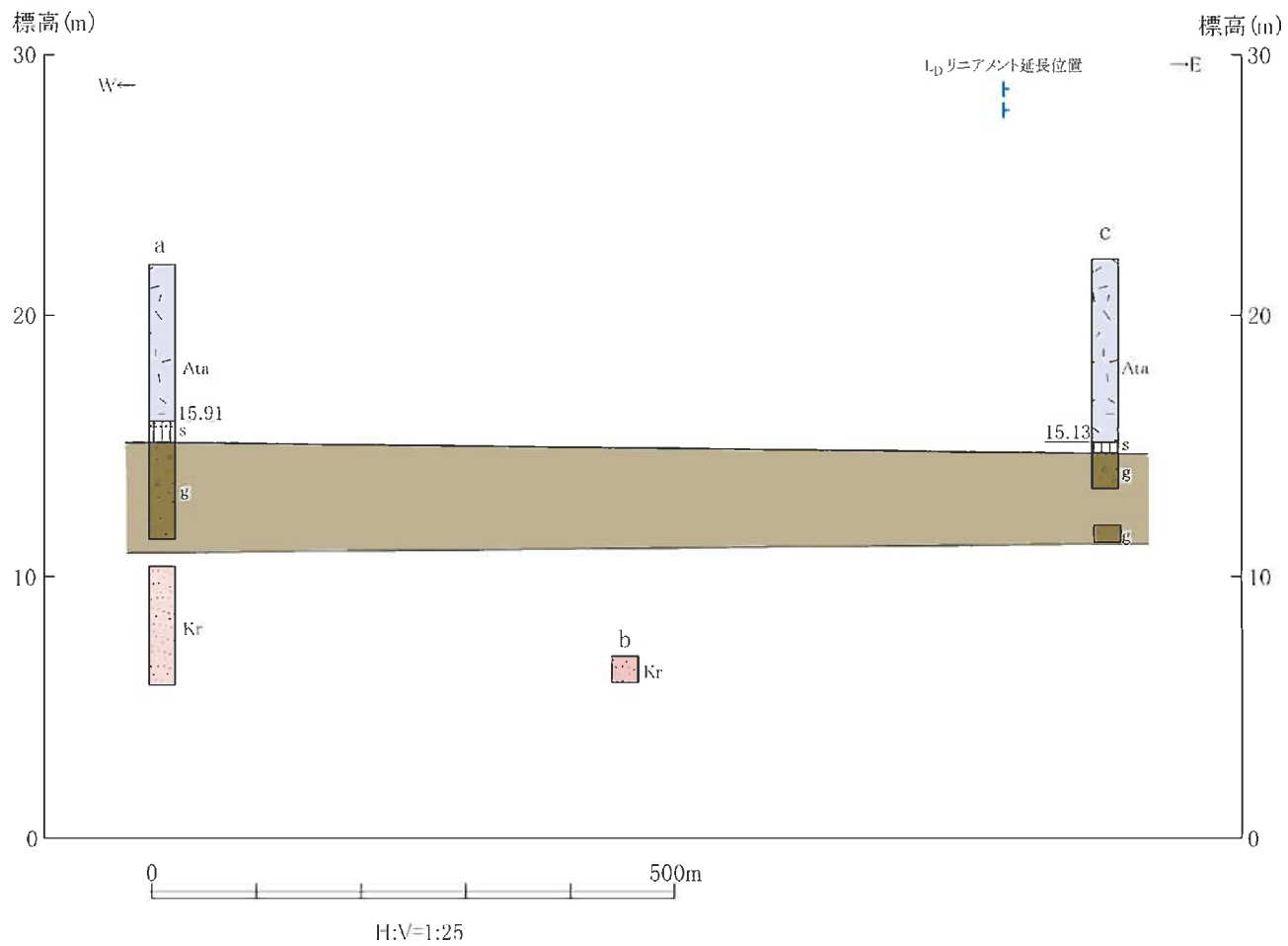
この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(東郷)を使用したものである。

第1.2-93図 ルートマップ・地質断面図(薩摩川内市吉野山南方付近)



南東側の角閃石安山岩溶岩 (北薩火山岩類IV) と北西側の輝石安山岩溶岩 (同火山岩類IV) とを境する正断層。
 断層面は平面的であり、幅数mm程度の軟質粘土が認められる。
 同断層を覆う崖錐性堆積物の基底面に変位を与えておらず、同堆積物基底付近に阿多テフラ降下層準が認められる。

第1.2-94図 露頭スケッチ (Loc.Ut-1, 薩摩川内市吉野山南方)



この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(東郷)を使用したものである。

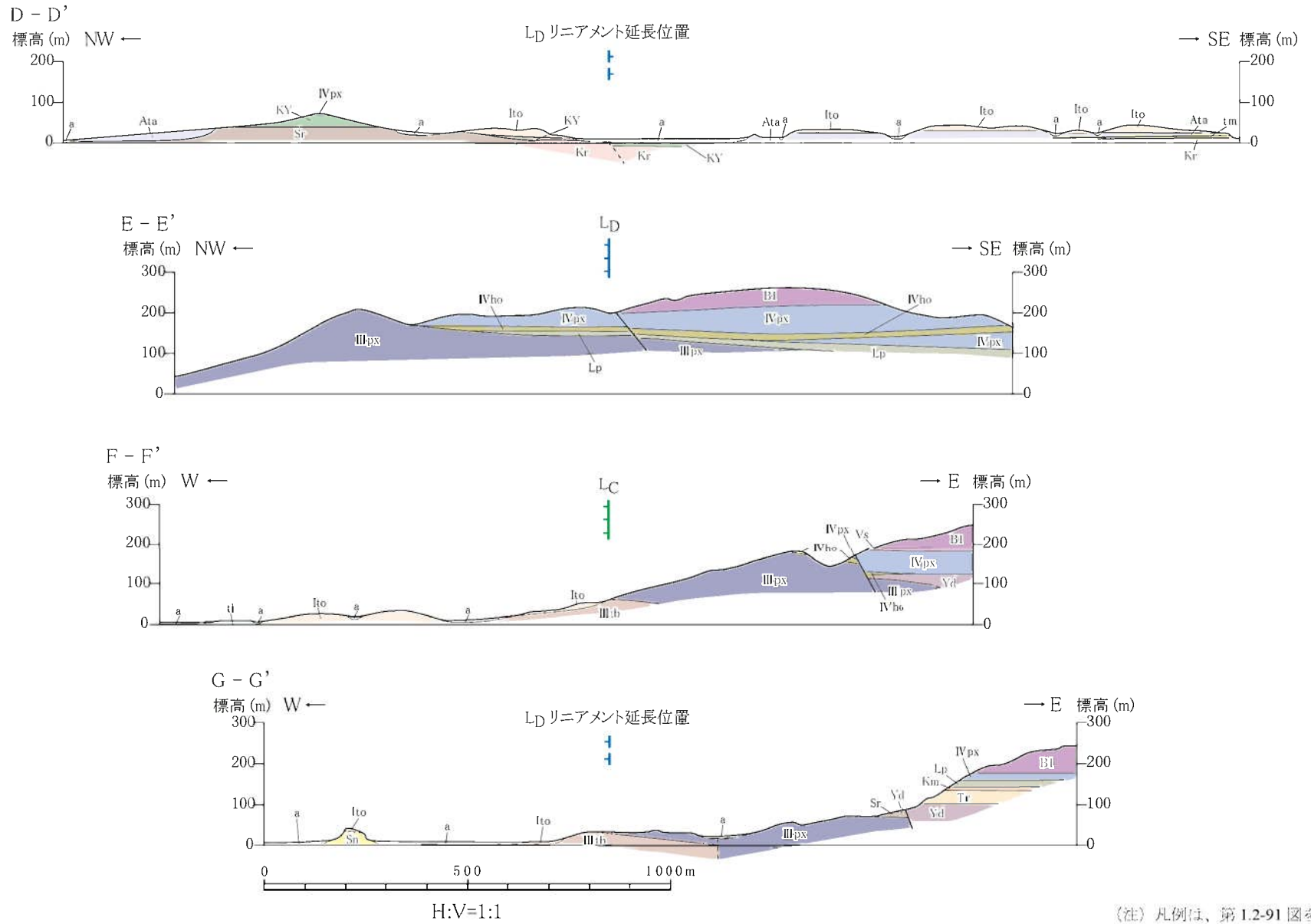
凡例

- Ata 阿多火砕流堆積物
- s 土壤化帯
- g 礫層} 中段段丘堆積物
- Kr 倉野火砕流堆積物
- a 柱状作成位置・番号
- 断層 (破線は推定、点線は伏在)

リニアメント凡例

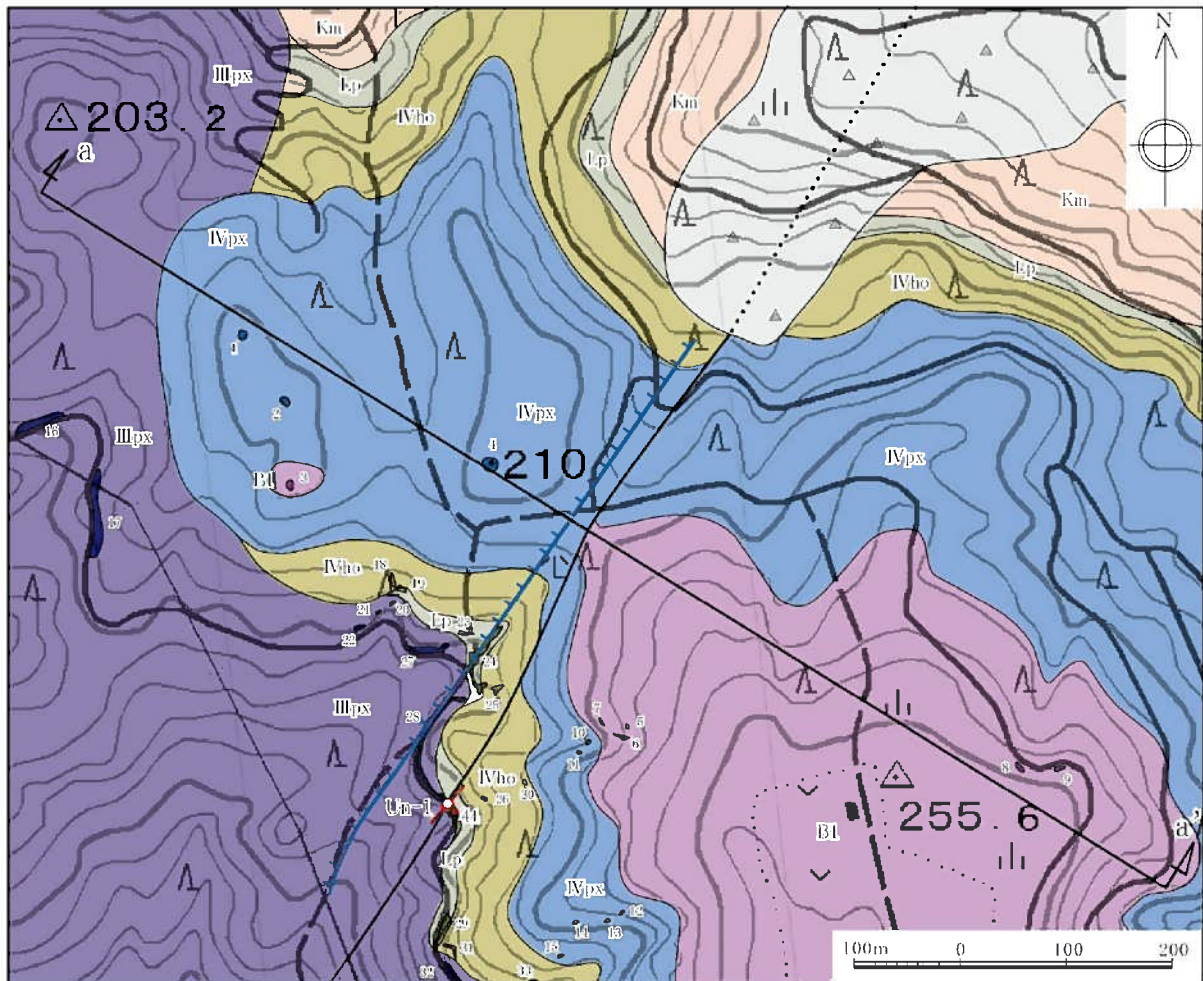
- |||| LDリニアメント (短線は低下側を示す。)

第1.2-95図 薩摩川内市戸田一庄込間の柱状対比



(注) 凡例は、第 1.2-91 図を参照。

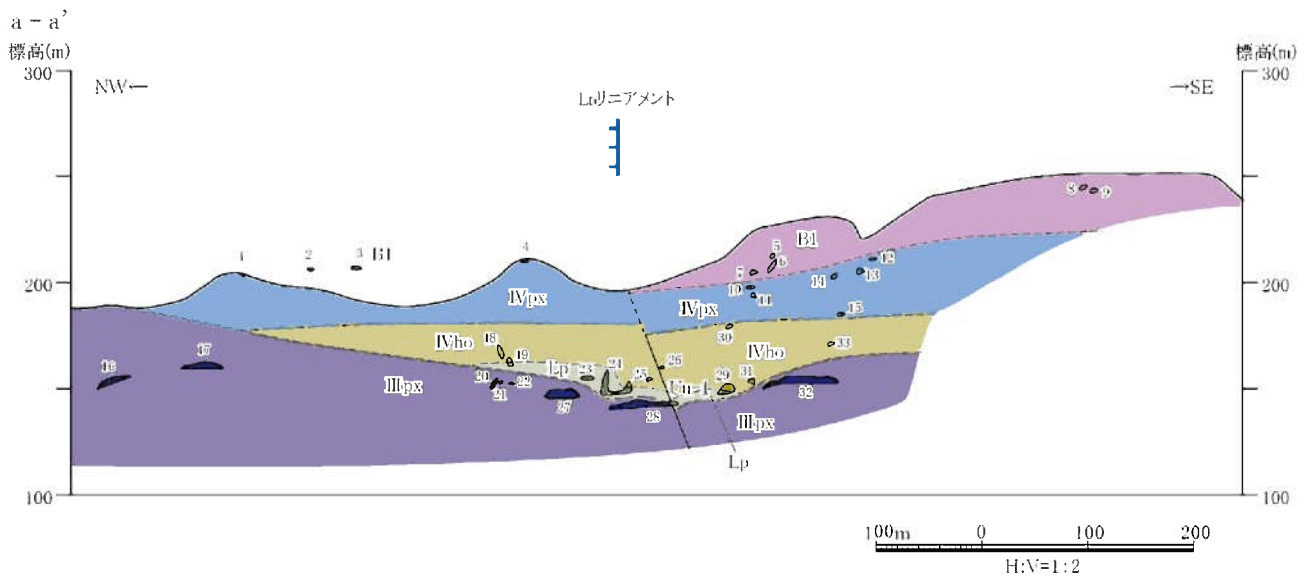
第 1.2-96 図 上床西リニアメント周辺の地質断面図



- 凡例
- 第四紀堆積物
 - 川内玄武岩I(溶岩) 川内玄武岩類
 - 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類IV
 - 角閃石安山岩溶岩 }
 - 火山輝岩凝灰岩
 - 標元火砕流堆積物
 - 輝石安山岩溶岩 } 北薩火山岩類III

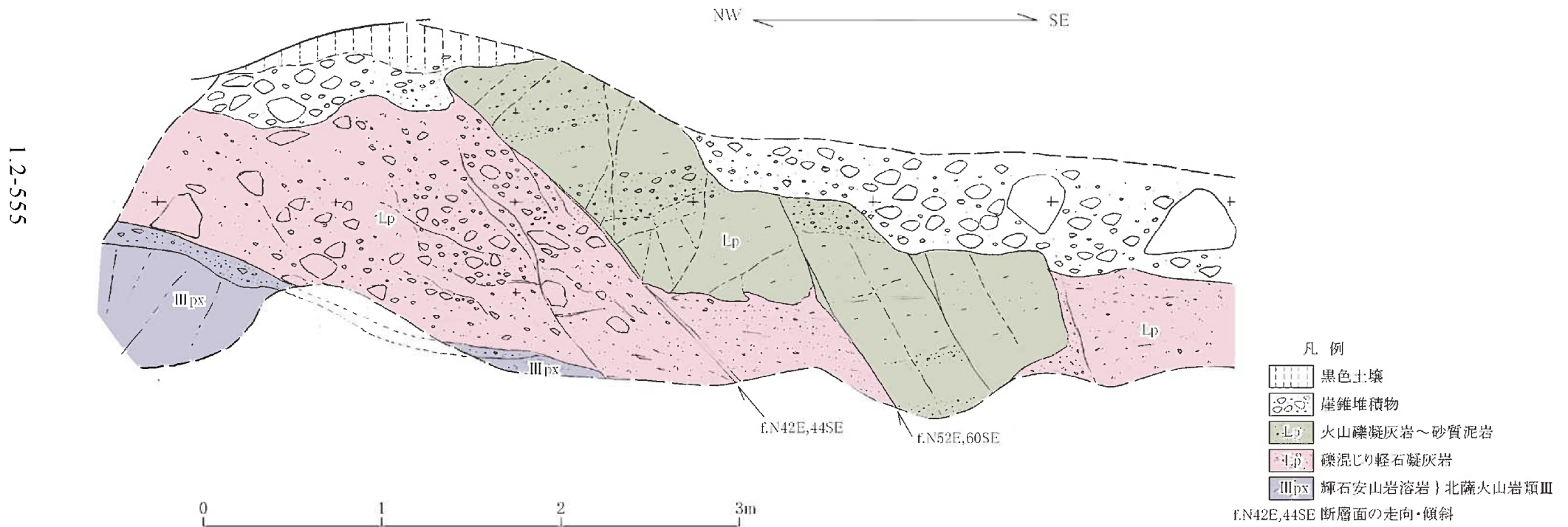
- 断層 (破線は推定、点線は伏在)
- 断層面の走向・傾斜
- LiRiament (短線は低下側を示す。)
- 地質断面線位置
- 露頭位置及び露頭番号

この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(東郷)を使用したものである。

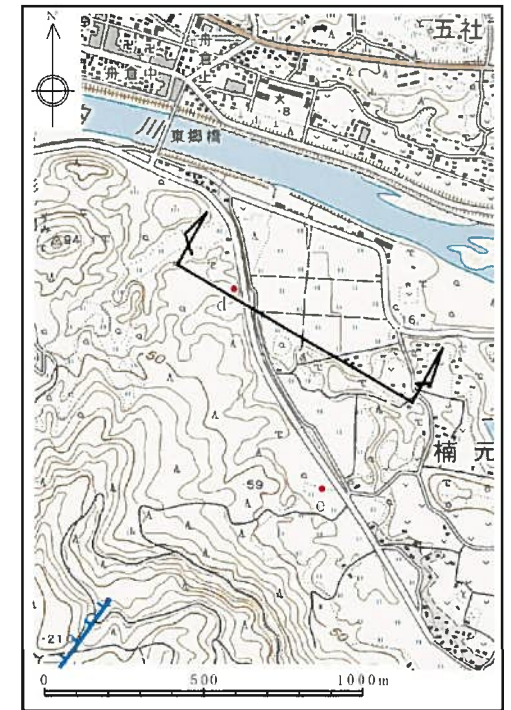
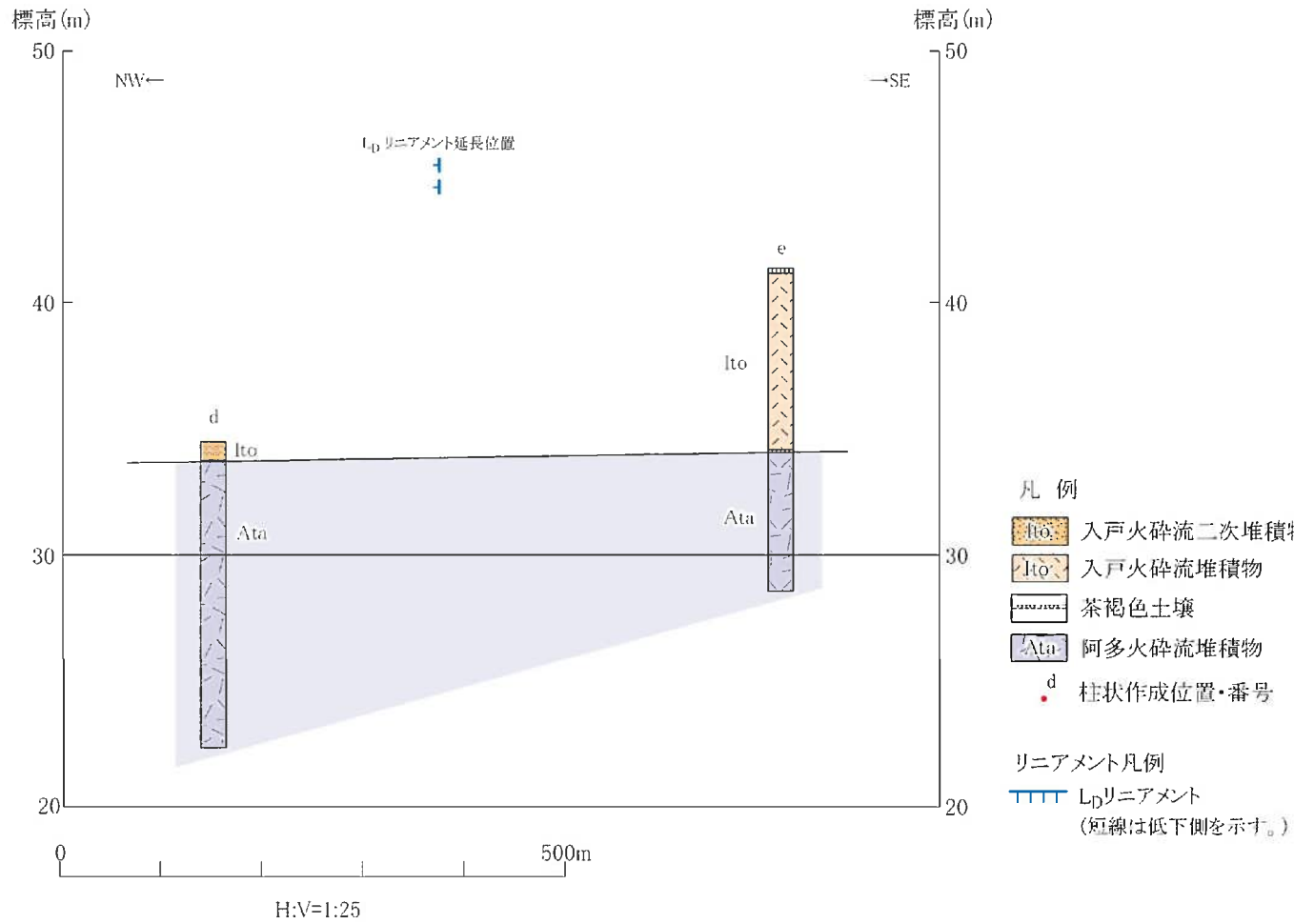


第1.2-97図 ルートマップ・地質断面図(薩摩川内市皿山北東付近)

輝石安山岩溶岩(北薩火山岩類Ⅲ)並びにその上位の礫混じり軽石凝灰岩及び火山礫凝灰岩～砂質泥岩に、いずれも南東落ちの変位を与える数条の正断層。
 いずれの断層面も平面的であるが、癒着している。また、断層面近傍の破碎も認められない。

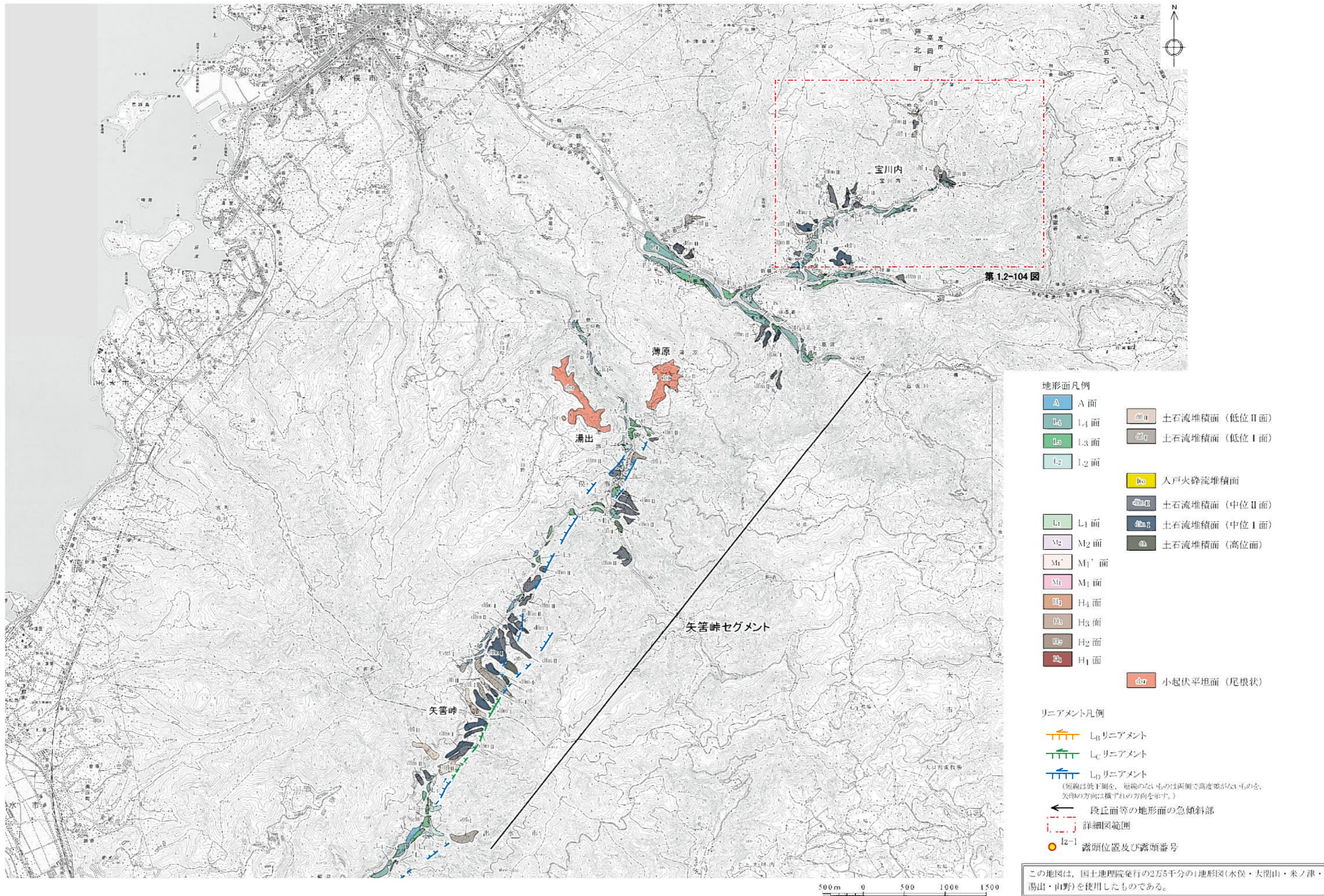


第1.2-98図 露頭スケッチ(Loc.Un-1, 薩摩川内市皿山北東)



この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(東郷)を使用したものである。

第1.2-99図 薩摩川内市白浜町一楠元町間の柱状対比



第1.2-100図(1) 出水断層系周辺の空中写真判読図(北部)